

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第234集

中屋遺跡

(第二東名No.130 地点)

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

浜松市-2

(第2分冊)

2010

中日本高速道路株式会社東京支社
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第234集

中屋遺跡

(第二東名No.130 地点)

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

浜松市-2

(第2分冊)

2010

中日本高速道路株式会社東京支社
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

中屋遺跡

目次

〔第2分冊〕

第4章 古代	323
1 概要	(武田) 324
2 竪穴建物	(武田) 326
3 掘立柱建物	(武田) 347
4 小穴	(武田) 385
5 土坑	(武田) 389
6 溝	(武田) 397
7 包含層・攪乱出土遺物	(武田) 400
第5章 保存処理	405
1 瓜文螺鈿鞍の保存処理	(西尾) 406
2 金属製品の保存処理	(大森) 416
第6章 理化学的分析	417
1 出土木製品の樹種	(小川・鈴木三男) 418
2 鉄滓の金属学的調査	(大澤・鈴木瑞穂) 449
第7章 総括	457
1 中屋遺跡出土瓜文螺鈿鞍について	(小松) 458
2 出土瓦からみた中屋遺跡	(武田) 464
3 中世土器・陶磁器について	(溝口) 475
4 中世の墨書土器	(武田) 480
5 まとめ	(足立) 491

図版 / 抄録

〔第1分冊〕

序 / 例言 / 凡例

第1章 調査の方法と経過	1
1 調査に至る経緯	(及川) 2
2 調査の体制	(武田) 4
3 調査の方法	(武田) 5
4 調査の経過	(武田) 7
第2章 位置と環境	15
1 遺跡の位置	(武田) 16
2 地理的環境	(足立) 17
3 歴史的環境	(足立) 20
第3章 中世～近世	25
1 概要	(武田) 26
2 大溝・土塁	(武田) 32
3 溝	(武田) 80
4 河川	(武田) 123
5 掘立柱建物	(溝口) 174
6 小穴	(溝口) 220
7 井戸	(溝口) 229
8 土坑	(溝口) 239
9 埋葬遺構	
(1) 埋葬方法と年代	(足立) 276
(2) 遺構と遺物	(武田) 277
10 包含層・攪乱出土遺物	(溝口) 306

第4章 古代

1. 概要

竪穴建物 竪穴建物は、調査区中央南側で合計5軒検出されている。平面形態は、隅丸長方形のもの(SB6001・6003・6004)と長方形のもの(SB4001)、やや円形に近い隅丸方形のもの(SB6006)が認められる。SB4001とSB6006では、建物の廃絶後に掘られた大型土坑(SF4015・SF6034)が重複して検出されており、その埋土からは多量の遺物が出土している。主柱穴はSB1001で可能性のある柱穴が検出されているが、他の建物では確認されない。また、いずれの建物にも、カマドや炉、壁溝、貼り床などの構造は設けられておらず、規模も一辺が3m前後と小型である。倉庫や工房等、住居以外の施設である可能性も考えられる。建物は、SB6006が7世紀末～8世紀初頭まで、それ以外は8世紀前半に廃絶している。

掘立柱建物 掘立柱建物は、調査区のはほぼ全域から合計32棟検出されている。多くは側柱建物であり、総柱建物は3棟(SH6001・7007・7012)確認できるのみである。平面形式は、2×2間のものが10棟と最も多く、次いで1×2間が6棟、2×3間が5棟となる。2×2間の建物は、総柱建物や正方形に近い平面形態のものなど、倉庫とみられる建物が多い。

建物規模は、平面積20㎡未満のものが21棟で、全体の6割以上を占めている。梁行・桁行のどちらかが4間以上となる建物は、SH1006・1008・2003・6012の4棟で、西側が失われているSH6012を除く3棟は、いずれも30㎡を超える大型の建物である。中でもSH1008は、平面積が47.9㎡の大型の建物であり、その構造も多柱式の建物で、周囲に溝を巡らしているなど、他の建物とは大きく異なっており、集落の中心となる建物であると推測される。西側が失われているため不明瞭な部分もあるが、多柱式の建物とみられるSH6012も、同様の性格の建物である可能性が高い。

建物方位は、①東に振れるもの、②真北に近いもの、③西に振れるもの、大きく3つに分けられる。柱穴の切り合いからは、①が②に先行する建物である可能性が高いと推測される。出土した遺物の年代



図282 古代の遺構配置図(1:1200)

からは、7世紀代までは①が多く、8世紀代には③が多くなる傾向が認められる。

また、古代の遺物を出土する柱穴とみられる小穴も多く検出されている。建物として認識できたものは調査区南半に多いが、北半にもこれらの小穴は分布しており、把握できなかった掘立柱建物も数多く存在するものと推測される。

土坑 土坑は合計19基確認されており、大型土坑SF4015・6034のように堅穴建物に重複しているものの他、ほとんどが掘立柱建物の周囲に位置している。全体的に出土遺物は多くないが、SF6034やSF6011などからは、須恵器や土師器などとともに製塩土器が出土している。いずれも、器壁の薄い小型のもので、ほとんどが口縁部付近の破片である。SF6032からは、輪羽口や炉壁などの鍛冶関連遺物も出土している。今回の調査において鍛冶遺構自体は検出されていないが、周辺で鍛冶が行われていた事を示すものとして注目される。

溝 調査区の東側で、大規模な溝(SD3001)が検出されている。幅約1.2m・深さ約50cmの大きさで、調査区を南北に縦断し、北側と南側はともに調査区外へと続いている。南へ向かって直線的に掘られており、方向は北側でやや東へ振れている。出土遺物から、7世紀末～8世紀初頭には、ほぼ埋没していたものと推測される。7世紀代の掘立柱建物も東に振るものが多く、その関連性がうかがえる。また、SD3001の西側には、削平されて断片的にしか残存しないが、ほぼ平行する溝(SD3002・3016・3017)も検出されている。

出土遺物 古代の遺物は、比較的豊富に出土しており、中世～近世の遺構にも多く含まれている。出土遺物の大半は、7～8世紀の須恵器と土師器であり、灰軸陶器はわずかに確認できる程度である。

これら他に、墨書土器(SR8001)や円面硯(SD1001)、二面硯(包含層)、緑軸陶器(包含層)、布目瓦(SF6034)といった特殊遺物も、点数は少ないが出土している。



2. 竪穴建物

SB6001 (図283・284、図版38・41・71)

6区の中央南側に位置する、長辺3.4m・短辺2.5mと小規模な竪穴建物である。平面形状は南北に長い隅丸長方形を呈し、主軸は約6°西に振れる。北西・北東隅と南側の一部は、後世の遺構等によって失われている。深さは現存で約20cm程度しかなく、上面が大きく削平されているものと推測される。埋土は暗褐色土を基調とし、部分的に地山崩落土とみられる黄褐色土がブロック状に混入する。床面では3基の柱穴が検出されており、主柱穴である可能性も考えられる。柱穴は直径22～24cmで、深さはいずれも床面から2cm程度と浅い。明確な貼り床や壁溝は検出されておらず、炉やカマドなどの痕跡も認められない。埋土中からも焼土や炭化物はほとんど確認されなかった。

床面に伴う遺物は発見されていないが、埋土中からは須恵器や土師器の破片が出土している。2144は須恵器の坏蓋である。口縁部から頂部にかけての破片で、口径が9cmと小型である。2145は須恵器の坏。2145は口径10cmと小型で、口縁部の立ち上がりは低い。2146は無台坏の小破片で、表面が黒く変色しており二次焼成を受けていると推測される。2147は土師器の坏。体部からやや内湾気味に立ち上がり、口縁部で外反する。内外面の全面に赤彩がみられる。2148は土師器の皿。底部から屈曲して立ち上がり、口縁部は平らに仕上げられている。内外面の全面に赤彩が施されている。2149～2153は土師器の壺である。図化したものの他に、須恵器高坏の底部から脚部にかけての破片と、土師の破片が各1点出土している。

埋土からの出土ということもあり、遺物に多少の年代幅はみられるが、須恵器坏(2146)や土師器坏皿(2147・2148)などから、SB6001の埋没年代は概ね8世紀の前半頃とみてよいであろう。

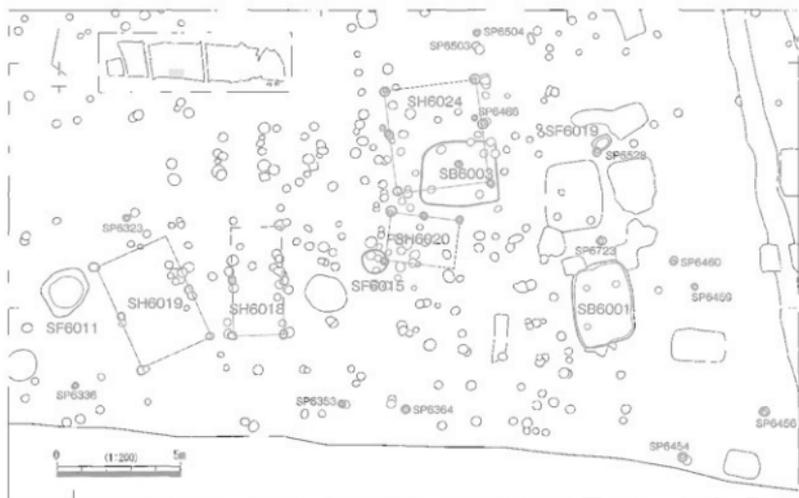


図283 古代の遺構配置図(6区・中央南側)

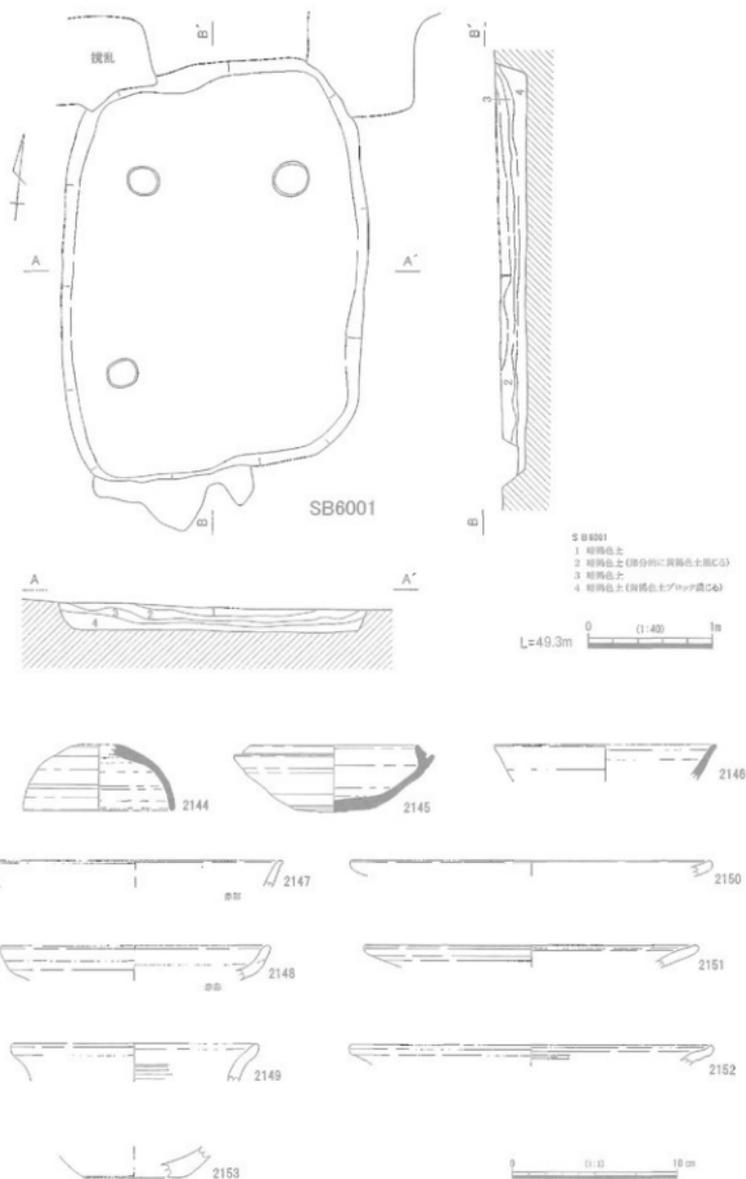


図 284 SB6001 実測図・出土遺物

SB6003 (図 283・285、図版 41)

SB6001の北西約4.5mに位置する。東西方向に約3m、南北方向に約2.7mと、やや東西方向に長い、隅丸長方形の堅穴建物である。主軸はほぼ真北となる。深さは現存で5~6cmほどしかなく、上面はほとんど削平されてしまっている。北東隅は、掘立柱建物SH6015の柱穴SP6490により失われている。南東部では、SH6024の柱穴SP6729に切られていることが確認されている。埋土は暗褐色土で、炭化物が少量混じる。床面において、明確な貼り床や壁溝、主柱穴は検出されていない。炉やカマドなどの燃焼施設の痕跡も認められなかった。

遺物としては、埋土中から土師器の甕が出土している。2154は土師器甕の口縁部である。2cm程度の小破片で、表面の摩滅も著しい。この他に、須恵器坏の底部とみられる破片や、土師器甕の体部の破片も出土しているが、いずれも小破片であり、図化できたのは2154の1点のみである。

出土遺物が非常に乏しく、年代の推定は困難であるが、後述のように、本遺構の埋没後に建造されたSH6024が8世紀前半頃の年代と推定されることから、SB6003の埋没年代は少なくともそれ以前とみてよい。

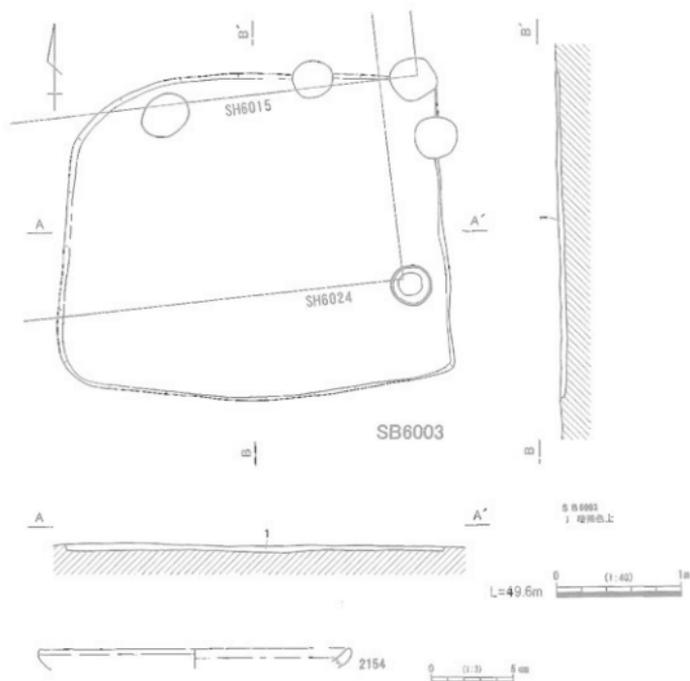


図 285 SB6003 実測図・出土遺物

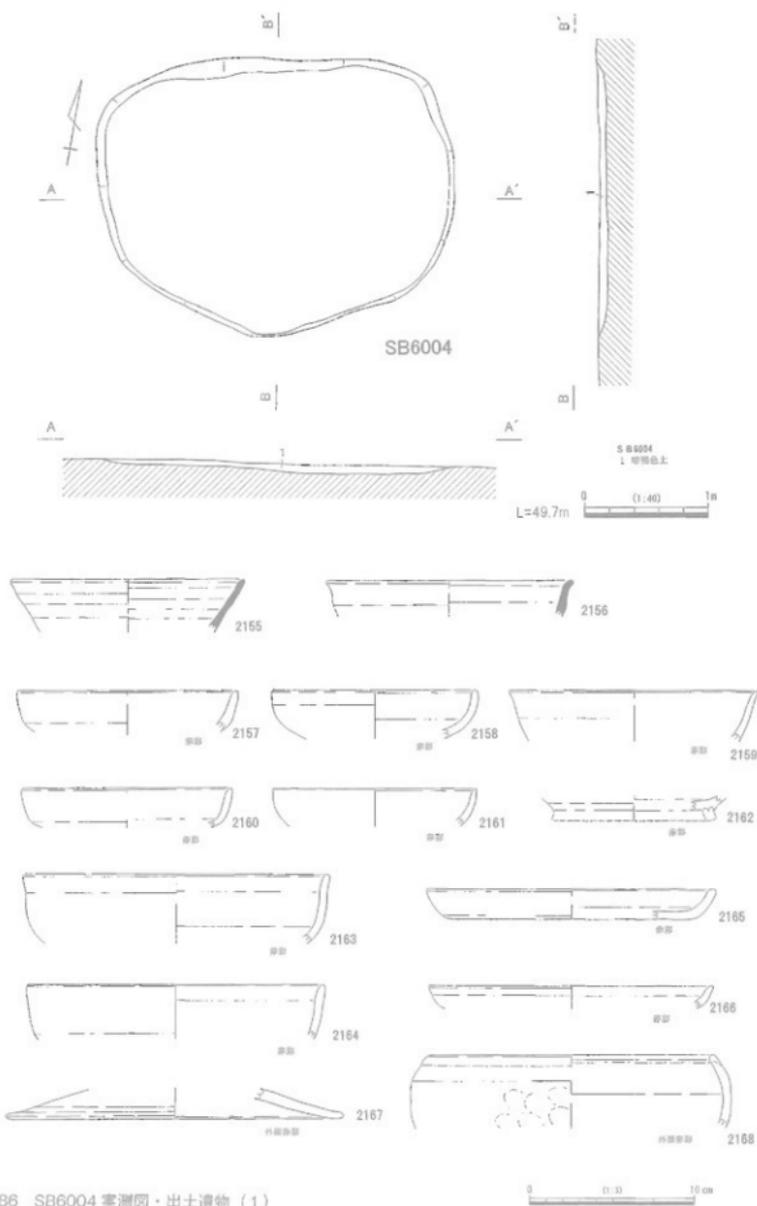


図 286 SB6004 羨洞回・出土遺物 (1)

SB6004 (図 286・287、図版 37・41・71)

SB6003の北東約8mに位置する竪穴建物である。平面形状は、ややいびつではあるが、東西方向に長い隅丸長方形である。規模は東西2.9m・南北2.3mで、深さは現存で約8cm程度しかない。埋土は暗褐色土を基調とし、ごく少量ではあるが炭化物を含んでいた。明確な貼り床や整溝、主柱穴、カマドなどは検出されていない。

遺物については、いずれも破片ではあるが、比較的豊富に出土している。2155と2156は須恵器の坏である。2155は無台坏である。ロクロ成形時の水引き痕が明瞭に残り、口縁部に向かって斜め上方へ立ち上がる。2156はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は大きく外反する。底部は残存しないが、高台坏であろう。2157～2162は土師器の坏である。2157・2158・2160・2161は口径12cm前後の小型の坏で、内外面には赤彩が施される。2159と2162は高台坏。欠損や摩滅によって確認できない高台部と底部外面以外には、赤彩が認められる。2163と2164はやや大型の坏。口縁部にはやや強めにナデ調整が施されている。内外面には赤彩が認められる。2164は、外面が二次焼成により黒色に変色している。2165と2166は土師器の皿である。2166は、2165に比べて薄いつくりとなっている。底部は残存しないが、下半が屈曲し始めていることからみて、浅いつくりのものであろう。いずれも、内外面に赤彩が認められる。2167は土師器の蓋である。外面のみに赤彩が施されている。2168は土師器の鉢である。口縁部は径を狭めるかたちで内湾し、ナデ調整が施される。表面は摩滅が著しいが、外面にわずかに赤彩が認められる。2169・2171～2178は土師器の甕である。2169は小型の甕であり、口縁部をやや外反

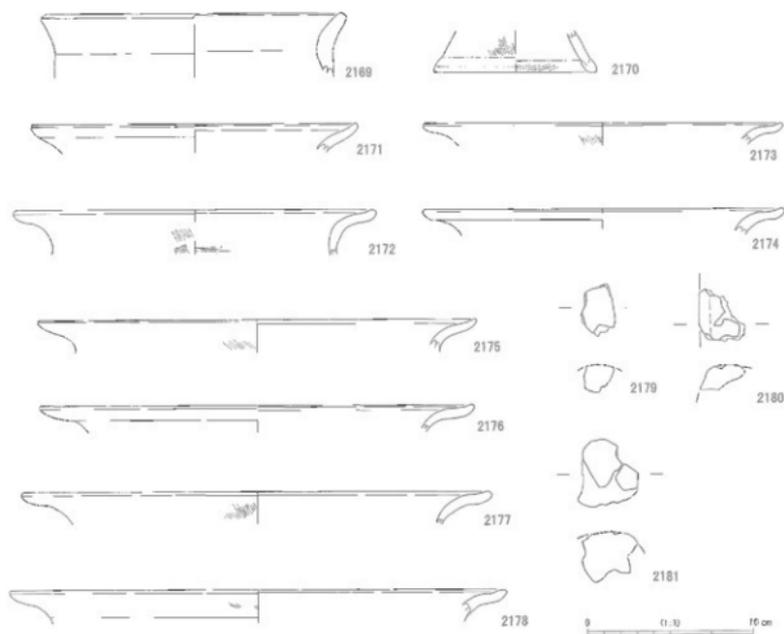


図 287 SB6004 出土遺物 (2)

させ、口縁端部を平らに仕上げている。比較的厚いつくりとなっている。2170 は台付き甕の脚部である。2171 ~ 2178 は甕の口縁部であり、いずれも頸部から大きく外反し、口縁端部にはつまみ上げるようなかたちでナデ調整が施される。2179 ~ 2181 は土製の支脚である。断面が台形または四角形に近い形状で、比較的小形のものと同推測される。図化したもの以外には、土師器甕の体部の破片が多数出土している。

いずれの遺物も破片の状態で出土しているため一概には断じ難いが、8 cm 程度の深さしか残存しないにも関わらず多量の遺物が出土している点や、年代の幅がほとんどないことなどから、大半は建物の廃絶時に遺棄されたものである可能性が高いと推測される。出土遺物の年代から、SB6004 の廃絶年代は 8 世紀前半とみてよいであろう。

SB6006・SF6034 (図 288 ~ 295、図版 35 ~ 37・40・71・72)

6 区東側の南端に位置する。SB6006 は、南西の部分が調査区外に続いており、西側が大型土坑 SF6034 によって失われている。また中央付近は、住宅の基礎により破壊されている。平面形は、一辺が 3 m 程度のやや円形に近い隅丸方形である。深さは現存で約 22 cm あり、壁は比較的明瞭に立ち上がる。埋土は暗褐色土を基調とし、上下 2 層に分けられる。下層には、黄褐色土ブロックが部分的に認められ

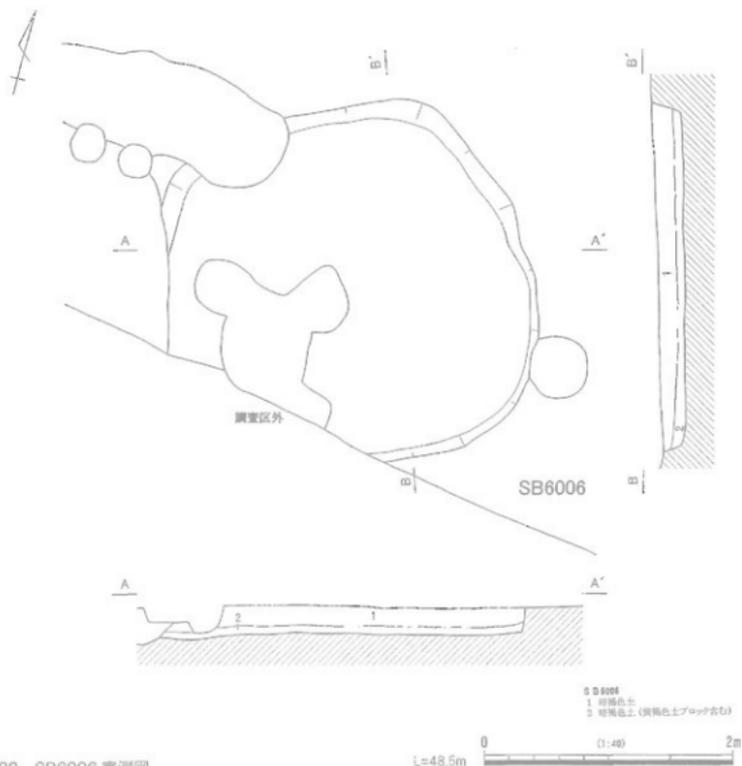


図 288 SB6006 平面図

るが、硬化面はなく、上下両層から出土した破片が接合するなど、明確な貼り床としてはとらえられない。よって両層とも埋没の際に流入した土と考えてよい。また、他の竪穴建物と同様に、炉やカマドなどの燃焼施設の痕跡も認められなかった。主柱穴や壁溝についても検出されていない。

遺物としては、埋土中から須恵器や土師器などが出土している。2182と2183は、須恵器の坏蓋である。いずれも頂部付近の破片であるが、柄みか剥離した痕跡が確認される。頂部付近には、丁寧なヘラケズリ調整が施されている。2184は須恵器の坏身である。口径が9cm程度と小さく、立ち上がりはほとんど無い。2185と2186は須恵器の坏である。2187は須恵器の高坏。口縁部の破片で、体部上方に1条の沈線が巡る。2188は須恵器の鉢である。口縁部に向かって内湾して立ち上がり、口縁端部で小さく外反する。2189は陶白である。口縁部に向かって斜め上方へ直線的に立ち上がり、口縁端部は平らに仕上げられる。2190は須恵器の広口壺で、頸部から口縁部にかけての破片である。2191は長頸壺の肩部で、上半には自然釉の付着が認められる。2192はフラスコ壺の頸部。上方に2条の沈線が施されている。2193は須恵器の甕である。

2194と2195は土師器の坏である。内外面ともに赤彩が施され、内面には暗文が認められる。2196～2204は土師器の甕である。口径20cm前後の小型のもの（2196・2197）と、25cm前後の中型のもの（2198～2201）、30cmをこえる大型のもの（2202～2204）の3種が出土している。土師器の甕については、図化したもの以外にも体部の破片が比較的多く出土している。

2208～2213は、製塩土器である。いずれも坏部の破片であり、脚部については1点も出土していない。坏部の形状は、内湾して斜め上方に立ち上がる浅いもの（2208～2211）と、直立気味に立ち上がる深

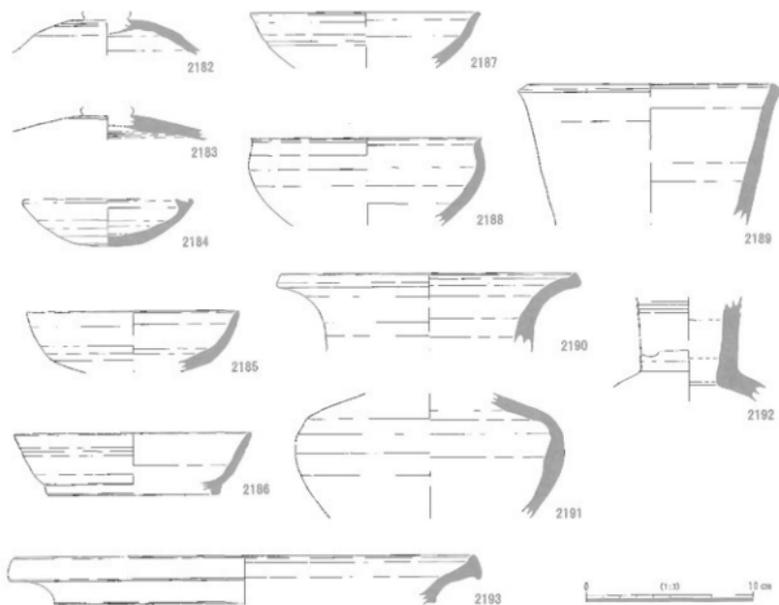


図289 SB6006出土遺物(1)

めのもの (2212・2213) とが認められる。いずれも、器壁は5mm以下と非常に薄いつくりとなっている。

土器以外の遺物としては、土製模造品が出土している。2214と2215は、堯または壺形の土製模造品である。胎土は緻密で薄いつくりとなっており、内面は板ナデ調整によって仕上げられている。2216と2217は、口縁部が斜めに開く坏の破片である。口縁部のみしか残存しないため、全体の形状は不明であるが、脚部と推定される2218と2219が同様に厚手のつくりとなっていることから、高環形の模造

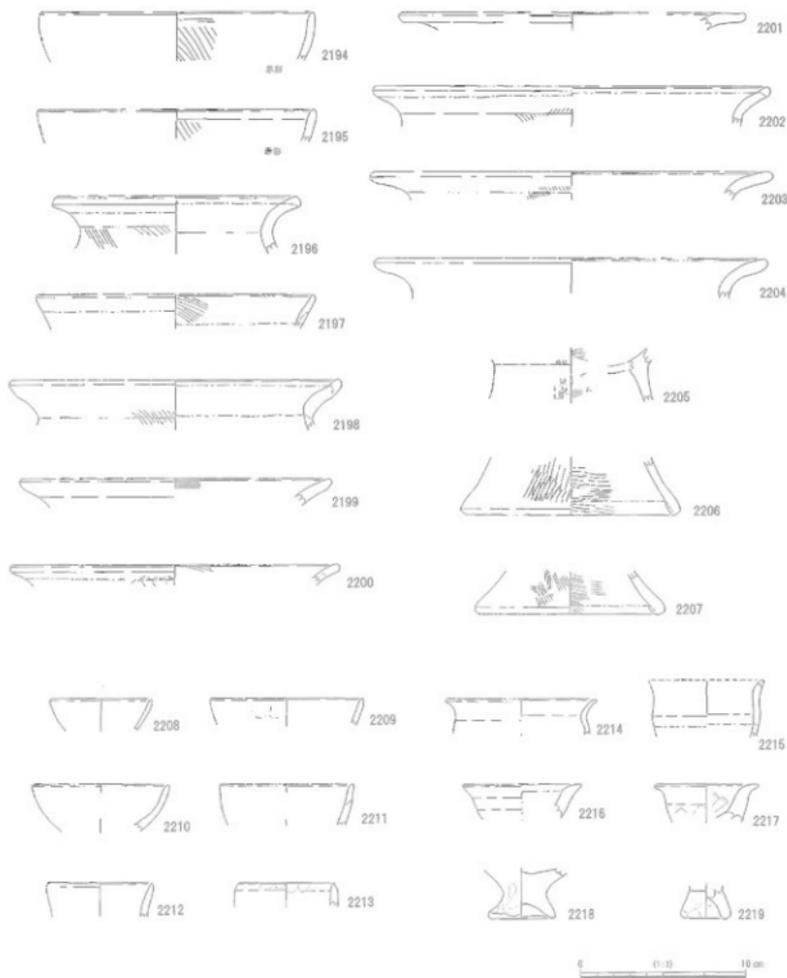


図 290 SB6006 出土遺物 (2)

品である可能性が高い。

土坑 SF6034 は、南側が調査区外となっているが、直径 4 m 程度の円形と推定される。掘鉢状の形状を呈し、深さは最深部で検出面から約 80 cm となっている。堅穴建物 SB6006 の埋土を切るかたちで掘られている。埋土は上下 2 層に分けられるが、遺物の内容や年代などに大きな差異は認められない。遺物としては、埋土から須恵器や土師器、土製品などが比較的豊富に出土している。

2220 ~ 2252 は須恵器である。2220 ~ 2228 は坏蓋である。2220 は口縁の復元径が約 10 cm と小型。2221 は大型のもので、やや内湾気味に口縁部へ向かい、先端を内側へ折り返している。2223 はやや厚めのつくりとなっており、被熱により表面が黒色の色調となっている。2229 ~ 2244 は坏である。2230 は無台の坏で、底部から斜め上方へ立ち上がる。底部には丁寧なヘラケズリ調整が施される。2231 も同様の形態であり、同一個体の可能性がある。2233 ~ 2239 は有台坏であり、高台のやや低い 2235・2236・2238 は被熱して表面が黒色となっている。2240 と 2241 は比較的平らな底部から、やや内湾して立ち上がる。2242 と 2243 は丸底の底部から斜めに立ち上がるもので、いずれも被熱により黒色に変色している。2245 と 2246 は高坏である。2247 ははそうで、肩部には 2 条の沈線が巡り、刺突文が施されている。2248 と 2250 は長頸壺である。2249 はやや内湾して立ち上がり、口縁部は外側へ折り返され玉縁状となる。鉢類であろうか。2251 は鉢であり、直線的に立ち上がり、口縁端部は平坦に仕上げられている。2252 は甕で、体部の外面は叩き調整、内面はナデ調整となっている。

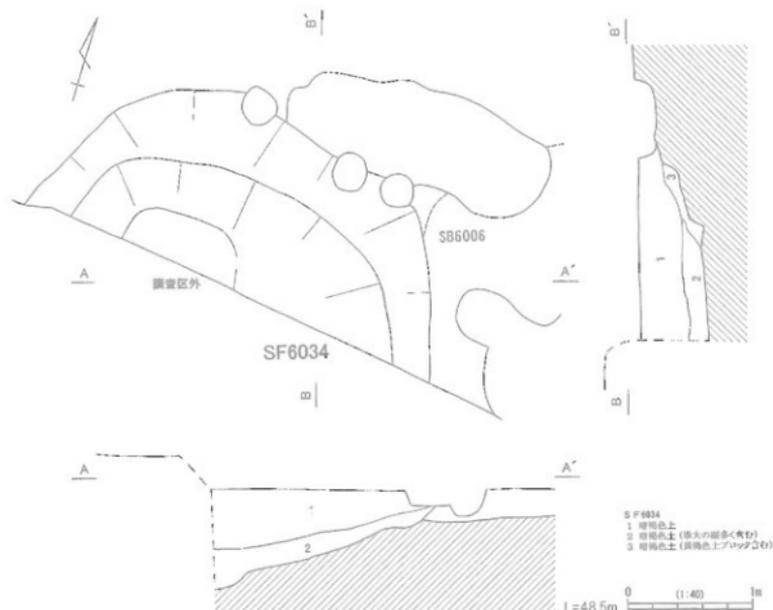


図 291 SF6034 実測図

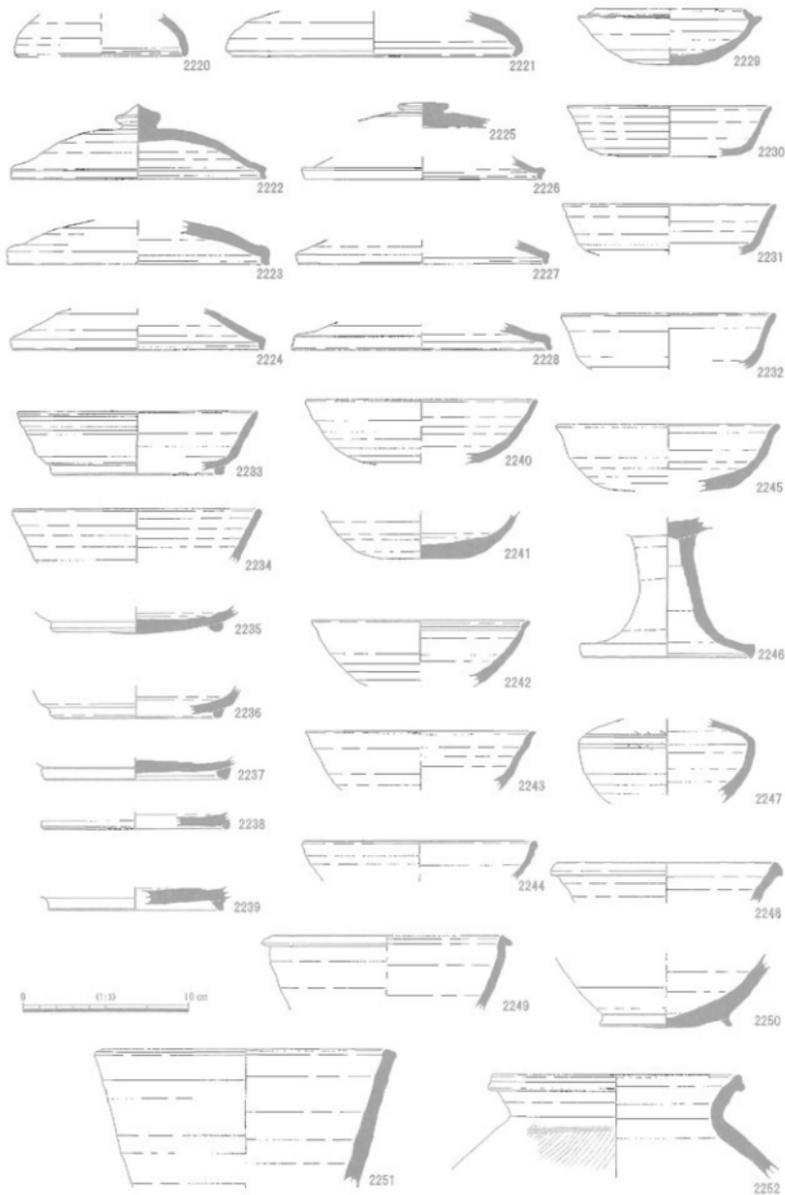


図 292 SF6034 出土遺物 (須恵器)

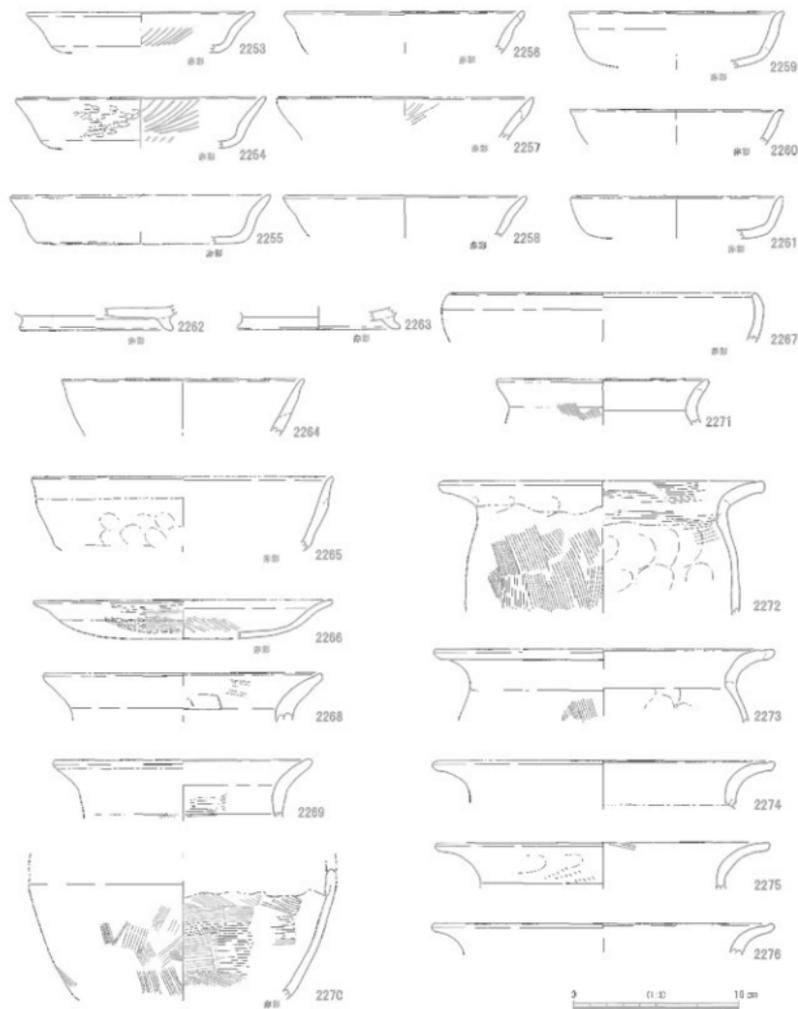


図 293 SF6034 出土遺物 (土師器)

2253～2288 は土師器である。2253～2258 は、底部から屈曲して立ち上がる坏で、口縁部に向かって大きく外反する。いずれも内外面ともに赤彩が施されており、2253 と 2254 の内面には暗文が認められる。2259・2260 は、緩やかに内湾してして立ち上がる坏である。内外面ともに赤彩が施されてお

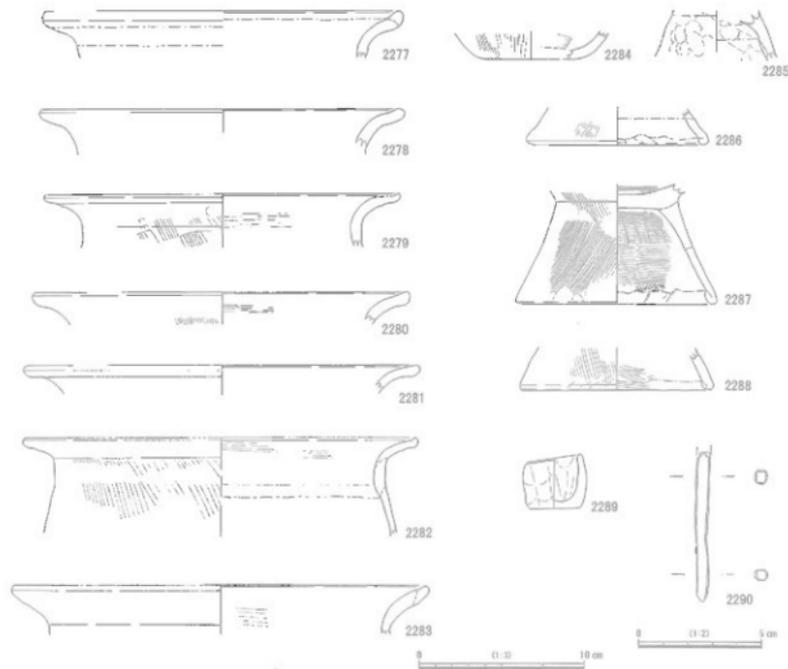


図 294 SF6034 出土遺物 (土師器・土製品)

り、口縁部は強いナデ調整によって外反する。2261 は浅い坏である。内外面ともに赤彩が施されている。2262 と 2263 は坏または皿の高台部である。いずれも底部外面が被熱している。被熱している部分を除き、全面に赤彩が認められる。2264 と 2265 はやや深い坏。口縁部に横方向のナデ調整が施されている。口縁部のみの破片ではあるが、高台坏の破片と推測される。2265 には内外面に赤彩が認められる。2266 は皿で、内外面ともに丁寧な磨き調整と赤彩が施されている。2267 は小型の鉢である。口縁部は内傾し、内外面ともに赤彩が施されている。2268 と 2269 は壺の口縁部である。2270 は壺の体部の破片で、外面にのみ赤彩が施されている。2271 ~ 2283 は甕の口縁部である。小型のもの (2271) と大型のもの (2272 ~ 2283) がみられ、大型のもの口縁部は斜め上方へ大きく開く。2284 は甕の底部、2285 ~ 2288 は台付き甕の脚部である。

2291 ~ 2313 は製塩土器である。いずれも口縁部の破片であり、脚部については全く確認できない。坏部の形態は、SB6006 と同様に、口縁部に向かって内湾して斜め上方に立ち上がるもの (2291 ~ 2302) と、直立気味に立ち上がるもの (2303 ~ 2313) の 2 つに大きくに分けることができる。さらに、直立気味に立ち上がるものについては、口縁端部の形状が平らになるもの (2309 ~ 2313) と、それ以外のもの (2303 ~ 2308) とに細分することができる。なお、口縁端部が平らになるものについては、SB6006 では出土していない。胎土については、緻密なものがほとんどであるが、2303 と 2311 など砂

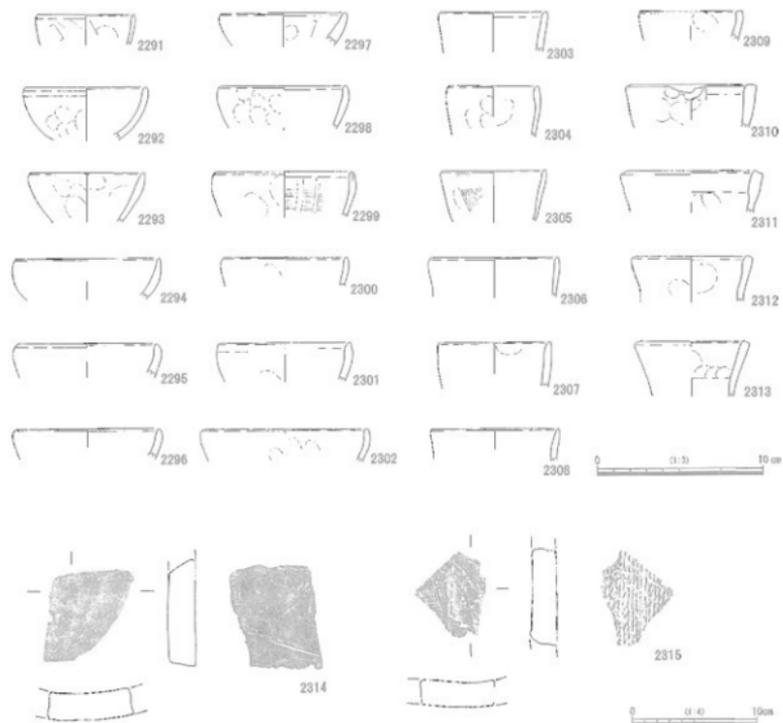


図 295 SF6034 出土遺物（製塩土器・瓦）

礫を含むものも一部存在する。

土器以外のものとしては、瓦と土製模造品が出土している。瓦は、平瓦が2点出土している。2314は広端部の破片で、凹凸面ともにナア調整が施されている。2315は端部の残存しない破片であり、凸面にタテ縄叩き、凹面には布目痕が認められる。2289は土製模造品である。手づくね成形されており、内外面には指頭痕が明瞭に残る。

遺物の年代としては、SB6006が7世紀末～8世紀初頭、SF6034が7世紀末～8世紀前半に位置付けられる。SF6034については、やや遺物の年代に幅はあるが、SF6034がSB6006の埋土を掘り込んでいることから、7世紀末の遺物に関しては、SB6006から混入したものとみてよい。

以上の点から、SB6006の廃絶年代の上限は7世紀末～8世紀初頭に、SF6034が掘削された年代はSB6006がある程度無化した8世紀の前半に位置付けられる。

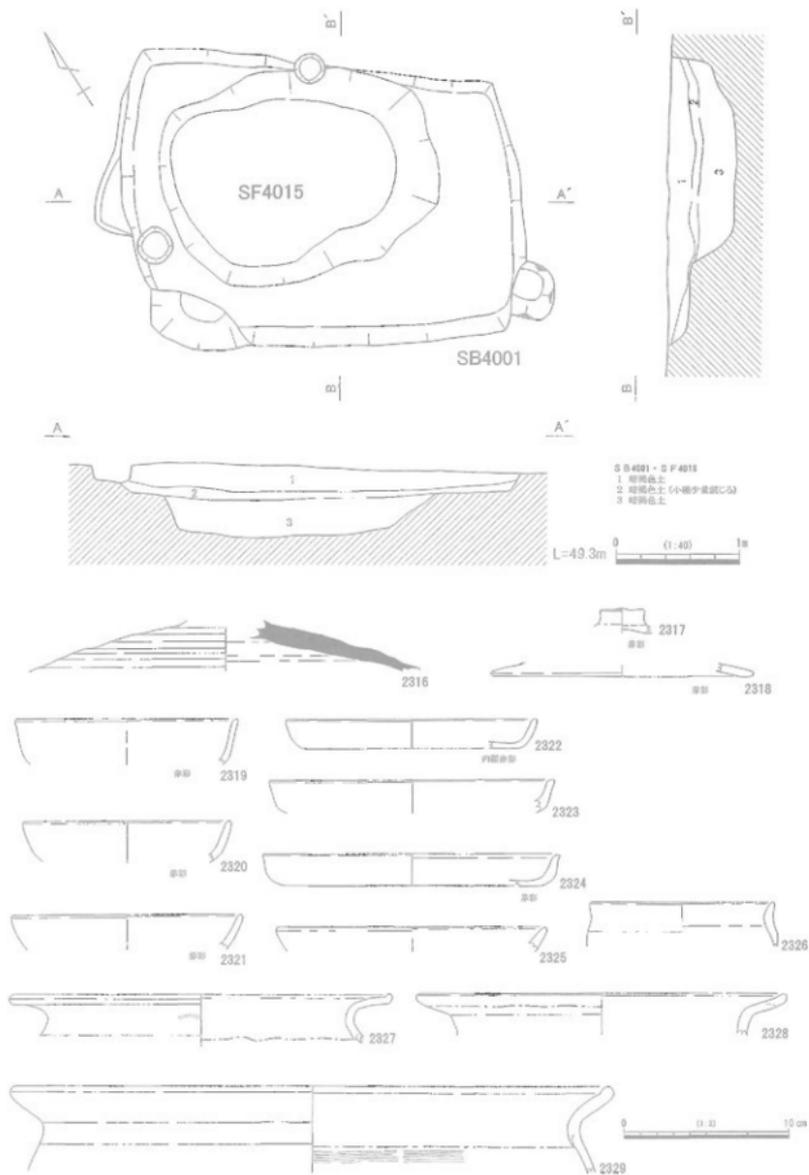


图 296 SB4001・SF4015 実測図・SB4001 出土遺物

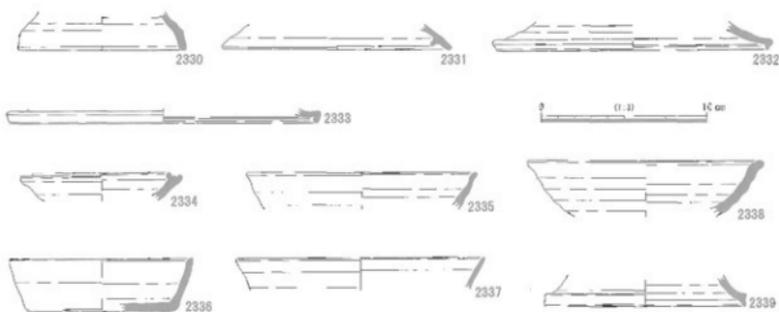


図 297 SF4015 出土遺物 (1)

SB4001・SF4015 (図 296～300、図版 34・40・73)

SB4001は、4区の南東側に位置する竪穴建物である。長方形の形状を呈し、大きさは23×3.8mである。深さは現存で30～50cmであり、床面はほぼ平坦となっている。建物の主軸は正方位に乘らず、北西へ大きく傾く。貼り床や壁溝、主柱穴などは、確認されていない。建物内のほぼ中央には、長径2.2mの大烈土坑SF4015が検出されている。調査時において、建物と土坑との間に切り合い関係は確認されていない。埋土は3層に分けられており、最下層の第3層はSF4015、第2層はSB4001の床面直上とSF4015の上に堆積している。

遺物は比較的豊富に出土しているが、土器については完形のものではなく、ほとんどが破片の状態の出土である。SB4001の床面直上にあたる、第2層のSX4001の上方を除く範囲からは、須恵器と土師器が出土している。2316は須恵器の蓋である。大型のもので、摘みと口縁部は欠損している。2317と2318は土師器の蓋である。内面については摩滅が著しいため明瞭でないが、外面には赤彩が認められる。2319～2321は土師器の坏である。いずれも口縁部だけの破片であるが、下方の湾曲の様子からやや浅めの坏であろう。内外面ともにナデ調整され、赤彩が施されている。2322～2324は土師器の皿である。2322は底部から若干内湾気味に斜め上方へ立ち上がる。内面には赤彩が認められるが、外面については摩滅しているため赤彩の有無が確認できない。2323は口縁端部が平らに仕上げられている。摩滅のためか、赤彩の痕跡は認められない。2324は丸みをもって立ち上がり、口縁はやや外反する。内外面ともにナデ調整され、赤彩が施されている。2325は土師器の坏または皿の口縁部である。2326は土師器の小型甕である。2327・2328は土師器の甕である。2327は口縁部が横に大きく開き、端部で上方へ屈曲している。2328は口縁部が斜めに開く形態である。2329は土師器の大型甕である。口縁部の内外面は板状工具によるナデ調整が施され、口縁端部はややつまみ上げ気味に丸く仕上げられている。

SF4015(第3層)からは須恵器と土師器、土錘が出土している。2330～2333は須恵器の坏蓋である。いずれも口縁部だけの破片である。2334～2337は須恵器の坏身である。2338と2339は須恵器の高坏である。2338は口縁部、2339は脚部だけの破片である。2340～2343は土師器の蓋である。口縁部だけの破片で、全体的に摩滅が著しいが、いずれも外面には赤彩が認められる。2344～2363は土師器の坏である。2344～2353はやや浅めの坏で、口縁部を丸く取めるものと、わずかに外反させるものがある。内外面ともにナデ調整され、赤彩が施されている。全体的に緻密な胎土のものが多い。2354～2357はやや深めの坏である。比較的粗い胎土のものも多く認められる。表面が摩滅しているものも少

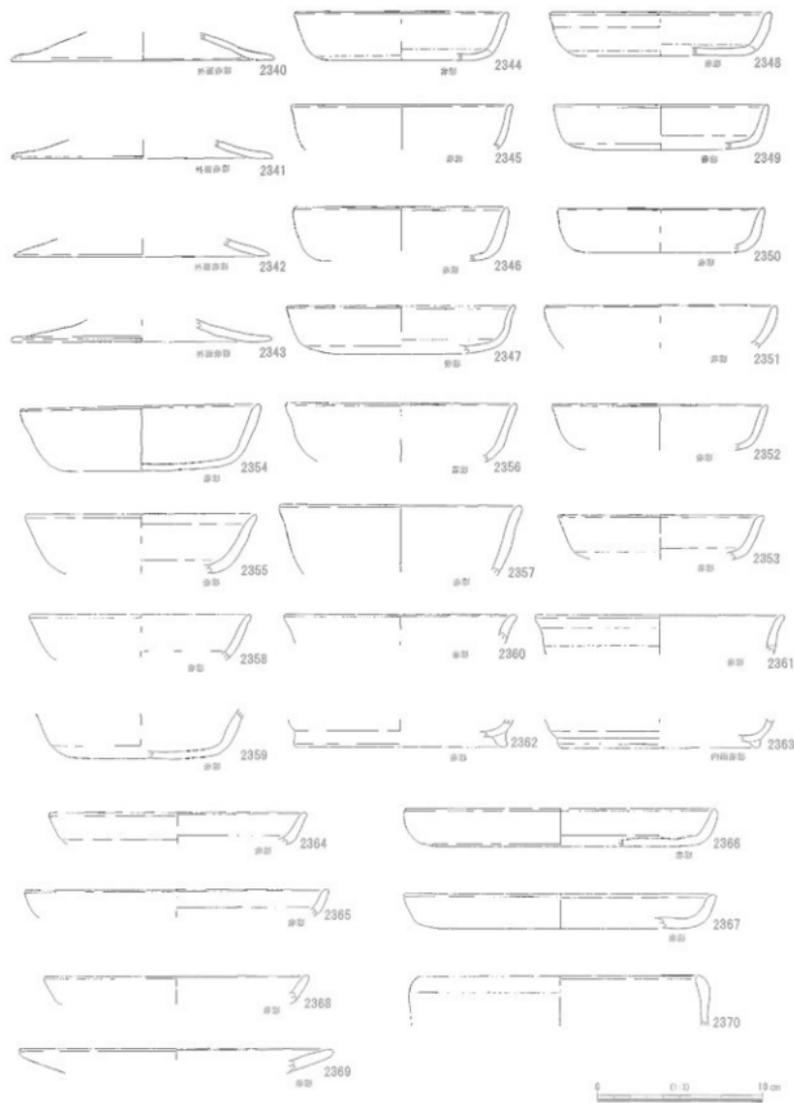


图 298 SF4015 出土遺物 (2)

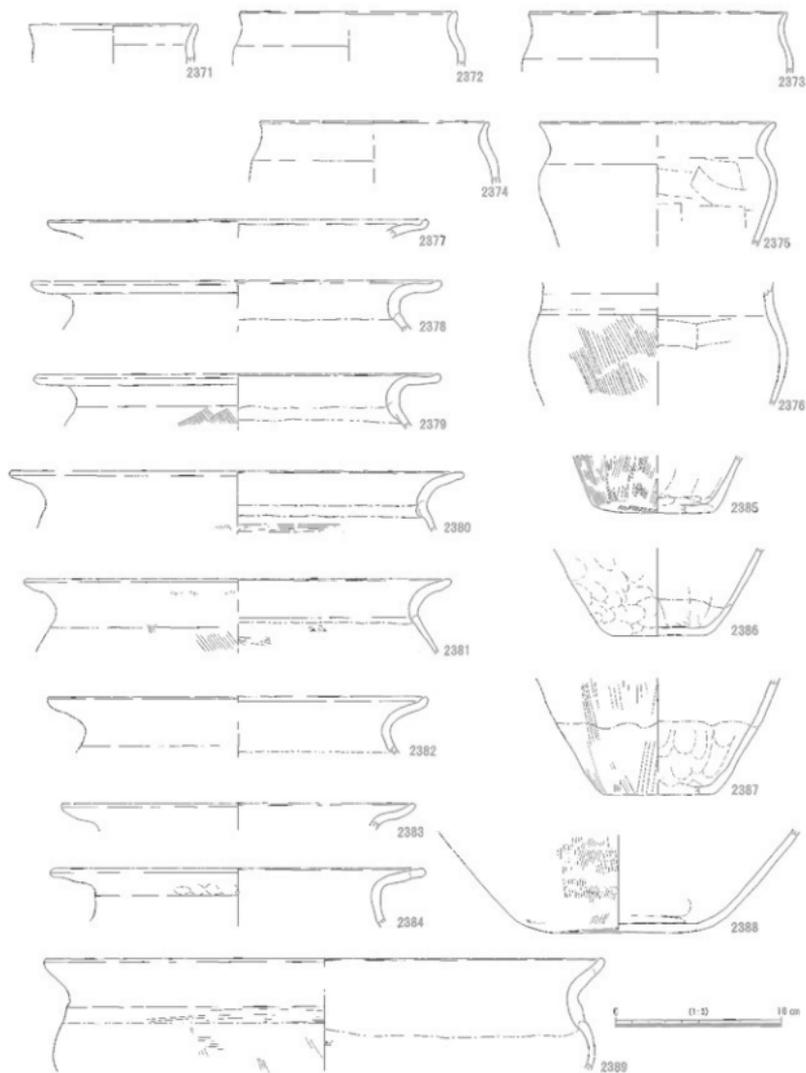


图 299 SF4015 出土遺物 (3)

なくないが、内外面ともにナデ調整で赤彩が施されている。2360～2363は高台杯である。底部から屈曲して立ち上がり、口縁部が外反する。2363は表面が摩滅しているため内面のみしか赤彩が確認できないが、他のものについては全面に赤彩が施されている。2364～2368は土師器の皿である。大型のものと小型のものがみられる。いずれも丁寧なナデ調整が施され、内外面ともに赤彩されている。

2369は土師器の高杯である。杯部の破片で、口縁に向かって大きく開き、端部は丸く収まる。内外面に赤彩が認められる。2370は土師器の鉢である。口縁部は、器壁が厚く内湾している。2371～2376は土師器の小型甕である。わずかに外反させて短い頸部とするものが多いが、屈曲させて頸部を明瞭につくり出しているもの(2375)も認められる。摩滅の著しいものも多いが、いずれも頸部から口縁部にかけては強いナデ調整が施されている。2377～2384は土師器の甕の口縁部である。口縁部が横方向に大きく広がるものと、斜めに開くものがある。

2385～2387は、土師器甕の底部である。摩滅により調整が不明瞭なものもあるが、外面にはハケ目調整、内面には板ナデ調整が施されている。2388と2389は土師器の鍋である。2389は口径30cmを越える大型のものである。

2390～2399は土錘である。直径1.5～2.0cm程の太いものと、直径1cm前後の細いものがある。また、これらの遺物のうち、2336と2344・2354・2375については、第3層の上層と遺構の底面近くから出土した破片との間において、接合関係が確認されている。

以上のように、竪穴建物SB4001の床面直上から出土した遺物と、土坑SF4015の埋土から出土した遺物を比べると、数量的にはSF4015が圧倒的に多いものの、内容や年代についてはほとんど差はない。調査時における所見の通り、SB4001とSF4015の間には、土層の切り合い関係は存在しないものとみてよいであろう。出土遺物は、多少古いものもみられるが、SB4001とSF4015ともに、8世紀前半から中頃にかけてのものが大半である。よって、SB4001は8世紀前半頃に廃絶し、その廃絶時またはほとんど間を空けない時期に、SF4015が建物内部に掘られたものと考えられる。

また、SF4015では、上層から出土した破片と底部付近から出土した破片との間に、接合関係が認められており、土坑全体が一時に埋められていることがわかる。さらに、SF4015の遺物の出土量は、中層遺跡で発見されている他の遺構に比して多量であることから、SF4015は土器などの廃棄土坑と考えてよいであろう。なお、出土した遺物については、SB4001の廃絶時またはその直後に投棄されている上に、SB4001の床面付近で出土した破片との間でも接合関係が確認できることから、SB4001で使用されたものである可能性が高く、建物の廃絶時における片付け行為などに伴うものであると推測される。

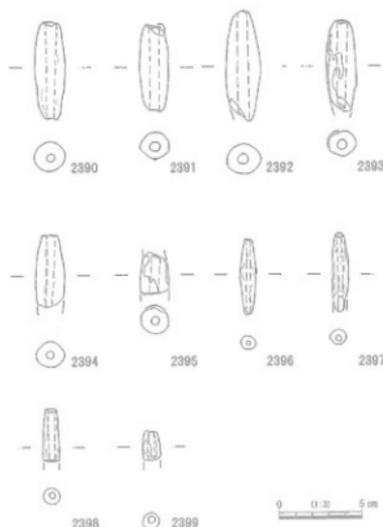


図300 SF4015出土遺物(4)

表 28 壁穴建物出土遺物観察表 (1)

No.	遺構名	層位	種類	形状	口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	重さ (g)	数量 (個)	観察者	色別	備考
2144	860001	埴土	須磨器	円筒	9(9)	0(3)	4.05			白緑-黒緑 1/4	灰白	
2145	860001	埴土	須磨器	円筒	10(10)	4(2)	4.1			白緑-黒緑 1/5	灰白 / 灰青	
2146	860001	埴土	須磨器	円筒	13(4)					白緑 1/16	灰	
2147	860001	埴土	土師器	円	17(5)					白緑 1/16	淡黄緑	検出
2148	860001	埴土	土師器	筒	18(8)					白緑 1/7	土色-黄緑	検出
2149	860001	埴土	土師器	筒	14(7)					白緑 1/6	土色-黄緑	
2150	860001	埴土	土師器	筒	21(6)					白緑 1/15	土色-黄	
2151	860001	埴土	土師器	筒	20(9)					白緑 1/14	土色-黄	
2152	860001	埴土	土師器	筒	21(9)					白緑 1/24	淡黄緑	
2153	860001	埴土	土師器	筒			16(2)			黒 1/5	灰	
2154	860003	埴土	土師器	筒	18(8)					白緑 1/30	土色-黄	
2155	860004	埴土	須磨器	円筒	14(4)					白緑 1/15	灰白	
2156	860004	埴土	須磨器	円筒	15(5)					白緑 1/10	灰白	
2157	860004	埴土	土師器	鉢	13(2)					白緑-黒緑 1/24	淡黄緑	土穴付録
2158	860004	埴土	土師器	鉢	12(3)					白緑 1/9	淡黄緑	検出
2159	860004	埴土	土師器	鉢	15(5)					白緑 1/24	淡黄緑	検出
2160	860004	埴土	土師器	鉢	12(3)					白緑 1/20	淡黄緑	検出
2161	860004	埴土	土師器	鉢	12(2)					白緑 1/11	淡黄緑	検出
2162	860004	埴土	土師器	鉢						黒 1/8 (黒色部分欠)	淡黄緑	検出
2163	860004	埴土	土師器	鉢	16(4)					白緑 1/15	淡黄緑	検出
2164	860004	埴土	土師器	鉢	17(8)					白緑 1/20	黒 / 土色-黄緑	検出
2165	860004	埴土	土師器	筒	17(4)		15(7)	1.85		白緑-黒緑 1/9	淡黄緑	検出
2166	860004	埴土	土師器	筒	17(2)					白緑 1/24	灰	検出
2167	860004	埴土	土師器	高円	19(5)					白緑 1/10	淡黄緑	検出
2168	860004	埴土	土師器	鉢	17(2)					白緑 1/8	淡黄緑	検出
2169	860004	埴土	土師器	分注器	17(8)					白緑 1/5	土色-黄	検出
2170	860004	埴土	土師器	分注器			19(9)			黒 1/5	土色-黄	
2171	860004	埴土	土師器	筒	19(5)					白緑 1/15	土色-黄緑 / 黄褐色	
2172	860004	埴土	土師器	筒	21(6)					白緑 1/12	土色-黄緑	
2173	860004	埴土	土師器	筒	23(5)					白緑 1/22	土色-黄	
2174	860004	埴土	土師器	筒	25(8)					白緑 1/17	土色-黄	
2175	860004	埴土	土師器	筒	25(4)					白緑 1/15	土色-黄	
2176	860004	埴土	土師器	筒	26(3)					土緑 1/20	淡黄緑	
2177	860004	埴土	土師器	筒	28(4)					白緑 1/16	土色-黄	
2178	860004	埴土	土師器	筒	30(5)					白緑 1/16	淡黄緑	
2179	860004	埴土	土師文器							一部欠	土色-黄緑	
2180	860004	埴土	土師文器							一部欠	土色-黄緑	
2181	860004	埴土	土師文器							一部欠	土色-黄緑	
2182	860006	埴土	須磨器	円筒			14(3)			黒緑 1/4	灰	
2183	860006	埴土	須磨器	円筒						黒緑 1/12	灰白	
2184	860006	埴土	須磨器	円筒	10.4					黄緑-黒緑 1/6	灰白	
2185	860006	埴土	須磨器	円筒	12(8)					白緑-黒緑 1/8	灰白	
2186	860006	埴土	須磨器	円筒	14(3)			3.85	(10.1)	白緑-黒緑 1/3	灰白	
2187	860006	埴土	須磨器	高円	13(5)					白緑-黒緑 1/16	灰	
2188	860006	埴土	須磨器	筒	13(8)					白緑-黒緑 1/8	灰	
2189	860006	埴土	須磨器	筒	14(5)					白緑-黒緑 1/5	灰	
2190	860006	埴土	須磨器	山形蓋	17(7)					白緑 1/6	灰青	
2191	860008	埴土	須磨器	丸形蓋						黄緑 1/4	黄緑	
2192	860008	埴土	須磨器	フタスコップ						筒 1/2	灰	検出
2193	860006	埴土	須磨器	筒	27(3)					白緑 1/16	灰	
2194	860006	埴土	土師器	鉢	18(4)					白緑 1/16	土色-黄	
2195	860006	埴土	土師器	鉢	18(8)					白緑 1/28	黒 / 土色-黄緑	
2196	860006	埴土	土師器	筒	14(2)					白緑 1/4	土色-黄	
2197	860006	埴土	土師器	筒	16(8)					白緑 1/12	土色-黄緑	
2198	860006	埴土	土師器	筒	18(1)					白緑 1/10	土色-黄	
2199	860006	埴土	土師器	筒	14(6)					白緑 1/20	土色-黄	
2200	860008	埴土	土師器	筒	19(5)					白緑 1/12	淡黄緑	
2201	860008	埴土	土師器	筒	20(3)					白緑 1/12	土色-黄	
2202	860006	埴土	土師器	筒	23(7)					白緑 1/15	土色-黄	
2203	860005	埴土	土師器	筒	24(5)					白緑 1/28	土色-黄	土穴付録
2204	860006	埴土	土師器	筒	23(4)					白緑 1/20	土色-黄	
2205	860006	埴土	土師器	分注器			12(5)			黒 1/10	土色-黄	
2206	860006	埴土	土師器	分注器			11(5)			黒 1/12	灰	
2207	860008	埴土	土師器	分注器			10(5)			黒 1/14	土色-黄	
2208	860006	埴土	須磨器	土部	15(1)					白緑 1/10	土色-黄	
2209	860006	埴土	須磨器	土部	18(1)					白緑 1/16	土色-黄	
2210	860006	埴土	須磨器	土部	18(3)					白緑-黒緑 1/6	灰	
2211	860006	埴土	須磨器	土部	18(9)					白緑 1/12	淡黄緑	
2212	860006	埴土	須磨器	土部	18(2)					白緑-黒緑 1/12	黄緑 / 土色-黄	
2213	860006	埴土	須磨器	土部	15(8)					白緑 1/8	灰	
2214	860006	埴土	土師織造品	袋・壺形	18(9)					白緑 1/8	灰	
2215	860006	埴土	土師織造品	袋・壺形						黄緑 1/5	土色-黄	
2216	860006	埴土	土師織造品	鉢形	7(5)					白緑-黒緑 1/8	土色-黄	
2217	860006	埴土	土師織造品	分注器	15(8)					白緑-黒緑 1/3	土色-黄	
2218	860006	埴土	土師織造品	高円形			18(8)			黒-黒	灰	
2219	860006	埴土	土師織造品	高円形			11(4)			筒 1/2	灰	
2220	860034	埴土	須磨器	円筒	10(1)					白緑 1/12	灰	
2221	860034	埴土	須磨器	円筒	17(1)					白緑 1/10	灰	
2222	860034	埴土	須磨器	円筒	15(2)			4.55		白緑 1/6	灰	
2223	860034	埴土	須磨器	円筒	16(4)					白緑-黒緑 1/8	灰	
2224	860034	埴土	須磨器	円筒	15(5)					白緑 1/10	灰	検出・土穴付録
2225	860034	埴土	須磨器	円筒			14(4)			白緑 1/16	灰	
2227	860034	埴土	須磨器	円筒	16(6)					白緑 1/16	灰	
2228	860034	埴土	須磨器	円筒	15(5)					白緑 1/10	灰	
2229	860034	埴土	須磨器	円筒	8(1)	5(2)	3.45			1/6	灰	

表 29 堅穴建物出土遺物觀察表 (2)

品	遺物名	遺址	種類	用途	口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	保存率	色相	備考
2230	SP6034	埴土	須磨器	杯	(12.3)	8(1)		1/3			灰黄	
2231	SP6034	埴土	須磨器	杯身	(12.9)						口縁部 1/8	破片
2232	SP6034	埴土	須磨器	杯身	(12.9)						口縁部 1/8	破片
2233	SP6034	埴土	須磨器	杯身	(14.4)		3.9	0.8			1/6	灰黄
2234	SP6034	埴土	須磨器	杯身	(15.0)						口縁部 1/8	破片
2235	SP6034	埴土	須磨器	杯身				0.7			底面 1/2	灰黄
2236	SP6034	埴土	須磨器	杯身				0.8			底面 1/6	灰黄
2237	SP6034	埴土	須磨器	杯身				1(0.5)			底面 1/2	灰黄
2238	SP6034	埴土	須磨器	杯身	(7.9)						口縁部 1/8	灰
2239	SP6034	埴土	須磨器	杯身				1(0.9)				灰白
2240	SP6034	埴土	須磨器	杯身	(13.8)						口縁部 1/12	灰黄
2241	SP6034	埴土	須磨器	杯身		14.0					口縁部 1/8	灰黄
2242	SP6034	埴土	須磨器	杯身							口縁部 1/2	灰黄
2243	SP6034	埴土	須磨器	杯身	(13.1)						口縁部 1/12	灰 / 灰黄
2244	SP6034	埴土	須磨器	杯身	(12.2)						口縁部 1/14	灰
2245	SP6034	埴土	須磨器	高坪	(13.4)						口縁部 1/8	灰
2246	SP6034	埴土	須磨器	高坪		1(0.2)					底面 1/2	灰
2247	SP6034	埴土	須磨器	鉢							口縁部 1/20	灰黄
2248	SP6034	埴土	須磨器	高脚鉢	(13.1)						口縁部 1/8	C.01A-群 / 灰白
2249	SP6034	埴土	須磨器	鉢	(14.0)						口縁部 1/8	灰黄 / 灰
2250	SP6034	埴土	須磨器	高脚鉢						1(7.0)	底面 1/2	灰
2251	SP6034	埴土	須磨器	鉢	(17.2)						口縁部 1/10	灰黄
2252	SP6034	埴土	須磨器	鉢	(15.0)						口縁部 1/12	灰
2253	SP6034	埴土	須磨器	片	(13.7)						口縁部 1/10	灰
2254	SP6034	埴土	土師器	片	(15.0)						口縁部 1/10	C.01A-群
2255	SP6034	埴土	土師器	片	(15.0)		1(0.0)	0.0			口縁部 1/12	C.01A-群
2256	SP6034	埴土	土師器	片	(14.2)						口縁部 1/12	C.01A-群
2257	SP6034	埴土	土師器	片	(15.4)						口縁部 1/16	C.01A-群
2258	SP6034	埴土	土師器	片	(14.7)						口縁部 1/10	須磨器
2259	SP6034	埴土	土師器	片	(12.8)						口縁部 1/8	須磨器
2260	SP6034	埴土	土師器	片	(12.4)						口縁部 1/10	須磨器
2261	SP6034	埴土	土師器	片	(12.7)						口縁部 1/8	須磨器
2262	SP6034	埴土	土師器	片	(12.7)						口縁部 1/8	須磨器
2263	SP6034	埴土	土師器	片	(12.7)						口縁部 1/8	須磨器
2264	SP6034	埴土	土師器	片	(14.8)						口縁部 1/16	須磨器
2265	SP6034	埴土	土師器	片	(18.15)						口縁部 1/4	須磨器
2266	SP6034	埴土	土師器	片	(18.0)						口縁部 1/12	須磨器
2267	SP6034	埴土	土師器	片	(18.2)						口縁部 1/12	須磨器
2268	SP6034	埴土	土師器	片	(15.0)						口縁部 1/10	須磨器
2269	SP6034	埴土	土師器	片	(15.0)						口縁部 1/8	須磨器
2270	SP6034	埴土	土師器	片	(16.1)						口縁部 1/8	C.01A-群
2271	SP6034	埴土	土師器	片	(12.7)						口縁部 1/8	須磨器
2272	SP6034	埴土	土師器	片	(19.4)						口縁部 1/2	須磨器
2273	SP6034	埴土	土師器	片	(20.4)						口縁部 1/20	C.01A-群
2274	SP6034	埴土	土師器	片	(20.2)						口縁部 1/8	C.01A-群
2275	SP6034	埴土	土師器	片	(20.1)						口縁部 1/8	C.01A-群
2276	SP6034	埴土	土師器	片	(20.0)						口縁部 1/12	C.01A-群
2277	SP6034	埴土	土師器	片	(21.3)						口縁部 1/20	須磨器
2278	SP6034	埴土	土師器	片	(21.4)						口縁部 1/20	須磨器
2279	SP6034	埴土	土師器	片	(20.1)						口縁部 1/14	C.01A-群
2280	SP6034	埴土	土師器	片	(22.4)						口縁部 1/8	C.01A-群
2281	SP6034	埴土	土師器	片	(22.2)						口縁部 1/16	C.01A-群
2282	SP6034	埴土	土師器	片	(22.0)						口縁部 1/4	C.01A-群
2283	SP6034	埴土	土師器	片	(24.7)						口縁部 1/12	C.01A-群
2284	SP6034	埴土	土師器	片		6(4)					底面 1/2	C.01A-群
2285	SP6034	埴土	土師器	片							底面 1/4	C.01A-群 / C.01A-群
2286	SP6034	埴土	土師器	片		1(0.1)					底面 1/8	C.01A-群
2287	SP6034	埴土	土師器	片	(11.0)						底面 1/4	C.01A-群
2288	SP6034	埴土	土師器	片	(11.8)						底面 1/2	C.01A-群 / C.01A-群
2289	SP6034	埴土	土師器	片	2.2	3.0	3.1				口縁部 1/4 底面	須磨器
2290	SP6034	埴土	須磨器	須磨器	口径 6.1	高さ 0.55	厚さ 0.9					
2291	SP6034	埴土	須磨器	須磨器	(5.8)						口縁部 1/8	灰
2292	SP6034	埴土	須磨器	須磨器	(7.4)						口縁部 1/8	須磨器
2293	SP6034	埴土	須磨器	須磨器	(6.0)						口縁部 1/4	須磨器
2294	SP6034	埴土	須磨器	須磨器	(6.0)						口縁部 1/12	C.01A-群
2295	SP6034	埴土	須磨器	須磨器	(5.2)						口縁部 1/12	須磨器
2296	SP6034	埴土	須磨器	須磨器	(5.0)						口縁部 1/12	須磨器
2297	SP6034	埴土	須磨器	須磨器	(7.0)						口縁部 1/10	C.01A-群
2298	SP6034	埴土	須磨器	須磨器	(5.0)						口縁部 1/8	C.01A-群
2299	SP6034	埴土	須磨器	須磨器	(5.1)						口縁部 1/10	C.01A-群
2300	SP6034	埴土	須磨器	須磨器	(7.4)						口縁部 1/12	C.01A-群
2301	SP6034	埴土	須磨器	須磨器	(7.2)						口縁部 1/12	C.01A-群
2302	SP6034	埴土	須磨器	須磨器	(6.1)						口縁部 1/12	C.01A-群
2303	SP6034	埴土	須磨器	須磨器	(5.9)						口縁部 1/12	灰
2304	SP6034	埴土	須磨器	須磨器	(5.3)						口縁部 1/8	C.01A-群
2305	SP6034	埴土	須磨器	須磨器	(6.3)						口縁部 1/4	C.01A-群
2306	SP6034	埴土	須磨器	須磨器	(7.0)						口縁部 1/10	C.01A-群
2307	SP6034	埴土	須磨器	須磨器	(6.7)						口縁部 1/10	C.01A-群
2308	SP6034	埴土	須磨器	須磨器	(7.0)						口縁部 1/12	C.01A-群
2309	SP6034	埴土	須磨器	須磨器	(6.1)						口縁部 1/12	C.01A-群
2310	SP6034	埴土	須磨器	須磨器	(7.1)						口縁部 1/8	C.01A-群
2311	SP6034	埴土	須磨器	須磨器	(7.0)						口縁部 1/8	須磨器
2312	SP6034	埴土	須磨器	須磨器	(6.0)						口縁部 1/12	C.01A-群
2313	SP6034	埴土	須磨器	須磨器	(6.1)						口縁部 1/4	灰 / 灰黄
2314	SP6034	埴土	瓦	平瓦							灰白	C.01A-群 / 須磨器
2315	SP6034	埴土	瓦	平瓦							灰白	須磨器 / 須磨器

表 30 竇穴建物出土遺物觀察表 (3)

編	遺物名	層位	種類	品名	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	容量 (cc)	形状	出所	備考
2315	SB4001	2層	土師器	甕					天井部	灰白	
2317	SB4001	2層	土師器	甕					地中	灰白	竇部 (外側)
2318	SB4001	2層	土師器	甕	(15.7)				口部径 1/20	灰白	竇部
2319	SB4001	2層	土師器	甕	(16.5)				口部径 1/6	灰白	竇部
2320	SB4001	2層	土師器	甕	(19.3)				口部径 1/16	灰白	竇部
2321	SB4001	2層	土師器	甕	(13.8)				口部径 1/16	灰白・黄緑	竇部
2322	SB4001	2層	土師器	甕	(16.0)	(13.0)			口部一帯径 1/7	灰白	竇部
2323	SB4001	2層	土師器	甕	(17.1)				口部径 1/36	灰白・黄緑	竇部
2324	SB4001	2層	土師器	甕	(17.2)	(15.0)			口部一帯径 1/14	灰白	竇部
2325	SB4001	2層	土師器	甕	(16.5)				口部径 1/16	灰白	竇部
2326	SB4001	2層	土師器	小甕	(11.0)				口部径 1/10	灰白・黄緑 / 灰白	竇部
2327	SB4001	2層	土師器	甕	(22.0)				口部径 1/12	灰白・黄緑	竇部
2328	SB4001	2層	土師器	甕	(22.0)				口部径 1/20	灰白	竇部
2329	SB4001	2層	土師器	甕	(26.1)				口部径 1/5	黄緑	竇部
2330	SF4015	3層	土師器	甕	(9.7)				口部径 1/5	灰白	竇部
2331	SF4015	3層	土師器	甕	(13.85)				口部径 1/20	灰白	竇部
2332	SF4015	3層	土師器	甕	(15.4)				口部径 1/6	灰白	竇部
2333	SF4015	3層	土師器	甕	(10.0)				口部径 1/12	灰白	竇部
2334	SF4015	3層	土師器	甕	(8.2)				口部径 1/10	灰白	竇部
2335	SF4015	3層	土師器	甕	(13.8)				口部径 1/12	黄緑	竇部
2336	SF4015	3層	土師器	甕	(11.0)	(9.2)	3.95		1/10	灰白	竇部
2337	SF4015	3層	土師器	甕	(12.9)				口部径 1/12	灰白	竇部
2338	SF4015	3層	土師器	甕	(14.0)				口部一帯径 1/5	灰白	竇部
2339	SF4015	3層	土師器	甕	(12.0)	(12.0)			底径 1/12	灰白	竇部
2340	SF4015	3層	土師器	甕	(15.2)				口部径 1/5	灰白	竇部
2341	SF4015	3層	土師器	甕	(15.0)				口部径 1/8	黄緑	竇部
2342	SF4015	3層	土師器	甕	(15.4)				口部径 1/5	灰白	竇部
2343	SF4015	3層	土師器	甕	(15.0)				口部径 1/3	黄緑	竇部 (外側)
2344	SF4015	3層	土師器	甕	(12.7)	(10.4)	3.0		口部一帯径 1/3	黄緑	竇部
2345	SF4015	3層	土師器	甕	(13.3)				口部径 1/12	黄緑	竇部
2346	SF4015	3層	土師器	甕	(12.2)				口部径 1/10	黄緑	竇部
2347	SF4015	3層	土師器	甕	(13.5)	(7.0)	2.0		口部一帯径 1/4	黄緑	竇部
2348	SF4015	3層	土師器	甕	(13.1)	(10.4)	2.65		口部一帯径 1/8	灰白	竇部
2349	SF4015	3層	土師器	甕	(12.8)	(7.0)	2.9		口部一帯径 1/5	灰白	竇部
2350	SF4015	3層	土師器	甕	(12.4)				口部径 1/5	黄緑	竇部
2351	SF4015	3層	土師器	甕	(13.0)				口部径 1/5	黄緑	竇部
2352	SF4015	3層	土師器	甕	(13.0)				口部径 1/12	黄緑	竇部
2353	SF4015	3層	土師器	甕	(12.4)				口部径 1/10	灰白	竇部
2354	SF4015	3層	土師器	甕	14.3	10.55	3.95		3/4	灰白 / 灰白・黄緑	竇部
2355	SF4015	3層	土師器	甕	(13.0)				口部径 1/8	灰白・黄緑	竇部
2356	SF4015	3層	土師器	甕	(13.0)				口部径 1/5	黄緑	竇部
2357	SF4015	3層	土師器	甕	(14.5)				口部径 1/5	黄緑	竇部
2358	SF4015	3層	土師器	甕	(13.0)				口部径 1/10	黄緑	竇部
2359	SF4015	3層	土師器	甕	(12.0)	(9.4)			口部一帯径 1/4	灰白	竇部
2360	SF4015	3層	土師器	甕	(13.0)				口部径 1/12	黄緑	竇部
2361	SF4015	3層	土師器	甕	(14.8)				口部径 1/16	黄緑	竇部
2362	SF4015	3層	土師器	甕	(12.8)	(12.0)			底径 1/16	黄緑	竇部
2363	SF4015	3層	土師器	甕					底径 1/12	黄緑	竇部
2364	SF4015	3層	土師器	甕	(15.0)				口部径 1/14	黄緑	竇部
2365	SF4015	3層	土師器	甕	(19.7)	(15.0)	2.5		口部一帯径 1/4	黄緑	竇部
2366	SF4015	3層	土師器	甕	(15.1)				口部径 1/10	灰白・黄緑	竇部
2367	SF4015	3層	土師器	甕	(18.7)	(15.0)			口部一帯径 1/10	黄緑	竇部
2368	SF4015	3層	土師器	甕	(15.2)				口部径 1/16	黄緑	竇部
2369	SF4015	3層	土師器	甕	(16.4)				口部径 1/20	黄緑	竇部
2370	SF4015	3層	土師器	甕	(17.2)				口部径 1/12	黄緑	竇部
2371	SF4015	3層	土師器	甕	(10.0)				口部径 1/10	黄	竇部
2372	SF4015	3層	土師器	甕	(12.0)				口部径 1/12	黄緑	竇部
2373	SF4015	3層	土師器	甕	(16.0)				口部径 1/20	黄緑 / 黄	竇部
2374	SF4015	3層	土師器	甕	(13.0)				口部径 1/8	灰白・黄 / 灰白・黄	竇部
2375	SF4015	3層	土師器	甕	(14.2)				口部一帯径 1/5	黄 / 黄緑	竇部
2376	SF4015	3層	土師器	甕	(22.0)				口部径 1/7	黄	竇部
2377	SF4015	3層	土師器	甕	(24.0)				口部径 1/3	黄	竇部
2378	SF4015	3層	土師器	甕	(24.2)				口部径 1/6	黄	竇部
2380	SF4015	3層	土師器	甕	(27.0)				口部径 1/6	灰白・黄 / 灰白・黄	竇部
2381	SF4015	3層	土師器	甕	(25.4)				口部径 1/6	灰白・黄	竇部
2382	SF4015	3層	土師器	甕	(22.0)				口部径 1/6	黄緑	竇部
2383	SF4015	3層	土師器	甕	(21.2)				口部径 1/8	黄緑	竇部
2384	SF4015	3層	土師器	甕	(22.2)				口部径 1/6	黄	竇部
2385	SF4015	3層	土師器	甕			7.2		底径 3/5	灰白・黄 / 黄	外側・大付筒
2386	SF4015	3層	土師器	甕			6.5		底径 1/4	黄 / 灰白・黄	外側・大付筒
2387	SF4015	3層	土師器	甕			10.0		底径 1/4	黄	竇部
2388	SF4015	3層	土師器	甕			10.7		底径 3/5	黄緑	竇部
2389	SF4015	3層	土師器	甕	(20.0)				口部径 1/8	灰白・黄	竇部
2390	SF4015	3層	土師器	甕	底 6.0	幅 1.0					
2391	SF4015	3層	土師器	甕	底 5.3	幅 1.7					
2392	SF4015	3層	土師器	甕	底 6.0	幅 2.05					
2393	SF4015	3層	土師器	甕	底 5.5	幅 1.75					
2394	SF4015	3層	土師器	甕	底径長 4.4	幅 1.7					
2395	SF4015	3層	土師器	甕	底径長 2.0	幅 1.7					
2396	SF4015	3層	土師器	甕	底 4.5	幅 1.0					
2397	SF4015	3層	土師器	甕	底径長 4.8	幅 1.0					
2398	SF4015	3層	土師器	甕	底 3.2	幅 1.0					
2399	SF4015	3層	土師器	甕	底径長 1.3	幅 1.05					

3. 掘立柱建物

SH1005 (図 301・図版 45)

1区の中央東側に位置する、1×2間の小規模な側柱建物である。建物規模3.0×3.5mの東西棟で、主軸方位はN-4°-Eである。検出された穴はいずれも柱抜き穴で、柱痕跡は確認されていない。形状はややいびつな楕円形で、大きさは30～40cm前後である。深さは、現存で10～20cm程度と比較的浅い。建物の厳密な柱間については不明であるが、抜き穴の位置から梁行で約1.5mのほぼ等間であると推測される。

遺物については、1点も出土していないため、厳密な時期については不明である。ただし、中屋遺跡において、主軸を東に振る建物は古代に限られることから、この建物についても古代に属する可能性が高いと推測される。

SH1006 (図 302・303、図版 43)

1区の南側に位置する、2×4間の側柱建物である。建物規模4.88×6.76mの南北棟で、主軸方位はN-7°-Eである。北側の一部は、攪乱によって失われている。妻柱は、隅柱を結んだ線上よりもやや外側で検出されている。また、建物内部の両妻柱を結ぶ線上には、東柱または間仕切柱とみられる

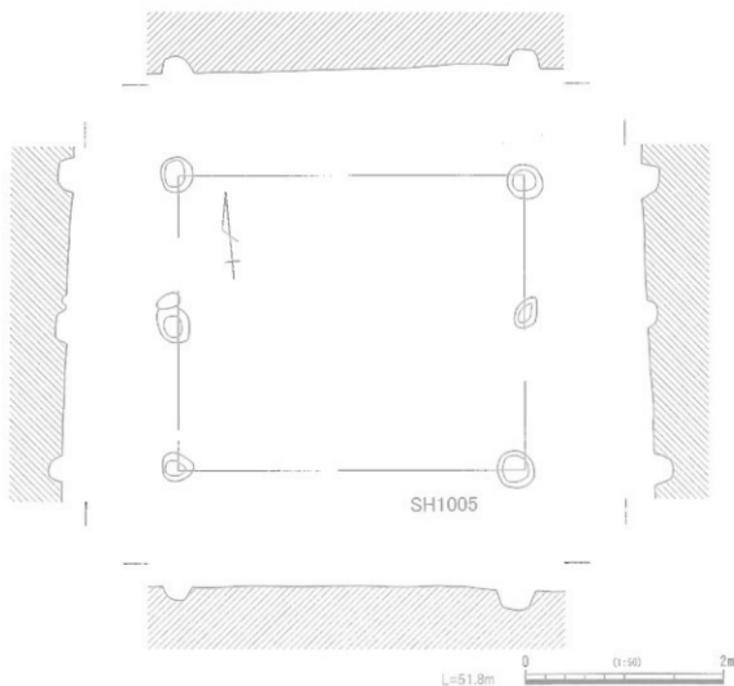


図 301 SH1005 実測図

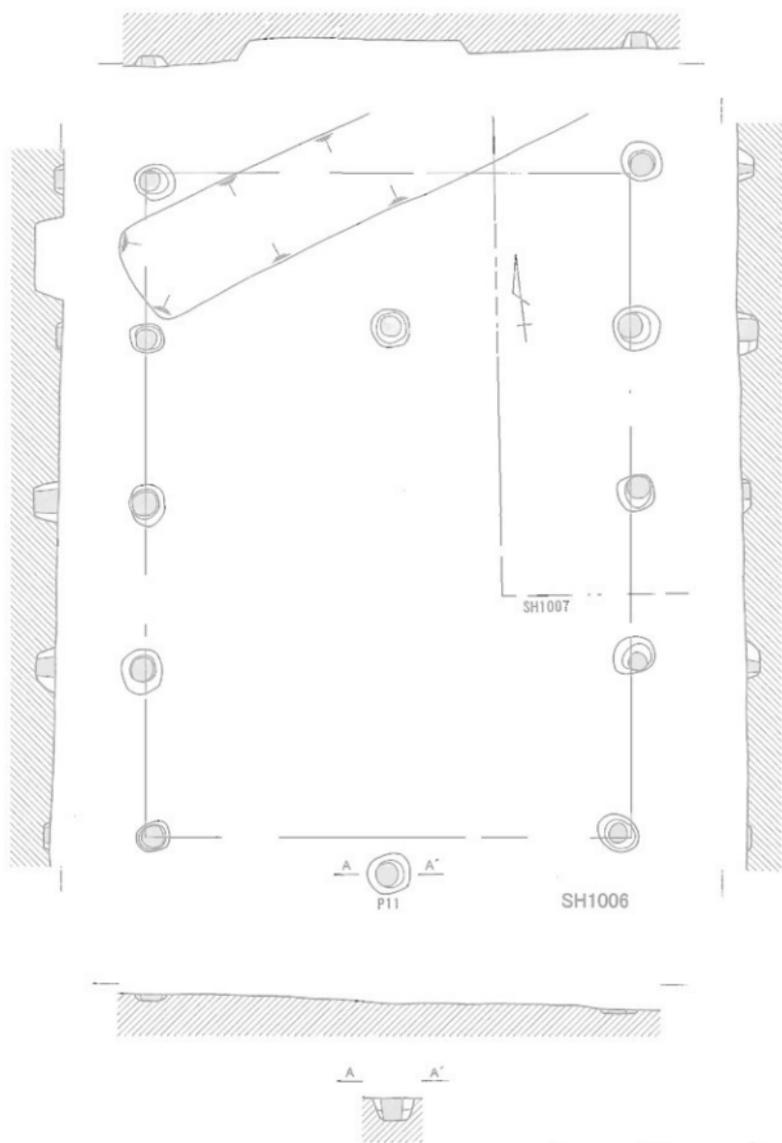


图 302 SH1006 实测图

L=51.5m 0 1:50 2m

柱穴も検出されている。柱間は、梁行では2.44mの等間である。桁行は、西側は1.69mの等間であるが、東側では北から1.56m + 1.64m + 1.78m + 1.78mと、若干のバラツキが認められる。全ての柱穴において、直径18～25cm柱痕跡が確認されている。柱掘方は、円形または楕円形である。規模は、長径が30～40cmで、深さは現存で約8～20cmである。

遺物としては、P11の柱痕跡埋土から、土師器甕の破片が1点出土しているのみである。小片のため詳細な時期については不明であるが、古代の遺物である。また、SH1007とは北東部で重複しており、存続時期の差が認められる。柱穴の切り合い等がみられないため、その前後関係については明らかでないが、建物の主軸がほぼ同じ方位であることから、同時期には存在しないものの、比較的近接した時期の建物である可能性が高い。

SH1007 (図303・304、図版43)

SH1006の北東側に一部重複する形で位置する。一部未検出の柱穴があるが、2×3間の偏柱建物とみられる。規模が4.0×5.8mの南北棟で、建物の主軸はN-6°-Eである。梁行の柱間は2.0mの等間である。桁行の柱間は、1.84m + 1.84m + 2.21mと南側の柱間がやや広い。柱痕跡は、P3以外の柱穴で検出されている。柱痕跡の直径は22～25cmであり、多くの柱痕跡では、掘方底面からやや沈み込んでいる状況が確認されている。柱掘方は直径40～50cmの円形で、深さは現存で20～30cm前後のものが多く、柱痕跡の検出されていないP3については、土層の堆積状況から柱抜き穴とみられる。直径が55cmと、他の柱穴に比べて一回り大きい規模となっている。

遺物は、P6の掘方埋土から、土師器甕の破片が1点出土しているのみである。明らかに古代の遺物ではあるが、図化できない小片のため、詳細な年代については判断できない。前述のように、近接した時期の建物とみられるSH1006からも、同様に古代の遺物が出土している。両遺構ともに、少なくとも古代の範疇に収まる遺構であるとみて間違いのないであろう。



図303 古代の遺構配置図(1区・南側)

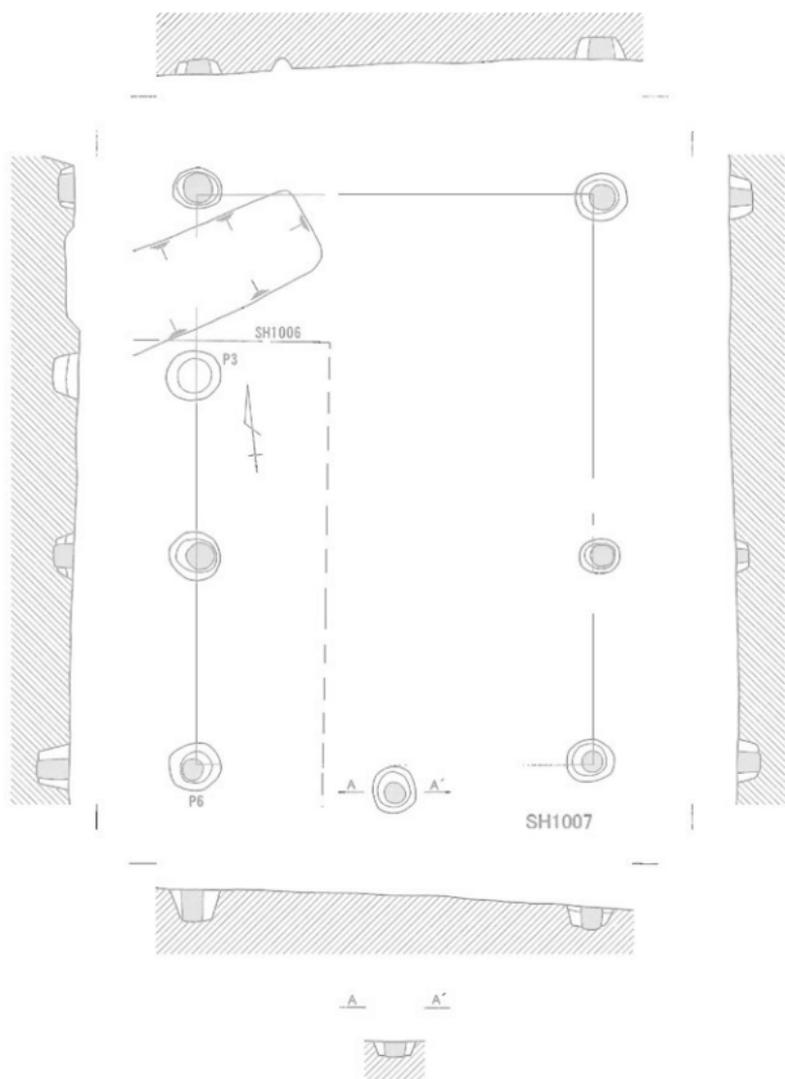


图 304 SH1007 实测图

L=51.6m 0 (1:50) 2m



図 305 SH1008・SD1014 出土遺物

SH1008・SD1014 (図 303・305・306、図版 38・42)

SH1007 の東側に位置する、6×6 間の大型掘立柱建物である。規模 6.92×6.92m の正方形プランの建物である。建物の主軸は、N-10°-E である。北東の隅柱 (P3) では、根石の残存が確認されている。P3 の柱穴は直径 30cm の円形で、掘方の底部から 15cm 程の高さまで、拳大の石を詰め込んで根石としている。その他の穴については、柱痕跡が検出されていないことから、柱取り穴とみられる。柱穴規模は長径 50cm 前後の大型で楕円形の形状を呈するものもみられるが、円形で直径 20~40cm と建物の規模に比べて比較的小型の穴が多い。

また、検出された柱穴は、6×6 間の配置となっているが、詳細にみると、隅柱及び 2・4 間目の柱穴と 1・3・5 間目の柱穴とは様相が異なる。四隅柱と 2・4 間目の柱は柱筋が通り、南北側で 2.42 + 2.0 + 2.5m、東西側で 2.52 + 2.16 + 2.24 m と、等間にはなっていないものの、相対する柱との位置関係については整っている。一方 1・3・5 間目の柱穴は、柱筋の通りが悪い上に、相対する柱と位置が揃っておらず、深さが全体的に浅く、検出されなかった柱穴もみられる。このような点からすると、建物の基本的な構造は 3×3 間であり、間に位置する柱穴については補完的な柱や足場穴など、主幹の柱とは別の役割のものともた方がよいかもしれない。

建物の西側 1.7m には、溝状の遺構 (SD1014) が確認されている。建物に平行して設けられていることから、雨落ち溝や区画溝など建物に伴う溝であると推定される。幅 30cm で、長さは南北に 4.2m 検出されており、深さは現存で約 10cm と浅い。調査によって検出されたのはこの部分のみであるが、上面が削平されていることを勘案すると、溝が建物の四周に巡っていた可能性も考えられる。

柱穴からは、2 点の遺物が出土している。2400 は須恵器の坏身で、P1 の埋土から出土している。口縁部の復元径は約 12cm で、受部から浅く上方へやや外反気味に立ち上がる。もう 1 点は P2 の埋土から出土しており、図化できない小片ではあるが、須恵器坏身の口縁部とみられる。SD1014 の遺物としては、1 点 (2401) 発見されているのみである。2401 は甕の体部の破片である。体部の上方には、1 条の沈線が施されている。出土遺物はわずかに 3 点と少ないが、これらの遺物から SH1008 の廃絶年代の上限は、7 世紀前半に位置付けられる。

この SH1008 は、中層遺跡で発見された掘立柱建物の中では群を抜いて大規模な施設であり、いわゆる多柱式の建物で、周囲に溝を伴うなど構造上も他の建物とは大きく異なっている。豪族住宅など、集落における中心的な施設とみてよいであろう。

SH1010 (図 303・307)

SH1008 から 5m 東側に位置する、2×3 間の側柱建物である。4.2×4.98m の東西棟で、建物の主軸は N-1°-W とほぼ真北である。西側の妻柱は検出されておらず、南西隅の柱穴は擾乱によって失われている。柱間は、梁行が 2.1m、桁行が 1.66m の等間となっている。柱痕跡は確認されていない。

遺物が出土していないため、年代については不明瞭な部分があるが、周辺に中世~近世の建物が検出されていないことから、古代の建物である可能性が高いと推測される。

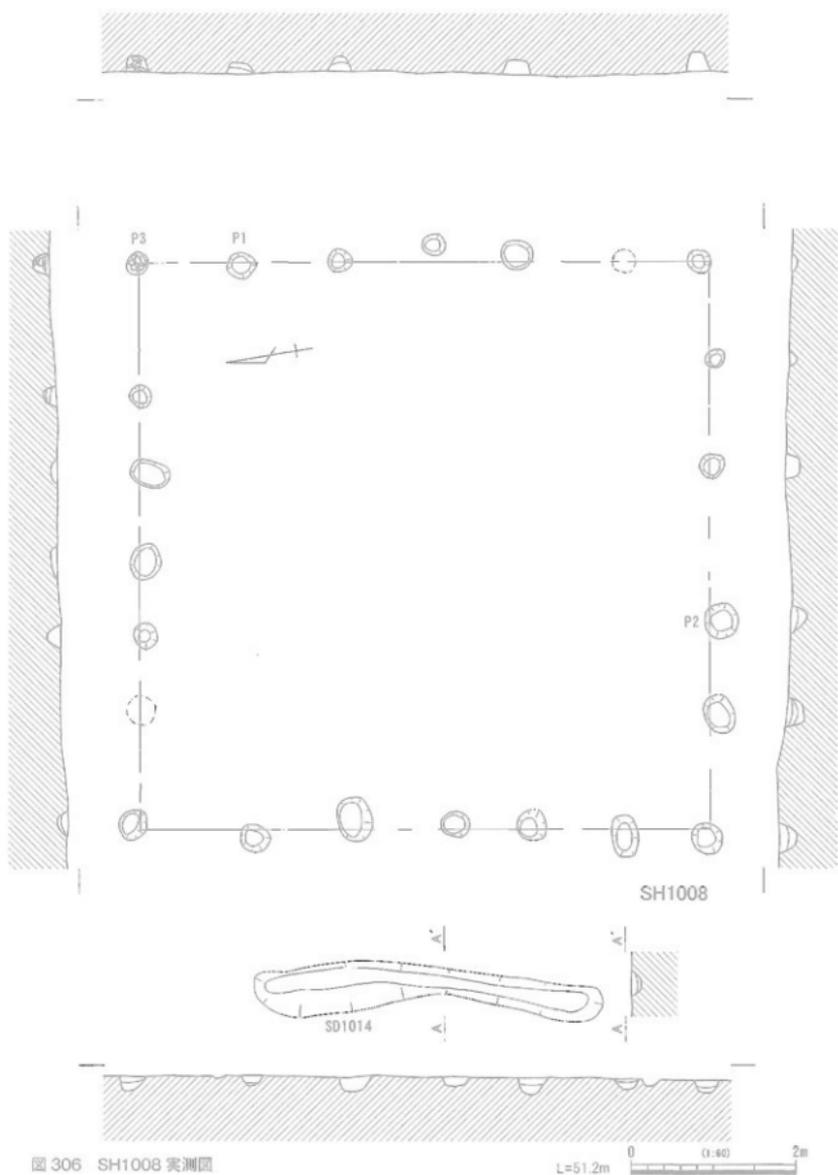


图 306 SH1008 实测图

L=51.2m 0 1:60 2m

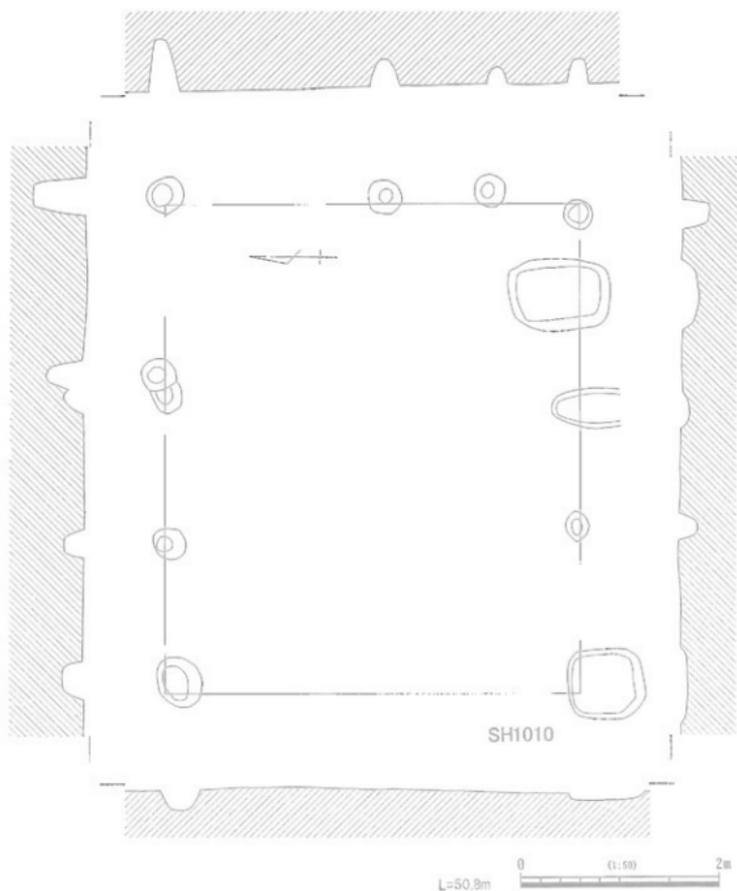


図 307 SH1010 実測図

SH1011 (図 303・308・図版 38)

1 区の南東側に位置する。南側が調査区外となっているため全体の規模については不明であるが、乗行 2 間・桁行 2 間以上の掘立柱建物である。北側と東側の柱穴は、攪乱や後世の溝によって一部失われている。

規模は $3.4 \times 2.8\text{m}$ 以上で、主軸は $N - 15^\circ - W$ である。検出された柱穴は全て抜取り穴であり、柱痕跡は確認されていない。ただし、SP1234 の一段深く窪んだ部分を柱の沈み込んだ痕跡とみれば、柱の直径はおおよそ 20cm 前後と推測される。

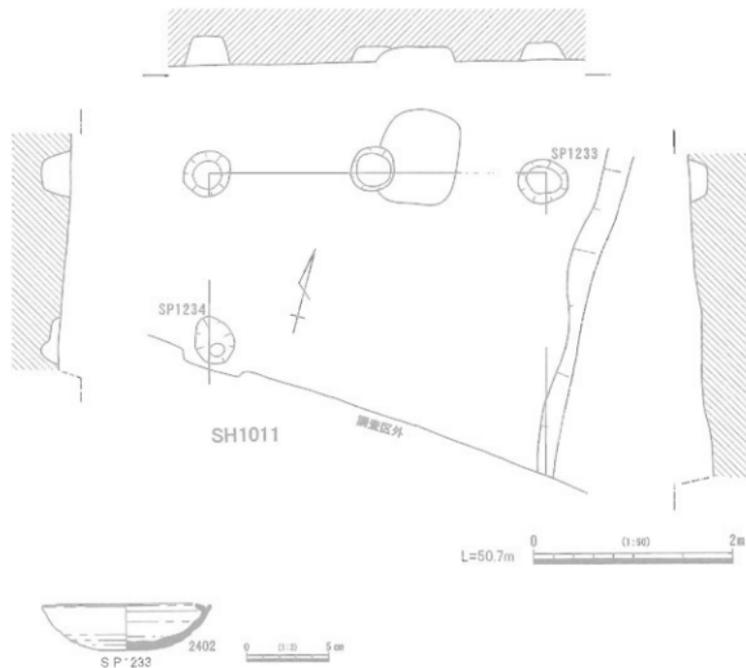


図308 SH1011 実測図・出土遺物

遺物については、SP1233の埋土から須恵器1点と土師器の小片2点が出土している。2402は須恵器の坏身で、4分の1程度の破片である。7世紀後半のもので、口縁部の復元径8.4cmと小型であり、口縁部の立ち上がりもごくわずかである。他に土師器の甕と坏と思われる破片が出土しているが、図化できない小片である。年代の根拠となる遺物は乏しいが、2402が取り穴の埋土より出土していることから、建物の廃絶年代の上限は7世紀後半に位置付けられる。

SH2003 (図309～311、図版38・42)

2区中央部に位置する、2×4間の欄柱建物である。北側から3間目の柱穴は、後世の溝により大部分が失われている。なお、北側の妻柱から2.25mと南側の妻柱から約2.5mの位置には、屋内棟持柱が設けられている。建物規模は4.8×7.8mと比較的大型で、主軸は北側でN-4°-Wである。柱間は梁行で2.4mの等間、桁行では1.95mの等間となっている。柱痕跡の大きさは25～30cmであり、全体的に太い柱が用いられていたことがわかる。掘方の形状はほとんどが円形であるが、北側の妻柱(P2)など一部には楕円形に近い形状のものもみられる。掘方の大きさは、直径40～50cmで、深さは現存で20～45cmである。いくつかの柱穴には、掘方埋土中に小礫の存在が確認されている。これらの小礫については、調査時の所見が残されていないため、人為的なものか否か判然としない。ただし、写真等を

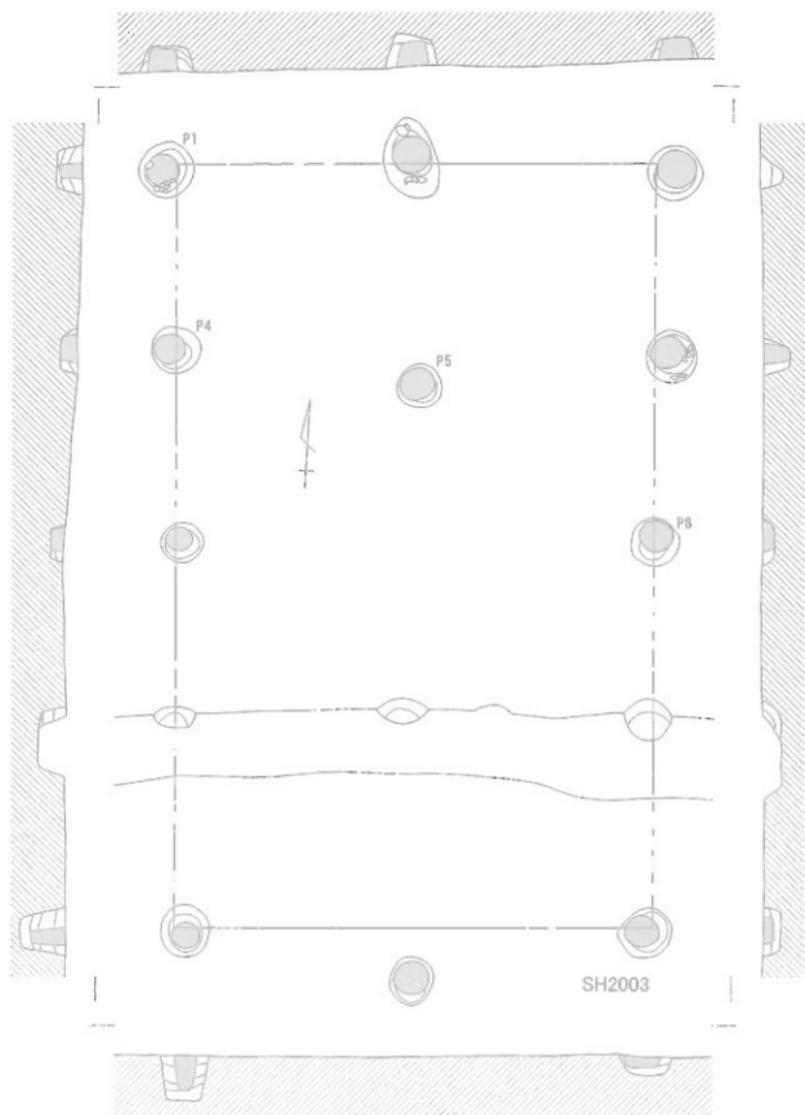


图 309 SH2003 实测图

L=50.0m 0 1:50 2m

見る限りでは、小礫は埋土に混入している程度であり、人為的に配されたり詰められたものとは見なし難い。地山に小礫が含まれていることから、掘方を埋め戻す際、偶然に混入した小礫とみた方がよいであろう。

遺物としては、須恵器と土師器が出土している。2403は、須恵器の坏身で、P8の柱痕跡から出土している。口縁の復元径が10.7cmと小型で、口縁部の立ち上がりもやや低い。2404は土師器の甕である。P1の掘方埋土から出土している。口縁の復元径が18.4cmと小型のもので、口縁部は頸部で屈曲しやや直線的に斜めに開く。また、この他に、P1の掘方埋土から2点、P4の柱痕跡から1点、P5の柱痕跡からは3点の土師器の破片が出土しているが、いずれも図化できない小片である。これらの遺物から、SH2003の廃絶年代の上限は、7世紀後半に位置付けられる。



図310 SH2003出土遺物

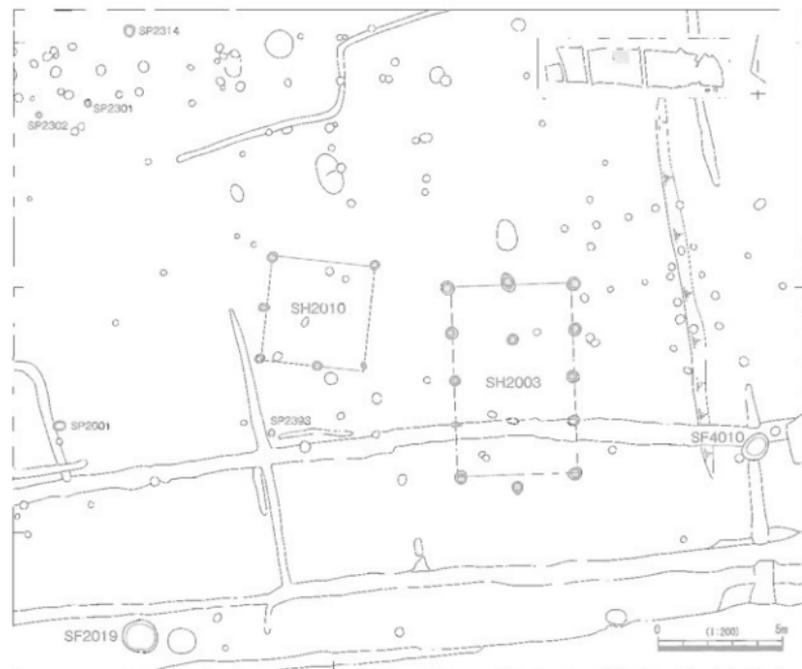


図311 古代の遺構配置図（2区・中央）

SH2010 (図 311・312)

SH2010の西側に位置する、2×2間の隅柱建物である。南北に4.2m、東西に4.26mと若干東西に長いが、ほぼ正方形の建物である。北側と東側の中央の柱穴は、検出されていない。建物の主軸方位は、N-5°-Eである。いずれも柱抜取り穴で、柱痕跡は検出されていない。形状はややいびつな楕円形のものが多く、大きさも長径20~40cmとばらつきが認められる。深さは、現状で10~20cm程度と全体的に浅い。柱間は、南北では2.1mのほぼ等間とみられるが、東西は2.3+1.96mと妻柱がやや東側に寄った位置に設けられている。

遺物は、SP2387から土師器の甕が1点出土しているのみである。図化できない小片のため、詳細な年代については不明であるが、古代の範疇に収まる遺物とみて間違いはない。出土遺物に加え、建物の主軸も東に振っていることから、SH2010は古代の建物とみてよいであろう。

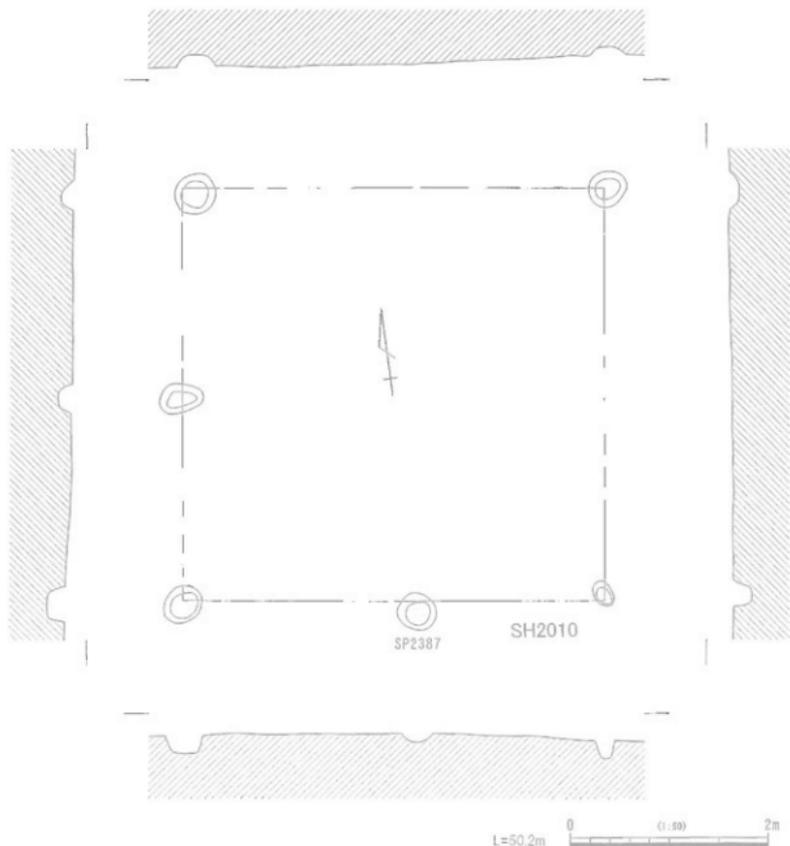


図 312 SH2010 実測図

SH3005 (図 313・314)

3区の北側中央付近に位置する、2×2間以上の隅柱建物である。南側は、中世の溝(SD2001)によって失われている。建物規模は4.4×2.4m以上で、建物の主軸方位はN-11°-Wである。梁行の柱間は、2.2mの等間である。柱穴はいずれも抜取り穴で、楕円形の形状を呈している。大きさはばらつきが認められるが、長径80～120cmと非常に大型である。柱痕跡は検出されていないが、SF3041の深く窪んだ部分が柱の沈下痕であるとすれば、直径20cm以上の柱が想定できる。抜取り穴の規模からみて、比較的太い柱が用いられていた可能性が高い。

遺物は1点も出土していないものの、中世に築かれたの土塁撤去後に、下層において検出されていることから、古代の建物とみて間違いのないであろう。

SH3006 (図 314・315)

SH3005の北東に位置する、1×1間の南北棟である。建物規模は梁行2.24m、桁行2.52mと小型であり、主軸方位はN-8°-Eである。北側の2基の柱穴で、直径約18cmの柱痕跡が確認されている。柱痕跡の深さは現状で25cm程であり、掘方底部より若干沈下した様子が認められる。掘方の形状はややいびつな円形で、大きさは直径30cmである。南側の2基は抜取り穴である。楕円形に近い形状で、大きさは長径40～50cmと、掘方より一回り大きい。

遺物は1点も出土していないが、SH3005と同様に、中世の土塁の撤去後に下層において検出されている上に、主軸が東に振っていることから、古代の建物とみてよい。

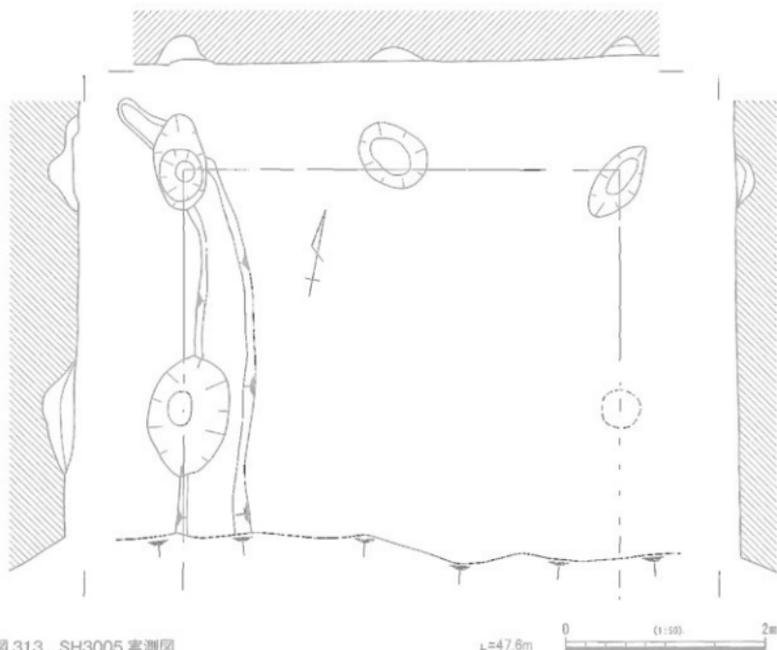


図 313 SH3005実測図



図 314 古代の遺構配置図 (3区・中央北側)

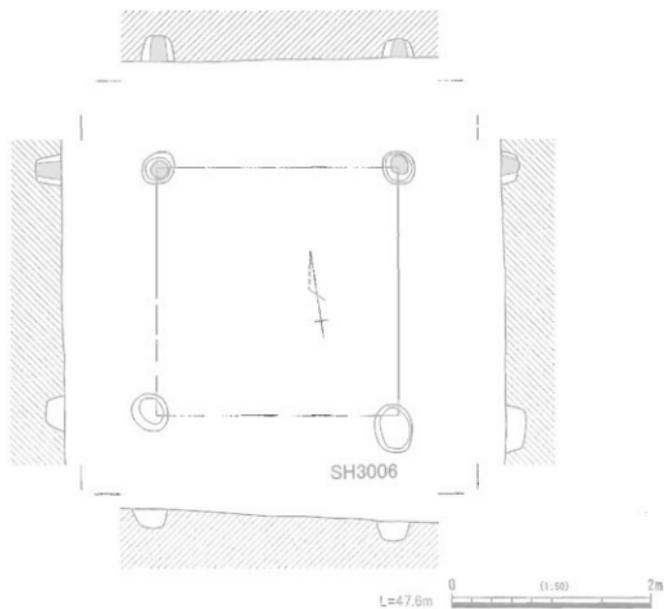


図 315 SH3006 実測図

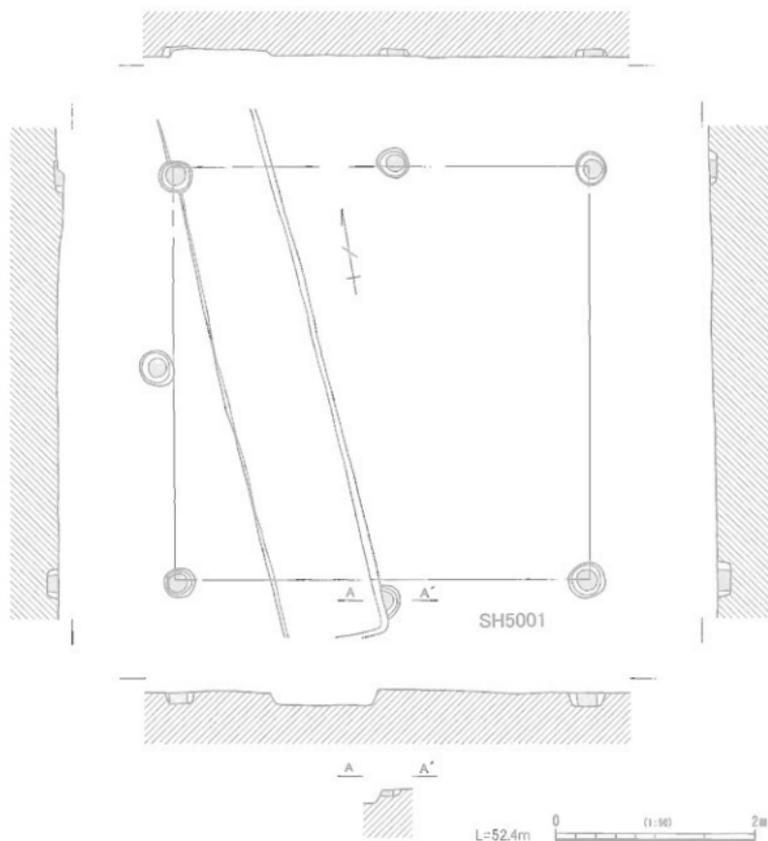


図 316 SH5001 実測図

SH5001 (図 316・319、図版 43)

5区の南西隅に位置する、 2×2 間の柵柱建物である。南側中央の柱穴は、トレンチによって半分が失われている。規模 $4.2\text{m} \times 4.2\text{m}$ の正方形の建物である。建物の主軸方位は、 $N-8^{\circ}-E$ である。全ての柱穴において、柱痕跡が検出されている。柱痕跡の大きさは $16 \sim 20\text{cm}$ で、柱間は 2.1m の等間である。掘方はいずれも円形で、大きさは $30 \sim 36\text{cm}$ である。深さは、現存で 10cm 程度であり、上面が大きく削平されているものと推測される。このような状況から判断すると、検出されていない東側中央の柱穴は、浅い柱穴であったために失われた可能性が高い。

柱穴から遺物は出土していないが、主軸が東側に振れることや、後述する SH5002・5003 との位置関係などから、古代の建物とみて間違いなさであろう。

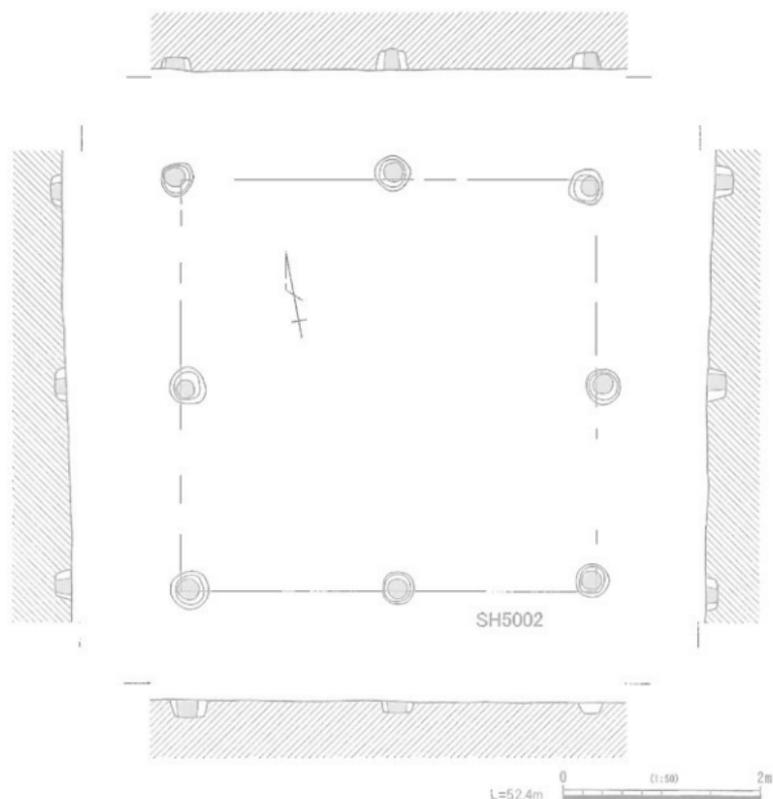


図 317 SH5002 実測図

SH5002 (図 317・319、図版 43)

SH5001 の東側に位置する、 2×2 間の側柱建物である。規模 $4.2\text{m} \times 4.2\text{m}$ の正方形の建物で、建物の主軸方位は $N-11^{\circ}-E$ となっている。柱間はいずれも 2.1m の等間である。すべての柱穴で柱痕跡が検出されている。柱痕跡の規模は、直径 $16 \sim 20\text{cm}$ である。掘方の形状は円形で、直径が $30 \sim 38\text{cm}$ 、深さは現存で $10 \sim 20\text{cm}$ である。いくつかの柱穴において、柱が沈下した痕跡が確認されている。

柱穴から遺物は全く出土していないが、主軸を東に振っていることから、古代の建物であると推測される。また、SH5001 とは、主軸方位がわずかに 3° 異なるものの、同一の建物規模や形態で建設されている上に、東隣の並列した位置に配置されている。このような点から、SH5001 と SH5002 は、ほぼ同時期に存在した建物とみてよいであろう。

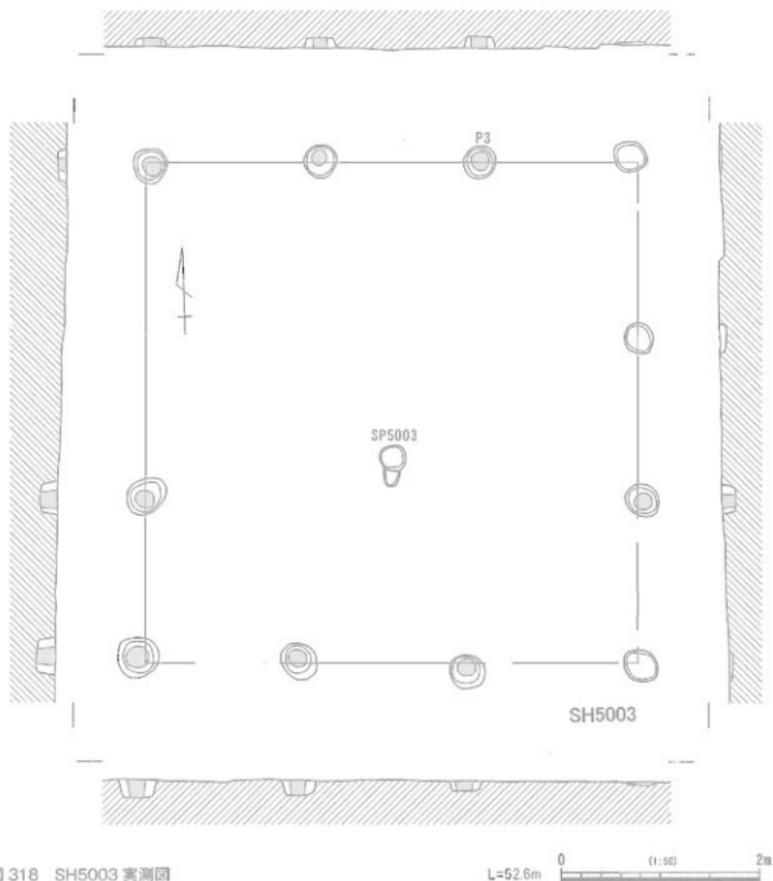


図 318 SH5003 実測図

L=52.6m 0 1.90 2m

SH5003 (図 318・319、図版 43)

SH5001の北側に位置する、3×3間の圓柱建物である。建物規模は4.96×5.1mと、わずかではあるが南北に長い。主軸方位はN-1°-Eであり、ほぼ真北とみてよい。遺存状態の悪い東側の柱列を除く全ての柱穴で、柱痕跡が確認されている。柱痕跡の大きさは、直径16～22mである。柱間は、桁行が北から1.82+1.64+1.64m、梁行は北側が西から1.74+1.58+1.64m、南側が西から1.56+1.7+1.7mと、ややばらつきが認められる。掘方は円形または楕円形で、大きさは長径30～40cm。深さは平均10cm程度であり、上面が大きく削平されていることがわかる。SP5003は、規模も小さく、深さも現存でわずか5cm程度と浅いため、東柱と推測される。

遺物は、柱穴P3の柱痕跡埋土から、須恵器が1点出土しているのみである。図化できない小片のた



図 319 古代の遺構配置図（5区・南側）

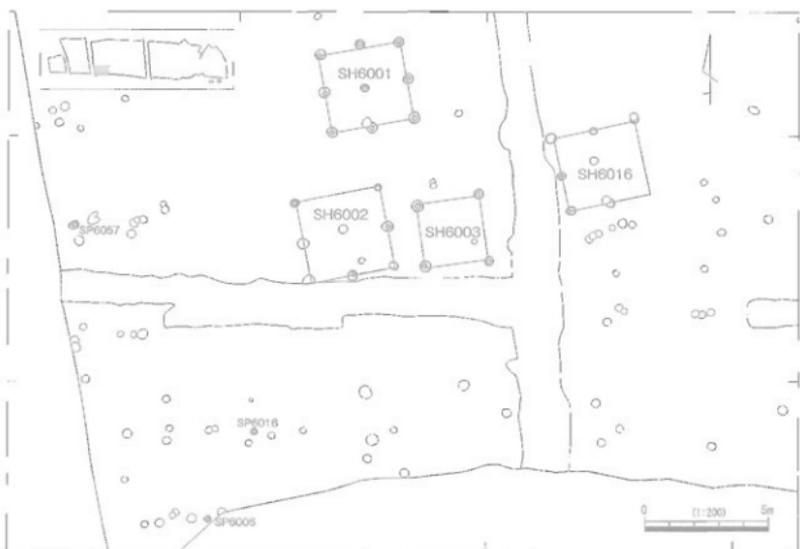


図 320 古代の遺構配置図（6区・西側）

め、詳細な年代については特定できないが、南側の SH5001・5002 と同様にはほぼ正方形の建物であることなどから、古代の建物であることは間違いないであろう。

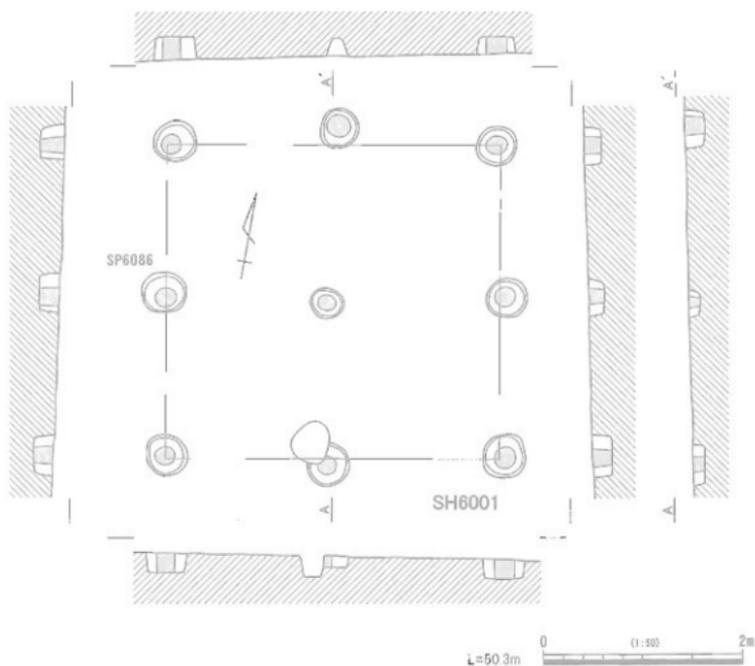


図 321 SH6001 実測図

SH6001 (図 320・321、図版 44)

6区の西側に位置する、 2×2 間の総柱建物である。建物規模は 3.2×3.36 mで、ほぼ正方形ではあるが、わずかに東西方向に長い。主軸方位は、 $N - 10.5^\circ - E$ となっている。全ての柱穴で、柱痕跡が確認されている。柱痕跡は、側柱が直径 $18 \sim 20$ cm。柱間は、梁行が 1.6 m、桁行が 1.68 mの等間である。掘方の形状はいずれも円形となっている。側柱の掘方は、大きさが直径 $38 \sim 43$ cm、深さは現状で $10 \sim 22$ cmである。屋内中心の柱穴については、柱痕跡が直径 16 cmの大きさと、掘方は直径 20 cm、深さ 10 cmとなっている。柱痕跡と掘方がともに側柱に比べて小規模であることから、屋内中心の柱は、東柱とみた方がよいであろう。

遺物としては、SP6086の柱痕跡埋土から、土師器が1点出土しているのみである。図化できない小片であることに加え、表面の摩滅も著しいため、詳細な年代についての特定は困難である。ただし、胎土の状況からすると、古代の遺物であることは間違いないであろう。

遺物が柱痕跡出土の土師器1点のみであるため、それが直接建物の年代を示す遺物とは言い切れないが、中世以降の遺物が含まれていない点や、正方形プランをもつ小型の総柱建物である点、後述するようにほぼ同じ主軸方位を有し南側に隣接するSH6003からも古代の遺物が出土している点などから、SH6001は古代の建物である可能性が高いと推測される。

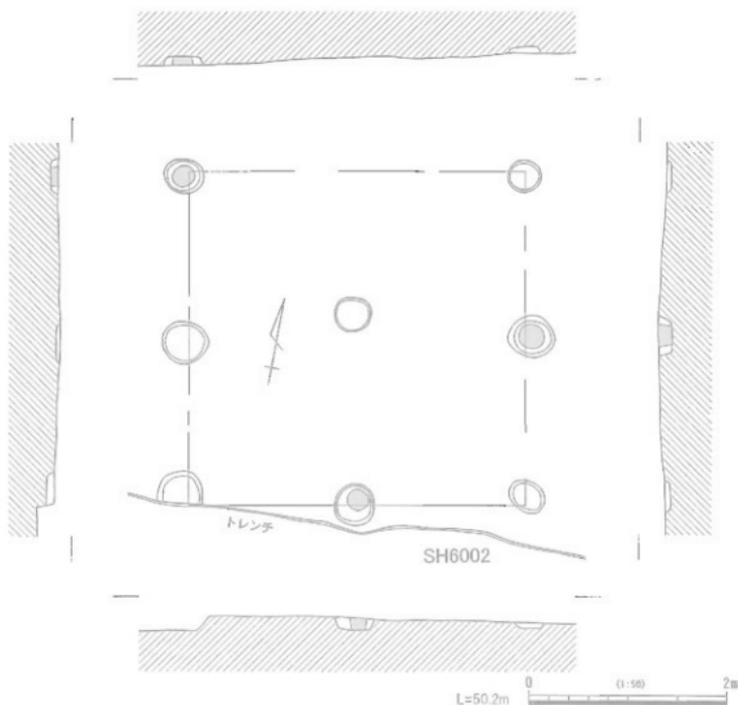


図 322 SH6002 実測図

SH6002 (図 320・322、図版 44)

SH6001 の南側に位置する、2×2 間の総柱建物である。3.4×3.4 m の正方形の建物で、主軸方位は N-11°-W となっている。南東隅の柱穴は、トレンチによってその南半分が失われている。柱痕跡は、SP6042・6045・6066 で確認されている。柱痕跡は直径 20～24 cm の大きさで、隅柱の柱間はいずれも 1.7 m の等間と推定される。掘方は円形で、大きさは直径 34～46 cm である。屋内に配されている柱穴は、建物の中心よりやや北側に寄った位置に設けられている。全体的に上面が大きく削平されており、多くの柱穴で 5～6 cm 程度の深さしか残存しない。検出されていない北側の中間の柱穴は、削平によって失われたものと推測される。また、柱痕跡が検出されていない柱穴が認められるが、これらはいずれも残存状況が悪く浅い。抜き取り穴というよりはむしろ、調査時に柱痕跡を検出し切れなかったものと捉えておいた方がよいであろう。

柱穴から遺物は全く出土していない。ただし、SH6002 は SH6001 とほぼ同じ方位で建てられており、規模や構造においてもほとんど差がない。これらのことから、両建物の建設時期には、大きな時間的な差がないものとみてよい。よって、SH6002 は、SH6001 と同様に古代の建物である可能性が高い。

SH6003 (図 320・323、図版 44)

SH6002の東側1.2mに隣接する。東側が攪乱によって広範囲に失われており、1×2間程度の東西棟であった可能性もあるが、積極的に肯定する材料もないため、1×1間の建物として捉えておく。建物規模は2.56×2.64mで、わずかに南北方向に長いものの、ほぼ正方形の建物として捉えてよい。建物の主軸方位はN-7.5°-Wである。すべての柱穴で、直径20～25cmの柱痕跡が検出されている。掘方は、直径32～44cmの円形で、深さは現存で16～34cmである。

遺物としては、土師器が3点出土している。SP6046からは、掘方埋土から土師器甕の胴部の破片が1点出土している。SP6048では、掘方埋土と柱痕跡埋土から、土師器の破片が各1点出土している。いずれも図化できない小片であり、詳細な年代については不明であるが、少なくとも古代の範疇に収まるものであることは間違いない。掘方と柱痕跡の埋土の両方で古代の土器が出土していることから、SH6003は古代の建物であるみて間違いないであろう。

SH6009 (図 324)

6区中央北側に位置する、1×2間の南北棟である。建物規模は2.12m×3.36mで、建物の主軸方位はN-2°-Eとなっている。北西隅の柱がSD6002によって失われているが、残る全ての柱穴では

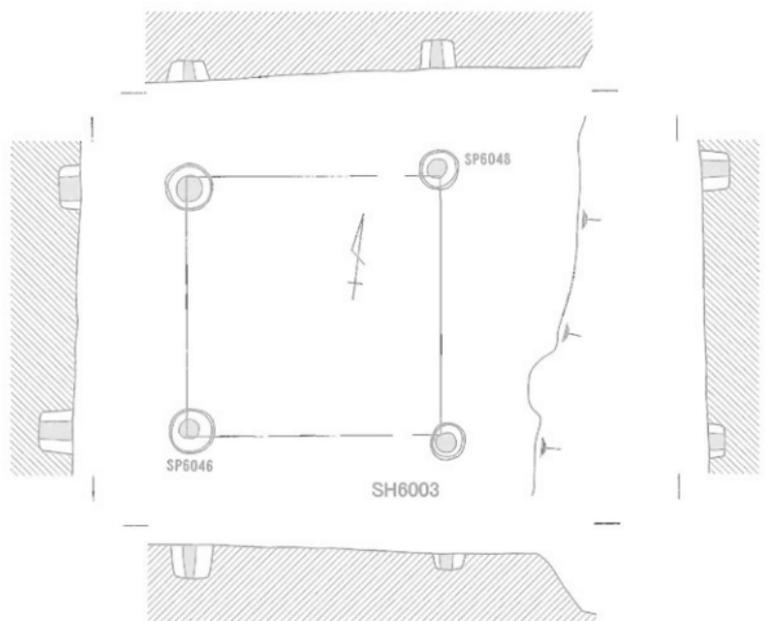


図 323 SH6003 実測図



柱痕跡が確認されている。柱痕跡は直径20～22cmの大ききで、桁行の柱間は2.4m+2.26mと北側がわずかに広い。掘方は直径45～50cmのややいびつな円形で、深さは10～15cmである。

遺物としては、SP6014・6015・6016の掘方や柱痕跡の埴土から、土師器甕の破片が出土している。点数としては合計13点あるが、いずれも図化できない小片である。詳細な年代については明らかでないが、SH6009については古代の建物であるとみて間違いなであろう。

SH6012 (図325、図版38・44)

竪穴建物SB6006の北西に位置する。4×3間以上の掘立柱建物で、主軸方位はN-6°-Wである。建物の西側は、SD1001により広範囲にわたって失われている。また、南側の柱列は検出されていないが、総体的に南側の柱穴の残存状態が悪く、南東の隅柱SP6463が6cm程度の深さしか残存しないことから、削平された可能性が高い。全体の建物規模は不明であるが、6.24×2.27m以上の比較的大型の建物であると推測される。柱痕跡は検出されておらず、柱穴はいずれも抜取り穴である。柱穴の間隔は狭く、1.3～2.0mとややばらつきも認められる。なお、屋内にもSP6467が検出されており、屋内棟持ち柱となる可能性が考えられる。その場合、梁行6.24m・桁行6.24m以上の、大型の東西棟が想定できる。

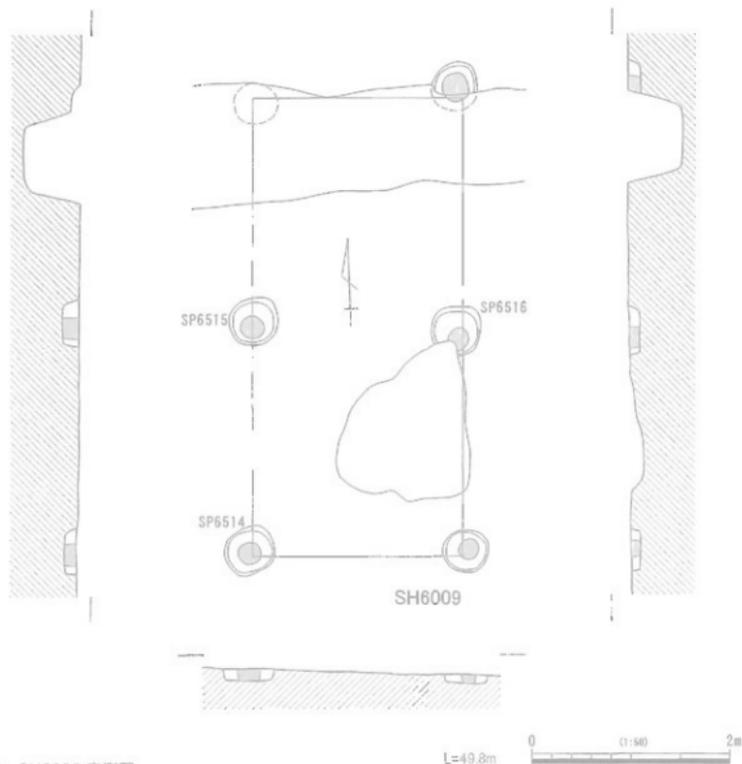


図324 SH6009 実測図

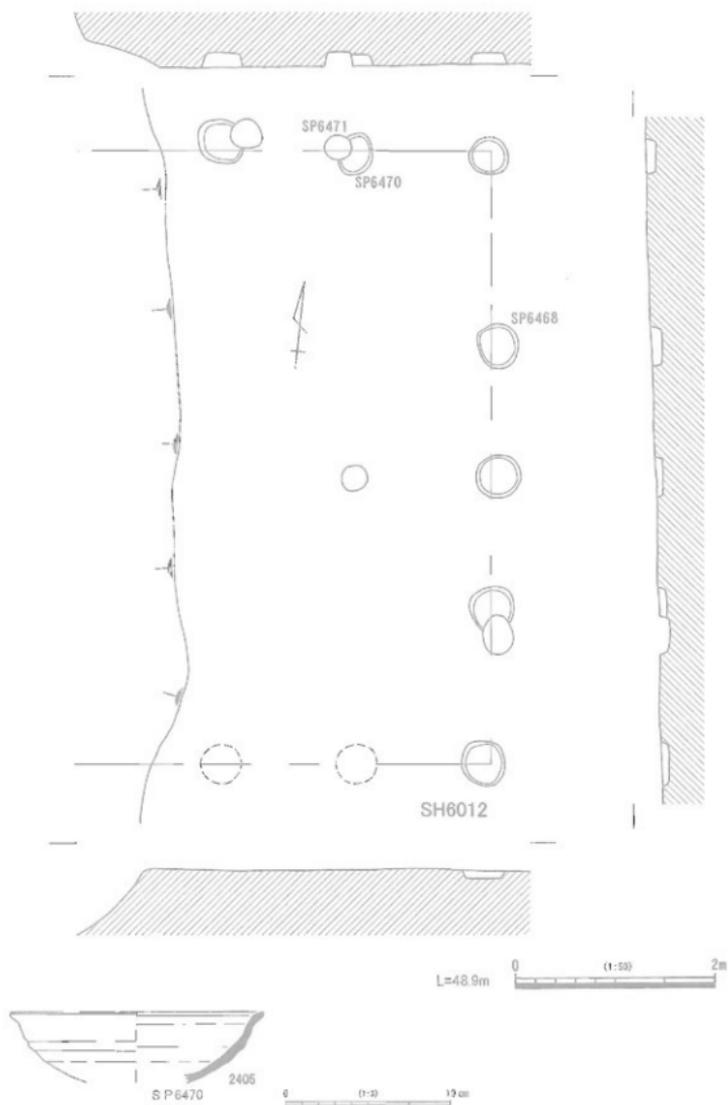


图 325 SH6012 实测图

遺物は、SP6470 から須恵器の高坏（2405）が出土している。坏部に突線が1条巡り、口縁部は大きく外反する。7世紀末から8世紀初頭にかけてのものである。この他に、SP6468から図化できない小片ではあるが、土師器甕とみられる破片が数片出土している。年代の決め手となる遺物は1点のみであるが、SH6012の廃絶年代の上限は、7世紀末から8世紀初頭に位置付けられる。

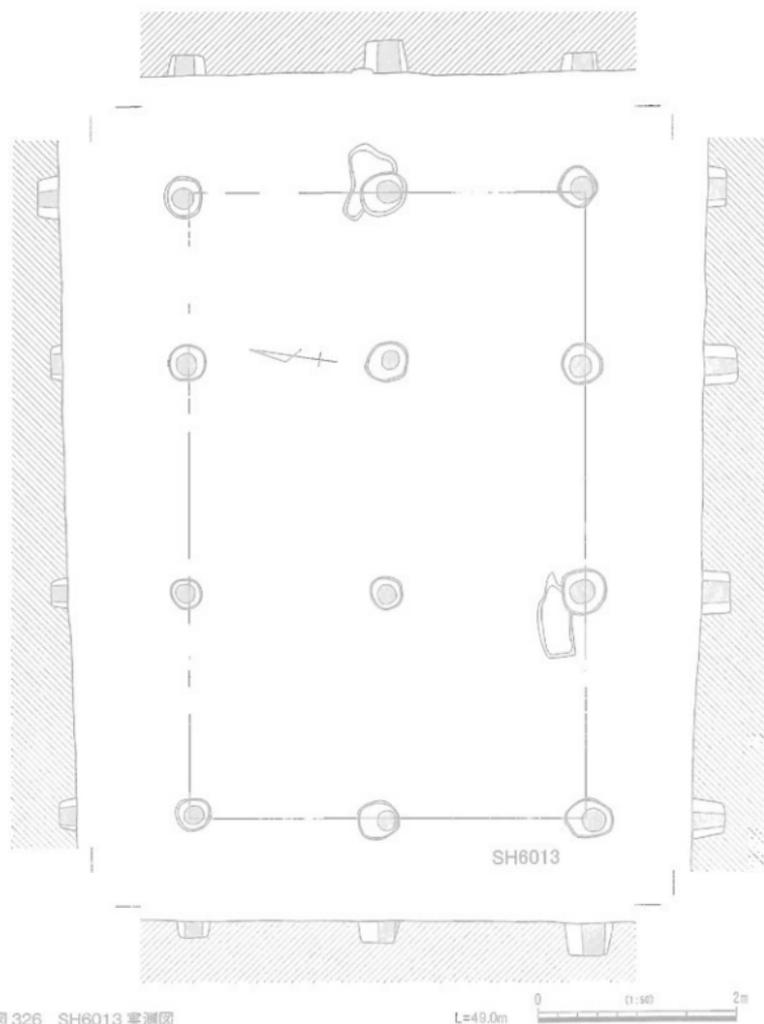


図 326 SH6013 実測図

L=49.0m



SH6013 (図 326、図版 49)

6区の北東部に位置する、2×3間の総柱建物である。建物規模は4.00×6.36mと比較的大型で、主軸がN-7°-Wとなる東西棟である。柱間は梁行で2.0mの等間、桁行では西の2間は2.3mの等間であるが、東側の1間は1.76mとやや狭い。掘方は、長径36～46cmの円形または楕円形で、深さは現存で12～30cmである。柱痕跡は、直径20～24cmの円形となっている。

遺物は出土していないが、建物方向が隣接するSH6012・6014とほぼ同じであることから、古代の建物である可能性が高いと推測される

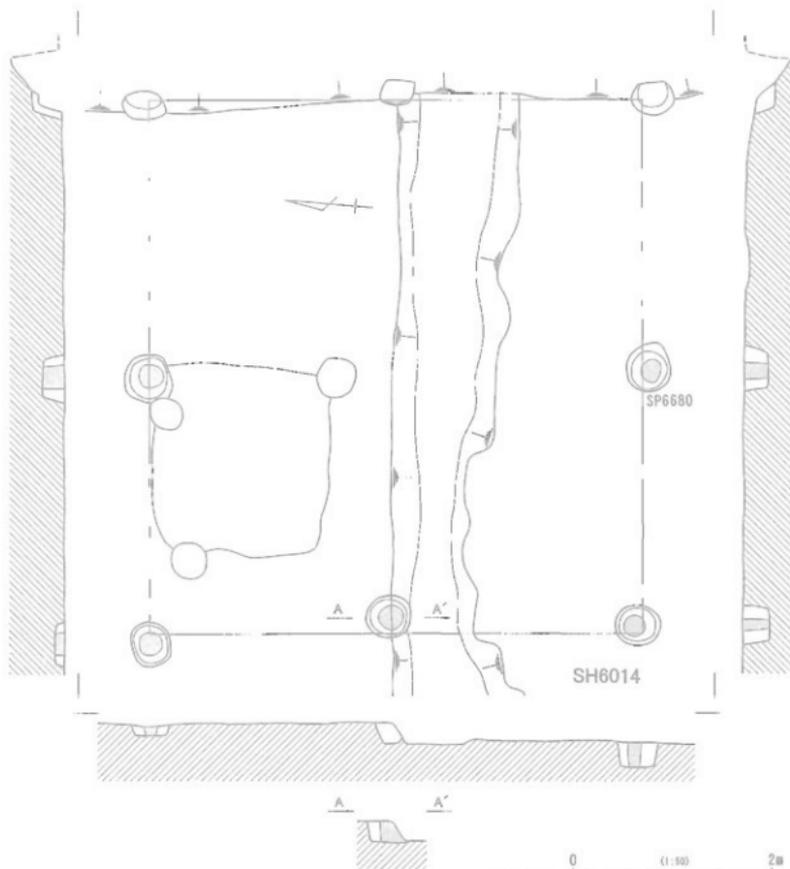


図 327 SH6014 実測図

SH6014 (図 327、図版 49)

6区の西端に位置する、2×2間の掘立柱建物である。東側柱列は、大部分が攪乱によって削平されており、南半も土地の造成によって一段低く削り取られている。規模4.96×5.44mの東西棟で、主軸方位はN-5°-Wとなっている。柱穴の大部分が失われている東側柱列以外では、柱痕跡が確認されている。柱間は梁行が2.48m、桁行が2.72mの等間で、柱痕跡の規模は直径20～22cmである。掘方は長径44～50cmのややいびつな円形で、深さは現存で10～20cm。

遺物は、SP6680の掘方埋土から土師器の甕が1点出土しているのみである。図化できない小片であるが、古代のものであることは間違いない。わずかに1点の遺物ではあるが、他に遺物が出土していないことから、SH6014は古代の建物と捉えてよいであろう。

SH6016 (図 328)

SH6003の北東約4mに位置する。南東隅と東側中央の柱穴が検出されていないが、他の柱穴の配置から2×2間の総柱建物と推定される。未検出の2つの柱穴に関しては、削平により失われたものと考えられる。建物規模3.04×3.4mの東西棟で、主軸方位はN-13°-Wとなっている。SP6140と6135では、直径16cmと18cmの柱痕跡が確認されている。掘方は円形で、直径が32cmと38cm、深さは現存で20cmと12cmである。

遺物は一切出土していないが、SH6001やSH6002と同じ、2×2間の総柱建物であり、軸もほぼ同一であることから、SH6016についても古代の建物と判断できる。

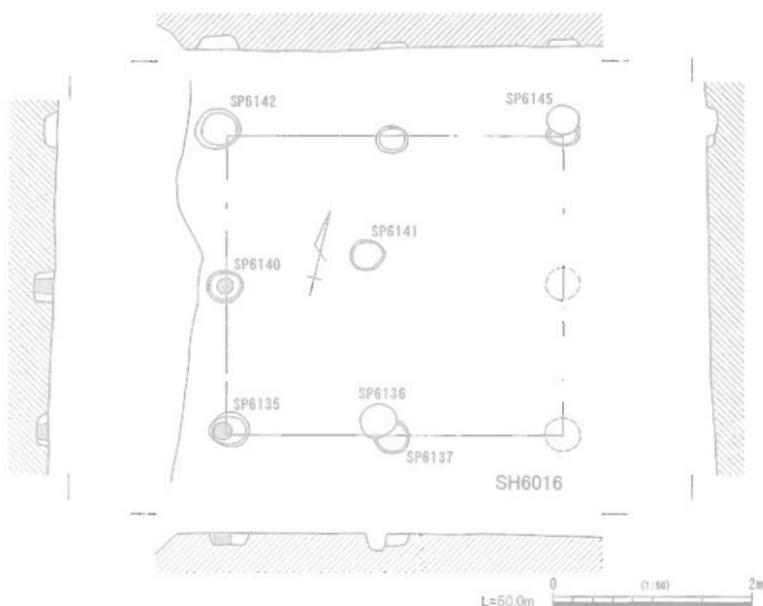


図 328 SH6016 実測図

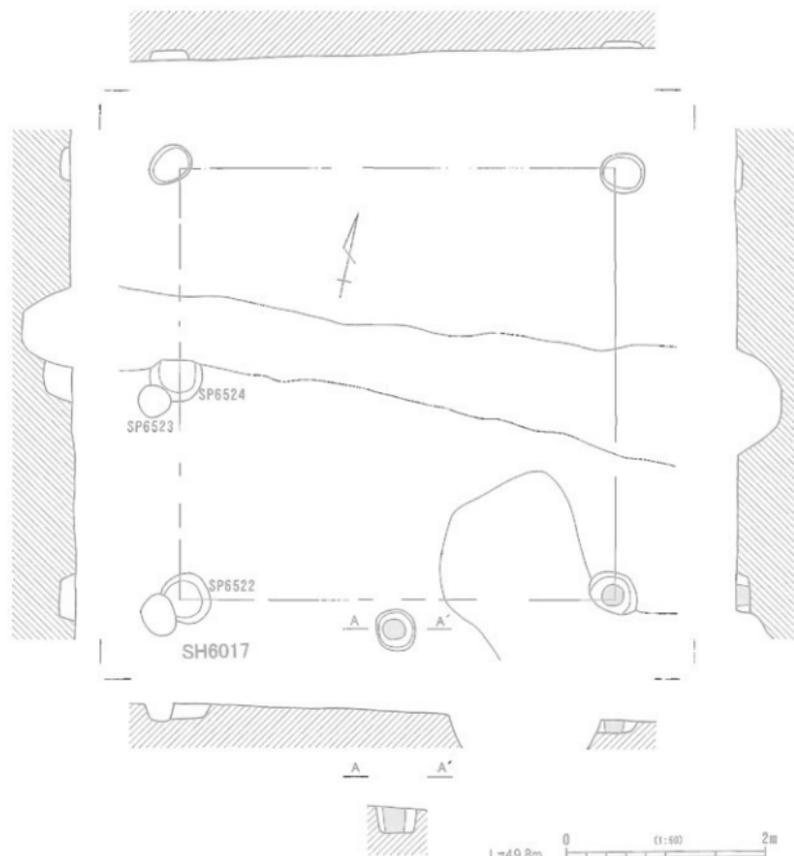


図 329 SH6017 実測図

SH6017 (図 329)

SH6009の東側に位置する。2×2間で、一辺4.4mの正方形の建物である。東西方向に横断するSD6002によって、柱穴が一部失われている。建物の主軸方位は、N-12°-Wである。抜取り穴が多いが、南側中央と南東の隅柱では柱痕跡が確認されている。柱痕跡は直径22cmで、掘方は直径45～50cmである。

遺物は、SP6522から1点とSP6524から7点出土している。いずれも図化できない小片であるが、多くは土師器甕の胴部の破片である。また、SP6524を切るSP6523からも、同様に土師器甕の小片が出土している。出土遺物が全て小破片であるため、詳細な年代については不明であるが、古代の範疇に収まるものであることから、SH6017も古代の建物とみてよいであろう。

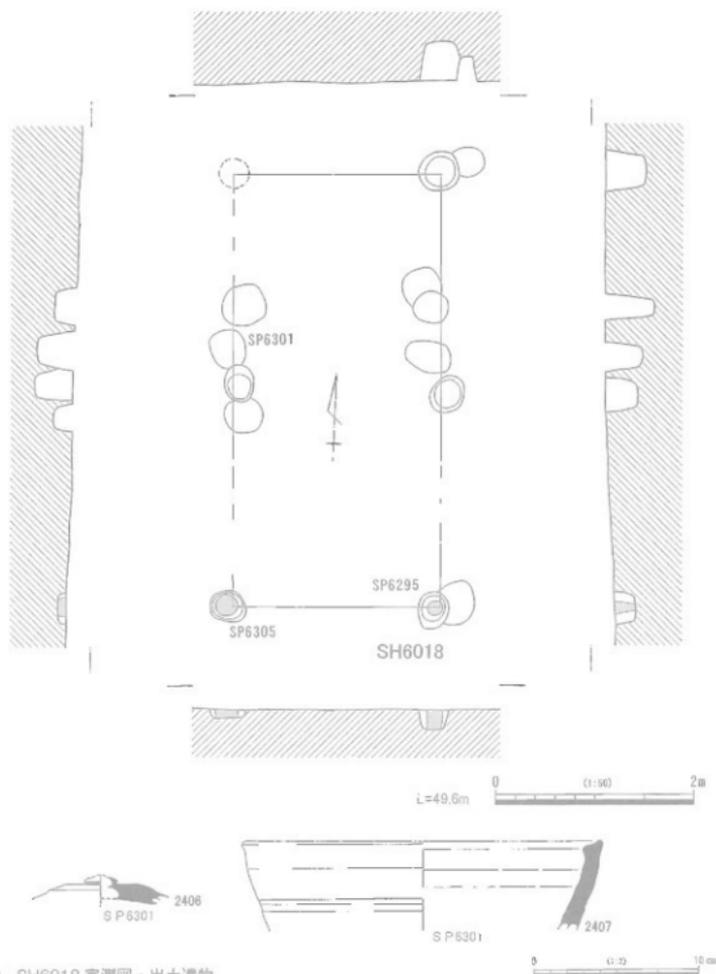


図 330 SH6018 裏面図・出土遺物

SH6018 (図 283・330、図版 38)

6区南側中央に位置する、1×2間の建物である。北西の隅柱については検出されていない。南西の隅柱SP6305のように、浅かったため削平されて失われたものと推測される。規模は21m×4.4mと小型の建物であり、主軸方位はN-3°-Wとなっている。柱痕跡は、SP6305と6295で確認されている。柱痕跡の大きさは、SP6305が直径22cmあるのに比べ、SP6295では16cmとやや細い。

遺物は、SP6301とSP6305から出土している。2406は須恵器の坏蓋である。頂部のみの破片であるが、

すぐに下方へと下がる形状からみて、返り付きの蓋と推測される。2407は須恵器の鉢である。口縁部に向かってやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は平らに仕上げられている。この他に、図化できない小片であるが、SP6305から壺瓶類の体部とみられる須恵器の破片が1点出土している。また、南東の隅柱SP6295が切っているSP6294からも、須恵器の甕の小片が1点出土している。

年代を特定する遺物は乏しいが、2406などからみて、SH6018の廃絶年代の上限は7世紀末から8世紀初頭頃と推測される。

SH6020 (図 283・331、図版 38)

SH6018の東側に位置する。1×2間の東西棟で、建物規模は20m×48mと小型である。主軸方位はN-8°-Eとなっている。全ての柱穴で柱痕跡が確認されており、いずれも直径20cmの規模である。桁行の柱間は西から2.34m+2.46mと、西側の柱間が少し狭い。掘方は直径30~40cmの円形で、柱穴の深さは平均40~50cmと深い。

遺物としては、SP6437の柱痕跡埋土から須恵器の坏身(2408)が出土している。受け口部の破片であるが、小型で口縁の立ち上がりも低いものと推測される。掘方埋土からは、須恵器の甕の小片が1点出土している。SP6709の掘方埋土からは、土師器の甕(2409)が出土している。口縁部は斜めに開き、端部はやや内湾気味となる。これらの他に図化できない小片であるが、SP6413・6437からも土師器の破片が出土している。

出土遺物から、SH6020の廃絶年代の上限は7世紀後半に位置付けられる。

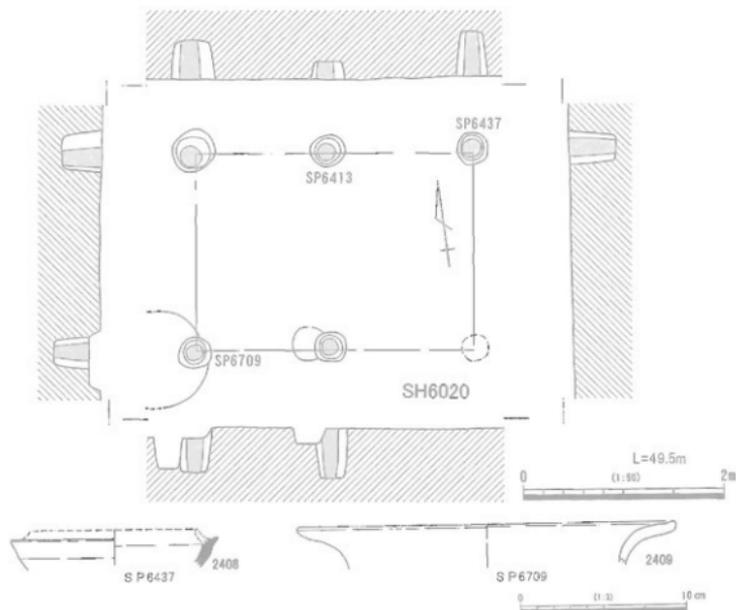


図 331 SH6020 実測図・出土遺物

SH6019 (図 283・332、図版 38)

SH6018 の西側に位置する、1×2 間の南北棟である。建物規模は 3.04×4.4 m で、建物の主軸方位は N-24°-W と大きく西に振る。SP6310 では、直径約 20 cm の柱痕跡が確認されている。

遺物については、SP6327・6343・6340 から出土しているが、いずれも図化できない小片である。SP6327 と 6343 からは土師器甕の破片がそれぞれ 3 点と 2 点、SP6340 からは須恵器の甕または壺の破片が 3 点出土している。また、この建物の柱穴ではないが、SP6343 を切る SP6342 からは須恵器と土師器が各 1 点出土している。2410 は須恵器の無台坏である。底部には丁寧なヘラケズリが施されている。2411 は土師器の坏で、内外面に赤彩が認められる。建物の廃絶直後に SP6342 が掘られたとすれば、SH6019 の廃絶年代は、概ね 8 世紀後半頃とみてよいであろう。

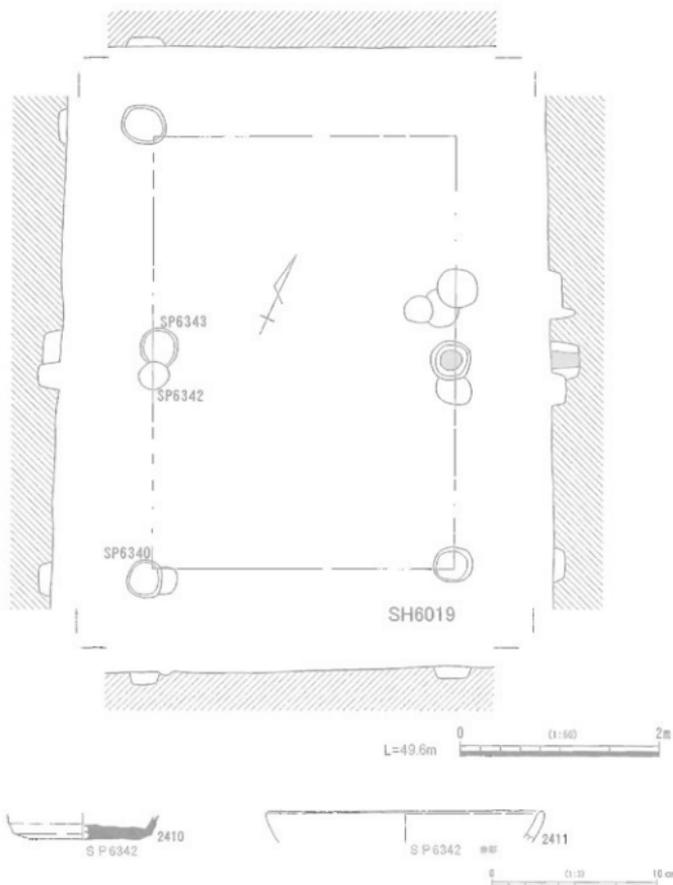


図 332 SH6019 実測図・出土遺物

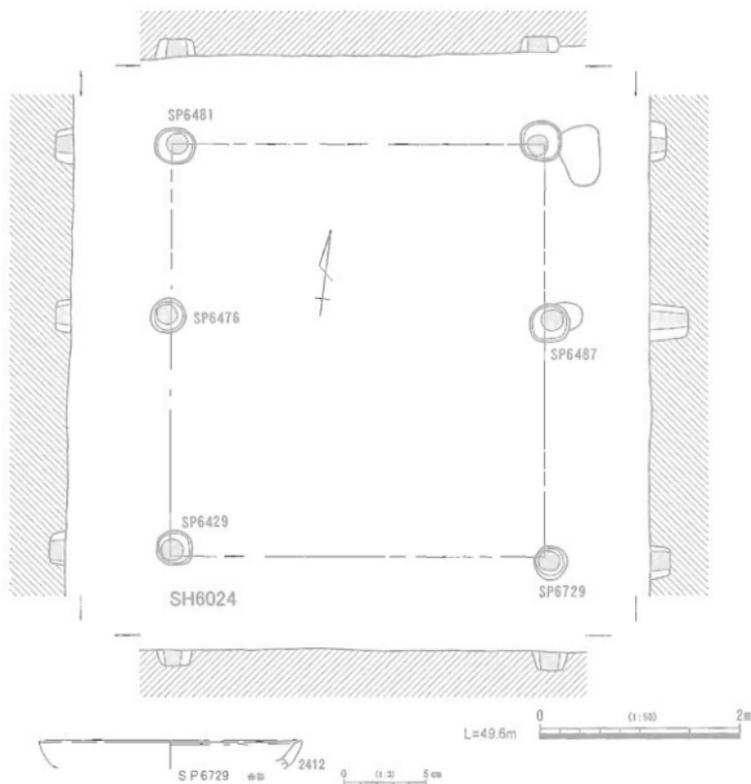


図 333 SH6024 実測図・出土遺物

SH6024 (図 283・333、図版 38)

SH6024の北側に位置する、1×2間の南北棟である。建物規模は3.76×4.2mであり、主軸方位はN-7.5°-Wとなっている。すべての柱穴において、柱痕跡が確認されている。柱痕跡の規模は、直径20～22cmである。掘方は、長さ36～40cmのややいびつな円形である。SP6487のように深いものもあるが、深さは現存で平均15cm程である。桁行の柱間は、北から1.76m+2.44mと、北側がやや狭い。

遺物は、SP6429・6487・6481・6476から出土しているが、ほとんどが細片で図化できたのは1点のみである。2412は土師器の皿で、SP6729の柱痕跡埋土から出土している。口縁端部は平らに仕上げられており、外面は摩滅が著しいが、内面には赤彩が認められる。他に、SP6487の柱痕跡からは須恵器の瓶類の破片が2点出土しており、SP6481と6476の柱痕跡からは土師器の甕の破片が出土している。年代の明確な遺物は乏しいが2412などの遺物から、SH6024の廃絶時期の上限は、8世紀前半頃に位置付けられる。

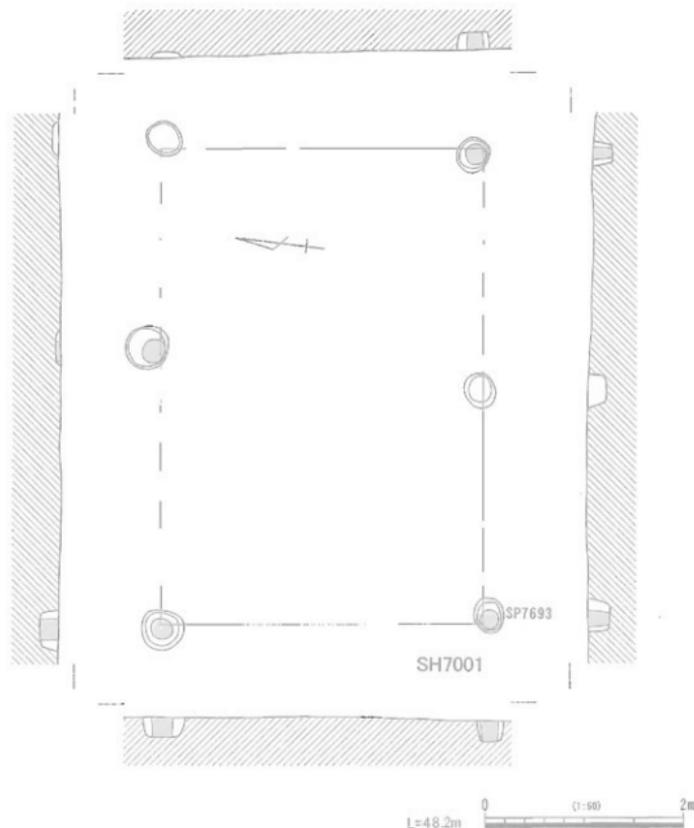


図 334 SH7001 実測図・出土遺物

SH7001 (図 334・335、図版 47)

7 区の西側に位置する、 1×2 間の東西棟である。建物の規模は 3.24×4.28 m であり、主軸方位は N-ア-W となっている。北東の隅柱と南側中央の柱穴を除き、柱痕跡が確認されている。柱痕跡は、直径 $20 \sim 22$ cm の大きさである。桁行の柱間は、南側が 2.42 m の等間であるのに対し、北側では西から $2.76 \text{ m} + 2.08 \text{ m}$ と、東に寄った位置に設けられている。掘方は長径 $34 \sim 44$ cm の円形または楕円形で、深さは北東側が現存で 4 cm と浅いが、他は平均 20 cm 程度である。

遺物については、SP7693 の柱痕跡埋土から土師器が 1 点出土しているのみである。図化できない小片であり、表面の摩滅も激しいが、胎土などから土師器の甕と推測される。

年代を示す遺物が乏しいが、中・近世の遺物を全く含んでいないことから、SH7001 は古代の建物である可能性が高いとみてよいであろう。

SH7004 (図 335・336、図版 45)

SH7001の南側に位置する、 2×3 間の南北棟である。建物規模は 3.68×5.0 mであり、主軸方位はN- 7° -Wとなる。後世の遺構や攪乱などにより、いくつかの柱穴は部分的に失われている。両妻柱は、隅柱を結んだ線よりもやや外側に設けられている。西側の5つの柱穴では、柱痕跡が検出されている。柱痕跡の大きさは、直径20~24 cmである。掘方は直径38~40 cmの円形で、深さは南西の隅柱が40 cmと深い、他は平均20 cm程である。柱間は梁行が1.84 mの等間で、桁行は北から $1.66 + 1.66 + 1.68$ mと南側の間隔が少し広いものの、ほぼ等間とみてよいであろう。

遺物は、SP7655から2点とSP7658から1点、土師器甕の体部の破片が出土している。いずれも図化できない小片のため、詳細な年代については明らかでないが、古代の遺物であることは間違いない。よって、SH7004についても、古代の建物とみてよいであろう。

SH7005 (図 335・337、図版 45)

SH7004の南側に位置する。ひとまず 1×1 間の建物として捉えておくが、西側は調査区外となるため、西側にさらに延びる可能性もある。規模 1.72×1.72 mの正方形の建物であり、建物の主軸方位はN- 45° -Wとなっている。柱痕跡は、すべての柱穴で検出されている。柱痕跡の規模は直径18~20 cmである。掘方は直径38~40 cmの円形で、深さは現存で18~30 cmである。

柱穴から遺物は、一切出土していない。そのため、この建物が古代のものであることを示す直接的な証拠はない。ただし、周囲に建設されているSH7001・7004・6014と、ほぼ同様の主軸で建てられていることや、中・近世の建物に梁行が2 m未満の小規模な建物がみられないことなどから、古代の建物である可能性が高いと推察される。



図 335 古代の遺構配置図 (7区・西側)

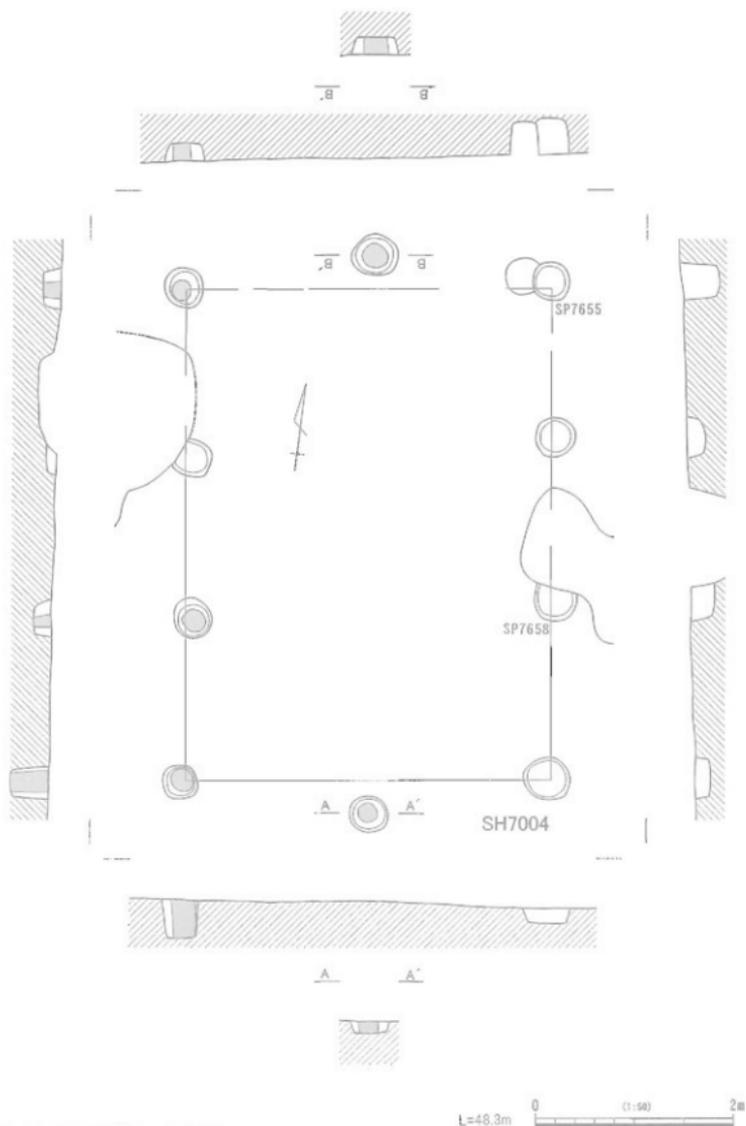


图 336 SH7004 突洞回・出土遺物

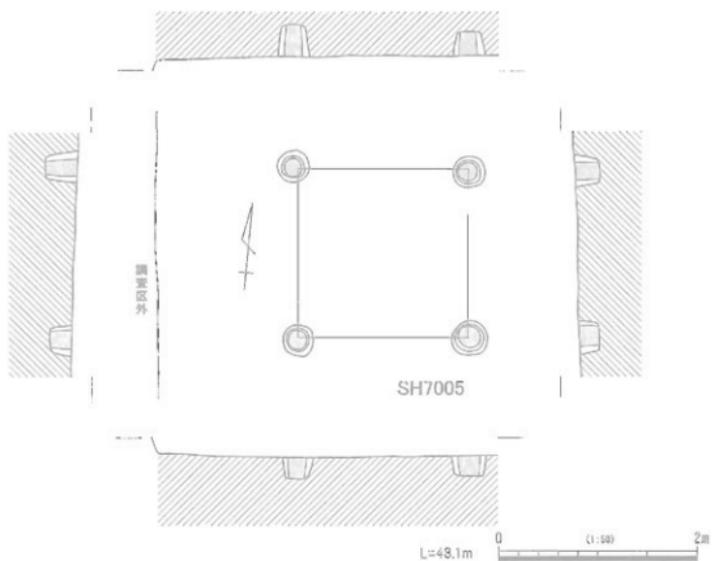


図 337 SH7005 実測図



図 338 古代の遺構配置図（7区・中央北側）

SH7007 (図 338・339、図版 50)

7区の中央に位置する、2×2間の総柱建物である。建物規模3.28m×3.76mの東西棟で、主軸方位はN-10°-Eとなっている。妻柱にあたるSP7705とSP7706の上面は、攪乱や土坑によって失われている。柱間は梁行・桁行ともに等間である。SP7510とSP7504以外の柱穴では、柱痕跡が検出されている。柱痕跡の規模は、直径18～20cmである。掘方は、直径34～44cmの円形で、深さは現存で18～30cmである。

遺物は一切出土していないが、南北軸が東に振っていることから、古代の建物である可能性が高いと推定される。

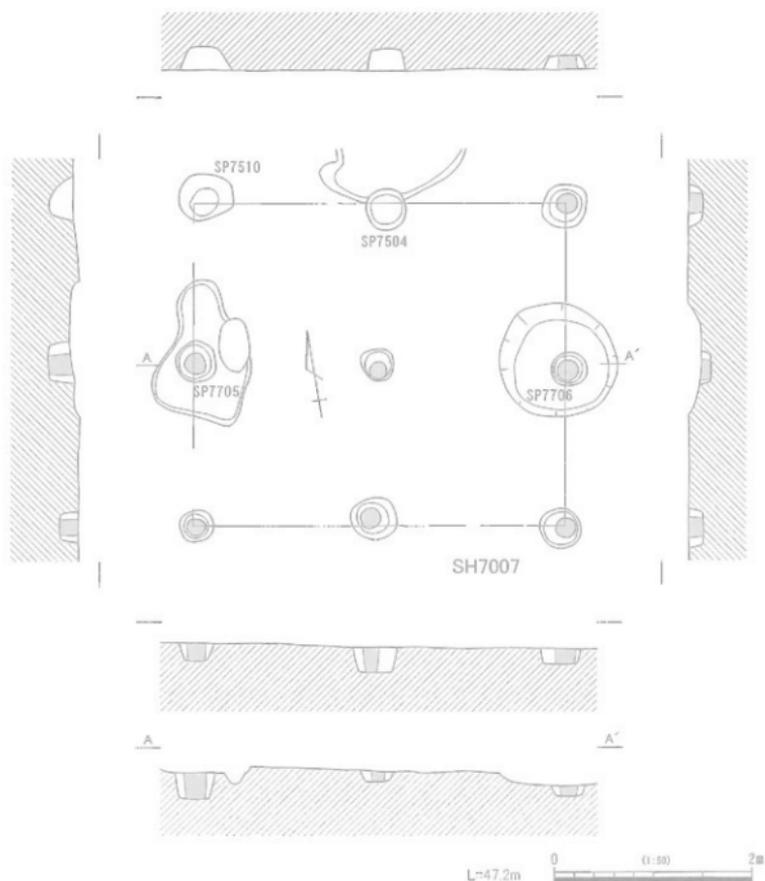


図 339 SH7007 実測図

SH7010 (図 338・340)

SH7012の南側に位置する、2×3間の側柱建物である。建物規模が3.92m×4.92mの南北棟で、主軸方位はN-1°-Eではほぼ真北となっている。多くの柱穴では、近接した位置に別の柱穴が検出されている。ほぼ同一の位置に2つの柱穴が検出されているものも多く、ほぼ同一の位置に建替えが行われたことが分かる。建替え後の柱穴からは、直径14～16cmの規模の柱痕跡が検出されている。抜き取り穴の位置から、建替え前の建物の柱間は梁行・桁行ともに等間と推測される。

柱穴から、遺物は全く出土していない。ただし、後述のように、切り合い関係からSH7012に後続することは明らかである。明確に年代を示す資料はないものの、僅かではあるが主軸が東に振っていることから、古代に属する建物として捉えておくことにする。

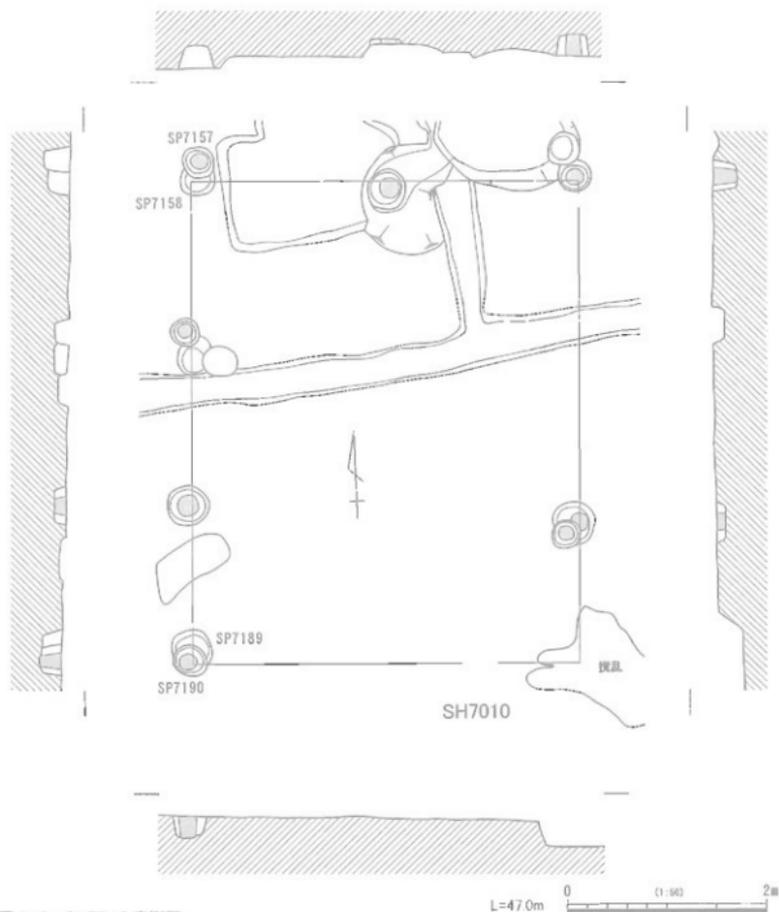


図 340 SH7010実測図

SH7012 (図 341)

SH7010の東側に位置する、 2×2 間の総柱建物である。建物規模が $3.08 \text{ m} \times 3.44 \text{ m}$ の東西棟で、主軸方位は $N - 10.5^\circ - E$ となっている。南西の隅柱は、SH7010の柱穴SP7282に切られており、SH7012がSH7010に先行する建物であることが明らかとなっている。北東の隅柱については検出されていない。元々浅かったため削平された可能性もあるが、他の柱穴については比較的深いものが多く、検出時に見落とされた可能性も否定できない。いくつかの柱穴で柱痕跡が検出されており、その規模は直径 $14 \sim 16 \text{ cm}$ である。掘方は、長径 $28 \sim 40 \text{ cm}$ のややいびつな円形で、深さは現存で $18 \sim 30 \text{ cm}$ 。柱間は梁行・桁行ともに等間と推定される。ただし、東柱とみられる屋内中央の柱穴については、やや北側に寄った位置に設けられている。

遺物は一切出土していないが、南北軸を東に振ることから、古代の建物であると推測される。また、SH7007とSH7012は、建物方位や構造、規模がほぼ同一である上に、東西に並列した位置関係にあることから、同時期あるいは近接した時期の建物である可能性が高いと考えられる。

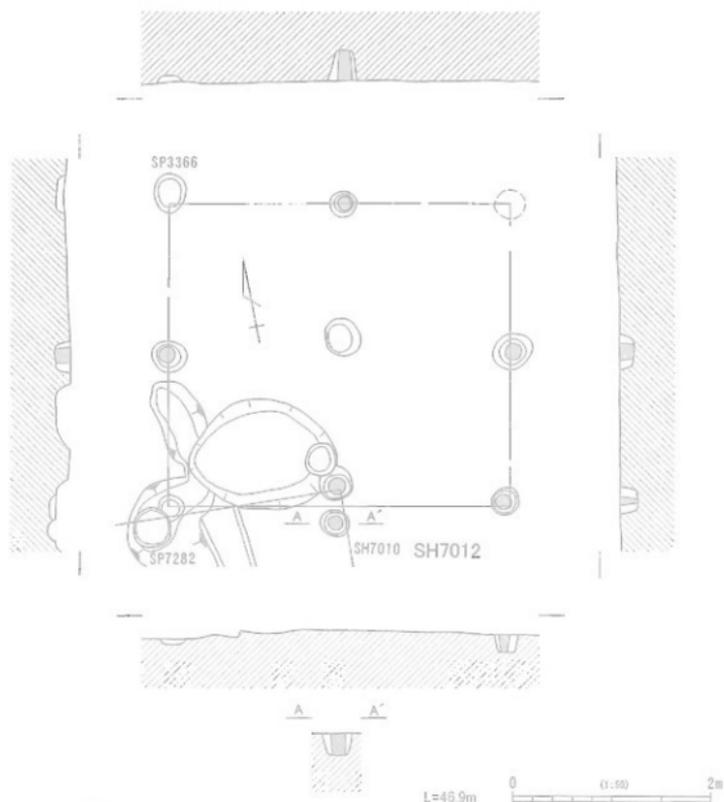


図 341 SH7012 実測図

表 31 掘立柱建物出土遺物觀察表

No.	遺物名	厚塗	遺物	厚塗	口徑 (cm)	直径 (cm)	底高 (cm)	厚塗厚	色澤	備考
2400	SH1008	P 1	漆器部	呼身	(12.0)				口部-朱紅 1/5	灰
2401	SH1006	SD1014	漆器部	蓋					口部 1/3	灰
2402	SH1011	SP1233	漆器部	呼身	(8.4)	(2.9)	3.6		口部-黒漆	灰
2403	SH2003	P 8	漆器部	呼身	(10.7)				口部 1/5	灰青
2404	SH2003	P 1	土器部	蓋	(16.4)				口部 1/5	口部-黒
2405	SH2012	SP0470	漆器部	高坪	(16.2)				口部-赤黒 1/6	灰青
2406	SH2018	SH4301	漆器部	呼身					口部 1/4	灰青
2407	SH2018	SH2021	漆器部	呼身	(9.1)				口部 1/4	灰
2408	SH2020	SP4237	漆器部	呼身					口部 1/10	灰
2409	SH2020	SP0700	土器部	蓋	(22.7)				口部部 1/6	口部-黒
2410	SH2010	SH2032	漆器部	呼身		(8.4)			口部 1/2	灰
2411	SH2019	SP6342	土器部	呼身	(10.4)				口部 1/16	口部-黒
2412	SH2024	SP6729	土器部	蓋	(15.7)				口部部 1/10	灰

表 32 掘立柱建物-覽表(古代)

遺物名	間取	柱高	方向	柱	間取 (m)	底高 (m)	掘立柱間 (m)	桁行間取 (m)	柱間距離 (m)	柱穴間取 (m)	備考
SH1005	1×2	側柱	東西	N-4°-E	3.00×3.50	10.6	160/199	350			
SH1006	2×4	側柱	南北	N-7°-E	4.85×6.70	33.0	244/244	169/169/109/169 156/164/176/176	18~25	30~40	遺物多未詳確位置
SH1007	2×3	側柱	南北	N-6°-E	4.00×5.50	23.2	200/200	164/164/212	22~25	40~50	
SH1008	6×6	側柱	正方形	N-10°-E	6.92×6.92	47.9	242/84/116/99/164 140/102/200/130/120	132/120/130/85/120/104 140/102/200/105/224	--	20	測 (3X1002) 未詳
SH1010	2×3	側柱	東西	N-1°-W	4.20×4.96	20.0	210/210	166/166/196	--	--	
SH1011	2×4	側柱	--	N-15°-W	3.40×4	--	260/	170/170	--	--	
SH2003	2×4	側柱	南北	N-4°-W	4.80×7.80	37.4	240/240	195/105/105/195	25~30	40~50	遺物多未詳確位置
SH2010	2×2	側柱	東西	N-3°-E	4.50×4.26	17.0	210/210	230/196	--	20~40	
SH2005	2×4	側柱	--	N-11°-W	4.40×4	--	220/220	245/	--	--	
SH2008	1×1	側柱	西北	N-9°-E	2.24/1.252	5.5	224	222	16	30	
SH2001	2×2	側柱	正方形	N-8°-E	4.20×4.20	17.6	210/210	210/210	16~20	30~36	
SH2002	2×2	側柱	正方形	N-11°-E	4.30×4.50	17.6	210/210	210/210	16~20	30~36	
SH2003	3×3	側柱	南北	N-1°-E	4.56×5.10	65.3	174/158/184 346/164	182/164/184 156/170/170	18~22	30~40	
SH2001	2×2	礎柱	東西	N-10.5°-W	3.20×3.30	10.6	160/160	160/160	16~22	40	
SH2002	2×2	礎柱	正方形	N-11°-W	3.40×3.40	11.6	170/70	170/70	20~24	34~46	
SH2003	1×1	側柱	南北	N-7.5°-W	2.56×2.64	6.8	256	264	20~25	32~44	
SH2009	1×2	側柱	南北	N-2°-E	2.12×3.36	7.1	212	240/206	20~22	45~50	
SH2012	4×4	礎柱	--	N-6°-W	6.24×4	--	136/136/	260/132/132/160	--	--	遺内棟柱
SH2013	2×3	礎柱	東西	N-7°-W	4.00×6.56	25.4	200/200	230/230/176	20~24	36~46	
SH2014	2×2	側柱	東西	N-5°-W	4.56×5.44	27.0	248/248	272/272	22	44~60	
SH2015	2×2	側柱	東西	N-13°-W	3.04×3.60	10.3	152/52	170/170	16~18	26	
SH2017	2×2	側柱	正方形	N-12°-W	4.40×4.40	19.4	220/220	220/220	22	45~60	
SH2018	1×2	側柱	南北	N-3°-W	2.10×4.40	9.2	210	220/220	16~22	36	
SH2019	1×2	側柱	南北	N-24°-W	3.04×4.40	13.4	304	220/220	20	40	
SH2020	1×2	側柱	東西	N-8°-E	2.00×4.60	9.6	200	234/246	20	30~40	
SH2024	1×2	側柱	南北	N-7.5°-W	3.70×4.50	15.6	370	176/244	20~22	36~40	
SH7001	1×2	側柱	東西	N-7°-W	3.24×4.64	15.7	324	270/208 242/242	20~22	34~44	
SH7004	2×3	側柱	南北	N-7°-W	3.60×5.00	18.4	184/184	160/166/160	20~24	36~40	
SH7005	1×1	側柱	正方形	N-4.5°-W	1.72×1.72	3.0	172	172	18~20	30~36	
SH7007	2×2	側柱	東西	N-10°-E	3.20×3.76	12.3	164/164	190/168	18~20	34~44	
SH7012	2×2	礎柱	東西	N-10.5°-E	3.08×3.44	10.6	172/172	154/194	14~16	28~40	
SH7010	2×3	側柱	南北	N-1°-E	3.62×4.52	19.3	196/196	160/160/152	18~20	30~40	

4. 小穴

組み合う柱穴が検出されていないため、建物としては認識できないが、出土遺物から古代の遺構と判断される小穴がいくつか発見されている。

SP1199・1200 (図 303・342、図版 38)

1区の南東部に位置している。SP1199からは、土師器の甕が2点出土している。2421は口縁部のみの破片である。口縁部はナデ調整が施されており、端部は上方へ積み上げられている。SP1200からは、須恵器の坏が2点と、土師器の坏や甕の破片が十数点出土している。2414と2415は須恵器の坏であり、1697は二次焼成によって橙褐色に変色している。

SP1129・1132・1201・1222・1235・1296・1305・1356・1367 (図 303)

SP1129とSP1132は1区の中央に、その他は1区の南側に位置している。いずれも図化できない小片ではあるが、SP1222からは須恵器の坏蓋と思われる破片が出土しており、その他の小穴からは土師器の破片が各1点出土している。土師器については、多くが甕の体部の破片であろうと推測される。

SP2001・2301・2302・2004・2314・2374・2393 (図 311・342、図版 38)

2区の中央部に位置する。SP2001からは土師器の甕(2423)が出土している。図示したもの以外にも、同一個体とみられる破片が20点程度出土している。SP2301と2302は東西に約2m離れた位置にあるが、出土した土師器甕(2420)の破片が接合している。口縁部がハの字状に開き、体部の内外面には板ナデ

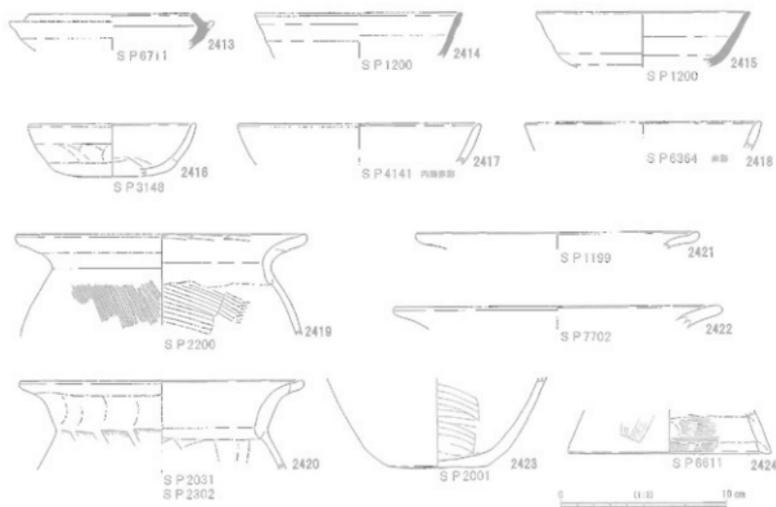


図 342 小穴出土遺物 (古代)

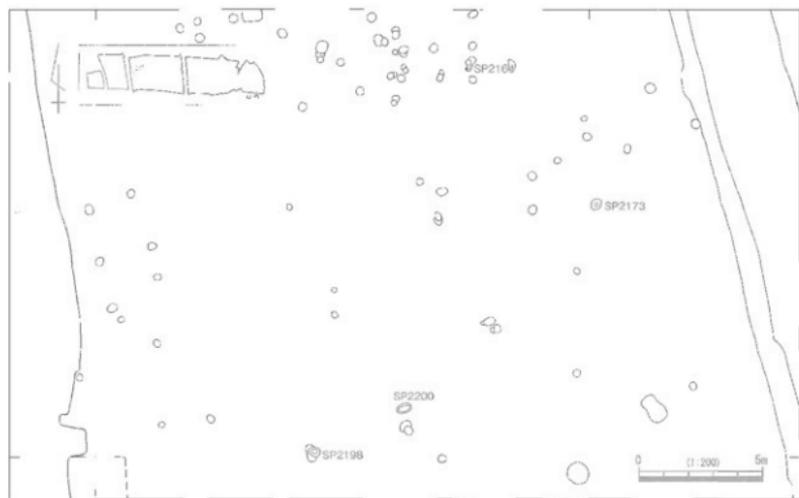


図 343 古代の遺構配置図（2区・西側）

調整が施されている。SP2004・2314・2374からは、土師器の破片が出土している。SP2393からは、須恵器の瓶類とみられる破片が1点出土している。

SP2200・2164・2173・2198（図 342・343、図版 38）

2区西側に位置する。SP2200からは、土師器甕（2419）が出土している。口縁部は横方向に大きく開き、内外面ともにナデ調整が施される。体部の外面はハケ目調整、内面は板ナデ調整となっている。SP2164からは須恵器の口縁部の破片が2点、SP2173からは須恵器の坏蓋の破片、SP2198では土師器の破片が各1点出土している。これらは、いずれも図化できない小片である。

SP3148・3202・3135・3106・3281・3334（図 338・342、図版 38）

3区中央南側に位置する。SP3148からは土師器の坏（2416）が1点出土している。下半は指オサエ調整で、口縁部のみヨコナデ調整が施されている。胎土は橙白色の色調を呈し、赤彩は施されていない。8世紀後半以降のものであろう。SP3202からは、須恵器の破片が出土している。2cm以下の破片のため、器種は不明である。SP3106・3135・3281・3334からは、土師器甕の破片が各1点出土している。いずれも、図化できない小片である。

SP3022・3297・3397～3416（図 314・344）

3区北側に位置する。SP3022と3297は、図化できない小片ではあるが、土師器が出土している。SP3397～3416については、遺物は全く出土していない。ただし、中世の土壘構築土の下層で検出されていることから、詳細な年代は不明ではあるが、概ね古代の遺構とみてよいであろう。

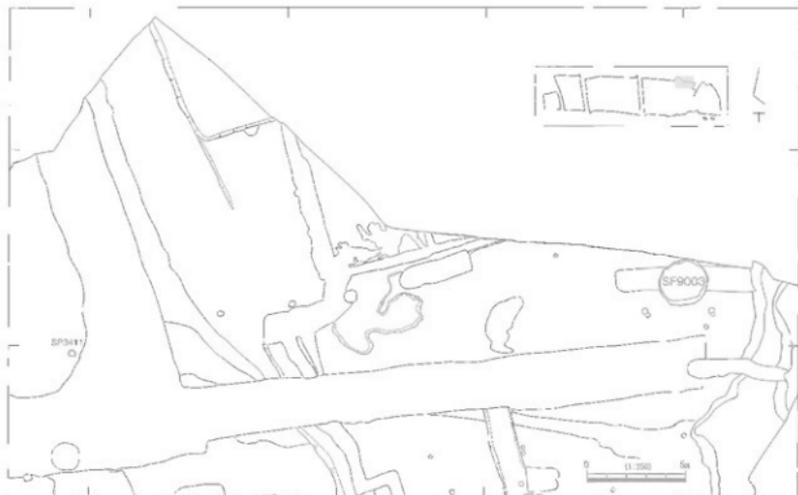


図 344 古代の遺構配置図（3区・東側）

SP4141・6562・6569・6578・6637（図 342、図版 38）

4区及び6区の東側に位置する。SP4141からは、土師器の坏（2417）が1点出七している。表面の摩滅が著しいが、内面にはわずかに赤彩が認められる。他の小穴では、土師器の甕とみられる破片が出土している。SP6562では5点、SP6569では2点、6637では3点、SP6578では1点出土しているが、図化できない小片であり表面の摩滅も著しい。

SP6561・6610・6611・6684・6764（図 342、図版 38）

6区の南東部に位置する。SP6611からは、土師器の甕（2424）が出土している。台付き甕の脚部の破片である。SP6610からは須恵器、SP6561・6684・6764からは土師器が出土しているが、いずれも図化できない小片である。

SP6006・6016・6057（図 320）

6区の西側に位置する。SP6006からは須恵器が1点出土している。壺・瓶類の体部の破片と推測される。SP6057とSP6016からは土師器が出土している。いずれも図化できない小片である。

SP6188・6189・6518・6540（図 282）

6区中央の北側に位置する。いずれも図化できない小片であるが、土師器甕の破片が出土している。

SP6364・6711・6270・6315・6323・6336・6353・6411・6414・6433（図 283・342）

6区中央の西側に位置する。SP6364では、土師器の坏（2418）と甕の小片が出土している。SP6711からは、須恵器の坏身（2413）が出土している。小型のもので、口縁部の立ち上がりも低い。また、図



図 345 古代の遺構配置図（7区・中央南側）

化できない小片であるが、SP6270・6336・6353・6433 から土師器、SP6315・6323 から須恵器、SP6411 からは須恵器と土師器が各 1 点、SP6414 からは土師器が 3 点出土している。

SP6454・6456・6459・6460・6486・6503・6504・6528・6723・6733（図 283）

5 区の中央の東側に位置する。出土した遺物は、いずれも図化できない小片である。SP6454・6486・6503 からは、須恵器が 1 点出土している。いずれも壺・瓶類とみられる。SP6456・6459・6504・6723 からは、土師器の甕が出土している。SP6460 からは土師器の坏とみられる、内外面に赤彩が残る破片が出土している。SP6528 と 6733 からは、須恵器と土師器が出土している。

SP7558・7664・7700～7702（図 335・342、図版 38）

7 区の西側に位置する。SP7702 からは、土師器の甕（1873）が出土している。図示したものの他に、体部の破片も 1 点出土している。SP7558 からは、須恵器の甕の破片が 1 点出土している。SP7664・7700・7701 からは、土師器が 1～2 点出土している。いずれも、図化できない小片である。

SP7008・7022・7184・7216・7261・7265・7267・7284・7286（図 345）

7 区の中央に位置する。いずれも、図化できない小片であるが、須恵器や土師器が出土している。SP7008 と 7216 からは、須恵器の坏身または蓋と推測される破片が出土している。SP7265 と 7286 からは、須恵器の壺瓶類の破片が出土している。SP7265 からは、土師器の坏が出土している。他の小穴からは、土師器の甕とみられる破片が出土している。

5. 土坑

SF6032 (図 346・347、図版 38)

6区の北東部に位置する。長径1m・短径65cmの隅丸長方形で、深さは現存で20cm。平坦な底部から、斜めに立ち上がる。攪乱とSP6653によって、西側の大部分は失われている。埋土は暗褐色土の単層で、炭化物や焼土についてはほとんど確認されなかった。

遺物としては、須恵器と土師器に加え、土製支脚、輔羽口、炉壁が出土している。2425と2426は須恵器の坏である。いずれも底部のみの破片であるが、2425は丸底の無台坏、2426は平底のいわゆる箱坏であると推測される。2427～2429は土師器の甕である。2427は口縁部に向かって、湾曲しながら開く。2428と2429は、口縁部が屈曲して横方向に大きく開く。口縁部はナデ調整、体部外面にはハケ目調整が施されている。土師器については、図化したもの以外にも20点程の破片が出土しており、ほとんどが甕の体部の破片であるが、内外面に赤影が施された坏とみられる破片も確認できる。

2430と2431は輔羽口である。2430は先端部の破片で、先端部は溶解して黒色ガラス化し、先端部が端には鉄滓が付着する。先端部の外径は約6cm、内径は約2.5cmである。先端から元口部に向かって、外径、内径ともに徐々に広がっている。色調は先端が青灰色、元口側が橙褐色で、境は帯状に灰白色となっている。青灰色の部分には鉄滓の付着が確認できることから、青灰色の範囲までが炉内に挿入されていたものとみてよい。炉内への挿入角度は、ほとんど付いていない。表面の調整は不明瞭で、先端部に長軸方向へのヘラナデ調整が多少施されている程度である。外面に比べて通風孔の壁面は平滑となっており、棒状の芯に粘土を巻きつけて成形したものと推測される。表面には、藁や初痕跡が多数認められる。欠損部の断面にも確認できることから、粘土に混入されたものである。先端に付着する鉄滓は、断面が

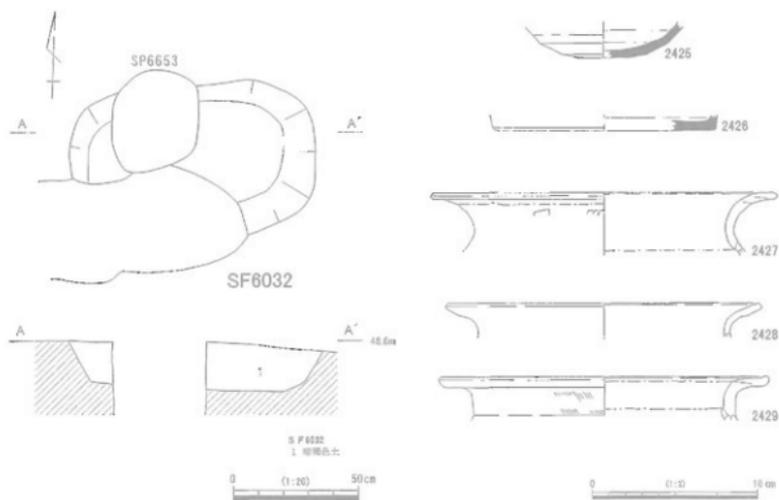


図 346 SF6032 実測図・出土遺物 (1)

碗形を呈しており、下面には小碟が多数付着している。炉床からさほど高くない位置に、羽口が設置されていたことがわかる。

2431は元口部である。元口の外径は約8cm、内径は約5cmに復元される。外面は横方向のナデ調整が施されており、元口部の端面は平らに仕上げられている。色調は外面が橙白色、内面及び断面は橙褐色である。2430と同様に、表面と断面に窯や初痕跡が確認できる。元口部に向かって、裾が緩やかに広がる形態である。

2432は炉壁である。当初鉄滓と捉えていたが、後述のように、化学分析の結果炉壁であることが判明した。詳細については、第6章に記載している。2433は土製の支脚である。破片資料であるが、断面は三角形または楕円形に近い形状と推測される。先端部には平らな面がつくられており、わずかに基部に向かって太くなっている。表面はナデ調整により、平滑に仕上げられている。

SF6032については、床面や壁面に被熱の形跡はないことから、それ自体が鍛冶遺構であるとは考え難い。出土した遺物については、近隣の鍛冶工房から持ち込まれ、投棄されたものであろう。土器などから、これらの遺物が廃棄された年代は、8世紀後半頃と推測される。

SF2019 (図311・348)

SF2019は、2区の中央南側に位置する土坑である。平面は直径1.4mの円形で、深さは現存で約10cmと浅い。埋土は暗褐色土の単層である。埋土中から土師器が2点出土している。いずれも図化できない小破片で表面の摩滅も著しいが、うち1点については坏または皿の破片で、内外面には赤彩が認められる。遺構の詳細な年代については不明であるが、出土遺物から古代の範疇に収まるものとみてよいであろう。

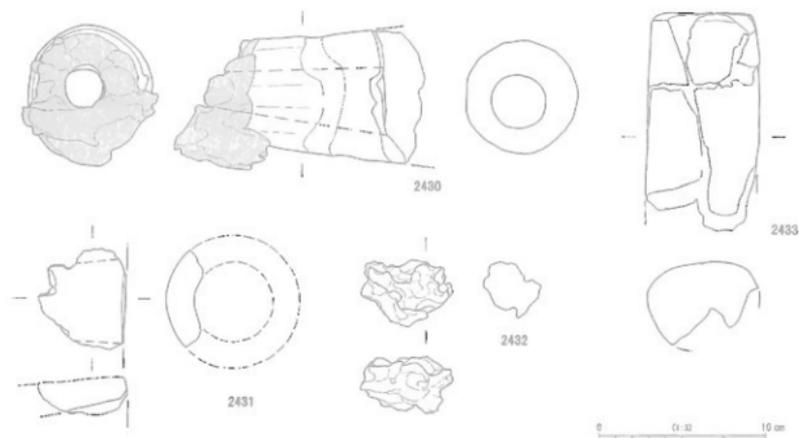


図347 SF6032出土遺物(2)

SF2028 (図 282・348)

SF2028 は、SF2019 の南西約 6 m に位置する。不整形の土坑であり、記録によると埋土は暗褐色土の単層とされている。ただし、南側の突出した部分に関しては深さが異なっており、底部に平坦面を形成していることから、別の遺構である可能性も考えられる。北側の部分に関しては、明確な底部はなく、播鉢状の形態となっている。規模は長径 80 cm、深さは現存で約 30 cm である。遺物については、埋土中より土師器が 1 点出土している。1 辺が 1 cm 程度の小破片のため、器種の特定も困難であるが、表面の一部に赤彩が確認でき、古代の土師器である可能性が高い。

遺物が 1 点のみのため、年代の決め手は乏しいが、他に中近世の遺物が出土していないことなどから、古代の遺構として捉えてよいと推測される。

SF4010 (図 311・348、図版 38)

SF4010 は、4 区の中央西隅に位置する。長径 1.2 m・短径 0.9 m の楕円形の土坑である。土坑の上面の大部分は、近世の溝 SD2003 と SD4001 によって失われている。埋土は暗褐色土を基調とするが、含まれている小礫の量などから 4 層に分けられている。このうち、最下層にあたる 4 層からは、須恵器の高坏が 1 点出土している。出土した高坏 (2434) は、坏部の底部から脚部にかけての破片である。脚部は比較的細いつくりで、透かしは設けられていない。8 世紀代のものであろう。遺物は 1 点のみであるが、最下層より出土していることから、SF4010 は少なくとも古代の遺構とみて間違いのないであろう。

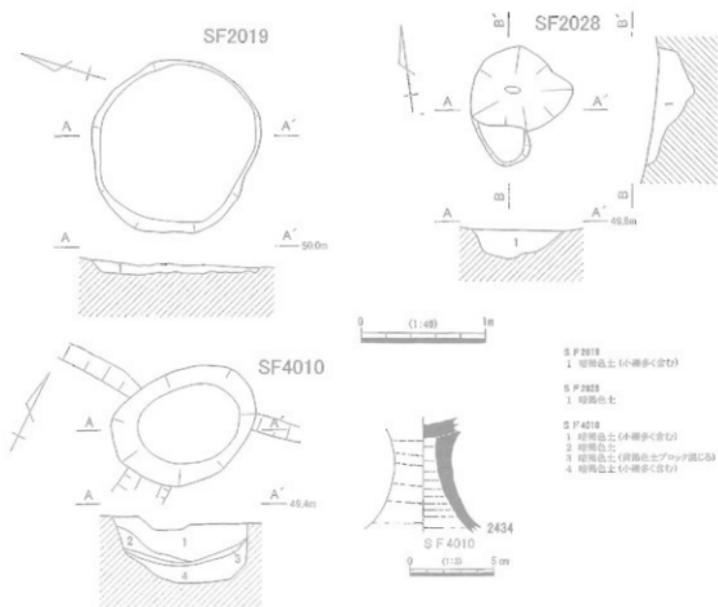


図 348 SF2019、2028、4010 実測図・出土遺物

SF3015 (図 338・349、図版 38)

SF3015は、3区の南東部に位置する。直径約1.4mの円形の土坑で、東側の一部は擾乱によって失われている。深さは、現存で10cm程度と浅い。埋土は暗褐色土を基調とし、上下2層に分けられている。遺物としては、埋土上層から土師器の甕(2435)が1点出土している。比較的薄いつくりで、口縁は斜め上方へ開く。遺物が1点のみであり、遺構の詳細な年代は不明であるが、中近世の遺物が混入していないことから、古代の遺構とみてよいであろう。

SF3031 (図 314・349、図版 38)

SF3031は、3区の中央北側に位置する。長辺1.6m・短辺1.1mの隅丸長方形の土坑で、深さは現存

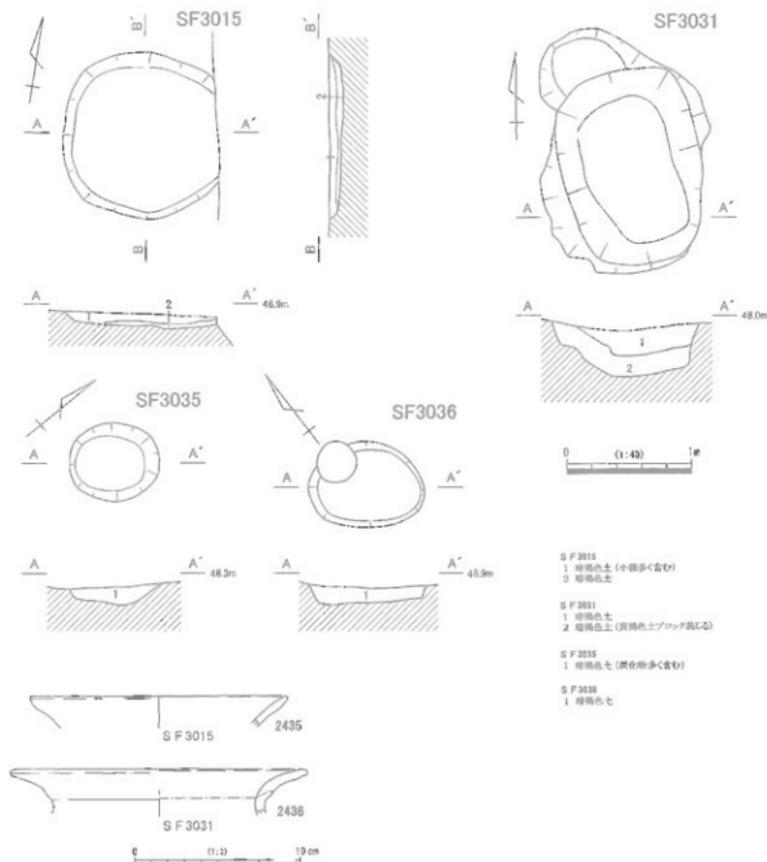


図 349 土坑実測図・出土遺物 (3区)

で約40cmである。埋土は下層が黄褐色土ブロック、上層は暗褐色土と明確に分かれている。調査時には、北側の突出部も同一の遺構と捉えているが、南側の溝状遺構から連続する遺構と推測される。土層断面で観察されている上層の暗褐色土は、恐らくは溝状遺構の埋土であろう。また、下層の埋土は、地山に相当する黄褐色土がブロック状に入っていることから、人為的に埋められた可能性が高い。

遺物としては、土師器の甕が9点出土している。2436は口縁部の破片で、口縁は横方向に大きく開く。他は胴部の破片であり、表面が摩滅しているものも多いが、外面にはハゲ目調整がみられる。いずれも溝状遺構の埋土とみられる上層からの出土であり、本来のSF3031の埋土に相当する下層から遺物の出土はみられないが、少なくとも溝状遺構に先行するSF3031は、古代の遺構とみてよい。

SF3035・3036 (図314・349)

両遺構は、3区の中央部に位置する。中世の土塁の解体後、地山面において検出されている。SF3035は直径約70cmの円形で、深さは現存で15cm程度と浅い。SF3036は、長径約90cm・短径約70cmの楕円形で、深さは現存で約15cmとやはり浅い。埋土は、いずれも暗褐色土の単層である。両遺構ともに、遺物は全く出土していないが、検出状況から土塁築造以前の遺構として捉えられる。中世初頭の遺構である可能性も想定し得るが、埋土の状況からは土塁築造時に人為的に埋められたとは考えにくい。遺物が出土していないため、具体的な年代については不明であるが、古代の遺構の可能性が高いと推測される。

SF6005・SF6015 (図282・283・350)

6区の中央北側に位置する。SF6005は直径約70cmの円形の土坑で、深さは現存で約10cmと浅い。埋土は暗褐色土の単層である。SF6015は、直径約1mの円形の土坑。SF6707や6708などの複数の遺構と切り合っている。深さは現存で約8cmと浅く、埋土は暗褐色土の単層である。遺物としては、両遺構ともに土師器の甕の破片が数点出土している。いずれも図化できない程の小破片のため、詳細な年代については不明であるが、SF6005・6015はともに古代の遺構とみてよいであろう。

SF6014 (図282・350、図版38)

6区の北東部に位置する。円形の土坑で、直径は約1.5mと比較的大型である。底部は平坦になっており、深さは現存で10cm程しかない。埋土は暗褐色土を基調とするが、底部付近には黄褐色土がブロック状に混入する。遺物としては、図化できない小片がほとんどであるが、埋土中から土師器の甕または甕の破片が十数点出土している。2437は土師器の小型甕または甕の口縁部である。比較的厚い作りとなっており、口縁部は外反して斜め上方へ開く。詳細な年代の特定は困難であるが、SF6014は古代の遺構とみて間違いない。

SF6019 (図283・350、図版38)

6区の中央、SF6015の北東約10mに位置する。長径約80cm・短径約50cmの楕円形で、深さは現存で約20cm。埋土は暗褐色土の単層で、埋土中から土馬(2441)が1点出土している。2441は前足から頭部にかけての破片で、頭部と胴部の大半が欠損する。胴部から頭部にかけては扁平な板状となっており、両側から挟み込むような形で前足が接合されている。簡略な作りとなっており、土馬としては比較的新しい要素を有している。遺物はわずか1点のみであるが、中近世の遺物が見られないことから、古代の遺構として捉えておく。

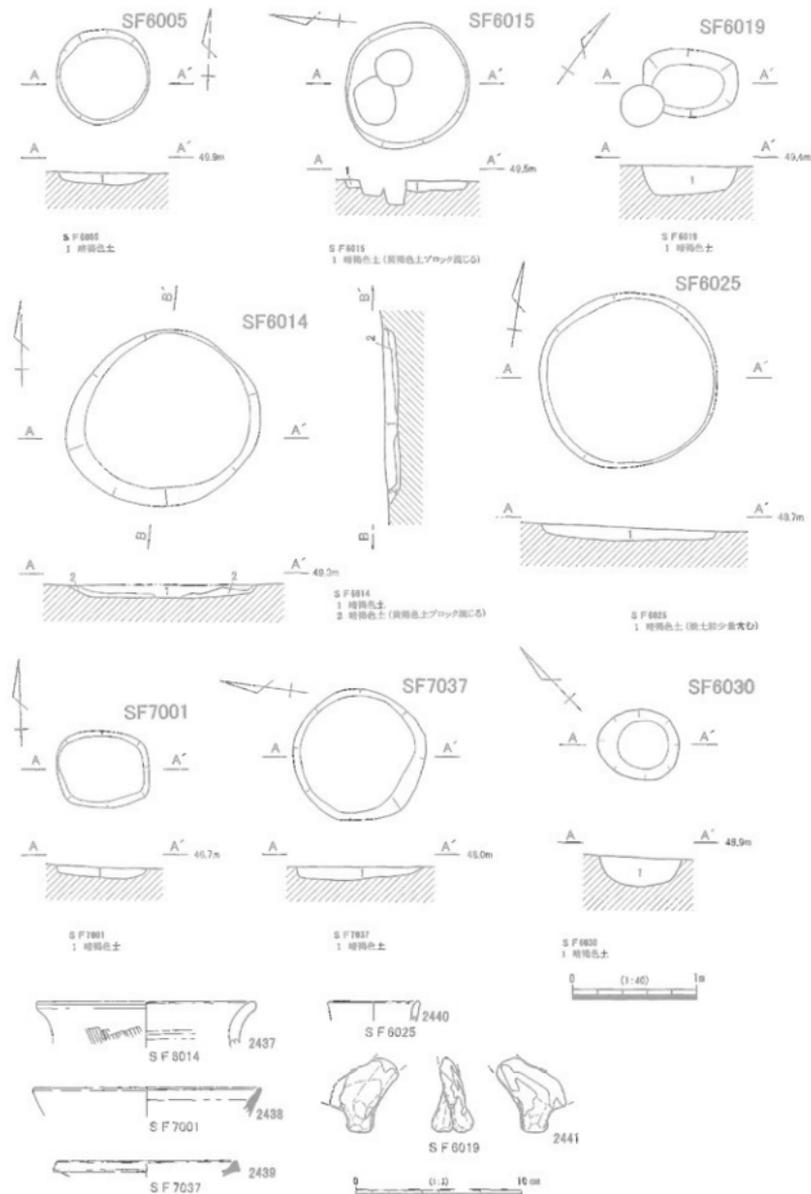


図 350 土坑実測図・出土遺物(6区・7区)

SF6025 (図 282・350、図版 38)

6区の西側に位置する。直径約1.4mの円形で、深さは現存で約10cm程度と浅い。埋土は暗褐色土の単層であるが、焼土粒が少量含まれていた。遺物としては、製塩土器(2440)が1点出土している。口縁部の小片ではあるが、口縁部が直立するタイプと推測される。厚さは一定していないが、厚い所でも3mm程度しかない。この他に、図化できない小片であるが、土師器の破片が数点出土している。遺物はいずれも古代のものであり、遺構の年代についても古代とみて差し支えないであろう。

SF7001・7037 (図 335・350、図版 38)

SF7001は7区の中央、SF7037は7区の西側に位置する。SF7001は長辺約70cm・短辺約60cmの隅丸長方形の土坑。SF7037は直径約1.1mの円形の土坑である。深さはいずれも現存で約10cmと浅い。SF7001とSF7037の埋土中からは、須恵器と土師器が出土している。2438はSF7001出土の須恵器で、丸底の形態となる無台坏とみられる。2439はSF7037出土の須恵器で、口縁部のみの破片であるが、小型の広口壺と推測される。土師器は、いずれも図化できない小破片である。

両遺構ともに年代の決め手となる遺物は乏しいが、概ね8世紀代の遺構とみてよいであろう。

SF6011 (図 283・351、図版 38)

6区の中央南側に位置する。長径約2mのややいびつな楕円形の土坑で、深さは現存で約30cm。遺物としては、埋土中から須恵器や土師器、製塩土器が出土している。2442は須恵器の坏身で、全体の8分の1程度の破片である。2443は土師器の高坏である。底部の中心から内湾して緩やかに広がり、口縁部において直立気味に立ち上がる。内外面ともに赤彩が施されている。2444は土師器の壺である。口縁部のみの小破片で、表面の摩滅も著しいが、外面には赤彩が認められる。2445は土師器の甕である。2446～2448は製塩土器である。2446は坏状の形態を呈するものである。口縁部に向かって斜めに立ち

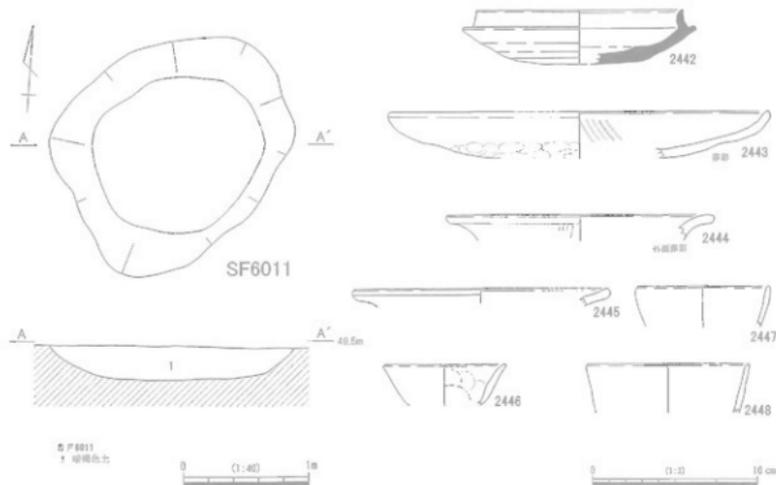


図 351 SF6011 実測図・出土遺物

上がり、口縁部では若干外反する。2447と2448は直立気味に立ち上がるもので、2447は口縁部がやや内湾する。いずれも器壁が3mm程度の薄いつくりとなっている。遺物の年代としては、2442のように古い遺物も混在するが、7世紀後半頃のものが多い。SF6011の年代の上限は7世紀後半に位置付けられる。

SF9003 (図 282・352、図版 38)

9区の北東隅に位置する。直径約2.4mの円形の土坑で、深さは現存で約30cmとなっている。埋土は2層に分けられている。遺物としては、両層から土師器が出土している。2449は壺の底部から体部にかけての破片で、2層から出土している。外面の底部から体部下半は指オサエ、体部上半はハケ目調整が施される。内面は板ナデ調整である。2450は小型の鉢の底部で、1層から出土している。胎土は緻密で、内面には横方向の丁寧なナデ調整が施されている。この他に、両層から1～2点の土師器が出土しているが、図化できない小片である。遺物は乏しいものの、2449や2450などの遺物から、SF9003は7世紀中頃の遺構として捉えられる。

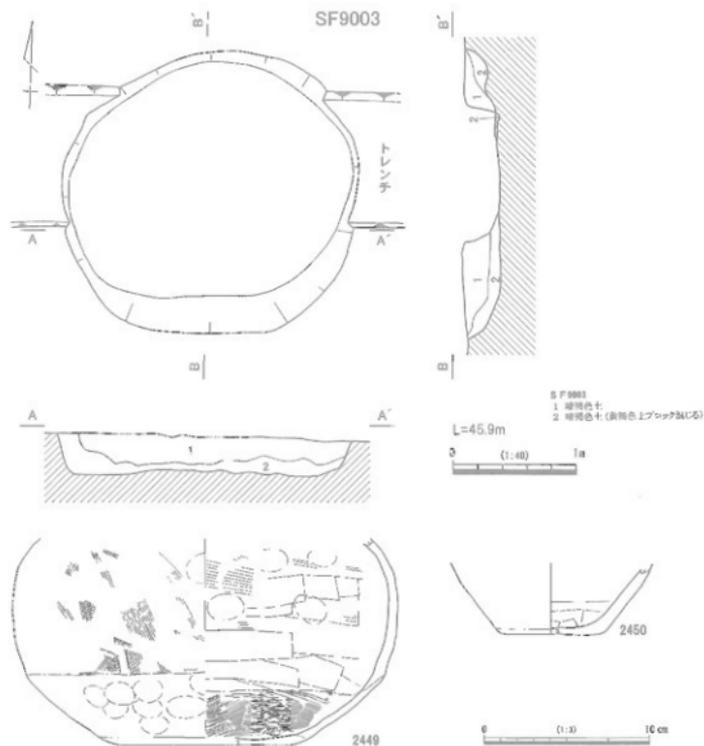


図 352 SF9003 実測図・出土遺物

6. 溝

SD3001 (図 353・354、図版 53・74)

3・7区の中央を南北に縦断する、大規模な溝である。3区の南側や7区においては、攪乱等によって失われている部分も多い。最も残存状況のよい北側で、幅が約1.2m、深さは約50cmとなっている。ほぼ直線的に設けられており、調査範囲内において総延長約70mにも及び、さらに南北ともに調査区外へと続くことが確認されている。



図 353 SD3001 実測図・断面図

埋土は大きく3層に分けることができ、中世の土層が残存する部分では、土壘構築以前の包含層の下層（第3層）上面から掘り込まれていることが確認されている。

遺物は、埋土の上層（4層）と中層（5層）から出土している。2451は、須恵器の坏である。口縁の復元径は11.5cmで、底部から外反気味に立ち上がり、口縁部でやや内湾する。2452は須恵器の皿である。口縁部の破片のみであるが、形状から有台皿と推測される。2453は須恵器の広口壺である。肩部はやや高く、湾曲して体部に至る。口縁部から肩部にかけて、外面に自然釉が付着する。2454は長頸壺の底部で、高台はやや外に開く。2455は須恵器の甕である。口縁部と体部下半の破片で、接合し

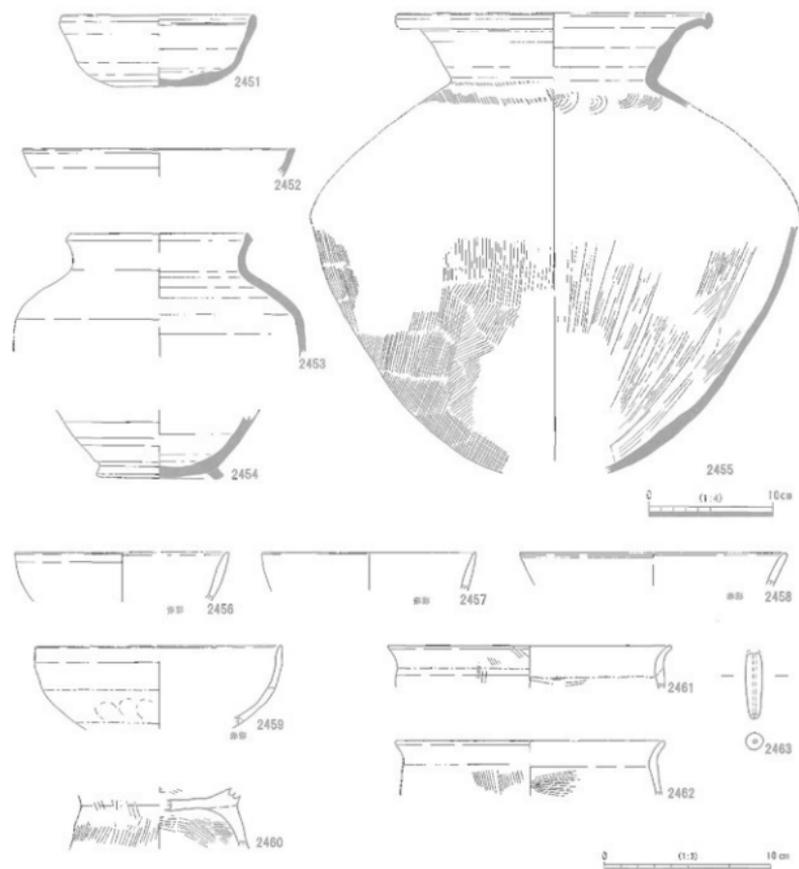


図 354 SD3001 出土遺物

ないが、近隣からまとまって出土していることから、同一個体の可能性が高い。2456～2458は土師器の坏である。口縁部の破片で、摩滅も著しいが、内外面に赤彩が認められる。2459は土師器の鉢である。内面は摩滅が著しく調整が観察できないが、外面は大半が指オサエ、口縁部のみナデ調整が施されている。内外面ともに赤彩が確認できる。2460は、土師器の台付き甕で、底部から脚部の破片である。2461と2462は土師器の小型甕。わずかに外反させ、口縁部をつくり出ししている。口縁部はナデ調整、体部はハケ目調整によって仕上げられている。2463は土師である。遺物の年代としては、一部7世紀後半のものもみられるが、大半は7世紀末～8世紀初頭のものである。

SD3001は、70mを超える長大な溝であり、全体的にやや西側へ湾曲することから、西側の土地を区画または囲むための施設であろう。年代としては、堰土層で7世紀末～8世紀初頭の遺物が出土していることから、その頃には既に溝の大半が埋没していたものとみてよい。

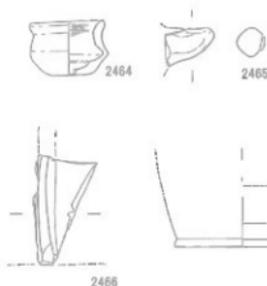
表 33 小穴・土坑・溝出土遺物観察表

No.	遺物名	部位	形状	器底	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存部	色調	備考
2413	SP8711		底面割	坏弁	(10.0)			口縁部 1/12	灰	
2414	SP1200		底面割	坏弁	(12.5)			口縁部-器底 1/5	灰	
2415	SP1200		底面割	坏弁	(12.5)			口縁部-器底 1/12	淡黄緑	
2416	SP1146		土師器	坏	(9.0)			口縁部-器底 1/6	淡黄緑	
2417	SP1411		土師器	坏	(14.0)			口縁 1/14	淡黄緑	
2418	SP8764		土師器	坏	(10.0)			口縁部 1/10	灰白	赤彩
2419	SP2200		土師器	坏	(17.4)			口縁部-器底 1/8	灰	
2420	SP2301		土師器	坏	(17.0)			口縁 1/5	灰白(焼)	SP2302と統合
2421	SP1130		土師器	坏	(16.0)			口縁部 1/20	灰白(焼)	
2422	SP7702		土師器	坏	(18.0)			口縁部 1/40	淡黄緑	
2423	SP2001		土師器	坏	(16.5)			器底 1/2	灰白(焼)	
2424	SP6011	泥土	底面割	坏	(12.2)			器底 1/5	灰白(焼)	
2425	SP6032	泥土	底面割	坏	(11.5)			器底 1/5	灰	
2426	SP6032	泥土	底面割	坏	(9.0)			器底 1/12	灰白	
2427	SP6032	泥土	土師器	坏	(20.7)			口縁部 1/4	淡黄緑	
2428	SP6032	泥土	土師器	坏	(18.0)			口縁部 1/24	灰白(焼)	
2429	SP6032	泥土	土師器	坏	(19.7)			口縁部 1/5	灰白(焼)	
2430	SP6032	泥土	器底割	器底片	直径片 5.3	先端部 6.0		器底部	淡黄緑	器底部に淡黄緑付
2431	SP6032	泥土	器底割	器底片	直径片 6.3	先端部 6.0		器底部	淡黄緑 / 灰白(焼)	
2432	SP6232	泥土	坏弁						灰白(焼)	
2433	SP6032	泥土	土師器	坏	器底片 13.3	器高 6.7		器底部	灰白	
2434	SP4012	4層	底面割	坏弁				器底部	灰白	
2435	SP3015	上層	土師器	坏	(15.0)			口縁部 1/19	淡黄緑	大穴群
2436	SP3021	泥土	土師器	坏	(16.4)			口縁部 1/12	灰白(焼)	
2437	SP6014	泥土	土師器	小底割・坏	(13.1)			口縁部 1/6	灰白(焼)	
2438	SP7021	泥土	底面割	坏弁	(12.4)			口縁部 1/10	灰白	
2439	SP7037	泥土	底面割	底口割	(10.0)			口縁部 1/12	灰白	
2440	SP6025	泥土	器底土割	器底	5.0			器底 1/20	淡黄緑	
2441	SP6019	泥土	土師	器底片 4.5	器高 2.5			器底 1/5	灰白(焼)	
2442	SP6011	泥土	底面割	坏弁	(12.5)	(7.1)		口縁部-器底 1/8	淡黄	内面・器底部
2443	SP6011	泥土	底面割	器底	(22.0)			口縁部-器底 1/3	灰白(焼)	赤彩
2444	SP6011	泥土	土師器	坏	(15.0)			口縁部 1/20	灰白(焼)	赤彩(内面)
2445	SP6011	泥土	土師器	坏	(16.4)			口縁部 1/14	淡黄緑	
2446	SP6011	泥土	器底土割	器底	(7.1)			口縁部 1/10	灰白(焼)	
2447	SP6011	泥土	器底土割	器底	(8.1)			口縁部 1/12	灰白(焼)	
2448	SP6011	泥土	器底土割	器底	(9.7)			口縁部 1/16	灰白	
2449	SP9003	2層	土師器	坏	(16.5)			口縁部-器底 1/3	灰白(焼)	
2450	SP9003	1層	土師器	坏	(15.1)			器底 1/4	灰白(焼)	
2451	SD2001		底面割	坏弁	11.5	3.6	4.4	1/3	灰白	
2452	SD3001		底面割	坏	(16.4)			口縁部 1/16	淡黄	
2453	SD3001		底面割	底口割	(10.8)			口縁部 1/4	淡黄	
2454	SD3001		底面割	器底割	(9.6)			器底の片	淡黄	
2455	SD3001		底面割	坏	(24.0)			口縁部-器底 1/2	淡黄	
2456	SD3001		土師器	坏	(11.1)			口縁部 1/5	淡黄緑	赤彩
2457	SD3001		土師器	坏	(11.2)			口縁部 1/19	淡黄緑	赤彩
2458	SD3001		土師器	坏	(15.0)			口縁部 1/20	淡黄緑	赤彩
2459	SD2001		土師器	坏	(14.2)			口縁部-器底 1/8	淡黄緑	赤彩
2460	SD3001		土師器	器底割	器底 10.0			器底 1/2	灰白(焼)	
2461	SD3001		土師器	坏	(17.0)			口縁部 1/10	淡黄緑	
2462	SD2001		土師器	坏	(13.0)			口縁部 1/12	灰白(焼)	
2463	SD3001		土師	器高 4.1	器底 1.0			器底割	淡黄緑	

7. 包含層・攪乱出土遺物

土製模造品 (図 355、図版 39)

2464 は壺形の土製模造品である。底部は平らで、口縁部は斜めに開く形状となっている。口縁部のみ横方向のナデ調整によって仕上げられている。6区の西側部分から出土している。2465 は甕または甔形の土製模造品である。把手の部分のみの破片であり、3区の攪乱から発見されている。



二面鏡 (図 355、図版 39)

2466 は二面鏡である。鏡尻側の堤部と右鏡面が残存する。堤部の左側は欠失しているものの、わずかではあるが、堤部の下端から水平方向に延びる鏡面が確認できる。裏面もほとんど欠損しているが、残存する部分の表面には、自然釉の付着がみられる。右鏡面の表面は、平滑に研磨されており、実際に使用されていたことがわかる。7区の攪乱から出土している。

図 355 包含層・攪乱出土遺物 (古代1)

緑釉陶器 (図 355、図版 39)

2467 は緑釉陶器の甔である。高台の復元径が8.2cmと比較的小型のものである。高台部から体部にかけての破片で、外面全体に淡緑色の緑釉が施されている。内面にも部分的に淡黄色の釉が認められるが、全面的な施釉ではない。胎土は基本的に須恵質で褐色の色調を呈するが、外面側については二次的な被熱により橙褐色に変色している。3区の攪乱から出土した遺物である。

須恵器 (図 356、図版 39)

須恵器としては、蓋・坏・皿・高坏・壺瓶類などが出土している。2468～2478 は蓋である。2470 は、全体に大きく変形している。2479～2493 は坏である。2488と2492、2493は、被熱によって変色し、胎土も軟質となっている。2494と2495は皿である。2496は高坏の脚部。透かしが設けられている。2497～2499は長頸壺である。2498は底部が丸底に近い形状となっており、四角形の高台が付く。2499は高台が付かないタイプである。須恵器については、広範囲から出土しているが、やはり多くの遺構が検出されている6区からの出土が多い。認識できる遺構の乏しい8世紀後半の遺物が、比較的豊富に出土している点が注目される。

灰釉陶器 (図 356)

2501と2502は碗の底部である。2501の底部には、外面に糸切り痕が認められ、断面三日月形の高台が付く。2502は薄いつくりで、底部に断面三角形の高台が付けられている。いずれも、10世紀代のものである。2501は6区、2502は2区の包含層から出土している。包含層や攪乱から出土した灰釉陶器は、わずかに数点程度であり、須恵器や土師器と比べて極端に少ない状況にある。

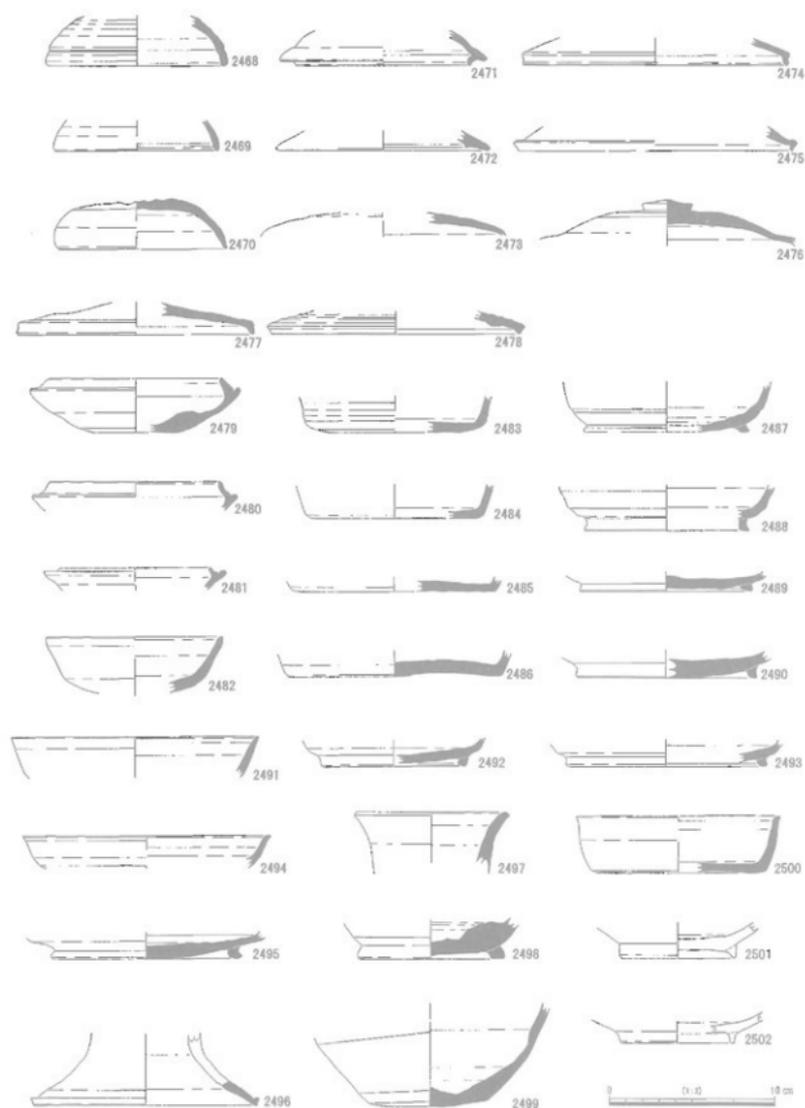


図 356 包含層・擾乱出土遺物 (古代2)

土師器 (図 357・358、図版 39)

土師器としては、坏・皿・鉢・甕などが出土している。2503～2515は坏である。2503～2510は胎土が緻密で、橙白色の色調を呈し、全面に赤彩が施されている。また、2509は二次的に被熱しており、底部外面が黒色に変色している。2511と2512は厚手のもので、胎土も他の坏とは異なり、褐色から赤褐色の色調を呈している。2513～2515は、胎土に砂粒を多く含んでいる。2516は皿である。平坦な底部から大きく外反して立ち上がる。全面に赤彩が施されており、内面には暗文が確認される。2517と2242は鉢である。

2519～252bは甕または壺の口縁部である。口径14cm程度の小型のものから、20cm以上の大型のものまでみられる。2526と2527は甕の底部である。2528は台付き甕の脚部で、脚部下端は内側に折り返して成形している。2529は甕である。全体の3分の1程度残存するが、残存部には把手の痕跡が認められない。外面はハケ目、内面は板ナデ調整によって仕上げられている。

土師器においても、分布や年代は、須恵器と同様の傾向が認められる。

包含層や攪乱から出土した遺物は、検出されている遺構と同様に、7世紀後半から8世紀代にかけてのものが大半を占めている。そして、二面硯や緑釉陶器の小型瓶などの特殊な遺物も一部認められるものの、基本的な遺物の構成は、一般集落における様相と大差ない状況であるといつてよい。

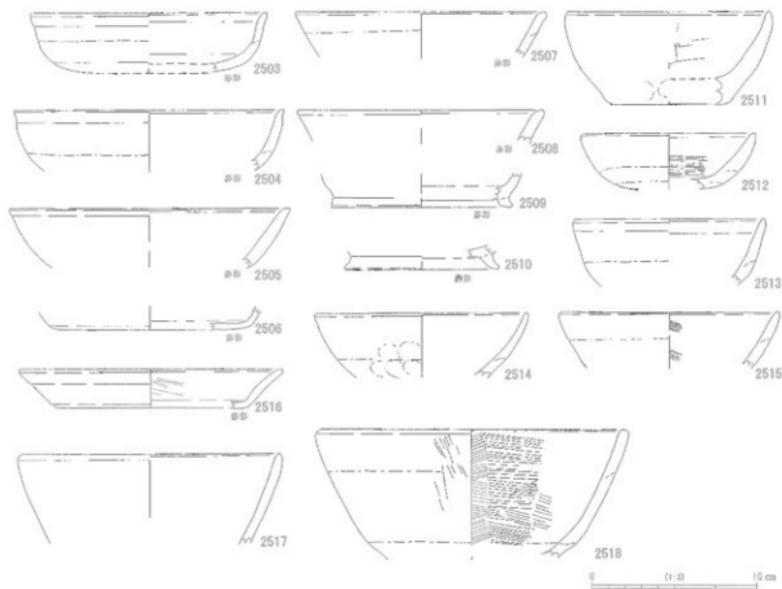


図 357 包含層・攪乱出土遺物 (古代3)

また、古代の遺物としては、点数は少ないものの灰釉陶器も出土している。当該期のものと認識できる明確な遺構は確認されていないが、灰釉陶器は後世の溝などからも出土しており、周辺に平安期の遺跡が展開している可能性も想定できる。ただし、須恵器などに比べて明らかにその出土量は乏しく、集落が著しく衰退していることは間違いないであろう。

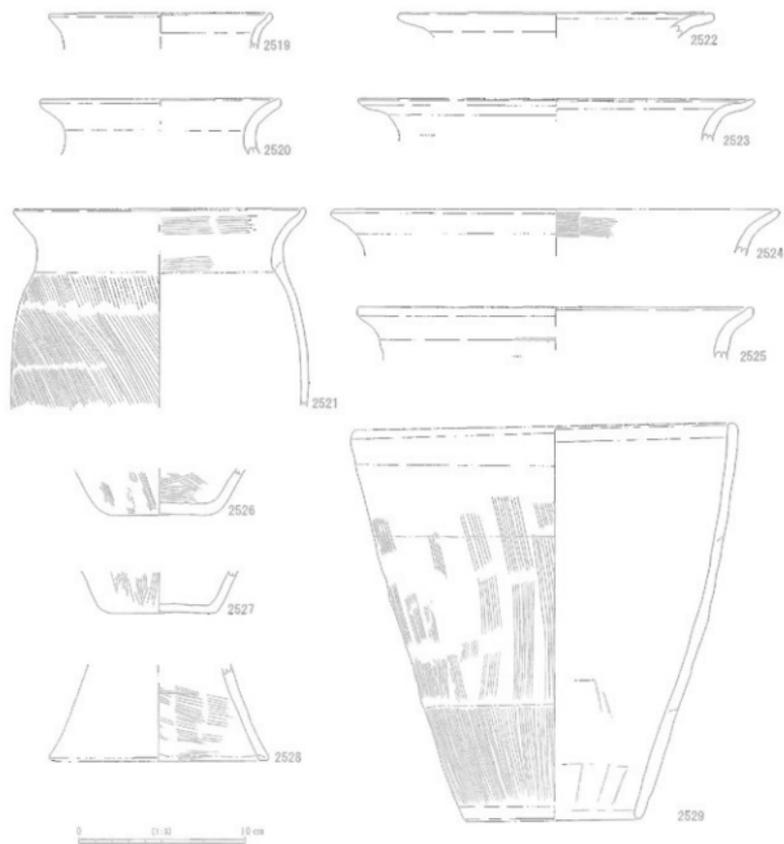


図358 包含層・擾乱出土遺物（古代4）

表 34 包含層・攪乱出土遺物觀察表

No.	遺物名	グリップ	種類	形状	出土層 (m)	縦長 (cm)	直径 (cm)	高さ (cm)	厚さ (cm)	保存率	位置	備考
2454	包金帯	HQ-NW	土師焼埴土	環形	(4.4)		3.4		1/2		にじい層	
2455	瓦片		土師焼埴土	環・破片					絶手		浅黄層	
2456	瓦片		土師焼埴土	環・破片					絶手		浅黄層	
2457	瓦片		土師焼埴土	環					(2.2)	底層~中層 1/4	浅黄層	二次焼成
2458	包金帯	H13-NE	滑石部	環形	(10.6)					中層~中層 1/7	灰白	
2459	包金帯	H11-SE	滑石部	環形	(9.7)					中層 1/7	灰	
2470	瓦片		滑石部	環形	(10.2)	縦長 7.5	2.2			2/3	灰	
2471	瓦片		滑石部	環形	(10.6)					中層 1/10	灰白	
2472	瓦片		滑石部	環形	(11.2)					中層 1/16	灰白	
2473	包金帯	H14-SW	滑石部	環形						中層 1/5	灰白	
2474	瓦片		滑石部	環形	(15.6)					中層 1/11	灰白	
2475	瓦片		滑石部	環形	(16.6)					中層 1/16	灰白	
2476	瓦片		滑石部	環形						2.2cm~中層 1/3	灰白	
2477	瓦片		滑石部	環形	(14.2)					中層 1/4	灰白	
2478	包金帯	G13-SW	滑石部	環形	(12.5)					中層 1/10	灰	
2479	瓦片	土師焼埴土	滑石部	環形	(10.4)	5.0	3.3			中層~底層 1/2	灰	へう記号
2480	瓦片		滑石部	環形	(8.5)					中層 1/8	灰白	
2481	包金帯	G5-SE	滑石部	環形	6.0					中層 1/5	灰白	
2482	包金帯	H11-N-E	滑石部	環形	(10.5)					中層~中層 1/4	灰白	
2483	瓦片		滑石部	環形		5.0				底層 1/5	灰白	
2484	瓦片	土師焼埴土	滑石部	環形		5.6				底層 1/8	灰	
2485	瓦片		滑石部	環形		11.2				底層 1/5	灰白	
2486	瓦片		滑石部	環形		12.9				底層 1/2	灰白	
2487	包金帯	19-NW	滑石部	環形					(9.2)	中層~底層 1/4	灰白	
2488	包金帯	19-NW	滑石部	環形					(9.5)	中層~底層 1/10	にじい黄層	攪乱
2489	包金帯	G17-SW	滑石部	環形					(10.4)	底層 1/4	灰白	へう記号
2490	包金帯	116-SE	滑石部	環形					(10.9)	底層 1/2	灰白	
2491	瓦片		滑石部	環形	(14.9)					中層~中層 1/10	灰白	
2492	瓦片	H3-NE	滑石部	環形					(6.5)	底層 1/3	灰白	攪乱
2493	瓦片		滑石部	環形					(11.3)	底層 1/10	灰白	攪乱
2494	包金帯	H13-SW	滑石部	環形	(14.9)					中層 1/12	灰白	
2495	瓦片		滑石部	環形					(11.6)	底層 1/4	灰白	
2496	包金帯	土師焼埴土	滑石部	環形					(13.3)	底層 1/12	灰白	攪乱し
2497	包金帯	115-NW	滑石部	高脚環	6.0					中層~中層 1/10	灰白	外層・高脚環
2498	包金帯	H10-NE	滑石部	高脚環					(8.9)	底層~中層 1/2	浅黄層	
2499	包金帯	G23-WN	滑石部	高脚環					(7.2)	底層~中層	浅黄層	
2500	包金帯	G23-WN	滑石部	環形	(12.2)	(9.2)	(3.5)			中層~底層 1/2	灰白	攪乱層
2501	包金帯	G17-SW	滑石部	環形					(6.7)	底層	灰白	
2502	包金帯	長脚陶器	陶器	環形					(5.8)	中層~中層 1/4	灰白	
2503	包金帯	G16-NW	土師部	環形	(14.5)				(3.6)	中層~中層 1/5	にじい層	
2504	包金帯	G13-NE	土師部	環形	(11.6)					中層~中層 1/12	にじい黄層	攪乱
2505	瓦片		土師部	環形	(9.4)					中層~中層 1/6	浅黄層	攪乱
2506	瓦片		土師部	環形		(11.0)				底層~底層 1/4	灰白	攪乱
2507	包金帯	G14-SW	土師部	環形	(15.1)					中層 1/12	にじい層	攪乱
2508	包金帯	G14-SW	土師部	環形	(13.9)					中層 1/10	にじい層	攪乱
2509	包金帯	H13-SE	土師部	環形					(10.8)	底層 1/16	浅黄層	攪乱、二次焼成
2510	包金帯	116-SE	土師部	環形					(9.3)	底層 1/16	浅黄層	攪乱
2511	包金帯	15-NW	土師部	環形		(6.8)				底層~中層 1/6	にじい層	
2512	瓦片		土師部	環形	(10.4)					中層~中層 1/4	浅黄層	
2513	包金帯	19-NW	土師部	環形	(11.2)					中層~中層 1/15	にじい黄層	
2514	包金帯	19-N-E	土師部	環形	(12.2)					中層~中層 1/6	にじい黄層	
2515	包金帯	112-NW	土師部	環形	(13.1)					中層~中層 1/6	明黄層	
2516	瓦片	H3-NE	土師部	環形	(15.8)	(11.0)	2.4			1/10	浅黄層	攪乱
2517	包金帯	13-N-E	土師部	環形	(15.6)					中層~中層 1/8	明黄層	
2518	包金帯	19-NW	土師部	環形	(18.4)					中層~中層 1/10	浅黄層	
2519	包金帯	19-N-E	土師部	環形	(14.4)					中層 1/5	浅黄層	
2520	包金帯	F15-SW	土師部	環形	(14.6)					中層 1/5	にじい黄層	
2521	包金帯	H13-SW	土師部	環形	(17.5)					2/3	にじい層	入土付層
2522	包金帯	116-SE	土師部	環形	(18.6)					中層 1/6	にじい黄層	
2523	包金帯	G24-NW	土師部	環形	(22.8)					中層 1/4	浅黄層	
2524	瓦片		土師部	環形	(20.9)					中層 1/6	にじい黄層	
2525	包金帯	F25-SW	土師部	環形	(29.2)					中層 1/10	浅黄層	入土付層
2526	包金帯	19-NW	土師部	環形		(5.8)				底層~中層 1/2	にじい黄層	入土付層
2527	包金帯	19-NW	土師部	環形		(6.5)				底層	浅黄層	
2528	包金帯	19-NW	土師部	高脚環		(12.2)				縦長 1/4	にじい黄層	
2529	包金帯	G9-SW	土師部	環形	22.7	10.3	24.2			2/3	にじい黄層	入土付層

第5章 保存处理

1. 瓜文螺鈿の保存処理

(1) はじめに

日本の風土で木製品が土の中に遺存するためには、二つの条件が重なる必要がある。そのひとつは、遺跡が地下水豊富な低地に位置して常に湿った状態にあること、もうひとつは、粘土質の土壌で真空パックされたような埋没環境が必要である。遺跡が乾燥や湿潤を繰り返すような丘陵地に位置していたり、砂利や礫など通気性のある埋没環境では、酸素が供給されるため木製品は微生物やバクテリアによって土中で腐朽、分解し消滅してしまう。

この節では、なぜ木製品を保存処理しなければならないのか、また、どんな考えに基づいて、どのように保存処理をするのかという基本的な事柄について述べるとともに事前調査として実施したX線透過撮影、漆塗膜の分析など自然科学的調査の内容についても触れることとする。

(2) 遺跡から出土する木製品

木製品は埋没中に木材の主要な成分であるセルロースなどが溶出し、その減少した部分に水が入り込んでいるため、外観上の大きさに変化はみられない。しかし、出土後にそのまま放置して乾燥すると、図361（無処理）のように元の形が分からないほどに収縮・変形する。こうなってしまうは資料としての価値は永久に失われてしまう。この変化は、木材内部の水分の蒸発によって引き起こされるが、毛管作用に伴う水分子の張力による破壊と、細胞壁の収縮による複合的な作用が要因となって引き起こされると考えられている。

このような木製品の乾燥による収縮・変形を防ぐことが保存処理の第一義の目的であり、保存処理することで初めて木製品は学術資料や展示資料として保管・活用できるのである。図360のサンプルは古墳時代の河跡から出土した径8cmの自然木（丸太材）を1cmの厚さで3等分したものである。図361は同サンプルの処理後の状況である。左は無処理で放置して乾燥させたもの、中央はポリエチレングリコール（以下、PEG）含浸法、右は真空凍結乾燥法（フリーズドライ法以下、FD）で保存処理したものである。



図359 木製品の出土状況（藤枝市寺家前遺跡）

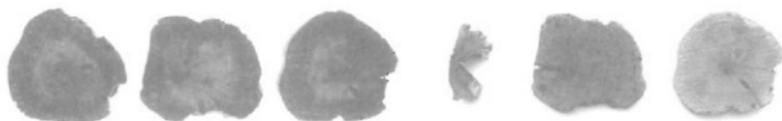


図360 自然木サンプル（アカガシ産属）処理前

図361 同 無処理・PEG処理後・FD処理後

(3) 木製品の保存処理

木製品の保存処理は以下の工程で実施する。ここでは事前調査と形状安定化処理の工程について説明する。

処理前記録→事前調査→処理法の検討→洗浄→形状安定化処理→修復→処理後記録

木製品の保存処理では、後述する形状安定化処理における薬剤の木製品への浸透は、薬剤本来の性質に加え、木製品の樹種や劣化状態、形状、大きさ、構造、木取りなどにより大きな影響を受けるため、事前にそれらの項目について調査することが重要である。

①事前調査

樹種同定 木材には針葉樹材と広葉樹材とがある。両者の大きな相違は道管（水分通導専門の組織）の有無である。針葉樹材には道管がなく、細胞構造は単純で細胞の配列は整然としており、年輪界が明瞭な樹種が多い（図362）。一方、道管のある広葉樹材は、構成細胞の種類が多く、かつ複雑で多様な様相を呈する（図363）。

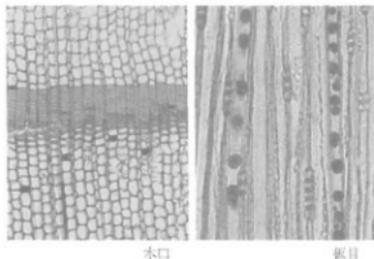


図362 針葉樹材（スギ）顕微鏡写真

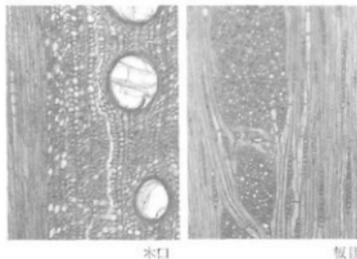


図363 広葉樹材（アカガシヤ属）顕微鏡写真

木製品は用途により樹種が選択されており、鉋や鋸などの農具には広葉樹材のカシ類が用いられ、人形・舟形・馬形などの形代や挽物、曲物などの容器は、針葉樹材のスギやヒノキで造られている。遺跡から出土する場合、広葉樹材は針葉樹材に比較すると劣化が進行しており脆弱な木製品が多い。また、広葉樹材のうちクスノキ、クリ、アカガシなどは薬剤含浸中に変形を生じることがあるが、そのような危険な樹種を事前に把握することで処理中のトラブルを未然に回避することが可能となる。

木材は、樹種によって細胞の種類や配列、微細構造が異なるので、木製品から採取した試料を顕微鏡下で観察し細胞組織の形状を調べることで樹種を同定することができる。下記に、樹種同定に必要な木材切片のプレバート作製工程について概略を述べる。

プレバートの作製工程

- i. 木製品から直接、木材の3断面（木口面、柁目面、板目面）の切片を透過光で観察できる30μmほどの厚さで切り出し（図364）、水を張ったシャーレに切り出した切片を落とし込む。
- ii. シャーレから面相筆で切片をスライドグラスにすくい上げるようにして移し、泡水クロラル、アラビアゴム、グリセリンなどを混合した封入剤を切片の上に滴下し、カバーガラスを傾けながら気泡が入らないようにゆっくりと倒していく（図365）。

- iii. プレパラートを顕微鏡下で観察し、同定に関する書籍、文献、対照用の現生木材および出土木材の組織標本を参照しながら同定する。
- iv. プレパラートには遺跡名、遺物名、標本番号等の情報を記録する。1枚のスライドガラスに1遺物3断面の切片を載せる(図366)。これによってコンタミネーション(複数の試料が混在すること)を防止するとともに、同定作業が効率的になる。封入剤が完全に固化するまで1カ月ほど水平に安置してから、保管箱に収納し永久保管する。樹種同定結果の証拠であるプレパラート標本は、公的機関で保管し報告書等では保管場所を明記する必要がある。



図364 切片の切り出し

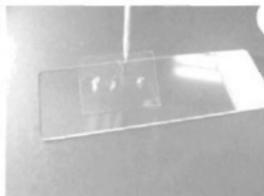


図365 カバーガラスを被せる



図366 プレパラート標本

含水率の測定 木製品の劣化状態は樹種や形状、木取り、埋設環境などによって異なり、一般的には含水率で示される。

含水率とは木材に含まれる水分量を、木材実質の質量に対する百分率で表したもので、劣化の程度を判断する目安となる。現生木では樹種や部位によって異なり40%～150%であるが、出土木材では200%～1500%になることがある。含水率が高いほど劣化していることになる。含水率800%(実質木質重量1kgに対して8kgの水分を含んでいる)の出土木材はスイカのように軟らかく容易に指で押しつぶすことができる。

含水率の測定方法は、破断面などから試料を採取して算出する方法(式1)と木製品本体の空中重量と水中重量から近似値を求める方法(式2)とがある。試料採取の方法は、木製品から直接5mm角程度の大きさの試料を採取し、表面の水気を除去した重量(含水重量)と105℃で加熱乾燥した重量(絶乾重量)とを式1に代入し算出する方法である。しかし、完全な形で遺存するものや木簡、漆製品などの場合は、試料採取によって著しく木製品の資料的価値を損ねてしまう危険があるため、空中重量と水中重量とを式2に代入し非破壊的に近似値を求める。

$$\text{[式1]} \quad \text{含水率(\%)} = \frac{\text{含水重量} - \text{絶乾重量}}{\text{絶乾重量}} \times 100$$

$$\text{[式2]} \quad \text{含水率(\%)} = (0.3187 \times \frac{\text{空中重量}}{\text{水中重量}} - 1) \times 100$$



図367 水中重量の測定作業

形状安定化処理における薬剤含浸工程で、含水率300%以下の広葉樹材は低濃度領域、含水率300%～600%の広葉樹材では高濃度領域での薬剤含浸が困難で処理中に変形を生じる。そのため、木製品の含水率に応じた各濃度領域の含浸期間や速度を設定する必要がある。

②形状安定化処理

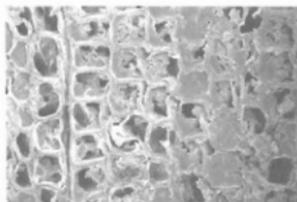
木製品の樹種や含水率、形状、大きさ、構造、木取りなどを総合的に検討し、処理方針および形状安定化処理に用いる薬剤を選定する。

形状安定化処理とは、脆弱化した木製品の強化と寸法の安定化を目的に、収縮・変形を生じさせることなく木製品中の水分を除去する工程である。使用する薬剤には水溶性と水に溶けない非水溶性の薬剤があるが、木材組織を十分に強化して寸法安定性を保持できることおよび可逆性（リバーシビリティー）を持っていることが薬剤の条件となる。木製品の保存処理における可逆性とは、保存処理後に元の水漬け状態に木製品を戻すことが可能であることを意味する。

形状安定化処理の基本原理は二つある。そのひとつは、木製品中に含まれている過飽和な水分をほかの安定した物質に置き換えて木材の形状を強化し、固化するというもので、使用する薬剤によって充填法、支持法、樹脂強化法に分けることができる。もう一つは、木材組織内部の不安定な水分を蒸発時の表面張力による細胞壁破壊を生じさせることなく強制的に除去する真空凍結乾燥法である。

処理法と薬剤 木製品への薬剤の拡散速度や含浸状況は、分子量によって異なる。分子量の違いは薬剤の木製品への拡散速度に影響する。分子量が大きい薬剤ほど木製品への拡散速度は遅くなる。

平均分子量 3000～3700 の高分子の PEG4000 では木製品中への拡散量以上に、木製品に含まれていた水が溶液中へ流出する脱水が生じることがある。この脱水によって木製品は収縮・変形するが、十分な含浸期間を設定することで脱水現象を回避することができる。図 368 は、木材組織に充填された PEG4000 の状況であるが、細胞壁および細胞内腔全体に PEG が分布している様子がよく分かる。



(スギ木口・電子顕微鏡写真)

図 368 PEG の含浸状況

糖アルコールのラクチトールの分子量は PEG4000 の 1/10 程度であり、拡散速度は速く含浸期間の短縮を図ることができる。しかし、融点が高く 70℃（実際の処理での含浸温度）での溶解度は 85% であり、木製品中の空隙を完全に充填することはできない。15% は空隙として存在するため、高含水率の脆弱化した木製品では収縮・変形することがある。

常温では固形を呈する高級アルコールのセチルアルコールは、ラクチトールと同様に分子量は小さく浸透性に優れるが、水には溶けない。そのため、木製品中の水分を水溶性のエチルアルコールまたはメチルアルコールに置き換える工程が必要となる。含有水分を水溶性のアルコールに完全に置き換えたのち、同溶液にセチルアルコールを投入して加減しながら濃度 100% まで上昇させる。

PEG、高級アルコール、糖アルコールそれぞれの薬剤には一長一短がある。PEG の短所は、含浸期間が長期にわたること、処理後の色調が処理前よりも暗色化すること、PEG には吸湿性があるため処理後の保管には湿度管理が必要となることなどである。高級アルコールの短所は、水溶性のアルコールに置換する段階で液製品などに含まれる可溶性の物質が流出すること、引火性の有機溶剤を使用するた

表 35 含浸薬剤

薬剤名	化学式	分子量	融点℃	比重	水溶性
PEG4000	$\text{HO}-(\text{CH}_2-\text{CH}_2-\text{O})-\text{H}$	3000～3700	53～55	1.2	可溶
7747α-β (高級77α-β)	$\text{CH}_2(\text{CH}_2)_n\text{CH}_2\text{OH}$	242.5	42.9	0.815	不溶
7747α-β (糖77α-β)	$\text{C}_{12}\text{H}_{24}\text{O}_{11} \cdot \text{H}_2\text{O}$	386.3	96～99		可溶

め安全性に問題があることなどである。糖アルコールの処所は、高含水率の脆弱な木製品では十分な形状安定化が得られないこと、含浸後の乾燥工程で三水和物が生成され結晶化が促進されないことなどである。

形状安定化処理に用いる薬剤の特徴を理解したうえで、木製品の樹種、含水率などの事前調査結果を総合的に判断し、個々の木製品に最適な薬剤を選択することが重要である。

また、いずれの薬剤も高濃度溶液にするためには24時間加熱できる処理槽が必要となる。

真空凍結乾燥法 木製品の収縮・変形は、木材内部の水分蒸発によって引き起こされる。その要因は液体の水分子の移動に伴う張力によって、細胞組織を破壊するからであることはすでに述べた。真空凍結乾燥とは、水分子の移動なく水分を除去する方法である。そのため、細胞組織を破壊することなく乾燥することができ、木製品の収縮・変形を防ぐことができる。しかし、脆弱な木製品では乾燥後の強度が不足したり、表面に細かなクラックが生じることがあるため、真空凍結乾燥処理前にPEGや高級アルコールを40%程度木製品に含浸する。

処理の工程であるが、薬剤が含浸された木製品を真空凍結乾燥庫に入れ、 -40°C で凍結させたのち真空状態を維持しながら木製品内部の水を昇華させる。装置は高価であるが、木筒などの墨書のあるもの、漆製品などの処理には最適な方法である。

(4) 瓜文翠細鞍の事前調査

①事前調査

適切な保存処理法を選択するため鞍の材質や劣化状態、構造などの自然科学的調査を実施した。樹種同定については別項があるためここでは割愛する。事前調査の基本は肉眼観察である。肉眼観察とは可視光領域で等倍の表面情報を肉眼で取得することであるが、内部の構造や極微細な状況を観察することはできない。そのため、光学レンズや赤外線、紫外線、X線などの可視光領域外の電磁波を利用することで不可視領域の情報を取得することが必要となる。

②木取りと含水率

丸太材から板材や角材などの木材を切り出す場合、どの位置からどのような部材を切り出すかを定めることを木取りと呼んでいる。各部材の破損部断面に現れた木口面の年輪界の状況から前輪、後輪の木取りは両輪ともに木の叉部を使用しており、居木は木表が上面となる板目材であることが確認できた。

鞍の含水率は、極小破片の含水重量と絶乾重量を測定した結果、前輪が811.8%、居木(右)は769.6%であった。居木は数値以上に脆弱で軸方向に平行する亀裂、接線方向の収縮から生じる割れが多数生じていた。

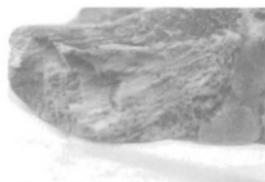


図 369 前輪の木口断面

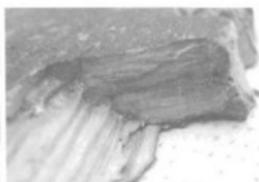


図 370 後輪の木口断面



図 371 居木の木口断面

③内部構造

X線透過撮影により右側の居木先に金属製の補修用釘および後輪の山形縁辺部に覆輪を固定したと思われるピンホールのような金属痕を確認することができた(図版84)。

④塗塗膜の断面構造

鞍の表面は、前輪、後輪、居木の下面および組立て時に結合する部分以外は黒漆でほぼ全面が塗装されている。接合不可能な小破片と剥落した塗膜片を試料とする塗塗膜断面プレパラート標本作製し、検鏡することで塗膜の構造を調査した。

プレパラート標本の作製は研磨法で行った。研磨法とは、試料小片を透明なエポキシ樹脂に埋め込んだ後、透過光で検鏡できる厚さまでサンドペーパーやアルミパウダーを使って研磨する方法である(図373～375)。なお、作製した標本は当研究所清水整理事務所保存処理室で保管している。



図372 居木先の布養生部分



図373 樹脂で包埋した試料



図374 研磨中の試料



図375 完成したプレパラート

前輪(図376) 試料は塗膜片、下地となる木炭粉と思われる黒色の物質が塗膜下面にわずかに遺存する(A層)。部分的に塗塗膜の直下に木地が確認できる部分があるため、この木炭粉下地は極めて薄く塗られていたと推定できる。塗塗膜は2～3層に分離することができるが、ここでは2層として記述する。下地直上のB層は黄褐色で、黒色の微粒子をわずかに含む透明に近い漆層。層厚は均一で70～110 μ m、上面は平滑。C層は茶褐色の透明漆層で層厚は均一で30～50 μ m、上面は平滑で研ぎ出しによるとと思われる。表面から層向と垂直方向に多数の亀裂が入っている。

後輪(図377) 試料は木質部がわずかに残存する塗膜片、木質部上面に木炭粉と思われる黒色の物質が極めてわずかに遺存する(A層)。塗塗膜は茶褐色の透明漆1層(B層)で、層厚は均一で30～50 μ m、上面は平滑で研ぎ出しによるとと思われる。表面から層向と垂直方向に多数の亀裂が入っている。

居木: 左(図378) 試料は木質部が残存する接合不可能な小破片、下地は麻の繊維や木粉を混和した刮字とよばれる漆下地層(A層)で、層厚は約1.5mmで上面は起伏している。下地直上のB層は茶褐色で、黒色の微粒子を含む漆層。層厚は30～150 μ mで部分的に1～3層に分離することができる。上面は研ぎ出しにより平滑。C層は暗褐色で、黒色の微粒子を密に含む漆層。層厚は均一で30～50 μ m、上面は平滑で研ぎ出しによるとと思われる。表面から層向と垂直方向に多数の亀裂が入っている。

居木：右（図379） 試料は木質部が残存する接合不可能な布着せ部分の小破片、下地は麻の繊維や木粉を混和した刻字と麻と思われる布から構成される下地層（A層）で、層厚は950～1150 μm で上面は起伏している。布は1cm当たり10～10数本の糸数を有するやや目の粗い布、糸断面径は200～500 μm 、糸を構成する繊維断面径は20 μm ほどである。下地直上のB層は茶褐色で、黒色の微粒子を含む漆層。層厚は50～120 μm で部分的に1～2層に分離することができる。上面は研ぎ出しにより平滑。C層は暗褐色で、黒色の微粒子を密に含む漆層。層厚は均一で40～60 μm 、上面は平滑で研ぎ出しによると思われる。表面から層向と垂直方向に多数の亀裂が入っている。

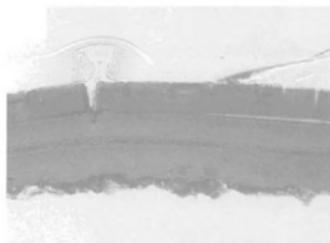


図376 前輪の漆塗膜断面 $\times 150$



図377 後輪の漆塗膜断面 $\times 150$

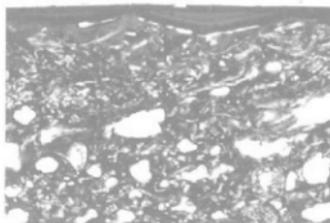


図378 居木（左）の漆塗膜断面 $\times 30$

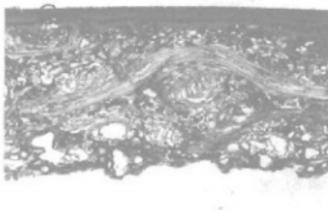


図379 居木（右）の漆塗膜断面 $\times 30$

（5）瓜文螺細紋の保存処理

事前調査の結果を総合的に検討することで処理法を決定する。以下に、鞍の材質や遺存状態についてまとめておく。また、その結果によりどのようなリスクが想定されるかを示す。

- i. 前輪、後輪の木取りは木の叉部を利用していることから、爪先は芯を外してはいるが丸太材の加工品である。→ 丸太材は放射方向の割れを生じる危険性がきわめて高いため、鞍の場合、山形から爪先にかけて、放射方向の割れまたはねじれや反りなどの変形を生じる危険性が高い。
- ii. 含水率は800%前後で劣化が進行しておりきわめて脆弱である。居木には軸方向と平行する亀裂や割れが多数生じている。→ 強度不足による変形や割れを生じる危険性が高い。
- iii. 樹種については、安定化処理における変形や収縮の危険性が高いクスノキ、クリ、アカガシではなく広葉樹材のクマシデ節、キハダである。→ 樹種については特に問題はない。

- iv. 金属製の釘をとまなう木質、漆との複合遺物である。→ 金属部分について錆が進行する危険性がある。
- v. 漆塗膜は部分的に亀裂、剥離、収縮、膨潤などが認められ、かなり劣化した状態である。触れるだけで漆塗膜が剥落する部分がある。→ 漆塗膜は亀裂、剥離、収縮、膨潤などの劣化が進行する危険性がある。

靴の考古資料としての価値は極めて高い。また、ほぼ完全な形を呈しており、その形状は美しく秀麗で美術工芸資料としての価値も同様に高い。木製品の保存処理において致命的な損傷は収縮やねじれによる形状の変化である。この靴の保存処理において最も重要な点はこの変形のリスクを回避することである。そのため、すべての部材についてポリエステル樹脂とアクリル繊維製不織布とで型枠を作製した。形状安定化処理の方法は漆製品の処理で実績のあるFD法を採用した。FD処理前の薬剤浸漬は、水溶性であるPEGを用いた。また、高含水率であるためPEGの最終濃度を通常より20%高い60%に設定した。初期濃度は、20%で徐々に濃度を上げ40%までは液温を常温(20℃前後)に保ち、約8ヶ月間浸漬する。40%～60%の期間は液温を50℃前後に保ち、約4ヶ月間浸漬する。FD処理では-40℃で予備凍結した後、凍結乾燥庫に入れ真空状態で徐々に温度を上昇させ約1ヶ月間をかけ乾燥させた。乾燥庫内から取り出した遺物の表面は粉末化したPEGが全面を覆っているため、温風を当てながら除去する。

修復は、破片をエポキシ樹脂(商品名:セメダインハイスーパー5)で接合し、欠損部、亀裂部にフェノールマイクロバルーンを適量混和したエポキシ樹脂(同上)で補填し、精密加工機で整形した後、アクリル絵の具で彩色した。また、漆塗膜の剥落を防止するためアクリル樹脂(商品名:パラロイドB72,3～5%キシレン溶剤)を数回程度表面に塗布する。

部材の組立では、前輪、後輪と居木との接合部の摩耗や損傷を防ぐため、居木先に付加型のシリコーン樹脂(商品名:東芝シリコーンTSE3453)で着脱可能な緩衝材を作製し取り付ける。

保存処理後の状況であるが、形状や寸法については収縮や変形はなく良好な状態である。遺物としての物理的強度は展示や研究には十分な強度を回復している。漆塗膜については、薬剤浸漬中の加温が原因と思われる波状の膨潤が部分的に生じているが概ね良好な結果である。

表36 保存処理作業工程

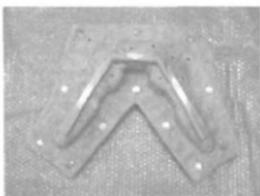
作業工程	内容	
①事前準備	遺物表面の保護 型枠の作製	レーヨン紙とキムタオルで表面全体を保護する。 ポリエステル樹脂にアクリル繊維製不織布を積層させ、アルミアングルで補強する。薬剤含浸用の穴を開け、型の接合はステンレス製のボルトを使用。
②形状安定化処理	PEG含浸処理 予備凍結 FD処理	PEG20%→40%(20℃前後,8ヶ月間)、PEG40%→60%(50℃前後,4ヶ月間) 凍結温度は-40℃ 乾燥庫内の温度を徐々に上昇させながら約1ヶ月間で乾燥させる。
③修復	表面調整 補填 整形 彩色 組立	FD処理後の表面に付着するPEGを温風で除去する。 フェノールマイクロバルーンを混和したエポキシ樹脂で補填する。 精密加工機で整形する。 アクリル絵の具で補填部を彩色する。 部材の接合箇所をシリコーン樹脂で保護し、革紐で組み立てる。



1 遺物表面の保護



2 型枠の作製



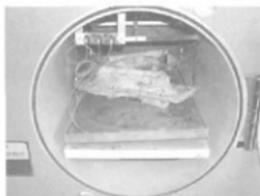
3 完成した型枠



4 PEG 溶液処理



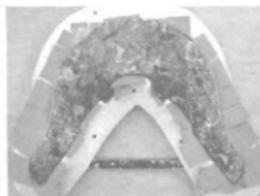
5 予備凍結



6 FD 処理



7 表面調整



8 表面調整前の状況



9 表面調整後の状況



10 補填後の状況



11 補填部の整形



12 補填部の彩色



13 緩衝材の作製



14 完成した緩衝材



15 組立作業

図380 作業工程

(6) 小結

木製品保存処理と金属製品保存処理との大きな外観上の相違点は、処理前と後との形状変化であろう。金属製品の処理前の形状は原形が解らないほどに全面が塵い土砂と錆に覆われていることが一般的で、処理後は土砂や錆が除去された本来の形状が回復されている場合が多い。なかには、金剛の輝きがよみがえることもある。また、そのような処理を求められもするが、木製品の場合は正反対である。

考古学研究を進める上で求められる木製品保存処理の条件は、出土直後の形状と寸法、表面の微細な加工痕、色調、装飾などを厳密に維持することである。処理前と後との変化は許されないのである。また、脆弱化した物理的強度を博物館展示や研究資料として活用するための強度を回復させることも必要となるとともに環境変化に対する適応性も求められる。しかし、それらの条件をクリアすることがいかに困難であるかを保存処理後の木製品は語ろうとしない。

埋蔵文化財としての遺物は人と同じように唯一無二である。また、長い間、土に埋もれていた遺物は人と同じように病氣やけがをしていることがある。遺跡からは様々な素材の遺物が出土する。土器、石器は文字通り土と石で造られているためほぼ健康状態で出土するが、金属製品や木製品は必ず病んでいる。病氣を治療するためには正確な見立てが重要である。保存処理においても同様である。遺物の症状を的確に診断することから治療方針が決定される。

なぜ木製品の保存処理が必要なのか、また、どんな考えに基づいて、どのように保存処理をしているのかという疑問への回答が本論で少しでも伝われば幸いである。



図 381 保存処理後の靴

参考文献

- 岡田文男 1995 『古代出土漆器の研究－顕微鏡で探る材質と技法－』 京都書院
 小松大秀 1992 『日本馬具大鑑 3 中世』 吉川弘文館
 沢田 正昭 1997 『文化財保存科学ノート』 近未来社
 島地 謙、伊東隆夫 1982 『図説木材組織』 地味社
 鈴木三男 2002 『日本人と木の文化』 八坂書房
 室瀬和美 2002 『漆の文化－受け継がれる日本の美』 角川学芸出版

2. 金属製遺物の保存処理

中屋遺跡からは釘、火打ち金、鎌などの鉄製品、銅銭、キセルなどの銅製品が出土しており、保存処理室ではそれら金属製遺物に対する保存処理を実施した。ここではその過程を報告する。

(1) 金属製遺物の保存処理工程

金属製遺物の保存処理工程は以下のとおりである。

- ①処理前記録の作成：遺物法量、観察所見などをカードに記載。処理前写真、X線写真を撮影し、遺物法量、観察所見を記録カードに記載した。
- ②クリーニング：処理前の遺物状態は全面がサビと土砂で覆われ、元来の形状がほとんど分からない状態の物が多かった。そのため、X線写真を参考にしてメス、ニッパ、精密加工具（リユーター）、エアブレイシブ（高压エアに微粒アルミナを混入して吹き付ける装置）を使用してサビ・土砂の除去を行った。
- ③安定化処理：
 - 鉄製品 防錆剤3%ダイカン（ジシクロヘキシルアミン亜硝酸塩）エタノール溶液の減圧含浸および2%チタネートカップリング剤（T.T.S）キシレン溶液の減圧含浸を行った。
 - 銅製品 2%ベンゾトリアゾール（BTA）エタノール溶液の減圧含浸を行った。
- ④強化処理：強化処理は鉄製品・銅製品ともに、10%パラロイドB-72キシレン溶液を減圧含浸した。
- ⑤修復：折損部はシアノアクリレート樹脂（商品名アロンアルファ）で接合し、欠損部はエポキシ樹脂（商品名セメダインハイスーパー）とフェノール樹脂製マイクロバルーンの混合ペーストで補填した。補填部は、乾燥後に精密加工具（リユーター）で整形し、アクリル絵の具で補彩を行った。
- ⑥処理後記録：処理後写真を撮影し、処理の経過を記録カードに記載した。

(2) 保存処理後の状況

中屋遺跡の金属製遺物は小物が大半であったが、遺存状態は比較的良好であり、原形復元できた個体が多くあった。銅銭は重なった状態で錆着していたものが多かったが、すべての銅銭を損壊することなく分離することができた。銅銭を括っていたとみられる繊維直は可能な限り残してある。内限観察では比較的粗い繊維であることがみとめられ、麻系の繊維のように思われる。



図382 出土銅銭 処理前

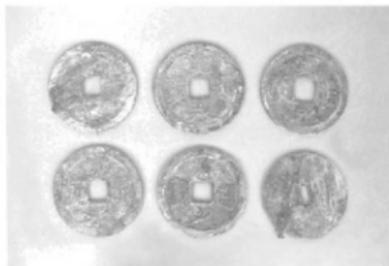


図383 出土銅銭 処理後

第6章 理化学的分析

1. 出土木材の樹種

中屋遺跡で検出された河川跡(SR8001)からは、護岸施設の芯材として打ち込まれた多数の杭、埋納された箆や尻符木筒など多くの木製品が出土している。この河川跡や遺跡内から出土した木製品や木材389点について樹種の同定を行った結果、49の分類群を識別できることが出来た。ここではこれら同定された樹種について識別の根拠となった木材構造について略記し、同定された材の代表的なサンプルについて各樹種毎に顕微鏡写真を掲載した。なお、作成された木材組織プレパラートは静岡県埋蔵文化財調査研究所に保管されている。

(1) 同定された樹種

1. モミ属 *Abies* マツ科 (図384-1: 試料番号11559)

垂直・水平両樹脂道を持たず、年輪が明瞭な針葉樹材で、仮道管は整然と並び、早材から晩材への移行は緩やかである。晩材部は一般に幅が広くはない。放射組織は、単列で放射柔細胞のみからなる。放射柔細胞の水平壁及び垂直壁は厚く多くの単穿孔があるモミ型壁孔である。分野壁孔は小型のスキ型で、1分野に2から4個ある。以上の形質から、マツ科のモミ属の材と同定した。

モミ属には亜高山帯に分布するトドマツ、アオモリトドマツ、シラビソ、冷温帯に分布するウラジロモミ、暖温帯に分布するモミがあるが、いずれも材構造は近似しており個々の種の識別は難しいが、本州、四国、九州の暖温帯に広く分布するモミがもっとも普通なものである。モミ材は大材が得易く、加工も容易でスギやヒノキと同じ用途の代用品に用いられることが多いので、当遺跡出土材は杭が9点、板材が1点である。

2. アカマツ *Pinus densiflora* Siebold et Zucc. マツ科 (図384-2: 試料番号11698)

年輪が幅広く、幅広い晩材部を持ち年輪界が明瞭な針葉樹材で、水平・垂直の両樹脂道を持つ。樹脂道の周囲は壁の薄いエビセリウム細胞からなり、これが出土材ではほとんど壊れているので不定形の穴に見える。早材から晩材への移行は緩やかで、樹脂道は多くは晩材部にある。放射組織は単列と中央に水平樹脂道を持つ紡錘形の2種類があり、その上下には1~数細胞層の放射仮道管があり、その水平壁の内面は、柾目面で見ると鋭角な歯状に肥厚している。放射柔組織の水平壁は平滑で、分野壁孔は大型の窓状で1分野の一つある。以上の形質より、マツ属のアカマツの材と同定した。五葉松類(単位管東亜属)とは放射仮道管の内壁が厚く肥厚することで、同じ二葉松類(複維管束亜属)のクロマツとはその内壁の肥厚が鋭く鋸歯状になることで区別される。

アカマツは北海道南部から九州にかけての冷温帯から暖温帯に普通に生える針葉樹で、特に二次林に多い。材は重硬で樹脂が多く加工性は悪いが保存性はよく、建築材、特に水湿に強いことから土木用材によく用いられる。本遺跡出土材は杭88点と判物と板材各1点、合計100点である。

3. クロマツ *Pinus thunbergii* Parl. マツ科 (図384-3: 試料番号11632)

アカマツに良く似た材だが、放射仮道管の内壁の肥厚がやや未発達で、柾目面で見ると先端が丸くなり、鋭くならないことで区別される。

クロマツはアカマツ同様本州、四国、九州に広く分布するが、アカマツが高標高地を除いたほぼ全域に分布するのに対し、クロマツは海岸部に限定される。材質、用途はアカマツ同様である。当遺跡出土材でクロマツであると断定できたのは杭材1本である。

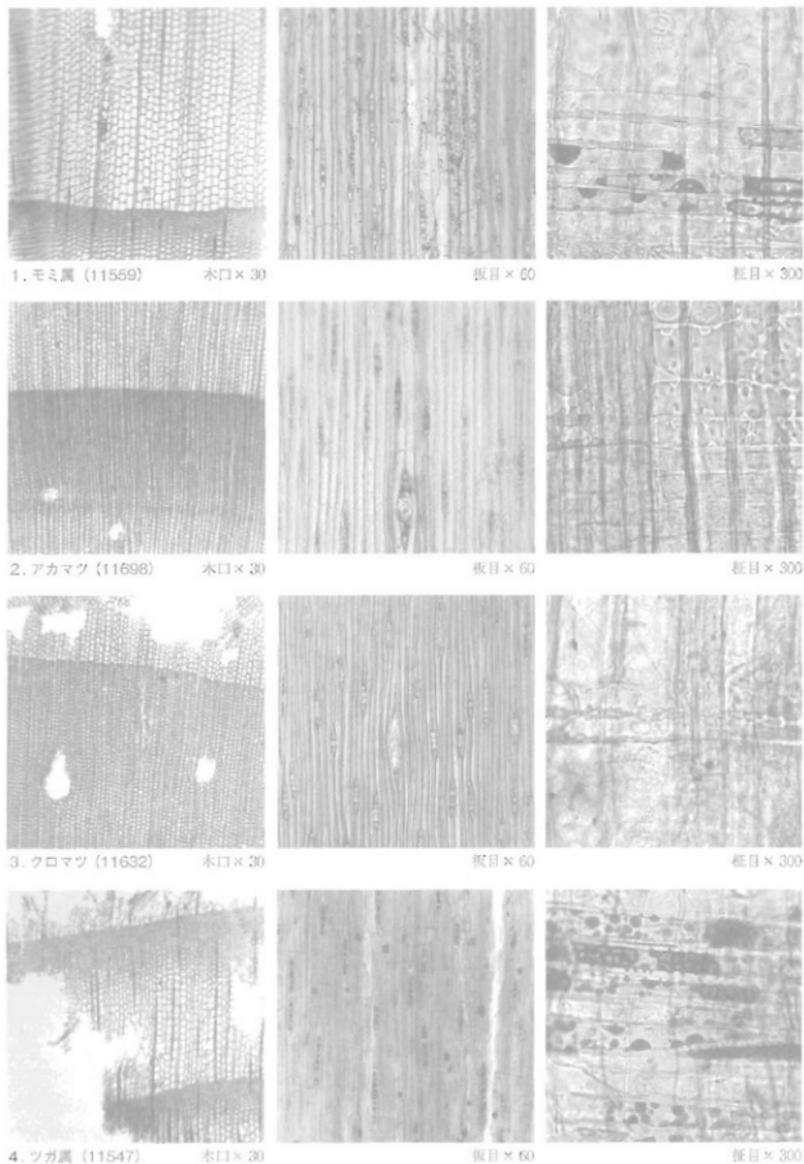


図384 顕微鏡写真(×)

3'. マツ属二葉松類 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科

上述のごとく、アカマツとクロマツは放射仮道管の内壁の歯状肥厚の顕著さ、特に先端の鋭さで区別されるが、材の保存が悪く、そのいずれとも判定できなかったものを「二葉松類」とした。五葉松類からは放射仮道管の内壁の肥厚が顕著であること（五葉松類ではやや肥厚するものの歯状になることはない）で区別される。

二葉松類とした当遺跡出土材は杭が7点、曲物側板が1点で、アカマツ100点に対しクロマツと同定できたものは1点しかないので、大部分はアカマツであると推定できる。

3''. マツ属 *Pinus* マツ科

基本構造はアカマツに一致するが、細胞壁が劣化しているため放射仮道管の内壁の肥厚状況が観察できないため、クロマツ、五葉松類との判別ができないのでマツ属の同定レベルに留めた。保存の良い材でのクロマツは1点に限られ、また五葉松類の出土はないので、「マツ属」としたものは大部分がアカマツの細胞壁が劣化したものである可能性が高い。同定されたものはアカマツ同様の用途で杭が9点ある。以後はクロマツ、二葉松類、マツ属としたものはアカマツと合わせて「アカマツ・マツ属」として扱う。

4. ツガ属 *Tsuga* マツ科 (図384-4: 試料番号11547)

年輪の明瞭な針葉樹材で、早材から晩材への移行は急である。垂直、水平の樹脂道は欠き、放射組織は放射仮道管と柔細胞からなる。柔細胞の垂直、水平壁はモミ同様、厚く肥厚し、多数の単壁孔があるモミ型壁孔である。これらの形質からツガ属の材と同定した。

ツガ属には関東以西の本州、四国、九州の暖温帯上部から冷温帯下部にかけて広く分布するツガと、本州中部の亜高山帯に分布するコマツガがあるが、互いに似ていて材構造での区別は困難であるが、分布の違いから見て当遺跡出土材はツガである可能性が高いと考えられる。

ツガは幹径80cm、樹高30mくらいになる高木で、材は木理通直で、重硬で、保存性は中位である。建築材、箱ものなどの各種器具材等に用いる。当遺跡出土材は時期不明の柱根2点である。

5. コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Siebold et Zucc. スギ科 (図385-5: 試料番号11481)

保存性のたいへん良い針葉樹材で、年輪は明瞭、晩材部は幅狭く、早材から晩材への移行は急である。仮道管と放射組織のみからなり、放射組織は柔細胞からなる。分野壁孔が特徴的で、大型で菱形を丸く膨らました窓状で1分野あたり通常1個、時に2個ある。これらの形質からコウヤマキの材と同定した。

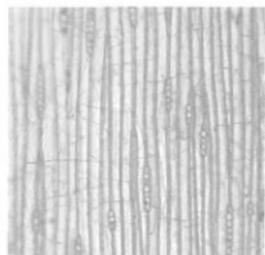
コウヤマキは福島県と本州中部以西、紀伊半島、中国、四国、九州の冷温帯下部に生える針葉樹で、幹径1m、樹高30mの大高木となる。材は比較的軽いが堅く強靱で、木理通直で、均質であり、加工性よく、仕上がりが美しい、そしてなにより耐朽性、特に耐湿性に優れ、建築材を始めありとあらゆる用途に用いることが出来るが、資源量が少ないため、特にコウヤマキを必要とする種類に用いられる。当遺跡出土材は板材2点と、笹塔婆各1点である。

6. スギ *Cryptomeria japonica* (Linn.f.) D. Don スギ科 (図385-6: 試料番号11460)

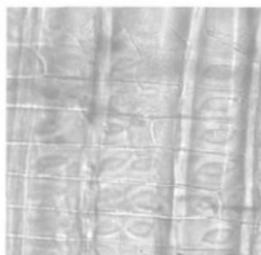
年輪が極めて明瞭な針葉樹材で、年輪幅は広いものから狭いものまで変異があり、広い年輪では早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部も幅広いのに対し、狭い年輪ではかなり急で、晩材部も狭くヒノキ科の材に似てくる。樹脂細胞は晩材部に多く、黒褐色の物質が充填して目立ち、横断面での形状は接線方向に扁平で、やや接線方向に連なって散在する。樹脂細胞の水平壁は平滑で薄いが、時にやや厚く、多数珠状に肥厚する。放射組織は単列で柔細胞のみからなり、垂直、水平壁は平滑、分野壁孔は大型



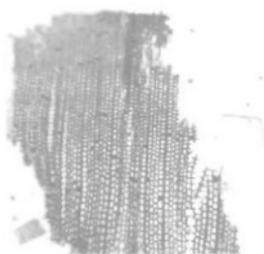
5. コウヤマキ (11481) 木口×30



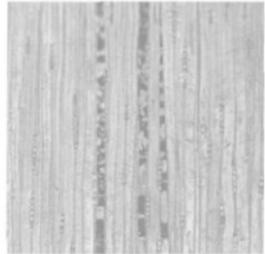
板目×60



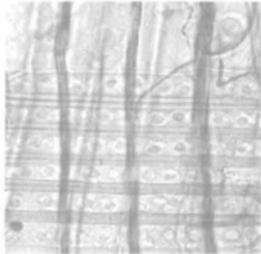
板目×300



6. スギ (11460) 木口×30



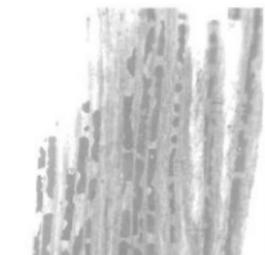
板目×60



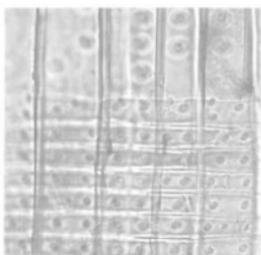
板目×300



7. ヒノキ (11639) 木口×30



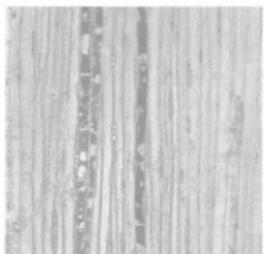
板目×60



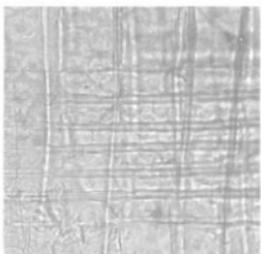
板目×300



8. サワラ (11637) 木口×30



板目×60



板目×300

図385 顕微鏡写真(2)

の楕円形で開孔部は厚いレンズ状となり長軸がほぼ水平方向で、スギ型、1分野に1～2個ある。以上の形質からスギの材と同定した。

スギは青森県の津軽地方南部から九州屋久島までの冷温帯から暖温帯に広く分布する針葉樹で、日本海側と関東南部以南の太平洋側に特に多い。幹径2m、樹高35mを超える大高木となり、材は木理通直で割裂性がよく、軽軟で強靱、加工性がよく仕上げは中位であるが、大材が得られるので、大型建築物から個人住宅までのさまざまな建築物のあらゆる部位、土木用材、さまざまな器具、細工物、指物など、国産材ではもっとも広い用途がある。当遺跡出土材は桶側板、箸、曲物底板など10点である。

7. ヒノキ *Chamaecyparis obtuse* (Sieb. et Zucc.) Siebold et Zucc. ヒノキ科 (図385-7: 試料番号11639)

水平・垂直の両樹脂道を持たない針葉樹材で、早材から晩材への移行は急で年輪界は明瞭だが、晩材部が幅狭いので肉眼で見たときの色彩は大きく違わない。樹脂細胞が早材部の最外部から晩材部にかけて散在し、その水平壁は数珠状に肥厚する。放射組織は単列で、放射柔組織のみからなり、分野壁孔は中型のヒノキ〜トウヒ型で、開孔部の軸は斜上し、通常1分野に2個存在する。これらの形質から、ヒノキ科のヒノキの材と同定した。

ヒノキは関東地方北部から九州屋久島までの温帯に分布し、特に中部地方の山地帯に多い。材はやや軽軟で、木理通直、肌目細かく、芳香があり、切削加工容易で、光沢があり、わが国の針葉樹類中でもっとも材質が優れたもので、古代の畿内地方を中心に大型の建築物の建築材や各種器具材、細工物、木簡や形代、蒔串、曲物など、広く用いられている。当遺跡出土材は曲物、呪符木簡、笹塔婆、箸、杭、矢板など48点である。

8. サワラ *Chamaecyparis pisifera* Siebold et Zucc. ヒノキ科 (図385-8: 試料番号11637)

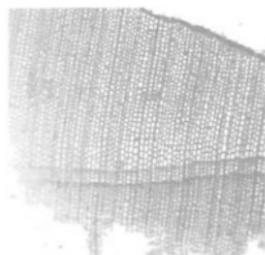
ヒノキ同様、水平・垂直樹脂道を欠き、仮道管、放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材で、早材から晩材への移行はやや急で、晩材部は幅狭い。樹脂細胞は晩材部付近に散在し、水平壁は数珠状を呈する。分野壁孔はスギよりも小さく、アスナロなどよりも大きい、中型のヒノキ型〜スギ型で、ヒノキよりもやや孔口が大きく、開口部は水平に近く開く。1分野当たり普通2個存在する。以上の形質からサワラの材と同定した。

サワラの材は木理通直、肌目は緻密であるがヒノキより軽軟で、芳香・光沢はなく、また保存性にやや劣る。スギ、ヒノキ同様に建築材、建具、家具、各種器具に用いられるが特に風呂桶などに重用される。本遺跡出土材は曲物、下駄、板材、角杭など11点でヒノキの用途に重なる。

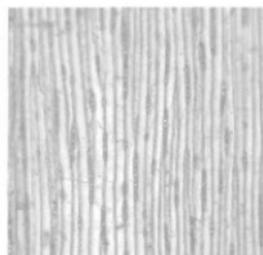
9. イヌマキ属 *Podocarpus* マキ科 (図386-9: 試料番号11532)

年輪界が全く目立たない針葉樹材で、晩材部はとて狭く、早材から晩材への移行は緩やかである。樹脂細胞は横断面では仮道管より放射径が小さく扁平な長方形をしており、接線方向にややまとまる傾向を見せながら年輪内に均一に分布している。仮道管内壁にはらせん肥厚を持たない。樹脂細胞の水平壁はしばしば斜目に位置して大変薄く平滑である。分野壁孔は広いスギ〜ヒノキ型であること、などによりイヌマキ属の材と同定した。

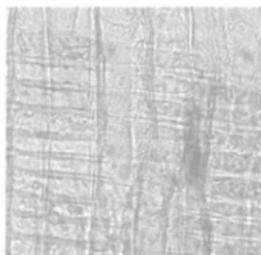
イヌマキ属には房総半島南部以南西の暖地に生えるイヌマキとさらに南方の紀伊半島以南に生えるナギがあるが、材構造での両者の区別は難しい。しかしナギは現在では静岡県内でもしばしば植栽されるものの、その天然分布がはるか南方に限られることから当遺跡出土材はイヌマキであると考えられる。静岡県の弥生時代〜古代の遺跡からはイヌマキ属の材がしばしば出土し、多くは丸木弓や棒、柄物などに利用されている。本遺跡出土材は杭が3点と板材が1点である。



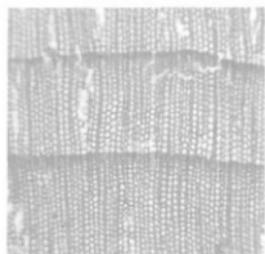
9. イヌマキ属 (11532) 木口×30



板目×60



板目×300



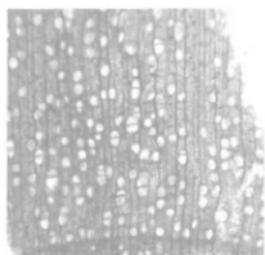
10. カヤ (11490) 木口×30



板目×60



板目×300



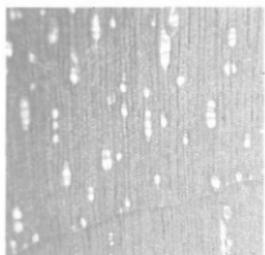
11. ハンノキ属 (11492) 木口×30



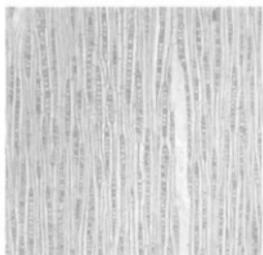
板目×60



板目×300



12. クマシデ属 (8582) 木口×30



板目×60



板目×300

図 386 顕微鏡写真 (3)

10. カヤ *Torreya nucifera* (L.) Siebold et Zucc. イチイ科 (図 386 - 10: 試料番号 11490)

大変保存性の良い針葉樹材で、年輪界は明瞭、晩材は量少なく、早材から晩材への移行は緩やかである。早材、晩材とも仮道管は整然と並び、樹脂細胞はない。仮道管の内壁には顕著な2~3本ずつまとまったせん肥厚がある。放射組織は単列で分野壁孔は小さなヒノキ型ないしトウヒ型で、1分野あたり2~4個ある。以上の形質からイチイ科のカヤの材と同定した。イヌマキ、イヌガヤ、イチイに似るが、前二者は年輪が不明瞭であるのと樹脂細胞を持つことで、イチイは仮道管内壁のらせん肥厚が2~3本ずつまとまることはなく、常に単独であること、等により区別される。

カヤは岩手県南部以南の本州から九州屋久島までの暖温帯に広く分布する針葉樹で、材はやや重硬で粘りがあり、木理通直、肌目は精、切削加工容易で磨くと光沢がある。材質が特に優れていることから建築材、器具材によく用いられ、碁盤、将棋盤などの特用の他、仏像などの彫刻材によく用いられる。本遺跡出土材は下駄1点である。

11. ハンノキ属ハンノキ節 *Alnus* sect. *Gymnothursus* カバノキ科 (図 386 - 11: 試料番号 11492)

薄壁で多角形~楕円形の小道管が単独、あるいは2~4個放射方向に複合して均一に分布する散孔材で、出土材の保存性はあまり良くない。道管の穿孔は横棒が20本くらいからなる階段状で、側壁の壁孔は少量の小孔紋で交互状に密に分布し、道管内壁にはらせん肥厚はない。木部柔組織は散在する。放射組織は単列同性と集合放射組織の両方がある。以上の形質からブナ科ハンノキ属のうち、ハンノキ節の材であることが分かる。

ハンノキ属には低湿地に多いハンノキ、山地斜面に多いヤマハンノキを始め幾つかの種類があるが、本遺跡出土材はこの何れかであると考えられる。ヤマハンノキの材はやや硬く、ハンノキの材はやや柔軟で共に保存性に劣るが、いずれも建築材、各種器具材、漆器木地、薪炭材などに用いられる。当遺跡出土材は漆椀1点である。

12. クマシデ属クマシデ節 *Carpinus* sect. *Distegocarpus* カバノキ科 (図 386 - 12: 試料番号 8582)

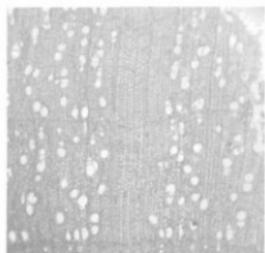
小型(直径約30~60 μ m)で丸~楕円形の小道管が単独あるいは数個放射方向に複合し、放射方向に波打って散在する散孔材で、道管の直径は年輪の後半で徐々に減少する。木部柔組織は接線状。道管の穿孔は数本の横棒からなる階段状と単一の両方がある。道管相互の壁孔はやや大きく、交互状で密に配列する。放射組織は同性にちかい異性で、2~3細胞幅である。これらの形質からクマシデ属クマシデ節の材と同定した。

クマシデ節にはクマシデとサワシバがあり、温帯の落葉樹林に広く見られる。いずれの材も硬く緻密で粘りがあり、床柱、柄杓、天秤棒、各種器具材、機械材などに利用される。本遺跡出土材は鞍の前輪と後輪であり、硬く粘りのある材質を利用した用途と言える。

13. クマシデ属イヌシデ節 *Carpinus* sect. *Eucarpinus* カバノキ科 (図 387 - 13: 試料番号 11897)

クマシデ属によく似た散孔材で、薄壁で丸みを帯びた小道管が主に放射方向に2~数個複合したものが放射方向にルーズに集まって散在する。道管の穿孔は単一で、側壁の壁孔は小孔紋で交互状に密に配列する。木部柔組織は1細胞幅の接線状の帯に配列し、晩材部でよく目立つ。集合度の低い集合放射組織と1~3細胞幅の同性に近い異性放射組織があり、放射組織細胞の中にやや膨らんだ細胞が混じり、中に結晶を持つ。これらの形質から、イヌシデ属のうち、イヌシデ、アカシデなどのイヌシデ節の材と同定した。

イヌシデ、アカシデとも本州から九州までの冷温帯から暖温帯に普通に分布する落葉広葉樹で、ア



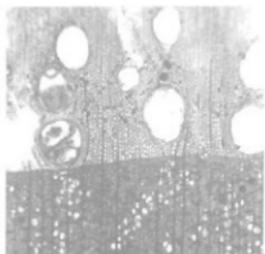
13. イヌシデ節 (11897) 木口×30



板目×60



板目×300



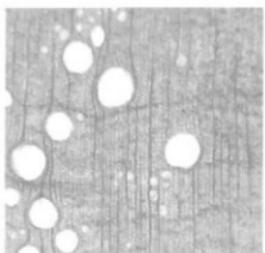
14. クリ (11626) 木口×30



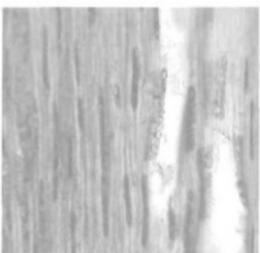
板目×60



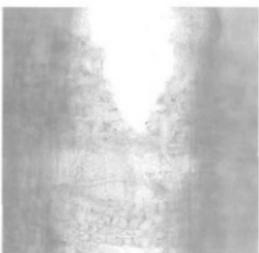
板目×300



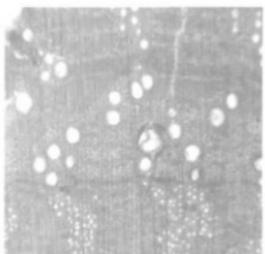
15. コジイ (11660) 木口×30



板目×60



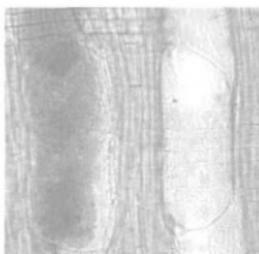
板目×300



16. サタジイ (11703) 木口×30



板目×60



板目×300

図 387 顕微鏡写真(4)

カシダの方が尾根筋に多く、イヌシダの方が低いところに多い。樹高 15 m、幹径 40cm くらいになり、二次林の主要素である。いずれも材質は木理通直、やや堅硬で木理緻密であるが、加工性にやや難がある。農具や傘の柄、小細工もの、漆器木地、下駄などの各種器具材に用いられ、また薪炭材とされる。当遺跡出土材は丸木の杭 2 点である。

14. クリ *Castanea crenata* Siebold et Zucc. ブナ科 (図 387 - 14: 試料番号 11626)

年輪のはじめに円～卵形の大道管が 1 列に並び、そこから順次径を減じ、晩材部では薄壁多角形の小道管が火炎状の紋をなす環孔材である。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔はやや大振りの小孔紋で交互状にやや隙間を開けて配列する。らせん肥厚はない。木部柔組織は周囲状及び単細胞幅の独立帯状、放射組織は単列同性で背は低い。道管-放射組織間壁孔は不定形の楕円形で大振り、櫛状にきちんと並ぶことはない。これらの形質からクリの材と同定した。

クリは北海道石狩低地周辺から九州鹿児島県までの冷温帯から暖温帯に広く分布する落葉高木で、幹直径 1 m 以上、樹高 30 m ほどとなる。材質は堅く、割裂が容易で耐久力、保存性は大変よい。大型建造物から一般の家屋の柱や土台回り、屋根葺き材(くれこば)などに用いられるほか、家具、農具、などさまざまな部分に用いられ、また水湿に強いことから土木用材や鉄道枕木などの特用があった。当遺跡出土材は杭が 10 点である。

15. コジイ *Castanopsis cuspidate* (Thunb.) Schottky ブナ科 (図 387 - 15: 試料番号 11660)

年輪の始めに丸い中～大型の道管が間隔を置いて 1～3 層並び、晩材部ではクリ同様薄壁多角形の小道管が集まって火炎状となる放射孔材～環孔材で、年輪界は目立たない。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は丸い小孔紋で交互状、木部柔組織は散在状及び単接線状である。放射組織は単列同性と集合放射組織の 2 型がある。道管-放射組織間壁孔は楕円形でしばしば縦に櫛状に並ぶ。これらの形質からシイ属のコジイ(ツブラジイ)の材と同定した。

コジイは関東地方南部以西の暖地に分布する常緑高木で、照葉樹林の主要な要素である。スダジイが海岸部に多いのに対し、これは内陸部に多い。材はやや堅硬で緻密、割裂容易であるが肌目は粗く保存性は低い。建築材、器具材(柄物など)、下駄、薪炭材などに用いる。本遺跡出土材は杭 44 点である。

16. スダジイ *Castanopsis sieboldii* (Makino) Hatusima ブナ科 (図 387 - 16: 試料番号 11703)

コジイによく似た放射孔材～環孔材で、年輪の始めに丸い中～大型の道管が間隔を置いて 1～3 層並び、晩材部ではクリ同様薄壁多角形の小道管が集まって火炎状となる。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は小孔紋で交互状。木部柔組織は散在状及び短接線状。放射組織は単列同性で、集合放射組織、複合放射組織はない。これらの形質からスダジイの材と同定した。

スダジイは東北地方南部以南の主に沿岸地の照葉樹林を構成する主要樹種で、コジイには材に集合放射組織が出ることで区別される。材質はコジイと同じで、やや堅硬で緻密であるが保存性は低い。当遺跡出土材は杭 30 点、板材 1 点、それに近世の漆碗 1 点があるが、コジイと全く同じ用途と言って良い。

16'. シイ属? *Castanopsis?* ブナ科

道管の配列が年輪始めに大道管があって晩材部では薄壁多角形の小道管が集合して火炎状に配列し、放射組織は単列同性であるなど、クリ及びスダジイ、コジイと基本的な構造で一致する材であるが、乾燥収縮など保存性が悪いため詳細な同定が出来なかったもの。

17. ブナ属 *Fagus* ブナ科 (図 388 - 17: 試料番号 11494)

薄壁で多角形の道管が密に均一に分布する散孔材で、道管の大きさは年輪界に向かって順次小さくなる。道管は数個が様々な方向に複合し、密にあるが、年輪界付近では小さくなるので密度が低く見える。穿孔は単一及び横棒が10本くらいと数の少ない階段状で、道管内壁にらせん肥厚はない。木部柔組織は散在状及び短接線状で晩材部でやや目立つ。放射組織は1~数細胞幅の狭くて背の低いものから10細胞以上となり肉眼で見えるほど幅広く背の高い大きなものまであり、ほぼ同性である。これらの形質からブナ属の材と同定した。

ブナ属には北海道南部から九州鹿児島県までの冷温帯に広く分布するブナと本州、四国、九州の冷温帯下部から暖温帯上部の太平洋側に分布するイヌブナがあるが、材構造は互いによく似ていて識別は困難である。いずれも幹直径1m、樹高30mに達する落葉大高木である。ブナの材は堅硬緻密で割裂が容易で保存性は低いが加工性はよく、建築材、家具材、器具材など広く用いられるが、漆器桶の木地などの特用がある。イヌブナの材はブナに比べると脆く、材質は劣るが、ブナ同様の用途がある。本遺跡出土材は近世の漆桶2点である。

18. コナラ属 コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 (図 388 - 18: 試料番号 11704)

年輪のはじめに丸い大道管が一列に並び、そこから順次径を減じて晩材部では薄壁多角形の小道管がタリ同様に変形して配列する環孔材で、道管の穿孔は単一、道管内壁にらせん肥厚はない。木部柔組織は周囲状、散在状及び独立帯状で、晩材部でよく目立つ。放射組織は単列同性と極めて大きな複合放射組織で、後者にはしばしば結晶細胞を含む。道管-放射組織間壁は縦長の楕円形で棚状に並ぶ。以上の形質からコナラ属のうち、コナラ節の材と同定した。

コナラ節には北海道南部から九州種子島までの冷温帯下部から暖温帯の二次林に広く分布するコナラ、北海道北部から九州までの冷温帯から暖温帯上部に広く分布するミズナラ、主に青森県以南の冷温帯から暖温帯に希に分布するナラガシワ、北海道から九州の冷温帯、暖温帯に分布するカシワがあるが、材構造での区別は困難である。コナラは幹径50cm、樹高20mくらいになる落葉高木で、材質はやや堅く、肌目は粗い。建築材、器具材、薪炭材に用いられる。ミズナラは幹径1m、樹高30mになる落葉大高木で、材質は大変よく、重硬で緻密なため加工は難しいが木目美しく仕上がりが重厚で家具材としては第1級である。机、テーブル、書庫などの家具材のほか建築材、各種器具材など極めて広い用途がある。ミズナラ、コナラとも薪炭材、椎茸のほだ木に用いられる。当遺跡出土材は杭4点と板材1点である。

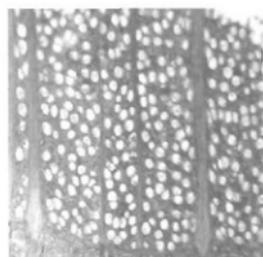
19. コナラ属 アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobatanopsis* ブナ科 (図 388 - 19: 試料番号 11548)

中型で丸い厚壁の道管がゆるくまとまりながら放射方向に年輪を越えて配列する放射孔材で、木部柔組織は独立帯状で接線状に多数配列してよく目立つ。道管の穿孔は単一、道管内壁にらせん肥厚はない。放射組織は単列のものと同様に複合放射組織があり、徑目面では肉眼で見える特有の紋様をなす。これらの形質からブナ科のコナラ属のうち、常緑のカシ類であるアカガシ亜属の材と同定した。

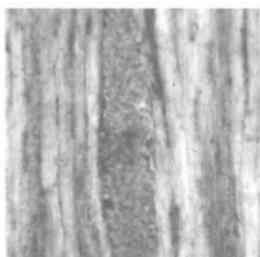
アカガシ亜属(カシ類)はブナ科コナラ属のうち、アカガシ、シラカシ、アラカシなど常緑の樹種からなる亜属で、全国の暖温帯以南に広く分布し、照葉樹林の主要要素である。多数の種があり、材構造による個々の種の識別は出来ていない。いずれの材も硬く緻密で強靱で粘りがあり、加工性には難があるが、建築材、各種器具材、車輪材、柄物など広い用途がある。当遺跡出土材は杭2点と加工材1点である。

20. エノキ属 *Celtis* ニレ科 (図 388 - 20: 試料番号 11573)

やや大型で丸~楕円の道管が年輪のはじめに単独あるいは2~3個複合して数層に配列し、孔圏外で



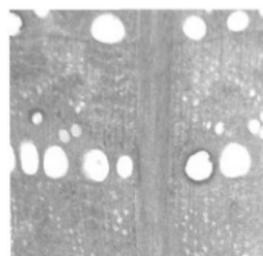
17. ブナ属 (11494) 木口×30



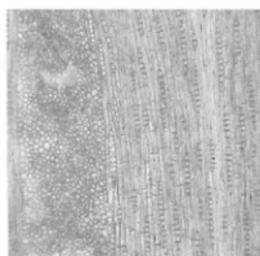
板目×60



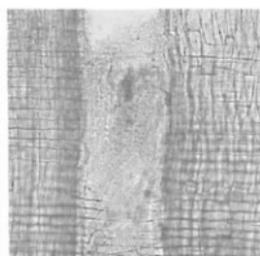
径目×300



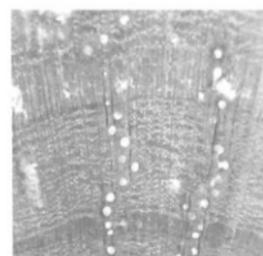
18. コナラ属 (11704) 木口×30



板目×60



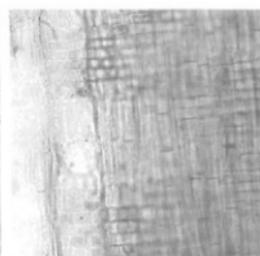
径目×300



19. アカガシ属 (11548) 木口×30



板目×60



径目×300



20. エノキ属 (11573) 木口×30



板目×60



径目×300

図 388 顕微鏡写真 (5)

は道管が集まって接線状～斜めにのびる塊となって分布し、晩材部では薄壁多角形の小道管となる環孔材である。道管の穿孔は単一、小道管の内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は異性で1～10数細胞幅以上となり、大型のものは明瞭な細胞をもち、しばしば結晶をもつ。以上の形質により、ニレ科のエノキ属の材と同定した。

日本のエノキ属には、エゾエノキ、エノキ、コバノチョウセンエノキ（近畿以西）、クワハノエノキ（山口県等一部）がある。エノキは成長が早く幹径2m、樹高30m位になる落葉大高木で、平野部によく生える身近な木である。材は比較的堅硬で従曲性にとみ、割裂は困難で、各種器具材、特にラケット枠や柄などに用いる。当遺跡出土材は杭が3点である。

21. ムクノキ *Aphananthe aspera* Thunb. ニレ科 (図 389 - 21: 試料番号 11617)

中～小型で丸～楕円形の道管が、年輪内に単独あるいは2～3個放射方向に複合して均一に散在する散孔材である。道管の壁はやや厚く、穿孔は単一、道管相互の壁孔は微細な小孔紋で密に交互状にある。木部柔組織は早材部で周囲状、晩材部では周囲状及び数細胞幅の帯状で著しい。放射組織は異性で1～3細胞幅くらい、1～4細胞高の単列部には小型の結晶がしばしば見られる。これらの形質からムクノキの材と同定した。

ムクノキは関東地方以西の暖温帯に生える落葉高木で直径60cm、高さ20mくらいになる。集落周辺および二次林に特に多い。材はやや堅く緻密で強靱であり、割裂は困難で、さまざまな農具の柄、天秤棒等の用途がある。本遺跡出土材は杭が1点である。

22. ヤマグワ *Morus bombycis* Koidz. クワ科 (図 389 - 22: 試料番号 11780)

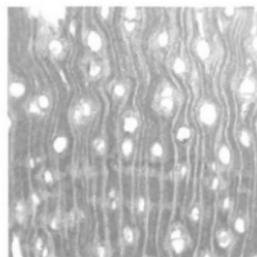
赤褐色を帯び、保存性がよい出土材で、年輪始めに中～大型の楕円形の道管が単独あるいは2個放射方向に複合して1～3層に並び、順次径を減じて、晩材部では薄壁多角形の小道管が集まって塊となったものが散在し、年輪界附近では接線状に配列する傾向がある環孔材で、道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は多少大きめの小孔紋で交互状、小道管の内壁には顕著ならせん肥厚がある。一見、エノキ属やケヤキによく似るが、放射組織は3～7細胞幅の紡錘形で、単列の翼部が発達し、異性であることで区別され、ヤマグワの材と同定した。

ヤマグワは北海道から九州まで広く全国の山野に分布する落葉高木で特に沢沿いに多く、幹径40cm、樹高15mくらいになる。材はやや堅硬で韌性にとみ、木理は粗いが光沢があって美しく、特に保存性に優れている。和風建築の内装材や家具材、強さを必要とする各種器具材、彫刻材などに用いる。当遺跡出土材は杭材1点である。

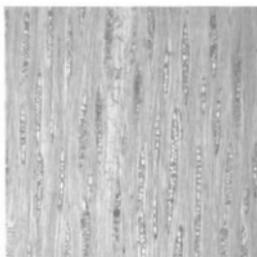
23. ヤマモガシ *Helicia cochinchinensis* Lour. ヤマモガシ科 (図 389 - 23: 試料番号 11542)

丸みを帯びた薄壁多角形の小道管が単独あるいは数個接線方向に複合して接線方向に配列する散孔材で、道管群の直ぐ外側に2細胞層の接線状の木部柔組織がある。木口面では巨大な放射組織がほぼ等間隔に放射方向に走り、年輪界は放射組織のところで木材の中心側に湾曲する。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は小孔紋で交互状に配列し、道管内壁には顕著ならせん肥厚がある。放射組織は単列のものと巨大なものがある。前者は2～数細胞高で直立細胞からなる。後者は幅10細胞あるいはそれ以上になり、高さも数ミリを超える。細胞は平伏細胞と直立細胞からなる異性で、粗雑である。以上の形質からヤマモガシ科のヤマモガシの材と同定した。

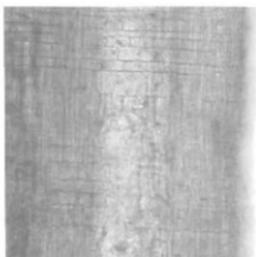
ヤマモガシは東海地方以南西南、四国、九州、南西諸島から台湾、中国、インドシナに分布する常緑高木で、分布の北限にあたる東海地方では希な樹木である。資源量が少ないため、その材質と利用は知ら



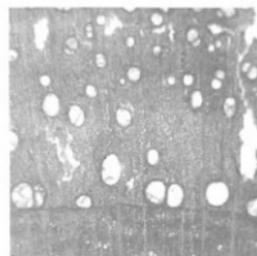
21. ムクノキ (11617) 木口×30



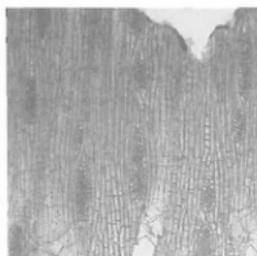
板目×60



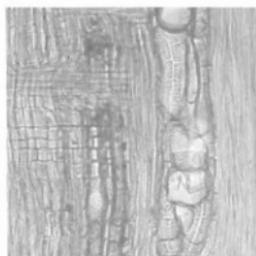
径目×300



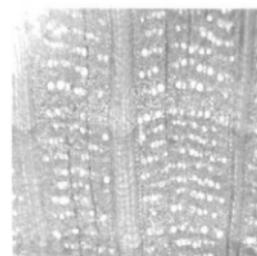
22. ヤマグチ (11780) 木口×30



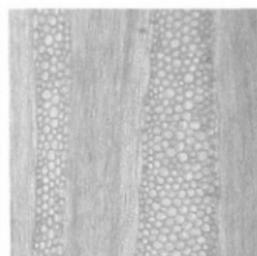
板目×60



径目×300



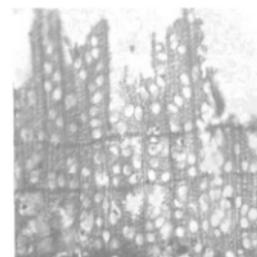
23. ヤマモガシ (11542) 木口×30



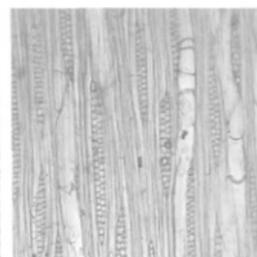
板目×60



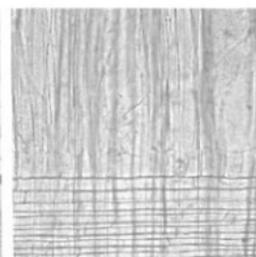
径目×300



24. モクレン属 (11491) 木口×30



板目×60



径目×300

図 389 顕微鏡写真 (6)

れていない。本遺跡出土材は杭1点である。

24. モクレン属 *Magnolia* モクレン科 (図389-24; 試料番号11491)

薄壁多角形～楕円形の小道管が単独あるいは放射方向に2～4個複合して均一に分布する散孔材で、年輪界付近で道管径はやや小さくなり、道管量が少なくなる。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は階段状、らせん肥厚はない。放射組織は2～3細胞でスマートな紡錘形、同性である。以上の形質からモクレン属の材と同定した。

モクレン属には全国の冷温帯から暖温帯上部にかけて広く分布するホオノキ、それよりもやや標高の低いところに多いコブシ、コブシよりもやや標高が高く、また日本海側の多雪帯地に多いタムシバなどが分布する。ホオノキ、コブシは幹径50cm、樹高15mを超える落葉高木で、特にホオノキでは幹が通直で樹高は優に20mを超える。ホオノキの材は軽軟緻密で木理通直、肌目は楕で早晚材の差が少なく年輪が目立たないので加工性がよい良質の材である。建築、各種器具材に用いられるが、下駄、版木、小細工ものの特用がある。当遺跡出土材は漆碗1点である。

25. シキミ *Illicium religiosum* Stebold et Zucc. シキミ科 (図390-25; 試料番号11836)

薄壁多角形の微細な道管が単独で年輪内に均一に分布する散孔材で、特に年輪始めに一回り大きい道管が一列に並ぶ性質があるが、年輪界は全く目立たない。道管の穿孔は横棒がとても多い階段状である。放射組織は1～2細胞幅で背は低く、典型的な異性で、多列部は平伏細胞、単列部は直立細胞からなり、多列部は単列部よりわずかに幅広だけである。これらの形質からシキミ科のシキミの材と同定した。

シキミは暖温帯の照葉樹林を特徴づける樹種の一つで、千葉県南部以西に分布する常緑低木～小高木である。材は堅く緻密で粘りがあり、割れにくく、小細工もの、柄物などに使われる。枝葉を仏前に供える特用があり、屋敷内や墓地等での植栽がよく見られる。当遺跡出土材は匙1点と杭22点である。

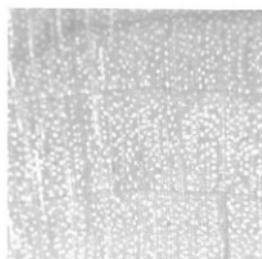
26. クスノキ *Cinnamomum camphora* (Linn.) Stebold et Zucc. クスノキ科 (図390-26; 試料番号11572)

中～大型でやや厚壁で楕円形の道管が単独あるいは2個放射方向に複合して、年輪界にむけて緩やかに径を減じながら疎らに散在する半環孔～散孔材である。木部柔組織は周囲状で量多く、大型の油細胞がまざる。道管の穿孔は単一、放射組織は同性にちかい異性で背は低く、1～3細胞幅、時に大きくふくれた油細胞がある。これらの形質からクスノキ科のクスノキの材と同定した。

クスノキは関東地方以西、四国、九州、沖縄、台湾、中国に分布する常緑広葉樹で、しばしば神社、公園、街路樹に植えられる。成長が非常に早く幹は1mを軽く超え、樹高も30m以上となり、巨木はしばしば天然記念物などに指定される。材はやや重く、肌目粗く、木理はしばしば交走し、切削加工は難であるが、大材が得られることと、保有している芳香族油成分により保存性が良く、時に美しい杰となり、芳香を有することから、神社の大型建築物、和風建築の内層、家具、彫刻材としてよく用いられる。また、西日本では縄文時代以降丸木舟への利用が目立つ。当遺跡出土材は杭1点である。

27. Lauraceae クスノキ科 (図390-27; 試料番号11831)

丸く壁がやや厚い小道管が単独あるいは放射方向に2、3個複合してまばらに均一に分布する散孔材で、年輪は目立たない。道管の穿孔は横棒の少ない階段状あるいは単一である。柔組織は周囲状でときどきやや大型になって精油を含んだ油細胞が混じる。放射組織は背が低く、2～3細胞幅の幅の狭い紡錘形で、異性で、上下端にある直立細胞にわずかに膨らんだ油細胞が混じる。以上の形質からクスノキ科のクスノキ以外の材と同定した。



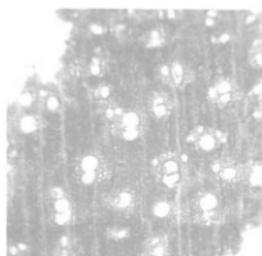
25. シキミ (11836) 木口×30



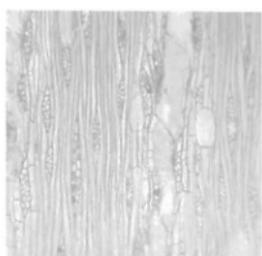
板目×60



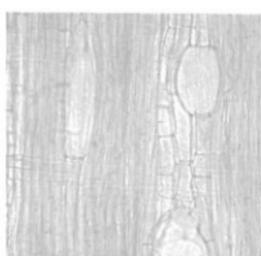
径目×300



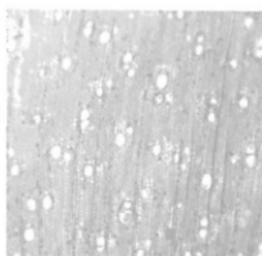
26. クスノキ (11572) 木口×30



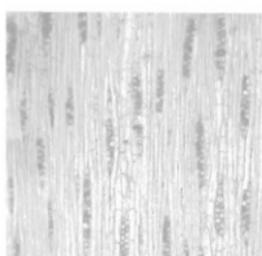
板目×60



径目×300



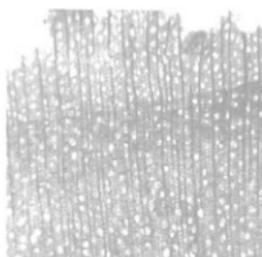
27. サスノキ科 (11831) 木口×30



板目×60



径目×300



28. サカキ (11634) 木口×30



板目×60



径目×300

図390 顕微鏡写真(7)

クスノキ科には多くの属、種があるが材の基本構造は共通である。中でも、照葉樹林の主要素であるタブノキ、シロダモ、ヤブニッケイ、カゴノキなどは互によく似ていて区別が困難である。タブノキは照葉樹林を特徴づける常緑高木で、幹径1m、樹高15mくらいになり、海岸部に多い。しばしば枝を大きく横に張り、こんもりとした樹形となり、なんじゃもんじゃの木と呼ばれたりする。シロダモは幹径50cm、樹高15mほどの常緑高木で東北地方南部以南に広く分布する。いずれも材はやや堅く、きめは粗く、割裂困難で加工性はあまり良くない。精油成分を持つので芳香があり、保存性はよいがクスノキほどではない。建築材、家具、器具材、細工物などに使われる。当遺跡出土材は杭4点である。

28. サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科 (図 390 - 28: 試料番号 11634)

薄壁で多角形の微細な道管が均一に分布する散孔材で、年輪界は全く目立たない。道管はほぼ単独で、穿孔は横棒の多い階段状である。木部柔組織は散在状で目立たない。放射組織はほぼ単列の異性で、背は比較的高く、平伏細胞及び背の大変高い直立細胞からなる。これらの形質からツバキ科のサカキの材と同定した。

サカキは照葉樹林を特徴づける常緑小高木で、関東南部以西に分布し、西南日本では普遍的な樹種であり、幹径30cm、樹高8mくらいになる。材は堅く粘りがあり、割裂困難で、萌芽枝がまっすぐによく伸びることから柄物に重用される。当遺跡出土材は杭3点である。

29. Hamamelidaceae マンサク科 (図 391 - 29: 試料番号 11805)

薄壁でやや丸みを帯びた多角形の微細な道管が均一に散在する散孔材で年輪界は目立たない。道管は単独で、穿孔は横棒がやや多い階段状である。木部柔組織は散在状で目立たない。放射組織は1ないし時に2細胞幅で単列部は直立細胞から、多列部は平伏細胞からなる異性である。これらの形質からマンサク科の材と同定した。

マンサク科には落葉あるいは常緑の低木~小高木の樹種が多数ある。その中でマルバノキ属、トサミズキ属、マンサク属などは本出土材と材構造が一致し、互いの区別は困難である。従って、イスノキ属など明快に区別されるものを除いたマンサク科の樹木の何れかとしか言えない。マンサク属のマンサクは北海道から九州の温帯に分布する落葉低木~小高木で、材は硬く強靱で韌皮繊維も強く、枝を結束材にする特用がある。本遺跡出土材は杭4点である。

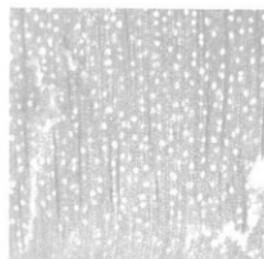
30. ウツギ属 *Deutzia* ユキノシタ科 (図 391 - 30: 試料番号 11710)

丸い微細な小道管がほぼ単独で均一にやや密に散在する散孔材で、年輪界は目立たない。道管の穿孔は50本ほどの横棒からなる階段状。放射組織は異性で1~5細胞幅くらい、明瞭な朝細胞を持ち、背は高く5mm以上になる。これらの形質からユキノシタ科ウツギ属の材と同定した。

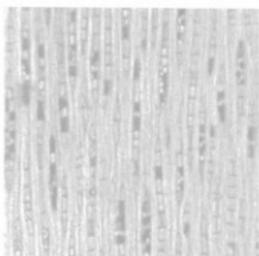
ウツギ属には全国の山野に広く分布するウツギの他、マルバウツギなど幾つかの種があるが、いずれも落葉低木で、材は硬く緻密で粘りがあるが、量がまとまって無いので木釘などの他は用途は余り無い。当遺跡出土材は杭3点である。

31. カナメモチ *Photinia glabra* (Thunb.) Maxim. バラ科 (図 391 - 31: 試料番号 11501)

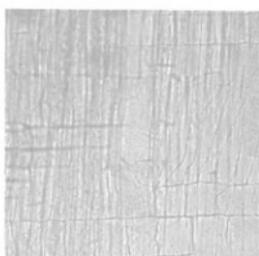
丸い小道管が単独で、密度低く均一に分布する散孔材で、年輪界は全く目立たない。道管の穿孔は単一、木部柔組織は散在状で目立たないが、縦方向の切片では丸く膨らんだ結晶細胞が鎖状に連結して見える。放射組織は1~2細胞幅で背は低く、単列部が方形~直立細胞からなる異性。これの形質から



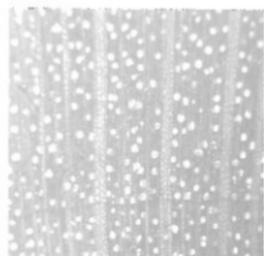
29. マンサク科 (11805) 木口×30



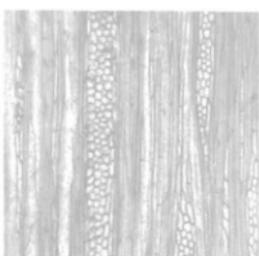
板目×60



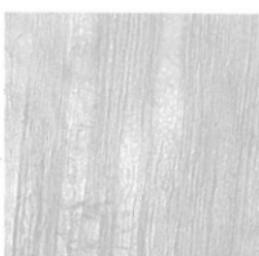
板目×300



30. ウツギ属 (11710) 木口×30



板目×60



板目×300



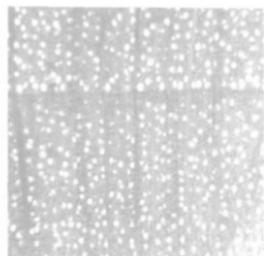
31. カナメモチ (11501) 木口×30



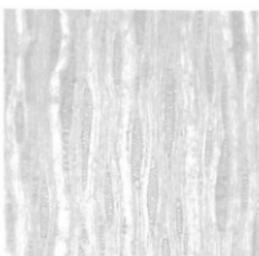
板目×60



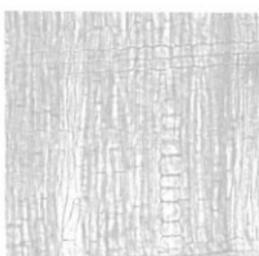
板目×300



32. カマツカ (11648) 木口×30



板目×60



板目×300

図 391 顕微鏡写真 (8)

バラ科のカナメモチの材と同定した。

カナメモチは東海地方以南西から四国、九州の照葉樹林帯に分布する常緑小高木で、材は堅硬緻密で粘りがあり、柄物、車輻材などに用いる。本遺跡出土材は杭1点である。

32. カマツカ *Pourthiaea villosa* (T.) Decne var. *laevis* (Thunb.) Stapf. バラ科 (図 391 - 32: 試料番号 11648)

小型で円形の道管がほぼ単独で散在する散孔材で、道管の直径は年輪始めにやや大きめのものが1層に並び、年輪界に向けて徐々に減少するが年輪界は目立たない。道管の穿孔は単一。木部柔組織は散在～短接線状でしばしば黒褐色物質を含み、時に丸く膨らんだ結晶細胞が鎖状に連結する。放射組織は異性で2-4細胞幅、やや背が高く、上下辺の1～数細胞が直立細胞となる異性である。以上の形質より、バラ科のカマツカの材と同定した。

カマツカは全国の低山地、丘陵、平野の二次林などに普通の落葉小高木で、材は堅硬緻密で非常に強靱であり、柄物の特用がある。本遺跡出土材は杭2点である。

33. ヤマザクラ *Prunus jamasakura* Siebold ex Koidz. バラ科 (図 392 - 33: 試料番号 11858)

丸い小道管が単独あるいは主に放射方向に数個複合して均一に分布する散孔材で、年輪始めには1層に配列する傾向がある。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は大振りの小孔紋で交互状、内壁に顕著ならせん肥厚がある。木部柔組織は散在状で、時に黒褐色物質を含む。放射組織は1～5細胞幅くらいの同性に近い異性で、構成細胞は大振りである。これらの形質からバラ科サクラ属のヤマザクラの材と同定した。

ヤマザクラは東北地方南部から九州にかけての冷温帯から暖温帯に広く分布する落葉高木で、材はやや堅く緻密で保存性、耐朽性がよく、加工も容易で優れた広葉樹材である。縄文時代以来、建築材、漆器木地などに使われてきている。本遺跡出土材は杭と漆桶、樽で、特徴的な用材である。

33'. サクラ属 *Prunus* バラ科

道管はヤマザクラよりやや小さく、多少とも角張っている。道管の配列、単穿孔であること、らせん肥厚を持つこと、木部柔組織の分布と量、放射組織の基本構造はヤマザクラと一致するが、道管配列、放射組織の大きさに於いて明らかにヤマザクラとは異なるが保存が充分でなく、種の同定は出来ない。本遺跡出土材は杭1点である。

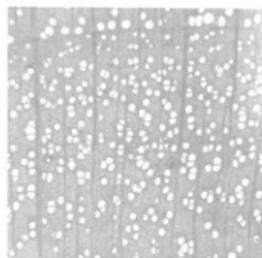
34. バラ属 *Rosa* バラ科 (図 392 - 34: 試料番号 11708)

年輪のはじめに中型で丸い道管がほぼ単独で1～3層ほど並び、孔圏外では丸い小道管がほとんど単独で均一に分布する半環孔材である。木部柔組織は目立たず、道管の穿孔は単一、放射組織は10細胞幅以上になり背は極めて高い。これらの形質から蔓性のバラ属の材と同定した。

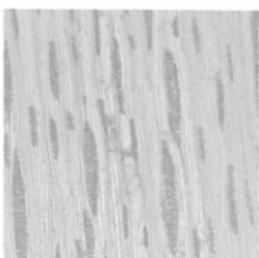
バラ属には全国の山野に普通にノイバラがあり、また北方の海岸にはハマナス、高山にはタカネイバラなど、さまざまな樹種があるがいずれも大きな材になることはない。材は硬く粘りがあり、当遺跡出土材は杭1点である。

35. ナナカマド属 *Sorbus* バラ科 (図 392 - 35: 試料番号 11788)

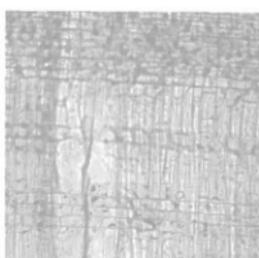
単独あるいはさまざまな方向に2～3個複合した薄壁で丸みをおびた小道管が均一に分布する散孔材で、年輪界は目立たない。木部柔組織は散在状でしばしば黒褐色物質を含み、散在する点に見える。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は小孔紋で交互状、放射組織は3細胞幅くらいで異性の程度が強いなどから、ナナカマド属の材と同定した。



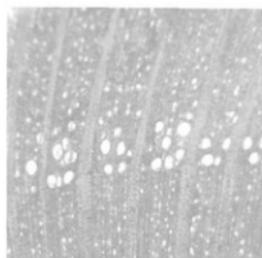
33. ヤマザクラ (11858) 木口×30



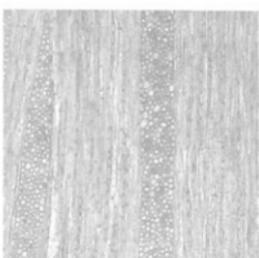
板目×60



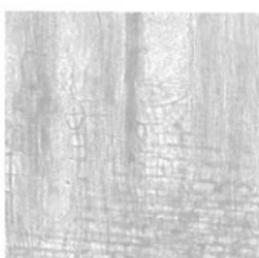
縦目×300



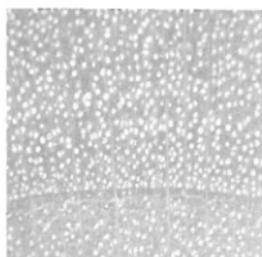
34. バラ属 (11708) 木口×30



板目×60



縦目×300



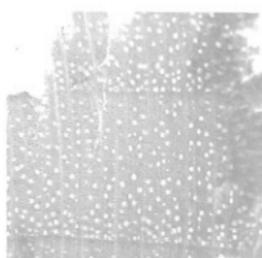
35. ナナカマド属 (11788) 木口×30



板目×60



縦目×300



36. ナシ亜科 (11848) 木口×30



板目×60



縦目×300

図392 顕微鏡写真(9)

ナナカマド属には全国の山地丘陵に分布するナナカマド、アズキナシなどがある。材は硬く木理緻密で粘り強く、柄物、機械材などに用いる。本出土材は杭が1点である。

36. ナシ亜科 Pomoideae バラ科 (図 392 - 36: 試料番号 11848)

丸みを帯びた多角形の小道管がほぼ単独で均一に分布する散孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は散在状或いは短接線状で黒褐色物質を含み、特に年輪の外半分が目立つ。放射組織は1~3細胞幅程度で背が低く、上下の細胞がやや縦長となって同性にちかい異性。これらの形質からバラ科のうち、ナシ属、リンゴ属などが含まれるナシ亜科の材と同定した。

ナシ亜科の材はナナカマド属、カマツカなどと同様に一般に緻密で粘り強く割裂困難で、柄物、各種器具材などに用いられる。本遺跡出土材は杭1点である。

37. アカメガシワ *Malotus japonicus* (Thunb.) Muell. Arg. トウダイグサ科 (図 393 - 37: 試料番号 11613)

年輪始めに中~大形の楕円形の道管が1~3層に並び、順次径を減じて、晩材部では丸いやや壁の厚い小道管が放射方向に数個複合したものが散在する環孔材。木部柔組織は目立たない。道管の穿孔は単一、放射組織は単列異性であることなどからアカメガシワの材と同定した。

アカメガシワは東北南部以南の丘陵、低地の二次林、路傍に普通に生える落葉小高木で、やや軽軟、木理粗く、保存性は悪く、各種器具、下駄、薪炭材に用いる。出土材は杭1点である。

38. ユズリハ属 *Daphniphyllum* ユズリハ科 (図 393 - 38: 試料番号 11861)

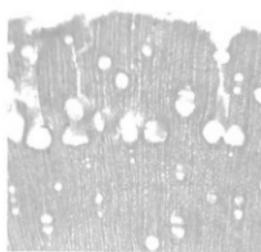
放射方向にやや長い薄壁多角形の微細な道管が単独で均一に分布する散孔材で、年輪界は目立たない。道管の穿孔は横棒の大変多い階段状で、木部柔組織は散在状で目立たない。放射組織は1~2細胞幅で背が高く、典型的な異性である。これらの形質からユズリハ属の材と同定した。

ユズリハ属には福島県以南の照葉樹林帯に生えるユズリハとほぼ同じ地域の特に海岸部に生えるヒメユズリハ、それに本州及び北海道の日本海側の多雪地帯に生える常緑低木のエゾユズリハがあるが、当遺跡出土材はその分布からユズリハかヒメユズリハのいずれかと考えられる。いずれも幹径30cm、樹高8mくらいになる常緑小高木で、ヒメユズリハの方がやや小さい。材は柔らかく緻密で、加工しやすく、箱物、漆器木地、小細工物などに用いる。本遺跡出土材は杭4点である。

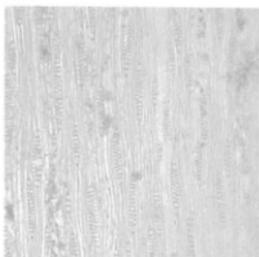
39. キハダ *Phellodendron amurense* Rupr. ミカン科 (図 393 - 39: 試料番号 8583)

しばしば赤褐色を呈する遺跡出土材で、道管内に黒褐色の物質が蓄積している。大きな楕円形の道管が年輪はじめに単独あるいは2個複合して配列し、順次径を減じて晩材部では薄壁多角形の小道管が多数集まって斜め接線状の幅広いゾーンをなす環孔材で、道管の穿孔は単一、側壁の壁孔はやや大振り的小孔紋で交互状にやや間隔をあけて分布し、小道管の内壁には顕著ならせん肥厚がある。柔組織は周囲状であまりめだたない。放射組織は2~5細胞幅くらいの同性で、背は低く、板目面で見ると輪郭が綺麗な紡錘形となる。これらの形質からミカン科のキハダの材と同定した。

キハダは北海道から九州にかけての温帯に分布する落葉高木で、幹径60cm、樹高20mになる。材は柔らかいが強く粘りがあり、木理が美しく加工が容易な優秀な材である。建築物の装飾的部分、家具、各種器具材、漆器木地などに用いられる。樹皮の内側部分がベルベリンを含んで黄色い「黄檗」で、薬用、染料とされる。当遺跡出土材は鞍の居木2点と杭1点である。



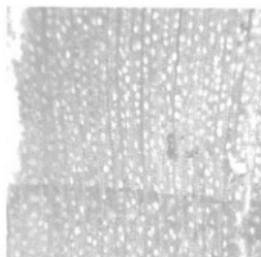
37. アカメガシワ (11613) 木口×30



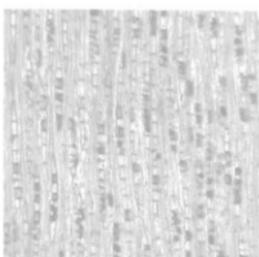
板目×60



径目×300



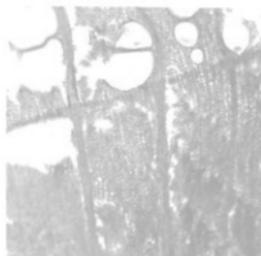
38. ユズリハ属 (11861) 木口×30



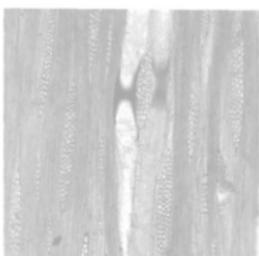
板目×60



径目×300



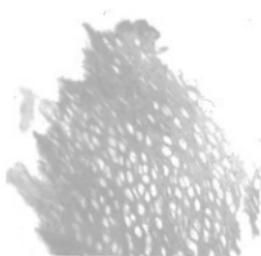
39. キハダ (8583) 木口×30



板目×60



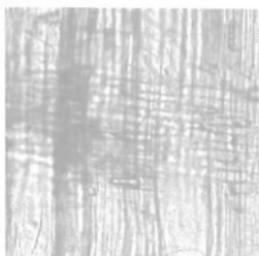
径目×300



40. トチノキ (11496) 木口×30



板目×60



径目×300

図393 顕微鏡写真(10)

40. トチノキ *Aesculus truinata* Blume トチノキ科 (図 393 - 40: 試料番号 11496)

薄壁で楕円形の小道管が単独あるいは数個が放射方向に複合して散在する散孔材で、木部柔組織は目立たない。道管の穿孔は単一、道管相互の壁孔は小孔紋で交互状、放射組織は単列同性で背が低く、層状配列する。これらの形質からトチノキ科のトチノキの材と同定した。

トチノキは北海道南部から九州にかけての温帯に広く分布する落葉高木で、時に直径 2 m、樹高 30 m を超える巨木となる。種子は有毒のサポニンを含むがこれを晒して取り除けば優良なデンプンが多量に取れる。材は肌理細かく柔らかく、加工性に優れるが狂いが出やすく、また保存性も低い。しかし大材が得られるので建築の大きな板を必要とする部分、大型の剝物、挽物、漆器木地などに縄文時代から非常によく利用されてきている。本遺跡出土材は近世の漆碗 1 点である。

41. ミズキ *Cornus controversa* Hemsl. ミズキ科 (図 394 - 41: 試料番号 11841)

丸みを帯びた薄壁多角形の小道管が単独あるいは数個放射方向に複合して均一に分布する散孔材で、年輪界は目立たない。木部柔組織は散在するが目立たない。道管の穿孔は横棒の多い階段状、側壁の壁孔は小孔紋で交互状、らせん肥厚はない。放射組織は 1~5 細胞幅くらいの典型的な異性で、単列の翼部は時に高くなる。これらの形質よりミズキの材と同定した。

ミズキは全国の山地、丘陵、平野に広く分布する落葉高木で、成長が早い。材はやや軽軟だが肌目は緻密、切削加工が容易で材の白さもあって各種器具材、特にこけしなどの彫刻材の特用がある。本遺跡出土材は杭 3 点である。

42. クマノミズキ類 *Cornus cf. macrophylla* (Wall.) Sojak ミズキ科 (図 394 - 42: 試料番号 11593)

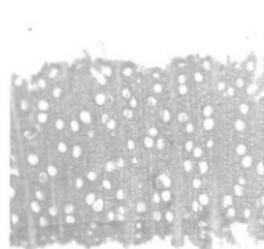
ミズキによく似た材だが、丸い小道管が単独で比較的まばらに均一に散在することで異なる。木部柔組織は散在状で量は少ない。道管の穿孔は多数の横棒からなる階段状で、らせん肥厚はない。放射組織は 1~5 細胞幅で単列の翼部が伸びた典型的な異性である。これらの形質からミズキ科ミズキ属のうちの、クマノミズキあるいはヤマボウシの材と同定し、これを「クマノミズキ類」と表示した。

クマノミズキはミズキ同様に成長の早い落葉高木で、樹高 15m、直径 50cm ほどになる。本州の青森県から、四国、九州の山地丘陵、平野に分布するが、東北日本では少なく、関東以西の西日本に多い。一方、ヤマボウシも本州、四国、九州の山地丘陵に分布するが、樹高 10m 程度の落葉小高木である。クマノミズキの材質はやや硬くて重く、緻密で、建築材、各種器具材にする。ヤマボウシは更に硬く粘りがあり、柄物の特用がある。当遺跡出土材は杭 1 点である。

43. アセビ *Pieris japonica* (Thunb.) D. Don ツツジ科 (図 394 - 43: 試料番号 11781)

薄壁多角形の極めて微細な道管が単独、あるいは斜~接線方向に 2~数個複合したものが年輪前半では均一に分布し、年輪後半では年輪界に向かって徐々に接線方向に配列する散孔材で、年輪界は目立たない。木部柔組織は目立たない。道管の穿孔は横棒が 10 本程度の階段状。放射組織は単列で背の低いものが多く、そこに 2~3 細胞幅のものが混じる。多列部は平伏細胞で単列部は直立細胞からなる異性である。これらの形質からツツジ科のアセビの材と同定した。

アセビは東北中部以南の本州、四国、九州の山地丘陵に分布する常緑低木で、材は硬く緻密であるが材が小さいのであまり用途はない。本遺跡出土材は杭 1 点である。



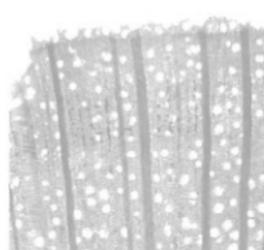
41. ミズキ (11841) 木口×30



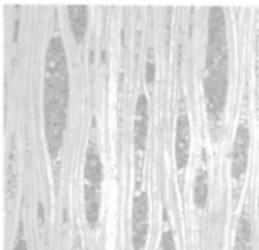
板目×60



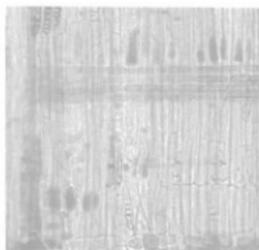
柎目×300



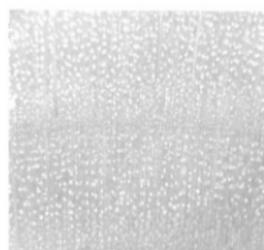
42. クマノミズキ類 (11593) 木口×30



板目×60



柎目×300



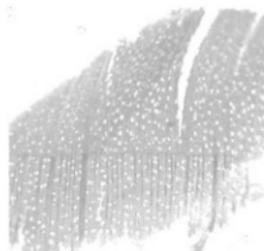
43. アセビ (11781) 木口×30



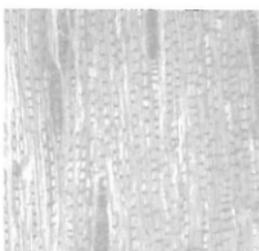
板目×60



柎目×300



44. ツツジ属 (11622) 木口×30



板目×60



柎目×300

図394 顕微鏡写真(11)

44. ツツジ属 *Rhododendron* ツツジ科 (図 394 - 44: 試料番号 11622)

薄壁多角形の極めて微細な道管がほぼ単独で年輪内に均一に分布する散孔材で、道管径は年輪界に向かってやや小さくなる。木部柔組織は目立たない。道管の穿孔は階段状で、横棒の数はそれほど多くない。放射組織は単列のものが多数均一に分布する中、3~5細胞幅程度の多列のものが少数混じる。単列部は直立細胞、多列部は平伏細胞からなる異性である。これらの形質からツツジ科ツツジ属の材と同定した。

ツツジ属には常緑のシャクナゲの仲間や落葉のミツバツツジの仲間など実に多数の種があるが種の識別は出来ていない。いずれも落葉又は常緑の低木~小高木で、全国の山地、丘陵、原野に自生するが、材を特に利用することは余り無い。本遺跡出土材は杭4点である。

45. スノキ属 *Vaccinium* ツツジ科 (図 395 - 45: 試料番号 11783)

薄壁多角形の極めて微細な道管が単独あるいは2個放射方向に複合して均一に分布する散孔材で、道管径は年輪界に向けてわずかに小さくなる。木部柔組織は散在状で量少なく、目立たない。道管の穿孔は単一あるいは横棒が10本以下と少ない階段状、道管内壁にはらせん肥厚が見える。放射組織は異性で、単列のものが多数均一に分布する中、3~7細胞幅の大きな多列放射組織がしばしば混じる。単列部は背が高い直立細胞のみからなり、多列部の構成細胞の大きさは不揃いである。以上の形質からツツジ科のスノキ属の材と同定した。

スノキ属には関東南部以南西の山地丘陵に生える落葉低木のシャシャンボを始め、高山帯から低山帯まで、さまざまな落葉及び常緑の低木、小低木があるが、基本的材構造はよく似ている。シャシャンボの材は粘りがあるが太くならないのでほとんど利用されない。当遺跡出土材は杭2点である。

46. カキノキ *Diospyros kaki* Thunb. カキノキ科 (図 395 - 46: 試料番号 11605)

厚壁で楕円形の中型の道管が単独あるいは2個放射方向に複合して密度低く散在する散孔材で、道管の穿孔は単一、内壁にはらせん肥厚はない。木部柔組織は1細胞幅の独立帯状でよく目立つ。放射組織は1~3細胞幅で背は低く、ほぼ同性で、層階状に配列する。これらの形質からカキノキ科のカキノキの材と同定した。

カキノキは古くに中国から渡来したといわれる果樹で、本州北部以南の農家に普通に栽培される。成長は遅く、心材はしばしば褐色となり特に黒色の濃いものは「黒柿」として珍重される。材は重硬で韧性があり、加工は困難だが心材の保存性の良さ、美しさから床柱、各種装飾材、家具調度材として珍重され、近年ではゴルフクラブのヘッド(ウッド)に用いられる。当遺跡出土材は杭5点である。

47. エゴノキ属 *Styrax* エゴノキ科 (図 395 - 47: 試料番号 11682)

小型で丸い道管が多くは放射方向に数個複合したものが年輪界に向けて徐々に径を減じながら散在する散孔材で、年輪後半では道管は目立たず、独立帯状の木部柔組織が目立つ。道管の穿孔は横棒の少ない階段状である。放射組織は異性で、1~3細胞幅である。以上の形質から、エゴノキ科のエゴノキ属の材と同定した。

エゴノキ属には、エゴノキ、ハクウンボク、コハクウンボクが含まれ、いずれも落葉小高木である。最も普通の樹木はエゴノキで本州から沖縄まで広く山野に分布し、材は白色均質で粘りがあり、玩具などに用いられる。当遺跡出土材は杭3点である。



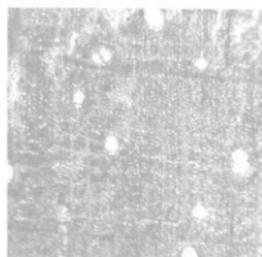
45. スノキ属 (11783) 木口×30



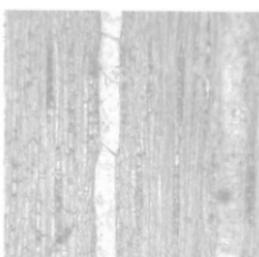
板目×60



径目×300



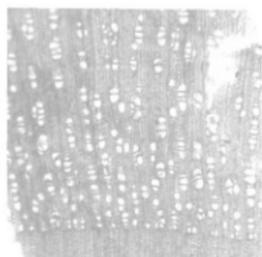
46. カキノキ (11605) 木口×30



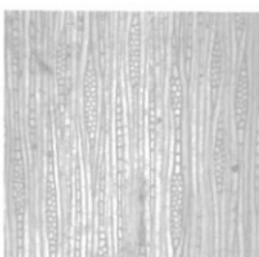
板目×60



径目×300



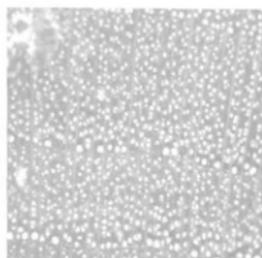
47. エゴノキ属 (11682) 木口×30



板目×60



径目×300



48. イボタノキ属 (11977) 木口×30

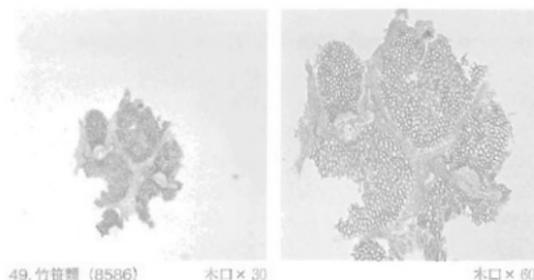


板目×60



径目×300

図395 顕微鏡写真 (12)



49. 竹節類 (8586)

木口×30

木口×80

図 396 顕微鏡写真 (13)

48. イボタノキ属 *Ligustrum* モクセイ科 (図 395 - 48: 試料番号 11977)

年輪のはじめに薄壁でまろい小道管が一回り大きな道管が断続的に1列にならび、その外側ではやや径の小さい丸い道管が均一に分布する散孔材で、年輪界に向けて形がわずかに小さくなる。木部柔組織は目立たない。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で2細胞幅、背は低く、道管との壁孔はやや小型の楕円形でやや疎ら。これらの形質からモクセイ科のイボタノキ属の材と同定した。

イボタノキ属には本州から琉球まで分布する常緑小高木のネズミモチ、全国の丘陵、原野に普通に分布する落葉小高木のイボタノキを始め多くの種があるが材構造での識別は困難である。材が小さいためその用途はほとんど知られていない。本遺跡出土材は杭2点である。

49. 竹節類 *Bamboo* イネ科 (図 396 - 49: 試料番号 8586)

木口面に維管束が均一に分布し、各維管束は向軸側の原生木部腔と、中間の左右にある一対の大きな後生木部道管、背軸側の髄部からなり、それら4つの部分の外側をそれぞれ横維組織が厚く取り囲むので、4つの円を合わせたような輪郭となる。これらの形質からイネ科のタケ亜科の桿であると同定した。

タケ亜科は通常桿に桿鞘が残存する笹類とそれが脱落する竹類に呼称が分けられるが、笹は一般に桿の直径が小さく、肉厚で、竹類は桿の直径が太く肉厚である。当遺跡出土材は護岸施設に埋納された板の下に配置されていたものであり、出土所見から桿径が小さいので笹類と言える。しかし、桿の内部構造からは種類を特定する手がかりはない。

(2) 出土材の樹種構成

中層遺跡から出土した木材 389 点の樹種を調べたが、それらの大部分 (300 点) は杭材であり、22 点が板材で、木製品は曲物などの容器が 23 点ある他は呪符木簡や籠塔婆等の祭祀具が 12 点など、わずかずつである。これらの出土材から記載されたように 49 の樹種、53 タイプが同定された (表 37)。針葉樹は 10 樹種 12 タイプで全体の 51% を占め、アカマツが 90 点と最も多く、次いでヒノキ (48 点)、サワラ (11 点)、モミ属、スギ (以上 10 点) などが比較的多い。広葉樹では 38 樹種 40 タイプが認められ、全体の約 49% をしめ、コジイが 44 点、スタジイが 32 点と最も多く、次いでシキミ (23 点)、クリ (10 点) が目立つ他は少数で、実に多様な樹種がある。単子葉類は竹笹類が 1 点でこれは祭祀遺構に伴うものである。

このように針葉樹と広葉樹がほぼ半ずつの構成であるが、それらの大部分は中世に築かれた護岸施設の杭材である。表 38 に見るように、これらの木材のうち護岸施設に伴うものが 311 点、Ⅱ層 (13 世

表 37 中屋遺跡出土木製品の樹種組成

	根	幹	葉	下枝	虫食具	葉食具	種子	根材	板	加工材	その他	総計
モミ属								1	9			10
アカマツ		1							03	1		04
クロマツ									1			1
マツ属ニニ葉松類		1							7			8
マツ属									9			9
ツグ属							2					2
コウヤマキ		1				1		2				4
スギ		3			1			5			1	10
ヒノキ		14			4	11		6	8		5	48
マツ		2		1				5	2		1	11
イヌヤキ属								1	3			4
カネ				1								1
ハンノキ属(ハンノキ部)			1									1
クマシラ属(クマシラ部)	2											2
クマシラ属(イヌシラ部)									2			2
クリ									10			10
コブシ									44			44
スダジイ		1					1	30				32
シイ属?				1				2				3
ブナ属			2									2
コナラ属(コナラ部)								1	4			5
コナラ属(アカガシ属類)									2	1		3
エノキ属									3			3
ムクノキ									1			1
ヤマザクラ									1			1
ヤマモガシ									1			1
モウレン属			1									1
シキミ		1							22			23
クスノキ									1			1
クスノキ科									4			4
サカキ									3			3
マンサク科									4			4
ウツギ属									3			3
カナメモチ									1			1
カマツカ									2			2
ヤマザクラ			1		1				2			4
サクラ属									1			1
バコ属									1			1
ナナカマド属									1			1
ナンシキ科									1			1
アキノガシウ									1			1
ユズリハ属									4			4
キハダ		2							1			3
トチノキ			1									1
ミズキ									3			3
クマノミズキ類									1			1
アセビ									1			1
ツツジ属									4			4
スノキ属									2			2
カキノキ									5			5
エゴノキ属									3			3
イボタノキ属									2			2
竹類										1		1
総計	4	23	7	3	6	12	2	22	300	3	7	389

紀後半～15世紀後半)から出土したものの24点、I層(主に16世紀～17世紀前半)から出土したものが46点である。

表39は出土材の大部分を占める13世紀の杭材について、その形状毎の樹種組成を見たものである。杭の形状で注目すべきは丸杭と角杭の違いである。丸杭は、恐らくは樹皮付の丸木の先端を尖らしただけで打ち込んだもので、いきおい小径木に由来するといえる。対して角杭はある程度の径のある材から割り、また割り取って作成しており、丸杭に比べると、角杭を作るためには、最終的に杭となる前に何段階かの作業を要しているし、また、それだけの大きさのある樹木の存在が不可欠である。このような視点から杭の形状と樹種を見ていくと、総数で最も多いのはアカマツ・マツ属で、103点、35%を占める特徴が目につく。なお、ここで「アカマツ・マツ属」としたのはアカマツ、クロマツ、二葉松類、マツ属と同定されたものをまとめたもので、種が識別されたのはアカマツとクロマツの2種であるが、その大部分をアカマツが占めること(クロマツと同定できたのは1点のみ)とその用途傾向に違いがない

表 38 中屋遺跡出土木製品の時期別組成

材種	数量統計 *4		1層 #5	1層 #6	不明	総計
	点数	(%)				
アカマツ・マツ属 *1	105	33.6	3			108
コシイ・スダジイ *2	75	24.1		1		76
シキミ	22	7.1		1		23
ヒノキ	10	4.2	15	22	1	49
クリ	10	3.2				10
モミ属	9	2.9			1	10
カキノキ	5	1.6				5
コナラ属コナラ類	4	1.3		1		5
ウスノキ科	4	1.3				4
マンサク科	4	1.3				4
ムズリハ属	4	1.3				4
ツツジ属	4	1.3				4
ヤマザクラ・サクラ属 *3	3	1.0		2		5
イヌナギ属	3	1.0			1	4
コナラ属アカガシ亜属	3	1.0				3
エノキ属	3	1.0				3
ウツギ属	3	1.0				3
サハジ	3	1.0				3
ミズキ	3	1.0				3
エゴノキ属	3	1.0				3
サウラ	2	0.6	4	4	1	11
シイタ	2	0.6		1		3
サカキ	2	0.6	1			3
クマシラ属クマシラ類	2	0.6				2
クマシラ属イヌシラ類	2	0.6				2
カマツカ	2	0.6				2
スノキ属	2	0.6				2
イボタノキ属	2	0.6				2
ムツノキ	1	0.3				1
ヤマザク	1	0.3				1
ヤマモガシ	1	0.3				1
クスノキ	1	0.3				1
カナメモチ	1	0.3				1
ハナ属	1	0.3				1
ナナカド属	1	0.3				1
シラカシ科	1	0.3				1
アカメギシク	1	0.3				1
クマノミズキ属	1	0.3				1
アサビ	1	0.3				1
スギ				7	3	10
コウヤマキ			1	3		4
ブナ属				2		2
ハンノキ属ハンノキ類				1		1
トチノキ				1		1
フジ属					2	2
カヤ			1			1
モウレン属			1			1
竹類						1
合計	311	0.3	24	46	9	390

*1 アカマツ・マツ属 *2 コシイ・スダジイ *3 ヤマザクラ・サクラ属 *4 海岸線より13世紀中に帰属 *5 1層-15世紀後半-15世紀後半に帰属 *6 1層-16世紀-17世紀前半に帰属 (19世紀までのものも一部含む)

ことから、まとめたものであり、ほとんどアカマツと考えて差し支えないと判断している。これらはすべて丸木をそのまま利用した丸杭であり、小径木を伐り取って利用したことが分かる。広重の絵に見るように東海地方沿岸部の砂浜では近世に飛砂防止のため盛んにクロマツが植林され、それが美しいマツ林を形成していたが、今回出土した大部分はアカマツであり、これは海岸部での植栽と言うよりも平野丘陵部での開発による自然植生の破壊とアカマツ二次林の成立の結果と見なすことが出来る。

次いで多いのはコジイ (44点、15.0%) とスダジイ (30点、10.2%) である。この両者を比べると比率的にはコジイは角杭が多くて、スダジイは丸木の杭が多いと見ることも出来る。コジイとスダジイはシイ属に属し、樹形や諸形質、材質などは実によく似ているが、沿岸部にはスダジイが、内陸部にはコジイが分布するというのが一般的で、スダジイは東北地方南部以南に広く分布するのに対し、コジイは東海地方が分布の北東限にある。今回の結果はコジイ、スダジイ両方がほぼ同量程度に利用されており、中屋遺跡がこの両者を利用可能な地理的位置 = 太平洋からやや内陸に入った扇状地の扇尖に近い平野部 = にあったと言える。ただ直ぐ北側には丘陵が控え、恐らくはコジイの優先する林があった

表 39 護岸施設構築材の樹種組成

樹種	丸杭	角杭	丸杭(新材)	杭	角杭	点数	割合 (%)
アカマツ・マツ属*1	102			1		103	36.0
コジイ	1	42			1	44	15.0
スダジイ	12	17			1	30	10.2
シイ属?				2		2	0.7
シキミ	21			1		22	7.5
クリ	9					10	3.4
モミ属		9				9	3.1
ヒノキ	1	1		1		3	2.7
カキノキ	5		3		2	5	1.7
コナラ属コナラ属	4					4	1.4
マンサク科	4					4	1.4
ユズリハ属	4					4	1.4
ツツジ属	3			1		4	1.4
エゴノキ属	3					3	1.0
エノキ属	3					3	1.0
クスノキ科	3					3	1.0
ミズキ	3					3	1.0
ヤマザクラ・サクラ属*2	3					3	1.0
サカキ	2					2	0.7
コナラ属アカガシ亜属	2					2	0.7
クマシデ属イヌシデ節	2					2	0.7
イボタノキ属	2					2	0.7
ウツギ属	2					2	0.7
カマツカ	2					2	0.7
スノキ属	2					2	0.7
イヌマキ属				2		2	0.7
サワラ		2				2	0.7
ムクノキ	1					1	0.3
アカメガシワ	1					1	0.3
アセビ	1					1	0.3
カナメモチ	1					1	0.3
キハダ	1					1	0.3
クスノキ	1					1	0.3
クマノミズキ類	1					1	0.3
ナンシキ	1					1	0.3
テチカヤド属	1					1	0.3
ヤマグワ	1					1	0.3
ヤマモガシ	1					1	0.3
バラ属		1				1	0.3
総計	205	73	3	5	4	294	

*1 アカマツ・マツ属 = アカマツ + コマツ + 二葉松類 + マツ属

*2 ヤマザクラ・サクラ属 = ヤマザクラ + キクラ属

ことが期待され、径の大きな材が容易に手に入ったことの結果が両樹種の角杭の比率の違いに表れているのかも知れない。そして、縄文時代以来、大量に使われてきたクリ材は10点に留まり、クリが土木用材の主役ではなくなっていることがわかる。

角杭に使われた樹種はシイ、クリの他はモミ属が9本、それにサワラが2本とヒノキが1本ある。いずれも針葉樹で、これは建築材や部材に使われた木材の転用と考えるのが妥当だろう。

このように角杭が極めて樹種が限定されているのに対し、丸杭の方は実に多種多様の材が使われている。既に取り上げた樹種以外では、カキノキの5点を筆頭に、コナラ属、マンサク科、ユズリハ属が4点、ツツジ属、エゴノキ属、エノキ属、クスノキ科、ミズキ、ヤマザクラ・サクラ属が3点の他、サカキ、アカガシ亜属、イヌシデ節、イボタノキ属、ウツギ属、カマツカ、スノキ属が2点、そしてムクノキ以下10の樹種が1点で、すべて広葉樹である。

これらの杭に使われた樹種の組成は大変興味深いものがある。まず第一には東海地方の平野の農村部で身近に生えているであろう樹種として、アカマツ、シイ類、クリの他にはシキミ、エゴノキ属（エゴノキ）、エノキ属（エノキ）、ミズキ、ヤマザクラ、イボタノキ属、サカキ、カシ類、イヌシデ節（イヌシデ）、カマツカ、ムクノキ、アカメガシワ、ヤマグワなどを挙げることができよう。一方、屋敷地などに植栽されていたのではないと思われる樹種に、カキノキ、ユズリハ属、クスノキ、アセビ、カナメモチなどが考えられる。これらは植栽されたものではあるが適宜伐り取って杭に用いたのではないだろうか。そして、低木でよくぞこのようなものを杭に用いたものだとと言えるものがツツジ属、ウツギ属、

スノキ属などで、これらは細い幹しか形成しないので、ほんの一寸した土留め程度の役割しか期待できなかったと思われる。

そして、植物学の立場から最も注目すべきは、1点のみの出土だがヤマモガシ科の「ヤマモガシ」である。ヤマモガシ科は南半球に分布の中心がある樹木で、我が国にはヤマモガシただ1種が分布するが、その東北限は静岡県沿岸部であり、当遺跡付近ではかなり希な樹木である。この木を好んで屋敷地などに植栽していたとは考えにくく、自然分布していた樹木から杭材を伐り取ったと考えるのが妥当であるが、そのような「希」な樹木が中世の河川の護岸施設に使われていたと言うことは植物分布の人間による改変（分布変遷）を考える上で実に示唆に富む証拠と言える。

いずれにしても、この13世紀の護岸施設に伴う杭群が実にさまざまな樹木を用いて構築されていたと言うことは、考古学のみならず、植物学的にも興味深いことである。

(3) 中屋遺跡の木製品の樹種

表40は杭、板材、柱材、用途不明品などを除いた木製品を時期毎に並べたものである。

護岸施設内から出土した木製品は、鞍と尻符木簡である。鞍は前輪と後輪、そして左右の居木の樹種が調べられた。前輪と後輪はいずれもクマシデ属のクマシデ節の材であった。記載の項にあるようにこの節にはサワシバとクマシデがある。前者は全国のやや冷涼な山地の沢沿いに多い樹木で、静岡県地方でも山間・丘陵部に入ると比較的普通に見られる。樹高15m、幹径40cmほどになり、材は加工・割裂は困難だが、硬く強靱で柄物や櫛等の特用がある。クマシデはサワシバよりやや温かい地方に分布の中心があり、東北部以南の丘陵部、平野部の湿潤な地域に比較的普通に生育し、高さ10m、幹径30cmほどになる。材質はサワシバと同様で利用も同様であり、いずれも前輪、後輪の用材に適していると言える。これらのことから、この材が、顕微鏡的性質に分布や材質を加味してもサワシバなのかクマシデなのかは判別がつかない。一方、居木は2点ともキハダであった。キハダは冷温帯の山間部に分布する落葉樹で、樹皮が薬用の「黄蘗」となるが、材は柔らかいが強く、木理美しく切削加工が容易で家具、指物、挽物などに適していることから、居木への利用もまさに材質を活かした利用と言える。キハダが浜松地方では平野部にはほとんど分布せず山間地に入らないと手に入らない材であるし、サワシバ、クマシデも山地に多いことから、この鞍は、遺跡周辺に生えている木を使ってつくられたと言うよりは、他所で作られたか、あるいは材料が他所から運ばれてきたものであることを示唆する。

Ⅱ層（13世紀後半～15世紀後半）の木製品には、曲物銅板などが7点あり、5点がヒノキ、残りがサワラと二葉松類と同定できた。更に草履芯1点、箸1点、笹塔婆1点もヒノキで、これらは古代から近世に至る東海地方での用材としてうなずけるものである。ただ、刺物1点がアカマツ、漆碗1点がモクレン属（ホオノキ？）はそれらの樹種がそれらの用途に使われることはあるが、決してメジャーな用材とは言えない。

I層（主に16世紀～17世紀前半）の出土品のうち、曲物、指物、箱、笹塔婆は針葉樹製であり、その多く（15点）をヒノキが占め、スギは2点と少なく、一方、コウヤマキも2点ある。東海地方では弥生時代以降、この地域に多産するスギを主要木材として建築土木のみならず、さまざまな生活具、製品に利用してきているが、その比率は西に行くほど減り、他の樹種、特にヒノキが使われる傾向が知られている。本遺跡のこれらの出土材はその傾向に良く合うものではあるか、近世には針葉樹天然資源の減少により、より早く安価に大量に供給できるスギに用材の比重が増していく傾向が一般的であり、その意味で当遺跡でのこれらの用材がヒノキ中心であることは、これら出土材の使用上の「家格」が上位に属する者であることを示していると考えられる。また、コウヤマキの存在は、それが当地での生産で

表 40 木製品の樹種（護岸施設構築材を除く）

遺物番号	測定番号	遺物名	出土層位	時期	遺物名	樹種
1075	8583	SR8001 護岸施設	護岸構築土	13 世紀中頃	葦 (古 葦木)	キハダ
1076	8585	SR8001 護岸施設	護岸構築土	13 世紀中頃	葦 (古 葦木)	キハダ
1074	8584	SR8001 護岸施設	護岸構築土	13 世紀中頃	葦 (新編)	クマシラ節
1073	8582	SR8001 護岸施設	護岸構築土	13 世紀中頃	葦 (新編)	クマシラ節
1081	8637	SR8001 護岸施設	護岸構築土	13 世紀中頃	柞材木節	ヒノキ
1079	8635	SR8001 護岸施設	護岸構築土	13 世紀中頃	柞材木節 (短)	ヒノキ
1078	8634	SR8001 護岸施設	護岸構築土	13 世紀中頃	柞材木節 (長)	ヒノキ
1077	8633	SR8001 護岸施設	護岸構築土	13 世紀中頃	柞材木節 (短)	ヒノキ
1080	8636	SR8001 護岸施設	護岸構築土	13 世紀中頃	柞材木節 (長)	ヒノキ
-	11529	SR8001	葦	13 世紀後半～15 世紀後半	葦状木製品	ヒノキ
1244	11517	SR8001	葦	13 世紀後半～15 世紀後半	葦	ヒノキ
1249	11518	SR8001	葦	13 世紀後半～15 世紀後半	葦	アカマツ
1239	11638	SR8001	葦	13 世紀後半～15 世紀後半	葦	ヒノキ
1246	11485	SR8001	葦	13 世紀後半～15 世紀後半	葦	サワラ
1247	11636	SR8001	葦	13 世紀後半～15 世紀後半	葦	ニホヒ
1241	11486	SR8001	葦	13 世紀後半～15 世紀後半	葦	ヒノキ
-	11533	SR8001	葦	13 世紀後半～15 世紀後半	葦	ヒノキ
1240	11471	SR8001	葦	13 世紀後半～15 世紀後半	葦	ヒノキ
1242	11475	SR8001	葦	13 世紀後半～15 世紀後半	葦	ヒノキ
1243	11476	SR8001	葦	13 世紀後半～15 世紀後半	葦	ヒノキ
1264	11461	SR8001	葦	13 世紀後半～15 世紀後半	葦	ケレンノ木
1245	10307	SR8001	葦	13 世紀後半～15 世紀後半	葦	ヒノキ
1614	11490	SC4001	遺土下層	16 世紀後半	遺土下駄	カヤ
1373	11523	SR8001	I	16 世紀～17 世紀前半	葦	スギ
1372	11522	SR8001	I	16 世紀～17 世紀前半	葦	ヒノキ
1382	11488	SR8001	I	16 世紀～17 世紀前半	葦	サワラ
1382	11489	SR8001	I	16 世紀～17 世紀前半	葦	シイ
1359	11635	SR8001	I	16 世紀～17 世紀前半	葦	コウヤマキ
1360	11549	SR8001	I	16 世紀～17 世紀前半	葦	ヒノキ
1362	11650	SR8001	I	16 世紀～17 世紀前半	葦	ヒノキ
1357	11551	SR8001	I	16 世紀～17 世紀前半	葦	ヒノキ
1372	11652	SR8001	I	16 世紀～17 世紀前半	葦	ヒノキ
1377	11463	SR8001	I	16 世紀～17 世紀前半	葦	シラカシ
1376	10302	SR8001	I	16 世紀～17 世紀前半	葦	スギ
1374	11545	SR8001	I	16 世紀～17 世紀前半	葦	ヒノキ
1375	11553	SR8001	I	16 世紀～17 世紀前半	葦	ヒノキ
-	11483	SR8001	I	16 世紀～17 世紀前半	葦	コウヤマキ
-	11490	SR8001	I	16 世紀～17 世紀前半	葦	サワラ
1368	10301	SR8001	I	16 世紀～17 世紀前半	葦	ヒノキ
1369	11472	SR8001	I	16 世紀～17 世紀前半	葦	ヒノキ
1386	11477	SR8001	I	16 世紀～17 世紀前半	葦	ヒノキ
1070	11473	SR8001	I	16 世紀～17 世紀前半	葦	ヒノキ
1071	11474	SR8001	I	16 世紀～17 世紀前半	葦	ヒノキ
-	11495	SR8001	I	16 世紀～17 世紀前半	葦	スダジイ
1365	11496	SR8001	I	16 世紀～17 世紀前半	葦	トチノキ
1363	11492	SR8001	I	16 世紀～17 世紀前半	葦	ハンノキ節
1367	11494	SR8001	I	16 世紀～17 世紀前半	葦	ブナ節
-	11496	SR8001	I	16 世紀～17 世紀前半	葦	ブナ節
1366	11487	SR8001	I	16 世紀～17 世紀前半	葦	ヤマザクラ
1375	11462	SR8001	I	16 世紀～17 世紀前半	葦	スギ
1379	80304	SR8001	I	16 世紀～17 世紀前半	葦	ヒノキ
1381	80305	SR8001	I	16 世紀～17 世紀前半	葦	ヒノキ
1380	80306	SR8001	I	16 世紀～17 世紀前半	葦	ヒノキ
1383	11410	SR8001	I (遺土層)	17 世紀後半～19 世紀	葦	ヤマザクラ
1358	11639	SR8001	不明	不明	葦	ヒノキ
-	11463	SR8001	不明	不明	葦	スギ

はなく、他所（畿内地方？）からの移入品である可能性も示唆する。一方、漆椀については中世以降近世においては「家格」と木地の樹種と塗り・加飾が連動していることが示されている（北野信彦、近世出土漆器の研究、2005；四柳嘉章、漆、I,II, 2006）。これらの研究に照合すると本遺跡出土漆椀 6 点のうち 2 点が最も安価と言われるブナ材で、1 点が中程度と言われるトチノキである他は、スダジイ、ハンノキ節、ヤマザクラと、近世の挽物に使われないことはないが決してメジャーではない用材で、ヒノキ材使用のような明確な傾向は見取れない。

以上の他、16 世紀の遺物下駄がカヤであること、17 世紀後半～19 世紀の櫓がヤマザクラであることなど、この遺跡からは類例の少ない用材が新たに知られるようになっており、本調査により、杭材に用いた樹種の多様性と共に、中世から近世の木材利用に新たな類例を多く加えることになったと言える。

2. 鉄滓の金属学的調査

(1) 調査の目的

中屋遺跡は静岡県浜松市浜北区根堅に所在する。奈良時代から近世までの遺構が確認された複合遺跡である。8世紀前後と推定される遺構(SF6032)からは鉄滓、羽子が各1点出土しており、鍛冶関連遺構の可能性が指摘されている。また中世、近世の溝跡からも年代の特定は難しいが、鉄滓が2点出土している。当遺跡での鉄器生産の様相を検討するため、これら鉄滓の調査を実施する運びとなった。

(2) 調査方法

① 供試材

表41に示す。出土鉄滓3点の調査を行った。

表41 供試材の履歴と調査項目

符号	出土位置	遺物名称	計測値		メタル度	マクロ 顕微鏡			調査項目				備考	
			大きさ(mm)	重量(g)		組織	組織	ビッカース 断面硬度	X線分析	EPMA	化学分析	最大欠け		加-
NKY-1	SF6032	板形鍛冶滓(8号煎)	55×40×35	43.0	なし	○	○	○		○	○			
NKY-2	大溝	板形鍛冶滓	80×60×28	171.3	なし	○	○	○		○	○			
NKY-3	SD6001	板形鍛冶滓	80×78×41	243.0	なし	○	○	○		○	○			

② 調査項目

i. 肉眼観察

遺物の外観上の観察所見を簡単に記載した。これらをもとに分析試料採取位置を決定している。

ii. マクロ組織

本来は肉眼またはルーペで観察した組織であるが、本稿では顕微鏡埋込み試料の断面全体像を低倍率で撮影したものを指す。当調査は、顕微鏡検査によるよりも広い範囲にわたって、組織の分布状態、形状、大きさなどの観察ができる利点がある。

iii. 顕微鏡組織

滓中の鉱物の調査を目的として、光学顕微鏡を用い観察を実施した。観察面は供試材を切り出した後、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の3 μ と1 μ で順を追って研磨している。

iv. ビッカース断面硬度

鉄滓中の鉱物の同定を目的として、ビッカース断面硬度計(Vickers Hardness Tester)を用いて硬さの測定を行った。試験は鏡面研磨した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除いた商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用した。

v. EPMA (Electron Probe Micro Analyzer) 調査

化学分析を行えない微量試料や鉱物組織の微小域の組織同定を目的とする。分析の原理は、真空中で試料面(顕微鏡試料併用)に電子線を照射し、発生する特性X線を分光後に画像化し、定性的な結果を得る。更に標準試料とX線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。

vi. 化学組成分析

供試材の分析は次の方法で実施した。

全鉄分 (Total Fe)、金属鉄 (Metallic Fe)、酸化第一鉄 (FeO) : 容量法

炭素 (C)、硫黄 (S) : 燃焼容量法、燃焼赤外線取法

二酸化珪素 (SiO_2)、酸化アルミニウム (Al_2O_3)、酸化カルシウム (CaO)、酸化マグネシウム (MgO)、酸化カリウム (K_2O)、酸化ナトリウム (Na_2O)、酸化マンガン (MnO)、二酸化チタン (TiO_2)、酸化クロム (Cr_2O_3)、五酸化燐 (P_2O_5)、バナジウム (V)、銅 (Cu)、二酸化ジルコニウム (ZrO_2) : ICP (Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer) 法 : 誘導結合プラズマ発光分光分析。

(3) 調査結果

① NKY-1 碗形鋳冶滓 (ガラス質滓)

肉眼観察 やや小型で細かい凹凸のある 43g の碗形鋳冶滓である。赤地部分は軽い質感の黒色ガラス質滓で、表面に一部淡褐色の被熱粘土が固着している。羽口先端など、炉材粘土の溶融物と推定される。マクロ組織 図 397-①に示す。観察面全体が炉材粘土の溶融物で、内部には粘土中に含まれていた、石英・長石類などの鉱物が点在する。また一部 (写真下側) はガラス質化が進んでいる。

顕微鏡組織 図 397-②③に示す。マクロ写真下側のガラス質滓部分の拡大である。ごく微細な灰褐色多角形結晶はマグネタイト (Magnetite : $\text{FeO} \cdot \text{Fe}_2\text{O}_3$) と推定される。さらに淡灰色柱状結晶ファヤライト (Fayalite : $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) も暗黒色ガラス質滓中に晶出する。

ピッカース断面硬度 図 397-③の灰褐色多角形結晶の硬度を測定した。硬度値は 653Hv であった。

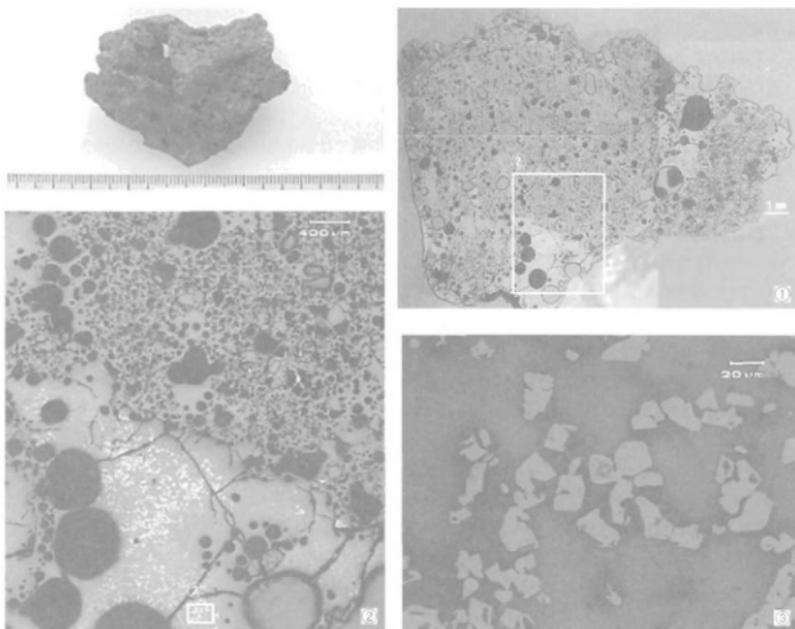


図 397 マクロ組織と顕微鏡組織 (NKY-1)

マグネタイトの文献硬度値 500～600Hv (註1) と比較するとやや硬質であった。このため純粋なマグネタイト (Magnetite: $\text{FeO} \cdot \text{Fe}_2\text{O}_3$) ではなく、他の元素を若干固溶する可能性が高いと考えられる。(組成についてはEPMA調査の項で詳述する)

EPMA調査 図39Bにガラス質滓の反射電子像 (COMP) を示す。1の灰褐色多角形結晶は、特性X線像では鉄 (Fe)、チタン (Ti) に反応がみられる。定量分析値は、表42のように 88.9%FeO - 4.6% Al_2O_3 - 2.1% TiO_2 であった。マグネタイト (Magnetite: $\text{FeO} \cdot \text{Fe}_2\text{O}_3$) で、アルミナ (Al_2O_3)、チタニア (TiO_2) を微量固溶する(註2)。2の淡灰色柱状結晶の定量分析値は 58.0%FeO - 2.4%MgO - 33.7% SiO_2 であった。ファヤライト (Fayalite: $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) で、マグネシア (MgO) を微量固溶する。3の素地部分の定量分析値は 55.7% SiO_2 - 11.4% Al_2O_3 - 8.2%CaO - 3.5% K_2O - 20.5%FeO であった。非晶質珪酸塩で、かなり鉄分 (FeO) を固溶する。

化学組成分析 表42に示す。全鉄分 (Total Fe) は 9.41% と低値であった。このうち金属鉄 (Metallic Fe) は 0.22%、酸化第1鉄 (FeO) 4.53%、酸化第2鉄 (Fe_2O_3) 8.10% の割合であった。造滓成分 (SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + K_2O + Na_2O) 82.31% 非常に高値であるが、塩基性成分 (CaO + MgO) は 2.59% と低値である。また主に製鉄原料の砂鉄に含まれる二酸化チタン (TiO_2) は 0.72%、バナジウム (V) が 0.01% と低値であった。酸化マンガン (MnO) も 0.04%、銅 (Cu) < 0.01%、二酸化ジルコニウム (ZrO_2) 0.02% といずれも低値である。

以上調査結果のように、当資料は炉材粘土の溶融物を主成分 (SiO_2 , Al_2O_3) とするガラス質滓であった。また滓中には鉄酸化物の結晶(マグネタイト)が確認されたが、これは製鉄原料の鉄素材が加熱され、酸化したものと判断される。さらに微量チタン (TiO_2) が検出されている。これが製鉄原料起源のものであれば、始発原料は砂鉄であるが、炉材粘土に含まれる鉱物起源の可能性もあるため断定は難しい。

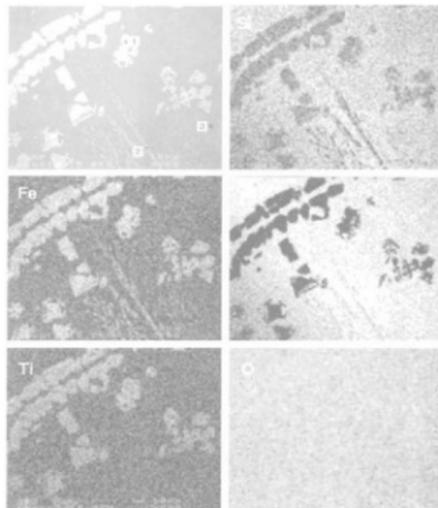


図39B 反射電子像 (COMP) および特性X線像 (NKY-1)

表42 定量分析値 (NKY-1)

Element	1	2	3
K_2O	0.082	0.109	3.451
Na_2O	—	—	0.386
CuO	0.014	0.110	0.044
MgO	0.172	2.422	0.290
CaO	0.029	0.703	8.152
Al_2O_3	4.612	0.103	11.411
FeO	88.925	57.955	20.516
SiO_2	0.351	33.731	55.731
TiO_2	2.148	0.055	0.372
S	2.148	0.055	0.372
MnO	0.103	0.326	0.084
As_2O_5	—	0.050	—
P_2O_5	0.011	0.059	0.187
ZrO_2	—	—	0.045
Cr_2O_3	0.219	—	—
V_2O_5	—	—	0.014
Total	96.666	95.646	102.698

② NKY-2 碗形鍛冶滓

肉眼観察 171gの平面不整半円状で扁平な碗形鍛冶滓破片である。上面は比較的平坦で、下面には薄い粉状痕と推定される細かい凹凸がある。側面3面は連続した破片で、大小の気孔が点在するが、緻密で重量感のある滓である。

マクロ組織 図399-①に示す。断面には細かい気孔が点在するが、比較的緻密で均質な滓である。

顕微鏡組織 図399-②③に示す。ほぼ全面白色樹枝状結晶ウスタイト (Wustite: FeO)、淡灰色柱状結晶ファヤライトが素地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。また滓中のごく微細な明白色粒は金属鉄、不定形の青灰色部は酸化鉄である。

表43 供試材の化学組成

番号	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe ₂ O ₃)	二酸化珪素 (SiO ₂)	酸化Al ₂ O ₃ (Al ₂ O ₃)	酸化CaO (CaO)	酸化MgO (MgO)	酸化K ₂ O (K ₂ O)	酸化Na ₂ O (Na ₂ O)	酸化MnO (MnO)
NKY-1	9.41	0.22	4.53	8.10	85.02	11.18	1.48	1.11	3.01	0.51	0.04
NKY-2	58.05	0.18	61.86	15.14	12.42	2.67	3.23	1.10	0.98	0.15	0.11
NKY-3	44.37	0.13	43.33	15.10	31.14	4.36	0.62	0.45	0.55	0.17	0.05

番号	二酸化チタン (TiO ₂)	酸化ZnO (ZnO)	砒素 (S)	五酸化リン (P ₂ O ₅)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	二酸化モリブデン (MoO ₃)	渣滓成分	渣滓成分	TK02 Total Fe
NKY-1	0.72	0.07	0.020	0.14	0.14	0.01	<0.01	0.02	82.51	8.747	0.077
NKY-2	0.17	0.04	0.021	0.32	0.12	<0.01	0.01	<0.01	20.55	0.349	0.003
NKY-3	0.32	0.04	0.035	0.17	0.07	0.01	0.01	<0.01	37.43	0.844	0.007

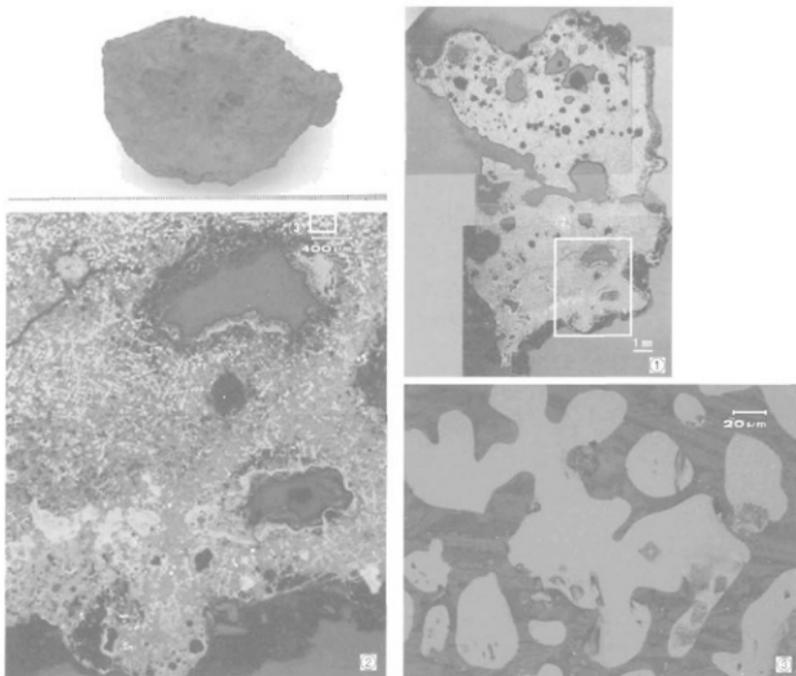


図399 マクロ組織と顕微鏡組織 (NKY-2)

ピッカース断面硬度 図 399-③の白色樹枝状結晶の硬度を測定した。硬度値は462Hvであった。ウスタイトの文献硬度値450～500Hvの範囲内であり、ウスタイトに同定される。

EPMA 調査 図 400 に滓部の反射電子像 (COMP) を示す。4 の白色不定形結晶は、特性 X 線像では鉄 (Fe)、酸素 (O) に反応がみられる。定量分析値は102.4%FeOであった。ウスタイト (Wustite: FeO) に同定される。5 の素地部分の定量分析値は41.8%SiO₂ - 16.9%Al₂O₃ - 10.6%CaO - 8.6%K₂O - 1.2%Na₂O - 22.6%FeO - 1.8%P₂O₅であった。非晶質硫酸塩で、かなり鉄分 (FeO) を固溶する。また微量増酸 (P₂O₅) も含まれる。6 の淡灰色柱状結晶の定量分析値は64.2%FeO - 4.5%CaO - 32.7%SiO₂であった。ファヤライト (Fayalite: 2FeO·SiO₂) で、ライム (CaO) を微量固溶する。さらに14の微小明白色粒の定量分析値は101.2%Feであった。金属鉄 (Metallic Fe) に同定される。

化学組成分析 表 44 に示す。全鉄分 (Total Fe) は58.85%と高く、このうち金属鉄 (Metallic Fe) は0.18%、酸化第1鉄 (FeO) 61.86%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 15.14%の割合であった。渣滓成分 (SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO + K₂O + Na₂O) は20.55%で、塩基性成分 (CaO + MgO) は4.33%であった。また主に製鉄原料の砂鉄に含まれる二酸化チタン (TiO₂) は0.17%、バナジウム (V) が<0.01%と低値であった。さらに酸化マンガン (MnO) も0.11%、銅 (Cu) 0.01%、二酸化ジルコニウム (ZrO₂) <0.01%と低値であった。

当資料は鉄酸化物の割合が高く、輪形鍛冶滓 (NKY-1) より高温下の熱間作業で生じた鍛錬鍛冶滓に分類される。鉄製錬で生じる不純物 (鉄チタン酸化物) をほとんど含まない、きれいな鉄素材を熱間で鍛打加工した時の反応副生物と判断される。

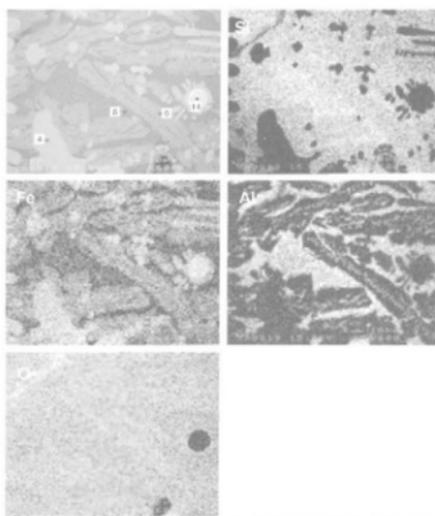


図 400 反射電子像 (COMP) および特性 X 線像 (NKY-2)

表 44 定量分析値 (NKY-2)

Element	4	5	6
K ₂ O	0.006	8.578	0.216
Na ₂ O	0.088	1.196	0.094
CuO	—	0.109	0.025
MgO	0.076	0.035	0.496
CaO	—	10.567	4.488
Al ₂ O ₃	0.571	16.851	0.429
FeO	102.357	22.636	64.213
SiO ₂	0.190	41.825	32.701
TiO ₂	0.233	0.399	0.035
S	0.002	0.071	—
MnO	0.113	—	0.248
As ₂ O ₃	0.003	—	—
P ₂ O ₅	0.002	1.776	0.104
ZrO ₂	0.172	0.037	—
Cr ₂ O ₃	—	—	0.028
V ₂ O ₅	0.039	—	0.050
Total	103.852	104.138	103.127

Element	14
O	0.195
S	0.005
Sn	0.004
Cu	0.630
Fe	101.178
V	0.012
Total	102.024

③ NKY-3 楕形鎮治滓

肉眼観察 423gのほぼ完形の楕形鎮治滓である。上面表層には一部、羽口先端溶融物と推定される黒色ガラス質滓が点在する。また下面にも細かい木炭痕が密に残る部分と、灰褐色の鎮治床土が付着する部分とが確認される。滓の地の色調は暗灰色で、重量感のある滓である。

マクロ組織 図401-①に示す。写真下側の暗灰色部は、被熱した鎮治床土部分である。また滓中には細かい気孔が多数点在するが、比較的緻密である。

顕微鏡組織 図401-②~④に示す。上面表層側の拡大である。白色樹枝状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。鎮治滓の晶癖といえる。

ピッカース断面硬度 図401-③④の硬度を測定した。③の白色樹枝状結晶の硬度値は449Hv、④の淡灰色柱状結晶の硬度値は592Hvであった。前者はウスタイトの文献硬度値、後者はファヤライトの文献硬度値の下限を若干下回るが、誤差の範囲内といえよう。

EPMA調査 図402-①に滓部（上面側）の反射電子像（COMP）を示す。10の暗黒色結晶の定量分析値は18.2% K_2O - 62.8% SiO_2 - 25.5% Al_2O_3 であった。正長石（Orthoclase: $KAlSi_3O_8$ ）と推定される。11の白色樹枝状結晶の定量分析値は102.2% FeO であった。ウスタイト（Wustite: FeO ）に同定される。また12はウスタイト粒内の暗褐色微結晶で、定量分析値は53.9% FeO - 46.0% Al_2O_3 - 1.2% TiO_2 であった。ヘーシナイト（Hercynite: $FeO \cdot Al_2O_3$ ）で、チタニア（ TiO_2 ）を微量固溶する。13の淡灰色結晶の定量分析値は74.4% FeO - 31.5% SiO_2 であった。ファヤライト（Fayalite: $2FeO \cdot SiO_2$ ）に同定される。

さらにもう1視野、図402-②に滓部（下面側）の反射電子像（COMP）を示す。7の素地部分の

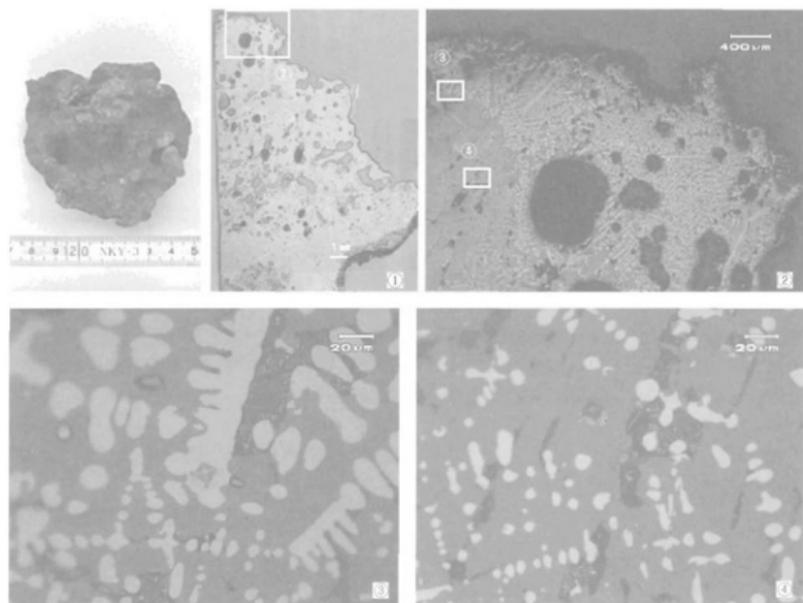


図401 マクロ組織と顕微鏡組織（NKY-3）

表 45 定量分析値 (NKY-3)

Element	7	8	9	10	11	12	13
F	—	—	—	0.098	—	—	—
K ₂ O	3.505	—	0.021	18.171	0.009	—	—
Na ₂ O	0.844	—	0.065	0.422	0.038	0.029	0.033
CuO	0.102	—	0.049	—	—	0.043	—
MgO	0.016	0.045	0.290	—	0.043	0.016	0.094
CaO	8.602	—	0.612	0.032	—	0.008	0.250
Al ₂ O ₃	12.574	6.490	0.047	25.456	0.477	45.951	0.075
FeO	19.803	86.832	72.872	1.670	102.189	53.891	74.429
SiO ₂	57.458	0.763	31.565	62.793	0.389	0.680	31.452
TiO ₂	0.198	2.375	0.085	0.046	0.611	1.162	0.041
S	0.071	0.007	—	—	0.003	—	0.017
MnO	0.088	0.089	0.197	—	—	0.015	0.087
As ₂ O ₃	—	—	—	—	—	0.031	0.006
P ₂ O ₅	0.511	—	0.067	0.081	0.005	—	0.044
ZrO ₂	0.022	—	0.032	0.022	—	—	—
Cr ₂ O ₃	—	0.272	0.041	0.017	—	0.366	—
V ₂ O ₅	—	0.299	—	—	0.090	0.250	—
Total	103.794	97.172	105.943	108.767	103.834	102.430	106.628

定量分析値は57.5%SiO₂ - 12.6%Al₂O₃ - 8.6%CaO - 3.5%K₂O - 19.8%FeOであった。非晶質珪酸塩で、かなり鉄分(FeO)を固溶する。8の灰褐色多角形結晶(FeO)の定量分析値は86.8%FeO - 6.5%Al₂O₃ - 2.4%TiO₂であった。マグネタイト(Magnetite: FeO·Fe₂O₃)で、アルミナ(Al₂O₃)、チタニア(TiO₂)を微量固溶する。さらに9の淡灰色結晶の定量分析値は72.9%FeO - 31.6%SiO₂であった。ファヤライト(Fayalite: 2FeO·SiO₂)に同定される。

化学組成分析 表45に示す。全鉄分(Total Fe)44.37%に対して、金属鉄(Metallic Fe)0.13%、酸化第1鉄(FeO)43.33%、酸化第2鉄(Fe₂O₃)15.10%の割合であった。渣滓成分(SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO + K₂O + Na₂O)37.43%とやや高めで、塩基性成分(CaO + MgO)は1.08%と低値である。また主に製鉄原料の砂鉄に含まれる二酸化チタン(TiO₂)0.32%、バナジウム(V)が0.01%と低値であった。さらに酸化マンガン(MnO)は0.06%、銅(Cu)0.01%、二酸化ジルコニウム(ZrO₂)<0.01%と低値である。

当鉄滓も主に鉄酸化物、および炉材粘土溶融物(SiO₂主成分)からなり、塊形鍛冶滓(NKY-1)より高温下の熱間作業で生じた鍛錬鍛冶滓に分類される。

また滓中からはごく微量チタン(TiO₂)が検出された。これが製鉄原料に由来するものであれば、始発原料は砂鉄と推定される。

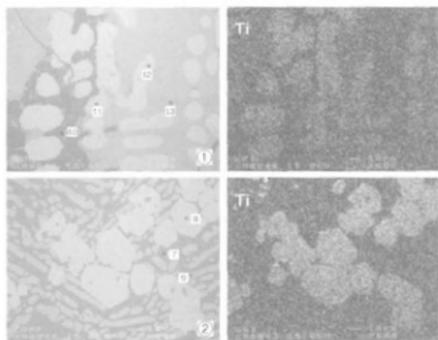


図 402 反射電子像 (COMP) および特性 X 線像 (NKY-3)

(4) 小結

中屋遺跡から出土した鉄滓3点を分析調査した結果、以下の点が明らかとなった。

橢形鍛冶滓(NKY-1)は、炉材粘土の溶融物を主成分(SiO_2 , Al_2O_3)とするガラス質滓であった。また滓中には鉄酸化物の結晶(マグネタイト)が確認された。これは鍛冶原料の鉄素材が加熱され、酸化したものと判断される。熱間での鍛冶加工の際に生じた遺物といえよう。ただし、赤熱鉄素材の表面酸化防止に粘土汁など塗布した、低温素延べや火造り時の排滓の可能性も考えられる。さらに微量チタン(TiO_2)が検出されている。これが製鉄原料起源のものであれば、始発原料は砂鉄といえるが、炉材粘土に含まれる鉱物起源の可能性もあるため断定は難しい。

橢形鍛冶滓2点(NKY-2, 3)は、ともに橢形鍛冶滓(NKY-1)より高温下の熱間作業で生じた鍛錬鍛冶滓に分類される。当遺跡では、鉄製錬で生じる不純物(鉄チタン酸化物)をほとんど含まない、きれいな鉄素材を熱間で鍛打加工して、鍛造鉄器を製作していた可能性が考えられる。また橢形鍛冶滓(NKY-3)からは、ごく微量チタン(TiO_2)が検出された。これが製鉄原料起源のものであれば、始発原料は砂鉄と推定される。近世の橢形鍛冶滓であれば妥当な結果といえる。

註

(1)日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968 ウスタイトは450～500Hv、マグネタイトは500～600Hv、フェイヤライトは600～700Hvの範囲が提示されている。

(2)黒田吉益・源訪豪位『偏光顕微鏡と造岩鉱物』[第2版]共立出版株式会社 1983 第5章 鉱物各論 D. 尖晶石類・スピネル類(Spinel Group)の記載に加筆。尖晶石類の化学組成の一般式は XY_2O_4 と表記できる。Xは2価の金属イオン、Yは3価の金属イオンである。その組み合わせでいろいろの種類のものがある。(後略)

第7章 総括

1. 中屋遺跡出土瓜文螺鈿鞍について

(1) 中世螺鈿鞍前史

中国から朝鮮半島を経由して、わが国に乘馬の風習が伝わってきたのは、古墳時代、6世紀ころのことと考えられている。その当時用いられていたのは、「両輪直立式」の鞍、すなわち、逆U字形の前輪と後輪が、幅広の居木の上に直立する形であった。

土中では木製素地が残存しにくいこともあって、いまのところ、この形式に属するものとしては、石木遺跡（佐賀県小城市）から出土した前輪の残欠1点が知られているにすぎない。しかし、両輪の外側を飾る金具については、誉田丸山古墳（大阪府）や、藤ノ木古墳（奈良県）、宮地嶽古墳（福岡県）などから、金銅製透彫で、まことに精緻な細工が凝らされたものが発見されている。古墳時代5世紀から6世紀にかけての、両輪直立鞍の盛行を示す遺例といえよう。

なお、これら両輪直立鞍は、朝鮮半島の古墳からの出土例が多かったため、新羅鞍などと通称された時期もあった。しかし、現在では、これを中国の晋で始まり、3世紀から5世紀にかけて用いられた形式とする説が有力になっている。わが国には、やはり朝鮮半島を経由して伝わったものであろう。

なお、この両輪直立鞍は、その構造上、居木と両輪との結合を強固なものにすることが難しく、また、後輪の形も騎乗者が馬上で動き易いようにはできていない。騎乗の戦闘など、激しい動きに耐えうる鞍でないことは明らかである。

次いで、古墳時代の末から奈良時代初頭にかかる、両輪直立式に替わって「後輪後傾式」の鞍が大陸から移入されてくる。これは、やはり、幅広の居木の上に前輪と後輪を立てたものだが、文字どおり、後輪が後方に傾いている点を際だった特色とする。騎射などの際、後輪が傾いていた方が運動性が良いことはいうまでもない。中国で両輪直立鞍に替わって、後輪後傾形の鞍が使われ始めたのは5世紀の半ば、南北朝時代初頭のことと推定されている。これは五胡十六国、あるいは北魏などの影響力が強まった時期でもあり、馬具もその例外ではなかったということになろう。

なお、初期の後輪後傾鞍については、実例が遺されていないので詳しいことはわからない。ただ、北齊、北魏などの墳墓に納められた明器の騎馬像には、明らかに後輪後傾形とみえる鞍が表現されている。わが国においても、奈良時代の後半に入ると、その後輪後傾鞍の形に倣った鞍が姿をみせる。ただ、中国で使用されていた後輪後傾鞍が、居木の上に前輪と後輪が乗るような形であったのに対して、わが国で使われた後輪後傾鞍では、両輪を居木が連結するような形を探るのが大きな特色である。

この時期の鞍の形は、奈良・正倉院に伝わる十背の鞍、そして、奈良・手向山神社に伝来する黒漆四枚居木鞍（重要文化財）などを通じて、今日でもはっきりと確認することができる。前輪・後輪の外側を平滑に仕上げ、左右二枚ずつ、合わせて四枚の居木をもつこれら鞍の形は、世界にも類を見ない特異なものだが、これがわが国で中世以降、永く踏襲されていく鞍の原型となる。

正倉院の鞍は、『国家珍宝帳』などに記された御物ではないので、その制作年代を厳密に押さえることはできない。ただ、藤原仲麻呂の乱（天平宝字8年 764）の際、鞍を始めとする正倉院の武器武具が大量に持ち出され、乱の鎮定後、代替品が新たに納入されたという説があり、もしそれがあたっているなら、これらの鞍の制作年代は8世紀の中頃ということになろう。

前述のように、大陸の後輪後傾形の鞍では、居木が鞍橋の構造の主体をなし、両輪はその前・後端に乗るような形であった。ところが、日本の鞍では、主体は両輪にあり、居木はそこに組み込まれているかのようにみえる。

乗馬に習熟した騎馬民族の間では、鞍は単なるクッションに過ぎず、さして複雑な構造のものを必要

としなかったであろう。鞍自体にさまざまな工夫が加えられるようになったのは、農耕を生業とし、乗馬に不慣れた漢民族が、必要に迫られて馬に乗り始めてからのことであり、わが国の場合は、山がちの地形、あるいは国家馬の体型などの問題もあって、漢民族よりもさらに乗馬の風習とは縁遠いものがあったと思われる。両輪直立鞍のような非機能的な馬具が長く使われたことや、両輪に厩木を組み込むという特異な形の鞍が生み出されたことも、そのあたりの事情を物語るものといえようか。

(2) 中世螺鈿鞍の形状

奈良時代から平安時代中期にかけてのわが国では、前項でとりあげた古代鞍様式の鞍が一般に用いられていた。しかしながら、平安後期に入ると、奈良朝以来続いてきた律令体制が衰退して新たに武士階級が勃興する。この過程で、保元、平治、さらに俗にいう源平合戦など、いくつもの戦乱が頻発するが、それにともなって、馬具にも武士の要求を講たすべく新しい形式が登場する。いわゆる中世螺鈿鞍様式がそれである。

正倉院鞍に代表される古代鞍形式では、前輪・後輪の外側は平滑に仕上げられていたが、中世鞍では、海、磯とよばれる起伏が設けられている。また、後輪は、立体感に富んだ形をみせて、後方へ大きく張り出し、爪先は強く外反する。そして、何よりも特筆すべきは、前輪の肩に「手形」が刻られている点であろう。

手形は、馬上で手綱を巻き付けておくための切り欠きで、乗馬の際の手掛かりとしても用いられた。その発祥については、『平治物語』に

(戦は)十二月廿七日巳刻のことなるに、一むら雨ざつとして風は激しく吹開、物具氷りてたやすからず。鎌田(正清)が鞍の前輪つららみて、のりかねければ、悪源太(源義平)見給いて「手形をつけてのれや」と宣ひければ、ふつふつと手形をきざみつけて手綱をうちかけて来てんけり、平治の合戦よりして手形はありとかなや…… (中巻「待賢門の軍の事」)

と記されている。もちろん軍記物の記述をそのまま信じることはできないが、この物語が成立した鎌倉時代初期の段階で、中世鞍の形が戦陣の中で創り出されたもの、との認識があったことは踏記すべきだろう。

さて、この中世螺鈿鞍は、その前輪の輪郭と素地の断面の形、そして装飾などによって、おおよそ前、中、後の3つの時期に分類することができる。

前期形式では、その典型的な例として萩螺鈿鞍(重要文化財 東京国立博物館)をあげることができる。装飾については後段で触れることとして、まず形からみていくと、前輪の中央幅が狭く、また、前輪山形の線が直線的でいかにも生硬であることに気がつく。古代鞍の前輪の輪郭に手形を付け足したような形、と説明すればわかりやすいだろうか(図403)。

次いで中期形式。この時期の代表作としては、雷文螺鈿鞍(重要文化財 香川・水主神社)をあげておこう。図404にあるとおり、前輪の山形の線は、前期形式に較べてやや丸みを帯び、前輪中央の幅も広まる傾



図403 萩螺鈿鞍



図404 雷文螺鈿鞍

向をみせる。後輪は前期形式と同様に腰が張った立体的な形で、鞍爪も強く外反している。前輪の輪郭はいかにも滑らかで、手形の存在を最初から考慮に入れて山形の線が決められているようにみえる。前述の萩螺鈿鞍に較べて、手形の位置がかなり下がっている点にも注目したい。

最後の後期形式では、時雨螺鈿鞍（国宝 東京・永青文庫）を代表的な例として取り上げておく（図405）。この時期の鞍の際だった特色は、前輪、後輪の素地が前期、中期のものに較べて全体に薄く造られていること、そして前輪中央の幅がかなり広がっていることの2点である。また、山形の線もより滑らかさを増しており、近世に一般に使用された鞍の外観を彷彿とさせるものがある。南北朝、室町期の鞍の遺例が少ないため、中世から近世への過渡期の鞍がどのような形をしていたかははっきりしないが、近世鞍の源流は、やはりこの中世螺鈿鞍後期様式に求めることができるのではなかろうか。



図405 時雨螺鈿鞍

（3）中世螺鈿鞍の装飾

中世鞍の装飾面での特色は、その華麗な螺鈿技術にある。

螺鈿は、夜光貝、鮑貝、蝶貝などの貝殻を磨いて適当な厚さにし、これを文様の形に切って器物の表面を飾る技法である。

奈良時代には、唐から数多くの螺鈿器がわが国にもたらされているが、そのほとんどは、いわゆる木地螺鈿によるものであった。これは、紫檀や黒檀、鉄刀木といった堅い木の表面を文様の形に彫り込み、そこに、ぴつたり同じ形に切った貝を嵌め込んでいく技法であり、堅木の質感と貝の光彩があいまって、いかにも厚重で華やかな雰囲気をかもしだす。そのさわだつて艶麗な姿は、正倉院宝物の螺鈿紫檀五弦琵琶や螺鈿紫檀阮咸などを通じて、現代の人々にも馴染み深いところだろう。

次いで平安時代に入ると、手間のかかりすぎる木地螺鈿に替わって、より平易な漆地螺鈿が盛んにおこなわれるようになる。これは、器物の表面に下地（粘土や砥粉を漆で練ったもの）を付け、そこに貝片を貼り付けて漆で塗り込め、それを研ぎ出したり、剥ぎ起こしたりして文様をあらわす技法である。唐風の木地螺鈿から日本風（和様）の漆地螺鈿へ。この変化はたいへんに劇的なものと映るが、これも当時隆盛をきわめた国風文化が、漆芸の世界に及ぼした影響の一端ととらえることができよう。

さて、漆地螺鈿が主流となった平安後期。この段階で、螺鈿の用法は二つの方向に分かれていったようにみえる。一つは、片輪草蒔絵螺鈿手箱（国宝 東京国立博物館）や籠蒔絵螺鈿硯箱（国宝 神奈川・鶴岡八幡宮）のように、蒔絵と融合して、蒔絵表現の中に螺鈿の特長を活かしていることとするもの。そしてもう一つは、和様化した螺鈿を主役に据え、その美しさを前面に押し出していこうとするものである。中世螺鈿鞍は、もちろんこの後者を代表するものにほかならない。

さきに前期形式を代表する作品として取り上げた萩螺鈿鞍では、全体を黒漆塗とし、両輪左右の爪先から中央に向けて萩の花枝を表わし、花枝の合するあたりに蜘蛛の巣を配する。文様は、すべて、薄手の夜光貝を用いて描かれるが、貝は小片に分けて細かく切り出され、一部では鞍の曲面に馴染ませるために小さく折られている。鞍橋（鞍の素地）は重心が低く、いかにも無骨な印象だが、装飾はそれに反して藤原時代というにふさわしい、いかにも優美な趣をみせる。

次いで、中期形式の菅文螺鈿鞍。両輪から居木にかけて黒漆を塗り、全体を螺鈿による菅文で埋め尽

くす。一つ一つの雷文はきわめて小さく、線状に切り出した夜光貝を細紙に組み合わせて文様を構成している。蒔絵主体、螺鈿主体に拘わらず、鎌倉時代の漆芸品には、小さな文様を繋いだり散らしたりといった表現が多く見受けられる。この雷文螺鈿鞍も、その典型作の一つといえよう（図406）。

鎌倉時代も終わりにくると、和様の螺鈿技術はさらに成熟の度を加え、精巧をきわめたものになっていく。とくに時雨螺鈿鞍にほどこされた螺鈿装飾は、まさに中世螺鈿鞍の掉尾を飾るにあさわしい作行を示したものと見える。

図407にみるとおり、時雨鞍では、前輪と後輪の外側に、松や葛が風に靡く様が表わされる。画中には、ところどころに「時雨・懸・染・原」などの歌文字が散らされて、『新古今和歌集』巻11に収められた天台座主慈圓の歌

わが懸は松を時雨の染めかねて 真葛原に風さわぐなり

を主題とした、いわゆる葦手による意匠であることがわかる。

葦手とは、絵画的に描いた背景の中に文字を溶け込ませて、画面と文字の両方から和歌や物語の一場面などを暗示するといった手法で、とくに鎌倉時代以降の漆芸意匠に多く取り入れられた。しかしながら、螺鈿による葦手の本格的な作品は、この時雨鞍が唯一のものとなる。

ここでは、松の細い葉は一本一本、間隔をそろえて整然と切り出され、文字の輪郭も実に滑らかに成形されている。松葉などの細部については、おそらく、何十枚かの薄い貝を膠などで貼り合わせ、それをまとめて切り出してから、膠を溶かして一枚一枚に分離する、といった方法が採られたと考えられる。とはいえ、貝はきわめて脆く、欠けやすい素材である。それを自在に扱って、鞍の複雑な曲面を飾った技巧は、まさに入神の域に達したものと見えよう。

（4）瓜文螺鈿鞍について

さて、ここまで中世螺鈿鞍成立までの経緯、中世螺鈿鞍の形状と装飾などについて、ごく簡単に述べてきた。以下に、本稿の主題である中屋遺跡出土の鞍について、特筆すべきところをあげ、また、一連の中世螺鈿鞍のなかで、本鞍がどのあたりに位置付けられるのか、といった点についても考えてみたい。

本鞍が出土した状況、現状での形や表面の状態などについては、第3章の「4. 河川」（135～143頁）に詳しく記述されているので、ここで繰り返すことはしない。私を知る限りでは、中世の鞍がこのように完好な状態で出土した例は他になく、日本の馬具や漆芸の歴史を考える上で、まことに貴重な事例といえる。

また、出土後の保存処理とその過程での科学的な分析も適切に行われており、今後、このように貴重な木漆器が出土した際、どのように保存し研究していくかを考える上で、好例になると思われる（第

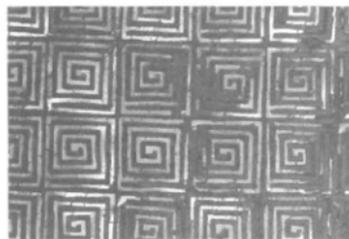


図406 雷文螺鈿鞍の文様



図407 時雨螺鈿鞍の文様

5章「保存処理」406～415頁参照)。

写真にみるとおり、鞍橋は全体に素地も厚く、まことに重厚な作行を示している(図408)。前輪の山形が欠失しているのは残念だが、手形の位置からみて、前輪中央の幅は広く、山形も滑らかな曲線で構成されていたことは間違いない。また、後輪はふっくらと立体的に造られてはいるものの、前期の鞍にみられるほどの後方への張り出しと鞍爪の外反はみられない。したがって、形状の面では、中世螺鈿鞍橋式の中期から後期にかけての特徴を併せ持ったものとみていいように思う。

本鞍の大きな特色は、螺鈿装飾の痕跡がみえるところである。本報告書の図126～128のように、現状で前輪の外側に7カ所、後輪の外側に9カ所、大小の窪みが左右対称に配置されているのがわかる。前述のとおり、和漆の漆地螺鈿では、石粉や泥などを漆で練ってペースト状にした下地を付けてから貝を貼り、それをいったん漆で塗り込めてから研ぎ出したり剥ぎ起こしたりして文様を表わす。本鞍の場合、長く土中であって貝が失われてしまっても、漆分を含んだ下地や漆塗膜などに、当初の文様の形がくっきりと残されている。漆が水分や酸、アルカリ、熱にも耐える強固な素材であることを改めて示した例であるといえよう。

さて、それら大小16カ所の窪みを子細に観察すると、それが円を二つ重ねたような輪郭の中に、弧状の縦線といくつもの斑点を描き込んだものであることがわかる(図409)。全体の形からみて、これは螺鈿で瓜を表現したものと推測される。

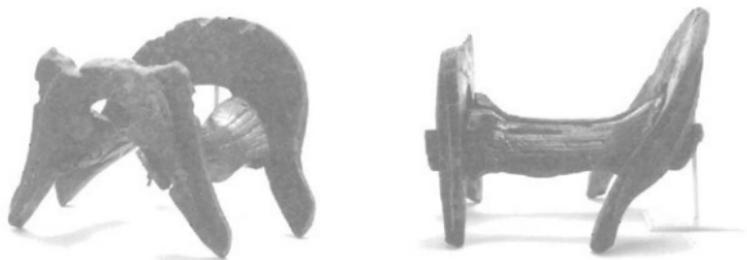


図408 中世遺跡出土瓜文螺鈿鞍

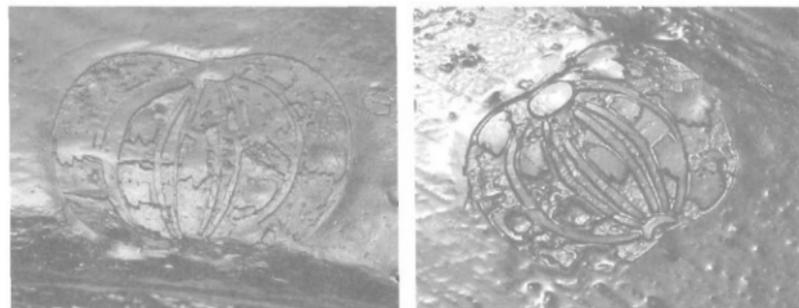


図409 螺鈿装飾の痕跡

中世鞍と瓜というのは、やや不思議な取り合わせと思われるかもしれないが、瓜を吉祥文の一種ととらえれば、けて意外ではない。古くから、蔓を伸ばしてはびこり、多くの実をつける瓜のような植物は、子孫繁栄を象徴するおめでたい文様として扱われてきた。鞍は武士の表道具の一つであるため、慶賀の意を込めた文様を取り入れたものが多く見受けられる。たとえば、中世螺鈿鞍の中期形式に属する柏木苑螺鈿鞍（国宝 東京・永青文庫）は、桐に鳳凰、松に鶴、竹に虎、梅に鶯などと同様、いわゆる瑞禽高木の文様で飾られている。また、室町時代以降の作品では燕や蜻蛉を主題にした鞍もある。燕は頭に音が通じるということで、首領格の武将になれるようにとの祈りが込められているとされ、また蜻蛉は勝虫ともよばれて、武家にとっては縁起のいい虫とされている。

このように考えてくれば、吉祥文である瓜が鞍の文様として採用されることは、充分にあり得ることだろう。また、中世螺鈿鞍中期様式の項で述べたように、鎌倉時代中期から後期にかけては、散らし文様、連続文様が流行した時期であり、瓜文を散らした本鞍は、文様の上からもおおよその制作期をおさえることが出来るように思われるのである。

なお、本鞍の制作地については、もちろんはっきりしたことはわからない。しかしながら、古代において鞍作部が存在したように、鞍の素地の制作はきわめて専門的な仕事であった。また、螺鈿などの漆工芸も、やはり古くから分業化がすすんだ専門的な技術である。となれば、本鞍のような完成度の高い作品を造り出したのは、時の権力に近い地域、鎌倉中期から後期ということであれば、京都か鎌倉の周辺と考えざるを得ない。

最後に覆輪について言及しておきたい。覆輪とは漆塗の手箱、硯箱、香合などの合口（蓋と身の接する部分）などに廻らされた金属製の部品をいう。木製漆塗の器物は衝撃に弱いので、薄く造られた口縁部などを保護するために金属の板で覆うのである。

現在、中世螺鈿鞍は14背が伝世しているが、そのうち5背に山形の縁を保護するために付けられたとみられる覆輪の痕跡（釘穴）を確認することができる。山形の縁は、鎧などと擦れ合って傷みやすい箇所でもあり、両輪外側に段差があって山形に近づくほど素地が薄くなるような鞍では、最初から覆輪の装着を考慮に入れて鞍橋の設計が行われていたのではないか。

この瓜文螺鈿鞍においても、後輪山形縁辺部に覆輪を固定するのに用いられたと思われる微小な金属の痕跡が発見されており、覆輪があった可能性は高いと思われる（本報告書第5章（4）瓜文螺鈿鞍の事前調査の項参照）。本鞍の制作当初の様を想像すると、重厚な鞍橋に黒漆を塗り、螺鈿で瓜文を散らし、両輪の山形から爪先にかけて金属製の覆輪を冠した堂々たる中世螺鈿鞍の姿が浮かび上がってくる。

この項の冒頭でも述べたとおり、本鞍は現在のところ中世螺鈿鞍唯一の出土例であり、保存状態もきわめて良好である。本報告書の刊行を契機としてさらに研究が進められ、いずれ復元模造の制作などが実現すれば、日本の馬具を研究してきたもの一人として、これに増える喜びはない。

2. 中世瓦

(1) はじめに

わが国において、瓦が近世に至るまで、特定の建物に限定的に使用されてきたことは、すでに広く知られているところである。特に古代の宮城や官衙、寺院遺跡の発掘調査では、大量の瓦の出土がみられ、早くから数多くの研究が行われてきた。中世の瓦に関する研究は、古代の瓦に比べて盛んではなく、本格的に研究対象となった歴史も浅いといえる。しかし近年では、主に鎌倉の瓦を対象とした原廣志氏や小林康幸氏、法隆寺の瓦を対象とした佐川正敏氏、全国的な規模で中世瓦を分析した山崎信二氏の研究など、徐々に研究の進展が認められる。

中屋遺跡では、土器や陶磁器、木製品など様々な遺物が出土しているが、瓦も比較的多く出土している。静岡県内における中世瓦の出土例は限られているが、そういった遺物が出土する点に、中屋遺跡の性格を示す重要なヒントが隠されているように思われる。本節では、中屋遺跡出土の瓦について整理した上で、他の遺跡の資料なども比較しながら、遺跡の性格について考えてみたい。

(2) 分類

中屋遺跡からは、軒丸瓦、丸瓦、平瓦、塼が出土しているが、その大半は丸瓦と平瓦である。また、いずれも破片であり、完形のものはいくつかも出土していない。

軒丸瓦・塼 軒丸瓦は、接合粘土が残存することなどから、軒丸瓦と判別できる破片が1点(238)出土しているのみである。瓦当面が残存しないため、瓦当文様については知り得ない。塼は1点出土している(237)。2側面が残存しており、一辺は26cmであったことがわかる。厚さは約4cmであり、比較的薄めのものである。表裏面の状態を比較すると、片面のみが著しく磨滅していることから、敷塼として実際に使用していたものとみて間違いない。胎土内の深くまで被熱による赤化が認められ、建物が火災に遭っていたことがみとれる。

丸瓦(図410) 丸瓦は、Ⅰ類とⅡ類の2つに分類できる。Ⅰ・Ⅱ類ともに、二次的な被熱の痕跡が残るものが多い。Ⅰ類は、有段式(玉縁式)のものである。玉縁部や段部が残存し、有段式であることが明確なものは3点(243・462・1344)のみであるが、布目痕がⅡ類に比べて明らかに粗いことから、玉縁部や段部が残存しなくてもこれらの特徴をもつもの(1429・1592)は、Ⅰ類と判断できる。明確なものとしては、この5点が確認できるのみである。この5点には、吊り紐痕や離れ砂の付着は認められない。凸面は全面ナデ調整であるが、1592にかすかに叩き目の痕跡が残っており、縄叩きであることがわかる。

Ⅱ類は、無段式(行基式)のものである。狭端部や広端部の破片をみると、さらに大型のものややや小型のものに細分できる可能性がある。Ⅰ類と同様に、凸面は全面ナデ調整であり、いくつかの破片には縄叩きの痕跡が残る。凹面の両側端と狭端には、幅広の面取り調整が施されている。凹面には、吊り紐痕が明瞭に残る。吊り紐の布に隠れている部分と出ている部分の両端が残る破片は少ないが、布に隠れている部分と出た部分の比率は、239が1:0.9、246は0.6、249は0.8、466と935は1、1223と1225(同一の吊り紐痕)は0.7、1346と1347(同一の吊り紐痕)は0.8以下と、個体によって多少ばらつきはあるものの、平均すると1:0.8程度である。狭端部には、狭端から6~7cm程の位置に釘穴が設けられる。広端面とその付近には、離れ砂が付着するものが多い。中屋遺跡から出土している丸瓦

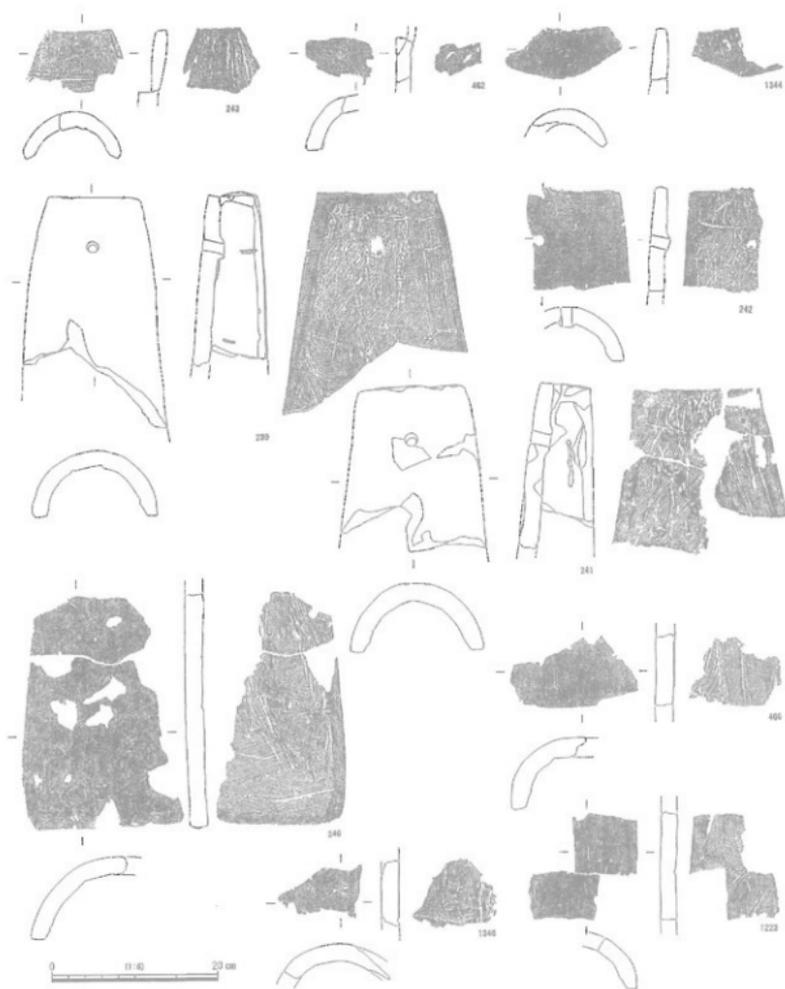


図 410 丸瓦の分類

I類: 243・462・1344 II類: 239・241・242・246・446・1223・1346

のほとんどが、このII類である。

平瓦 (図 411) 平瓦については、叩き具から、大きく I 類と II 類の 2 つに分類することができる。丸瓦と同様に、I・II 類ともに、多くの個体に二次的な被熱の痕跡が認められる。I 類は、縄叩きが残るものである。合計 10 点 (262・268・756・1350・2090) 出土している。凸面は平行縄叩きで、凹面には布目痕が残る。割板痕は認められず湾曲も緩いことから、凸型台成形の一枚作りであるとみられる。

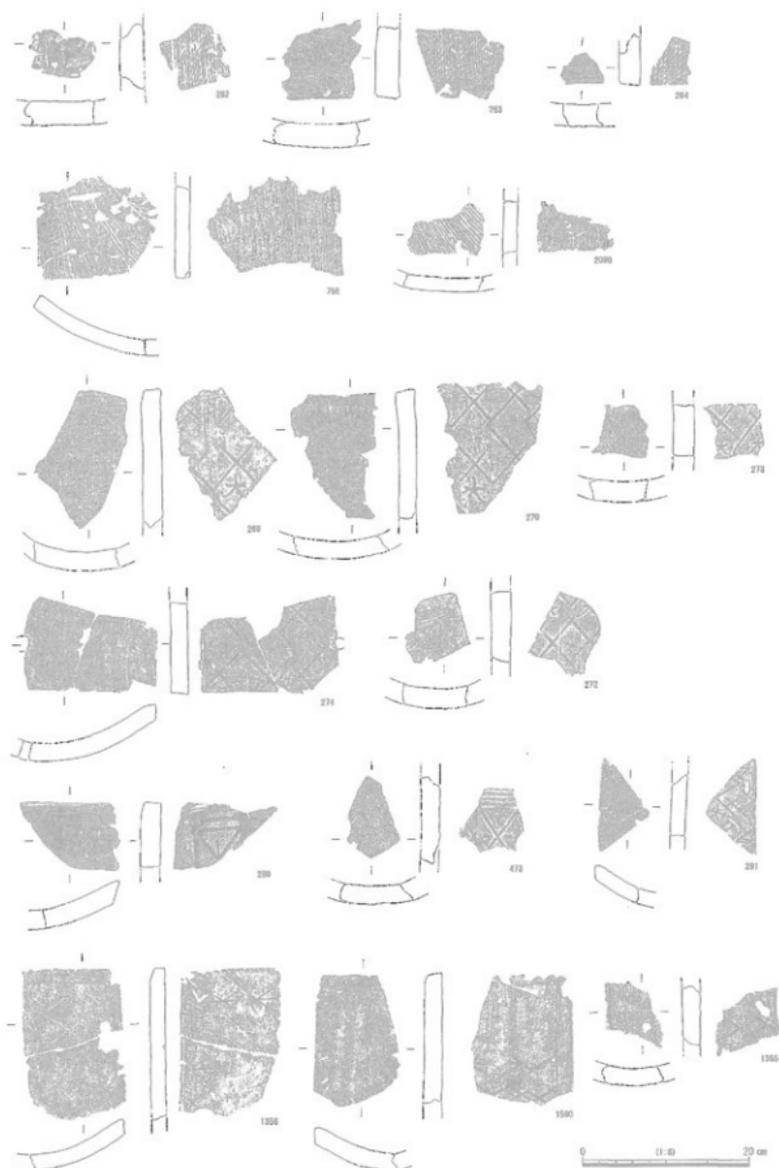


図 411 平瓦の分類

I A 類 : 756 - 2090 I B 類 : 262 - 264 II A 類 : 269 - 270 - 272 ~ 273
 II B 類 : 280 - 473 II C 類 : 291 - 1356 II D 類 : 1359 - 1355

I類は、さらにAとBの2つに細分することが可能である。I A類は、離れ砂の付着が認められないもの(756・2090)である。縄目が細かく、薄いつくりとなっている。胎土は比較的硬質で、灰白色の色調を呈している。I B類は、凸面に離れ砂の付着が認められるもの(262～268・1350)である。縄目は粗く、厚いつくりとなっている。胎土はやや軟質で、橙白色を呈している。

II類は、斜格子叩きが残るものである。中屋遺跡から出土している平瓦のほとんどが、II類である。広縁から約15cmの場所には、釘穴が設けられている。凸面は斜格子叩きで、離れ砂の付着が認められる。凹面は、布目痕のあるものとないものとがみられる。離れ砂は、布目痕のあるものには付着せず、布目痕のないものには付着が認められる。また、凹面に離れ砂の付着するものには、叩き目が転写されているものが確認できる。これらの点から、II類は「積み重ね技法」(東1994)によって成形されたものとみなすことができる。

また、II類については、叩き目の模様の違いにより、さらにA～Dの4つに細分することができる。II A類は、縦長斜格子のものである。格子の内部には、「大」の文字がみられる破片が認められる。破片のため、同じ叩き板に施されたものか、2つの別の叩き板に施されたものか判断できないが、「大」の文字は2種類確認できる。II B類は、縦長斜格子+横線のものである。格子の交点には、十字に涙形の文様が施されている。格子を菱文様、剣形文様の文様を花卉と見立て、花菱文様を表現しているものとみられる。II C類は、細い線による横長斜格子+横線のものである。格子内には、「大」の裏文字が施された破片が認められる。II D類は、太い線による横長斜格子+横線のものである。文字として認識できない記号状の文様が施された破片が確認できる。

(3) 出土瓦の特徴

中屋遺跡では、中世瓦の主な研究対象である瓦当面の残存する軒瓦は出土していないが、丸瓦と平瓦においていくつかの特徴が見出せる。

無段式丸瓦 丸瓦に関しては、前述のように有段式(I類)と無段式(II類)がみられるが、有段式はごくわずかで、主体となっているのは無段式である。周知のように、無段式の丸瓦は、7世紀には比較的多く生産されているが、8世紀になると急速にその数を減らし、8世紀後半にはほとんど確認できなくなる。管見の限りでは、平安～鎌倉時代の無段式丸瓦の出土例は、大分県富貴寺の1例のみである。

富貴寺は、豊後高田市田染に所在し、平安末期の建築で壮麗な壁画の残る大堂は国宝に指定されている(図412)。天台宗寺院で構成される六郷山の本山末寺であったとされ、その創建には宇佐大宮司が大きく関わったとみられている(宇佐資料館1984)。丸瓦は大堂の周辺から出土しており、現在はいくつかが大堂内に陳列されている。中屋遺跡では完形の資料がないため一概にはいえないが、富貴寺の丸瓦の方が全体的に一回りほど小さいような印象を受ける。他には、軒丸瓦や軒平瓦なども発見されている。

富貴寺以外の事例では、出土資料ではない



図412 富貴寺 大堂

が、3ヶ寺（孝恩寺・来迎寺・宝塔寺）の中世の建造物に確認できる。

孝恩寺は、大阪府貝塚市に所在する浄土宗の寺院であり、大正3年に観音寺を合併して現在に至っている。観音寺は神龜3（726）年、聖武天皇の勅願を受けて建立され、畿内四十九院の一つに数えられた寺院とされる。無段式丸瓦が葺かれているのは観音堂（図413）で、もとは観音寺の堂舎である。観音堂は、桁行5間×梁行5間の寄棟造りである。鎌倉後期とみられる大阪府最古の木造建造物で、国宝に指定されている。

来迎寺は、泉南郡熊取町に所在する曹洞宗の寺院である。創建は明らかでないが、寺伝によれば、もとは天台宗に属しており、後に真言宗となり、元禄2年に曹洞宗極楽寺の末寺になったとされる。無段式丸瓦が葺かれているのは本堂（図414）で、重要文化財に指定されている。嘉暦4（1329）年の建立と伝えられており、『熊取村誌』の編纂に関わる調査では応永31（1424）年銘の鬼瓦も発見されている。建物は、桁行3間×梁行3間の小堂で、屋根は寄棟造りとなっている。内部の探検で焼けた状態から、当初護摩堂であったものと推測されている。

宝塔寺は、京都市伏見区に所在する日蓮宗の寺院である。寺伝によれば、昌泰2（899）年に藤原時平が創建した極楽寺に始まり、もとは真言宗であったが、徳治2（1307）年に日蓮宗に改めたとされる。無段式丸瓦が葺かれているのは、多宝塔である（図415）。永享10（1438）年以前の建立とみられ、重要文化財に指定されている。

このように、中世における無段式丸瓦の使用は皆無とまでは言い切れない。しかし、中世寺院の発掘調査事例が増えているにもかかわらず、富貴寺以外に出土例が認められないことからみて、やはり全国的にみても、中世の丸瓦としては特異な部類に属するものであることは間違いない。

平瓦の叩き目 平瓦においては、Ⅱ類の叩き目に特徴がみられる。ⅡA類とⅡC類にみられるような「大」の文字が施されたものは、鶴岡八幡宮境内遺跡、永福寺跡、極楽寺旧境内遺跡、称名寺といった鎌倉およびその周辺の寺院から出土している（図416-1～10）。文字には、正位置のものと裏文字とが認められる。永福寺跡では、埼玉県水殿瓦窯と叩き目が類似したものが出土しており、ここから供給された瓦とみられている。鎌倉以外に、京では法住寺殿跡とそれに隣接する蓮華王院でも確認できる



図413 孝恩寺 観音堂



図414 来迎寺 本堂

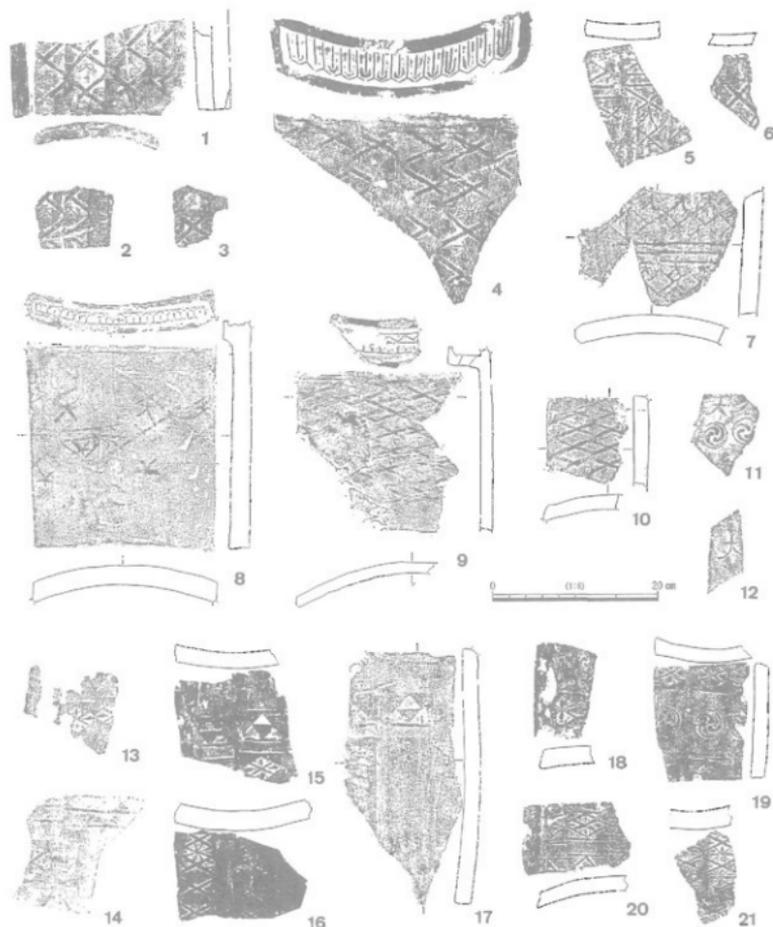


図415 宝塔寺 多宝塔

(図416-11・12)。格子+横線のもののほか、三巴文が配される格子のない叩き目もみられる。しかし、京においては、ほかに類例は見当たらず、特殊な部類に属する瓦のようである。

また、ⅡB類には花菱文のような模様が見られるが、先の「大」と同様に、これらは鎌倉とその周辺で多く出土している(図416-13~21)。ただし、これらはいずれも格子内に花菱が描かれており、中屋遺跡のもののように格子と一体化させているものはみられない。

いずれの特徴も、鎌倉やその周辺から集中して出土している点が注目される。



1~3・13・14 静岡八幡宮 4・15・16 永徳寺 5~7 称名寺
8~10・17 福楽寺 11・12 法住寺跡跡 18~21 建良寺

図416 平瓦叩き目「大」・花菱文

(4) 瓦の組合せと年代

丸瓦・平瓦の組合せ 丸瓦と平瓦のⅠとⅡ類では、出土点数に明らかな差がみられる。丸瓦と平瓦はともに、Ⅰ類は数点程度しか出土しておらず、Ⅱ類の方が圧倒的に多い。また、Ⅰ類の丸瓦と平瓦には、軟質で橙白色の色調を呈するものが多いなど、胎土や焼成の面にも共通点が認められる。丸瓦と平瓦に関しては、丸瓦・平瓦Ⅰ類、丸瓦・平瓦Ⅱ類という、2つの組合せが存在するとみてよい。軒丸瓦と塙丸瓦については、いずれも1点しか出土していないため、どちらの組合せに属するものか明確でないが、軒丸瓦に関しては、布目が細かいことからⅡ類に伴う可能性も考えられる。

また、丸瓦Ⅰ類では離れ砂や吊り紐痕が確認できるものは認められないが、丸瓦Ⅱ類では吊り紐が明確に確認できるほか、広端面を中心に離れ砂が付着するものが多いなど、形態だけでなく技法においてもⅠ類とⅡ類には明確な違いが認められる。平瓦においても同様で、平瓦Ⅰ類は、凸型台による一枚作りの技法が用いられているが、平瓦Ⅱ類では積み重ね技法が採用されるなど、製作技法に明確な違いが認められる。Ⅰ類には、平瓦に離れ砂の使用が認められるなど、多少新しい要素もみられるが、基本的には古代以来の技法が用いられている。それに対してⅡ類では、明らかに中世的な技法が採用されており、Ⅰ類とⅡ類の間にはある程度の時間的な隔たりが存在するとみてよいであろう。

Ⅰ類の年代 Ⅰ類の製作年代については、離れ砂の使用が一つの手がかりとなる。離れ砂の使用が確認できる平安時代の平瓦としては、浜松市祝田遺跡出土の瓦がある(註1)。祝田遺跡は、浜松市北区細江町中川の自然堤防上に位置する、弥生時代と中世の遺跡である。河川改修に伴って発掘調査が実施されている。瓦としては、平瓦や丸瓦、巴文軒丸瓦、唐草文軒平瓦、鬼瓦などが出土している。平瓦の凸面はいずれも縄叩きで、離れ砂が多く付着する。凹面は、布目が残るものとみられないものがある。布目のみられないものには、離れ砂が多く付着している。瓦は溝や井戸などから出土しており、いずれも12世紀末～13世紀初め以降の遺構である。屋根に葺かれた期間については知り得ないが、少なくともこれ以前に生産された瓦であることは間違いない。

平安時代の瓦は、浜松市浜北区の宮古古窯跡群や、掛川市の清ヶ谷古窯跡群といった灰軸陶器の窯跡からも、比較的豊富に出土している。しかし、いずれの窯跡でも、離れ砂が付着する平瓦は確認できない。少なくとも静岡県西部地域では、11世紀段階までは平瓦の製作に離れ砂は使用されていないとみてよいであろう。また、12世紀後半頃の窯跡とみられている大屋敷6号窯でも、鬼瓦や平瓦が採取されている(大谷2004)が、ここでも離れ砂は使用されていない。大澤SD2001が造られた時期を考慮すると、Ⅰ類の年代は12世紀後半～末頃の可能性が高いと推測される。

Ⅱ類の年代 Ⅱ類に関しては、丸瓦の吊り紐痕と平瓦の叩き目が、年代の手がかりとなる。前項で述べたように、丸瓦の吊り紐痕の布に隠れている部分と出た部分の比率は、平均1:0.8程度となっている。山崎信二氏によると、13世紀代を通して比率は原則的には1:1で、全体としては布で隠れる部分がやや多い傾向があり、1300年以降大きく変化するという(山崎2000)。この点からみると、中風遺跡の丸瓦Ⅱ類は明らかに13世紀代のものであるといえる。

平瓦の叩き目については、他の遺跡の事例が参考になる。前項に記したように、「大」の文字や花菱文などと同じ特徴をもつ平瓦は、鶴岡八幡宮境内遺跡、永福寺跡、極楽寺旧境内遺跡、法住寺殿跡・蓮華王院などで出土している。鶴岡八幡宮境内遺跡では、Ⅲ面(14世紀前半～15世紀前半)とⅡ面(15世紀中頃～16世紀初頭)から出土しており(鎌倉市1985)、当然瓦が使用されたのはそれ以前であるといえる。永福寺では、弘安10(1287)年から延慶3(1310)年までとされるⅢ期の遺構から出土し

であり、寛元・宝治年間(1244～1248)の修理瓦であるとみられている(鎌倉市1989)。極楽寺旧境内遺跡では、第1面と第2面から出土している。第2面は、報告書では応永32(1425)年の火災面とみている(鎌倉市1980)が、建治元(1275)年の火災面とする見解もある。また、これらの叩き目は、軒平瓦(Ⅳc類)にも残されているが、山崎信二氏はこの瓦を中期後半(1282～1300年)の時期に位置付けている(山崎2000)。法住寺殿跡・蓮華王院では、14世紀代の埋没とみられる井戸G3・G25・W8から出土しており、13世紀中葉に埋没した井戸C18とG2からは出土していない。これらは建長元年(1249)3月に焼亡した後の、再建に用いられた瓦とみられている(古代学協会1984)。このように、「大」の文字や花菱文などの特徴をもつ平瓦は、いずれも13世紀中頃から後半にかけての時期に位置付けられており、中層遺跡の平瓦Ⅱ類の年代もこの範囲でとらえてよいであろう。

丸瓦と平瓦の年代を総合すると、Ⅱ類の瓦の年代は13世紀中頃～後半頃であると推測される。

(5) 瓦からみた中層遺跡

中層遺跡では、大溝(SD2001)と土塁(SA1001)によって囲まれた、東西160m・南北210mの巨大な施設の存在は明らかになっているが、その内部に調査がほとんど及んでいないこともあり、施設の性格については不明点が多い。このことに関しては、これまで様々な見解を耳にしているが、大きくは「居館説」と「寺院説」の2つに分かれるようである。最終的な結論は、将来の施設内の調査結果に委ねたいと考えるが、最後に出土瓦から施設の性格について検討してみたい。

瓦の量と分布 今回の調査で出土した瓦の数量は、破片にして丸瓦136点、平瓦96点、軒丸瓦1点、埴1点で、重量にすると、丸瓦は合計282kg、平瓦は合計19.9kgである。数量的には、必ずしも多いといえないが、調査範囲が施設の外側であることを考慮すると、一定程度まとまって出土していることは確かであり、施設内に瓦葺きの建物の存在を想定するには十分な量であるといえる。また、広端部の残る平瓦の多くには、釘穴をもつものが存在することから、これらは棟ではなく屋根に葺くことを意図して製作されており、建造された建物は榎斗棟や薨棟の建物ではなかったことがわかる。平安時代末～鎌倉時代の瓦葺きの施設は、武家や公家の邸宅か、寺院や持仏堂などの仏教施設にほぼ限られるといわれている。また、武家や公家の邸宅に瓦葺きの居宅や塀、門、蔵などが築かれたのも、基本的には平泉や鎌倉、京といった都市部に限定されるとみてよい(註2)。地理的要件からみると、中層遺跡をこれらに該当させるのは困難であり、寺院または持仏堂の存在を想定するのが自然である。

次に、出土範囲についてみてみると(図417)、周囲のほぼ全域から出土していることがわかる。大溝(SD2001)や河川(SR8001)では、ほぼ全域に広がっており、それ以外の遺構からも出土が確認できる。範囲としては、西端のSF1025から東端の河川SR8001までは東西280mに及ぶ。全体的にややまばらな印象を受けるが、これは包含層の遺物がほとんど含まれていないためである。また、北側で行われた浜北市教育委員会の範囲確認調査(図2)では、北東の1トレンチ・北西の5トレンチ・西辺中央の9トレンチ・北辺中央の14トレンチから瓦が出土している。今回の調査と合わせると、施設とその周辺には、ほぼ全域に瓦の散布が確認できることになる。瓦は廃棄された状態で出土しており、当然いろいろな場所に運ばれたことも想定できるが、単独の施設の瓦を処理したにはあまりにも広範囲から発見されている。瓦の分布からみる限り、出土した瓦を屋敷内に設けられた持仏堂の瓦とするのは、やや無理がある。中層遺跡の溝と土塁で囲まれた施設については、区画内に複数の瓦葺き建物が存在した、寺院であったとみるのが妥当であろう。

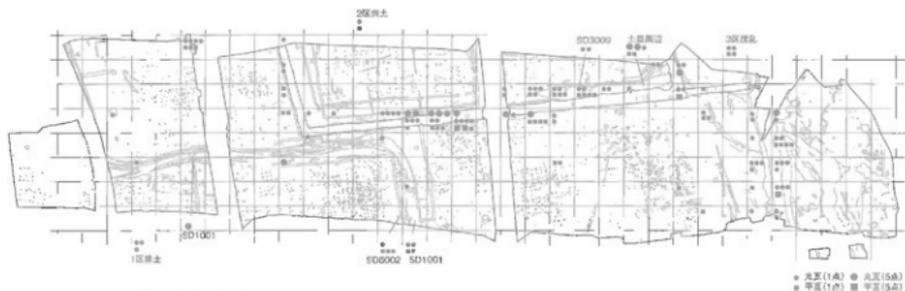


図 417 中層遺跡瓦分布図

寺院の展開 前項でみたように、瓦には2つの時期のものが出土している。Ⅰ類は12世紀後半～末頃、Ⅱ類は13世紀中頃～後半の瓦とみられ、Ⅰ類は創建瓦、Ⅱ類は改修または再整備に使用された瓦であると考えられる。市教委の範囲確認調査で出土している瓦は、いずれもⅠ類に相当するものであり、創建期の建物は北側に集中していた可能性が高い。

Ⅰ類に比べてⅡ類の瓦は圧倒的に多く、13世紀中頃～後半に相当大規模な寺院の改修・再整備が行われたものとみてよい。恐らくは、既存の建物の改修を行うとともに、敷地の南側に新たな建物の建造も実施されたのであろう。また、ほぼ時を同じくして、隣接する河川（SR8001）では、大規模な護岸工事も行われている。これらの工事が偶然同じ時期に実施されたとは考えにくく、寺院の改修事業にあわせて、隣接する河川の治水事業も行われたとみてよい。工事の規模もさることながら、当時最高級の漆芸品であった螺鈿鞍を惜しげもなく埋納している姿には、寺院の勢力の大きさが感じられる。

廃絶時期については不明瞭な部分もあるが、瓦が最も多く出土している大溝SD2001では、Ⅰ類とⅡ類ともにⅡ層（13世紀末～14世紀代）から出土しており、出土層位に明確な違いは認められない。溝SD3009・9002、河川SR8001、井戸SE1001などにおいても同様の状況であり、両者は同時期に廃棄されている。瓦には、二次的な被熱の痕跡を残すものが多いことから、建物は火災によって失われていることがわかる。また、これと相前後した時期には、大溝の南東部が崩落し埋まらされているが、掘り直された様子はなく、ある意味放置されたような状態にある。Ⅱ類より新しい瓦が出土していないことと合わせると、13世紀末～14世紀頃に火災によって建物が焼失した後、寺院は著しく衰退したか、廃絶している可能性が高いと考えられる。

県内の諸事例 静岡県内において、平安末～鎌倉時代の瓦がまとまって出土している寺院遺跡は、先にみた浜松市祝田遺跡のほかに、菊川市潮海寺薬師堂跡・堂橋遺跡と島田市智満寺、伊豆の国市順成就院跡がある。

潮海寺は、菊川市潮海寺に所在する真言宗の寺院である。天平年間に、行基が薬師如来像を安置したのが始まりと伝えられる。かつては寺領3千石、37坊を数える大寺院であったとされる。丸瓦や平瓦のほかに、巴文軒丸瓦、蓮華文軒丸瓦、唐草文軒平瓦、半截花文軒平瓦、鬼瓦などが出土しており、このうち半截花文軒平瓦は、鶴岡八幡宮と同范であることが確認されている（菊川町2000）。

智満寺は、島田市千葉に所在する天台宗の寺院である。神護景雲年間に広智が草庵を結んだのが始まりとされ、宝龜2（771）年に光仁天皇の御願寺となり、大伽藍を構えていたとされる。本尊の千住観音像や阿彌陀如来像、本堂などが重要文化財に指定されている。平瓦や丸瓦のほか、巴文軒丸瓦、蓮珠

文軒平瓦などが出土している（渋谷・坂巻 1988）。

願成就院跡は、伊豆の岡寺家に所在する。北条時政が奥州征伐の戦勝祈願のために建立した寺院として知られ、国指定史跡となっている。現在の願成就院には、運慶作の数多くの仏像が伝えられている。九瓦・平瓦のほか、巴文軒九瓦、剣頭文軒平瓦、唐草文軒平瓦、半截花文軒平瓦などが出土（山田町 1982 ほか）しており、このうちの剣頭文と唐草文軒平瓦は、鶴岡八幡宮・永福寺と同范の可能性が高いとされている（山崎 2000）。このように、静岡県内において、平安末～鎌倉時代の瓦がまとまって出土している遺跡は、いずれも地域を代表するような大寺院であったといえる。

中屋遺跡と岩水寺 中屋遺跡について検討する上では、約 500 m 北東に隣接する岩水寺の存在が無視できない。岩水寺は、神亀 2 (725) 年に行基によって開かれたと伝えられる、真言宗の古刹である。現在は、谷の入り口に本堂（地藏堂）と庫裏、鐘樓堂があり、薬師堂、弘法大師堂、護摩堂などの建物が山中に点在している。火災により古記録群が失われているため、中世以前の様相は、ほとんど明らかになっていないが、「遠江国風土記伝」によると、法相宗興福寺の末であったが、弘仁年間に東寺の末となり、往時はに谷を 12 に分け、360 坊を有する大寺院であったという。同じような話は、地元にも残されており、700 年程前の岩水寺は、広さ 70 町以上の境内に豪華な伽藍が建て廻されていた大寺院であったという。

岩水寺に関しては、ほとんど発掘調査がおよんでいないが、一部現在の本堂の東側に位置する北谷遺跡で発掘調査が実施されている。昭和 41 年の調査では、山茶碗や瀝美・湖西産の重甕、京都系の土器器皿、貿易陶磁などが出土（浜北市 2004）しており、平成 17 年の調査では、土器などに加えて瓦も出土している。出土瓦は、九瓦と平瓦であり、平瓦には縦長斜格子の叩き目のものが確認される（浜北市 2005）。いずれも破片ではあるが、九瓦・平瓦ともに調整技法は中屋遺跡のⅡ類と同一であり、実見したところ胎土や焼成も中屋遺跡のものと同様である。

前述のように、平瓦Ⅱ類にみられる「大」や花菱文を施した叩き目は、鎌倉から集中して出土している。現段階でこれらの瓦の出土が確認できるのは、鶴岡八幡宮や永福寺、極楽寺、称名寺であり、今後類例が増すことが予想できるため、必ずしもこれだけに限定できるものではないが、幕府や北条一門が深く関与した寺社から多く出土しているのは確かであり、そこに一定程度の関係を想定することは可能である。北条氏との関連では、岩水寺にまつわる時頼についての伝承や、西に隣接する宮口郷に名越北条氏の所領が存在した点にも注目しておく必要がある。時頼に関する伝承としては、地元には貫しい僧の姿で訪れた時頼に対し、隆盛を極めていた岩水寺の僧たちは時頼から岩水寺の西に位置する八幡宮周辺の土地を寄進されたとする話が残されている。その真偽はともかくとして、いずれも北条氏と岩水寺との間にあった何らかの関係を伝えるものと理解してよいであろう。宮口郷に関しては、史料が残されている。暦応 2 (1339) 年の「足利尊氏寄進状」には、「遠江国宮口郷相模国弘河郷 備前入道跡 地頭戦事」との記載がみえる（浜北市 2004）。「備前入道」なる人物については、不明とされることが多いが、弘河郷に関する史料からその人物を知ることができる。嘉元 2 (1304) 年「関東下知状」（『鎌倉遺文』21768）には、「鶴岡八幡宮供僧良印与相模国弘河郷地頭職備前入道定証代定覚相論供米事」とあり、「定証」の法名がみえる。この「定証」については、「武家年代記（裏書）」延慶 2 (1309) 年条に、「名越備前々司宗長法師 法名定証 逝去」とある（竹内 1993）ことから、北条宗長という人物であることがわかる。北条宗長は、名越流北条長頼の次男であり、官位は従五位下備前守左近将監で、能登・安芸・豊前 3ヶ国の守護を兼務した幕府内でも有力な人物であった（北条 2001）とされる。

それでは、中屋遺跡が鎌倉や北条氏との関係のみでとらえられるかといえば、そう単純ではない。九瓦Ⅱ類をみても、鎌倉での使用は皆無であり、寺院の造営に関して全般的に鎌倉との関係を想定するこ

とは困難といわざるを得ない。幕府または北条氏との関係は、13世紀中頃～後半に行われた寺院の改修・再整備における部分的な関与に留まっており、擅那になるなどの形で北条氏が一定程度関与していたとしても、造営の主体はあくまで寺院側にあったとみてもよいであろう。これは言い換えれば、寺院自体がそれだけの財力や権力を有していたことを意味している。この地域においてそのような大寺院となると、やはり岩水寺以外には考えにくい。岩水寺がいつ頃から現在の場所にあったのか明確でないが、北谷遺跡で出土している瓦は、中屋遺跡のⅡ類と近似しており、少なくともこの時点では、中屋遺跡と岩水寺が一体のものとして整備されているとみてよい。現在の岩水寺が山中に小規模な坊舎が点在する山岳寺院の様相を呈しているのに対し、中屋遺跡はいわば平地式寺院の形態をとっており、この二つが一体となる寺院であったとすれば、京の醍醐寺における上醍醐・下醍醐や、山科安祥寺における上寺・下寺の関係のように、現在の岩水寺が山林修行の場、中屋遺跡が民衆教化の場として機能していた可能性が高い。

以上、出土瓦から中屋遺跡の性格について検討したが、中屋遺跡の9割以上は未調査の状態に残されており、また関連性があるか否かの岩水寺に関しても同様である。将来調査が進捗すれば、より具体的な姿が浮かび上がってくるであろう。今後の調査の進展に期待したい。

註

1. 同様の瓦は、島田市智満寺や旗指 25 号宮、菊川市瀬海寺薬師堂・堂橋遺跡などでも出土しているが、遺構に伴わないものが多く、個々の瓦の年代については不明な点が多い。
2. 静岡県では、伊豆の沼市北条氏源跡から瓦が出土しているが、北条氏の本貫地という性格上、特殊な事例とみてよい。また、郡内には持ち余の存在が想定されており、瓦は主にそこで使用されたものと考えられている（池谷 2008）。

引用・参考文献

- 東洋一 1994 『平瓦製作における中世の技術革新について』『研究紀要』第1号 財団法人京都府歴史文化財研究所
 人身彫立字在風土記の歴史史民俗資料館 1984 『富貴寺』
 大谷宏治 2004 『大塚遺古墳群』『浜北市史 資料編』浜北市
 山崎信二 2000 『中世瓦の研究』雄山閣
 財団法人静岡県歴史文化財調査研究所 1985 『祝田遺跡Ⅱ』
 財団法人静岡県歴史文化財調査研究所 1994 『祝田遺跡』
 鎌倉市教育委員会 1985 『鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書』
 鶴岡八幡宮 1983 『新修道場川地発掘調査報告書』
 鎌倉市教育委員会 1980 『鶴岡寺境内遺構』
 鎌倉市教育委員会 1989 『永福寺跡～昭和63年度～』
 財団法人古代学協会 1994 『法住寺遺跡』
 京都大学大学院文学研究科 2007 『京都大学所蔵古瓦瓦葺Ⅱ』
 浜北市教育委員会 2003 『中屋遺跡確認調査報告書』
 菊川市教育委員会 2000 『旗指遺跡総合調査報告書 資料編』
 渋谷昌彦・坂巻隆一 1988 『旗指古宮における千歳山智満寺の瓦生産』『静岡県考古学研究』22 静岡県考古学会
 藤山町教育委員会 1982 『瀬成院跡跡第4次発掘調査概報』
 藤山町教育委員会 1988 『瀬成院跡跡第6次発掘調査概報』
 池谷勉志 2008 『伊豆における北条氏の館跡について』『金沢文庫研究 第321号』神奈川県立金沢文庫
 浜北市教育委員会 2005 『北谷遺跡』
 松井一尚 2004 『北谷遺跡』『浜北市史 資料編』浜北市
 小和田哲男 2004 『第3章中世』『浜北市史 資料編』浜北市
 竹内理三 1993 『増補歴史資料大成』21 福川書店
 北条氏研究会編 2001 『北条氏系譜人名辞典』新人物往來社

3. 中世土器・陶磁器について

中屋遺跡の調査では多くの中世土器・陶磁器が出土しているが、今回それらの総破片点数の計測を行い表46～48にとりまとめた。これは遺跡における出土傾向を分析するとともに、近年静岡県内の中世遺跡で進められている出土土器・陶磁器の数値化データの蓄積を図ることを目的としたもので、分類及び編年観は『陶磁器から見る静岡県の中世社会』に基づいている（菊川シンポジウム実行委員会2005）。なお、土器・陶磁器の分類及び計測は筆者が中心となって実施したが、瀬戸美濃系施釉陶器の調査指導をいただいた藤澤良祐氏をはじめ、小野正敏氏、松井一明氏、河合修氏より多大なご教示をいただいた。

全体の構成 表46に示したように、出土した中世土器・陶磁器の総破片点数は13,279点で、そのうち山茶碗類が15.9%、土師質土器類が73.77%と最も多く、併せて9割近い比率となっている。これに常滑・湖西産美産の壺蓋類を中心とした中世陶器、在地の志戸呂・初山産製品を含む瀬戸美濃系施釉陶器、貿易陶磁などが少量ながら一定量加わる器種構成となっている。

山茶碗 山茶碗類の多くは瀬美・湖西系の製品で占められ、実に97.6%となる。次いで尾張系（知多）製品、東遠江系製品がわずかに搬入され、東濃系山茶碗が1点のみ確認されている。遠江西部地区における山茶碗は瀬美・湖西系製品の主要流通圏内であることから（溝口2005）、傾向としては普遍的な状況ではあるが、ほぼ寡占となるような搬入状況は特徴的といえよう。時期別の出土状況を見ると、II期頃から出土量が増加しはじめ、III-1期、III-2期段階で出土総数の5割以上となり、ピークに達する。日常雑器である山茶碗類のあり方は、中世前期における遺跡の盛期が13世紀前半～中葉にかけてのこの時期にあることを示すものであろう。そしてIII-3期にあたる13世紀後半～14世紀前半にかけては山茶碗類がほぼ皆無となる。中世前期に大量出土する山茶碗類がみえなくなることによって、出土遺物からみた遺跡の様相は不明瞭となるが、後述するように一定量の貿易陶磁等遺物の存在によって、継続した人々の営みを窺うことは可能であろう。

土師質土器 上記のように土師質土器類が卓越することは当遺跡の特徴である。内訳は土師質土器皿（以下土師皿）が43.0%、鍋釜類が52.6%、器種不明4.4%となっている。土師皿については時期別の分類を実施していないものの、非ロクロ成形品が84.9%を占め、ロクロ成形品の5.5%をはるかに凌ぐ結果となっている。戦国期における当遺跡を含む浜松市北部地域で使用される土師皿は非ロクロ成形品が多数を占めることが指摘されている（鈴木2002・松井2005）、それを改めて認識することができる結果である。また、山茶碗類に並行する時期の土師皿も大溝やSR8001などを中心に多く出土していることが特筆される。当該期の遠江・駿河地域における供膳形態の器は、基本的に山茶碗類で占められるのが普遍的なあり方であるが、中屋遺跡では土師皿が供膳具の一端を担い、そしてその多くが非ロクロ成形品であったことは特徴的な出土状況といえる。

土師質土器のうち、鍋釜類を主体とする煮沸具の多くは中世後期以降の内耳鍋類で、中でもくの字形が多くを占め、内甕形がそれに次ぐ出土量であった。山茶碗類と並行する時期の伊勢鍋は一定量の出土があり、伊勢鍋249点に対し山茶碗類2,112点で、概ね1:8.48の比率となる。遠江地域における当該期の伊勢鍋は低密度分布域とされており（金子2005）、伊勢鍋の出土数は相対的に少ないとされる。例を挙げれば天竜川下流域の集落遺跡である恒武遺跡群では伊勢鍋23点に対し山茶碗類1,799点であり、その比率は1:78.21である。調査事例が限定されるものの、中屋遺跡では遠江における一般的な中世

表 47 瀬戸美濃系施釉陶器一覧表(1)

瀬戸美濃

器種名	古瀬戸前期												古瀬戸中期			古瀬戸後期			後IV期～大藏	大藏製品						不明	合計											
	I	II	III	IV	I	II	III	IV	I	II	III	IV	古瀬戸	後IV期	1	2	3	4	4	大藏	不明																	
天目	天目茶碗												4	5	1		26			4	10		1			19	7	52										
碗類	灰釉平碗												3	2	5	3	20									0	3	23										
煎茶	摩訶小11												3					6									0	10	6									
	I												2	1													0	1										
	九皿																		1								1	1										
	瑞沢皿																										2	2										
	九皿小瑞沢皿																										3	3										
	辻皿												1																1	1								
	内巻皿																												1	1								
	研蓋																												3	3								
飯類	折縁深皿												2		2		4		1												5							
	飯類																4		2		8											0	8					
鉢皿	鉢皿												2		5		8															8						
	鉢鉢																1	58			59				14		2	8	1				14	17	104			
皿・飯類	四耳壺												1								5										0	5						
	口広有耳壺												3																									
	粗粒茶壺																																					
	菓子												4																					5				
	密網												1																					1				
神仏具	北飯														1						2												2					
	尊式花瓶																3				6													6				
	神仏具菓子												1																					1				
	仏花敷																				1													1				
鉢類	大型和型香炉																2				2												2					
	向付																										1							1				
その他	胎																																1					
	南台片山																1				5													4				
	密入																												4					8				
不明																														5	5							
合計																															163	16			1	48	32	299

遺跡のあり方からすれば比較的多くの伊勢鍋が出土しているといえるのではないだろうか。

貿易陶磁 貿易陶磁は70点出土しているが、白磁四耳壺が1点ある以外はすべて碗皿類である。全体出土量からみると0.53%の比率となっており、遠江・駿河地域の一般的な中世集落のあり方としても少ない部類に入るといえる。山茶碗と並行する時期の青磁碗A類・B1類、白磁碗IV・V・IX類が多く、特に青磁碗B1類は突出した出土量である。山茶碗が急激に減少するのに赤調を合わせるかのように出土量が多くなっているのは、山茶碗類に代わって供膳具の一部を担っていることを示すものであろうか。15世紀以降に位置づけられる製品は青磁碗C2類・白磁皿B群・染付碗C群があるが、その数は極めて少なく、この時期の供膳具は基本的に国産施釉陶器や土師皿が主体であったことがわかる。

瀬戸美濃系施釉陶器 瀬戸美濃系施釉陶器は表47・48に総括したように507点が出土し、全体の3.82%の比率となる。そのうち瀬戸美濃産が259点、志戸呂産が205点、初山産が43点であった。全体とし

表 48 瀬戸美濃系施釉陶器一覧表(2)

志戸呂

器種名	古瀬戸前期				古瀬戸中期				古瀬戸後期				古瀬戸計	古瀬戸～大窯	大窯製品					不明	合計	
	I	II	III	IV	I	II	III	IV	I	II	III	IV			1	2	3	4	大窯計			
天目	天目茶碗											1	1					2	2		3	
碗類	丸碗											0	0					1	1		1	
皿類	小皿											0	0					1	1		1	
盤類	直縁大皿											2	2								2	
	盤類											5	5								5	
細鉢	細鉢											3	3								3	
播鉢	播鉢											126	126							5	5	131
壺	壺											1	1					1	0		1	
壺	壺											6	6								6	
	壺											1	0								1	
	花敷											9	9					1	1		1	
神仏具	香炉											0	0								9	
	仏俵											1	1								10	
	佛											0	0					10	10		10	
壺	壺											1	1								1	
壺	壺											0	0					2	2		2	
壺	壺											16	16								16	
その他	大瀬戸系器+類											7	7								7	
	壺											0	0					1	1		1	
	壺											0	0					1	1		1	
不明												0	0							1	1	4
合計												177	177					24	24	4	205	

初山

器種名	古瀬戸前期				古瀬戸中期				古瀬戸後期				古瀬戸計	古瀬戸～大窯	大窯製品					不明	合計	
	I	II	III	IV	I	II	III	IV	I	II	III	IV			1	2	3	4	大窯計			
天目	天目茶碗																					9
碗類	内丸皿																					8
	小皿																					1
盤類	大皿																					1
播鉢	播鉢																					12
壺	壺																					8
その他	壺																					4
合計																						43

ては古瀬戸前期～中期にかけての製品は数点程度と極めて少なく、四耳壺や瓶子といった極めて限定的な器種のみが出土している。セット関係をもって製品が出土するようになるのは古瀬戸後期段階に入ってからで、古瀬戸後Ⅳ期段階頃に出土量は最も多くなり、器種構成は天目茶碗、碗類、皿類、盤類、播鉢、壺類など多様となる。大窯期に入るとその量は激減し、大窯第1～2段階には少量の皿類や播鉢がみられるのみとなる。しかし、第3～4段階になると後述するように、初山・志戸呂といった在地産の製品が搬入されることで施釉陶器全体の出土量は再び増加している状況が窺える。

瀬戸美濃窯製品と在地窯製品の搬入状況は古瀬戸後Ⅳ期段階では瀬戸美濃窯製品 84 点（複数時期は案分）に対し古志戸呂窯製品 177 点と、古志戸呂窯製品がほぼ 2 倍の出土量となる。大窯期には第1～2段階に落ち込みがみられるが、第3～4段階に在地の初山窯・志戸呂窯製品の出土量が増加することにより出土量が多くなり、瀬戸美濃窯製品がほとんど搬入されず、それに代わり初山・志戸呂窯製品が需要に応じていたことがわかる。藤澤良祐氏の分析によれば、遠江西部地域では古瀬戸後Ⅳ期段階では古志戸呂窯製品は瀬戸美濃窯製品の半数以下、大窯第3段階の初山窯製品は瀬戸美濃窯製品よりも多く、大窯第4段階の志戸呂窯製品は瀬戸美濃窯製品と拮抗する傾向があるとするが（藤澤 2005）、中屋遺跡での当該期の出土状況は、特に大窯段階において志戸呂・初山窯製品が瀬戸美濃窯製品を圧倒している点で遠江西部の一般的な様相とは異なる傾向をみせている。

小結 このように中屋遺跡における中世土器・陶磁器の数値化作業を実施したことで、いくつかの特徴が見出せることが明らかとなった。中世前期段階においては山茶碗類の出土傾向から、13世紀前半～中葉にかけて遺跡の盛期があり、13世紀後葉以降は遺物量の落ち込みから人々の生活活動は低調になっていくと考えられる。また、当該期の周辺遺跡と比較して土師質土器、特に土師皿の使用が顕著であることも判明した。それに対し、碗皿を中心とした貿易陶磁、壺瓶類を中心とした瀬戸美濃系施釉陶器は相対的に少ないといえる。中屋遺跡で発見された大規模な大溝の存在は有力な造営主体によるものと考えられるが、中世土器・陶磁器の上からはそれを積極的に支持する結果は得られていない。あるいは調査区が遺跡の中心から外れていることにも起因する可能性もあろう。ただし、中世前期段階に土師皿の使用が顕著である点は一般的な集落の様相ではなく、遺跡の性格を推し量る要素として注目できるが、類例が少ないため評価は保留とし、今後の課題としておきたい。

13世紀後葉～14世紀代の様相は遠江・駿河地域における中世遺跡の多くがそうであるように、遺物量が激減し遺跡の様相は明らかでなくなる。これは集落域の再編に伴う盛衰という側面もあるだろうが、土器・陶磁器をはじめとする生活用具の消費のあり方が変化していることにも原因があるように思われる。つまり、この頃、生活用具として山茶碗類を大量消費するという生活スタイルが変化し、土器・陶磁器に限らず、その他の材質の器をその用途に応じて必要量使用するというような転換が図られた可能性が考えられるのである（溝口2005）。

古瀬戸後期段階～大窯段階となる15世紀後半～16世紀代には瀬戸美濃系施釉陶器、土師質土器類の出土量は増加し、これらはI～V群の建物群として捉えた屋敷地に伴うものと考えられる。碗皿類や播鉢を主体とした器種構成と出土量からは際だった特徴は見出すことは難しいが、在地の志戸呂・初山窯製品が古瀬戸後4期、大窯第3～4段階の時期に瀬戸美濃産製品を凌駕する勢いで搬入されることは注目される。

引用・参考文献

- 松井一明 1993 『遠江における山茶碗生産について』『静岡県考古学研究』25 静岡県考古学会
 中野晴久 1994 『知多（常滑）古窯址群の山茶碗について』『研究紀要第3号』三重県埋蔵文化財センター
 鈴木一有 2002 『戦国時代にかんする諸問題』『歴史民俗学』浜松市文化協会
 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2002 『桓武西宮遺跡Ⅱ 笠井若林遺跡』
 藤澤良祐 2005 『伊豆・駿河・遠江出土の瀬戸美濃製品』『出土遺物が語る社会 中世の伊豆・駿河・遠江』高志書院
 金子健一 2005 『羽柴の軌跡～中世東海の土器・陶磁器をみる新視角～』『出土遺物が語る社会 中世の伊豆・駿河・遠江』高志書院
 溝口彰吾 2005 『山茶碗～遠江・駿河・伊豆における生産・流通・消費～』『出土遺物が語る社会 中世の伊豆・駿河・遠江』高志書院
 松井一明 2005 『中世見付とその周辺 - 土器・陶磁器から見た遠江国府・守屋所を中心とした物資流通のネットワーク -』『陶磁器から見る静岡県の中世社会（発表要旨・論考編）』菊川シンポジウム実行委員会

4. 中世の墨書土器

(1) はじめに

周知のように、遺跡から出土する墨書土器は、遺跡の性格を知る上で重要な遺物として、これまで様々な視点から研究が行われ、多くの研究成果が報告されている。静岡県においても、伊場遺跡や御子ヶ谷遺跡から多量の墨書土器が出土して、全国的に注目されたこともあり、早くから多くの研究が行われてきた。しかし、その主な対象は古代の墨書土器であり、中世の墨書土器に関するものは、ほとんど確認できない。

中世の墨書土器については、古代に比べて出土量が少なく、遺跡の性格を直接知り得るような文字が少ない上に、文字として認識できないものも多く、その意味を理解することが困難であるといったイメージをもっている人が多く、それが研究の対象とならなかった大きな要因であると推測される。しかし、イメージはあくまでイメージであり、検証されないままでは、いつまでもその具体的な様相を知ることができない。中世前期の墨書土器が22点と、比較的にまとまった数出土している。これらについて検討する上で、まずは静岡市以西の地域から出土した、中世前期の墨書土器についてみてみることにする。

(2) 遠江・西駿河の墨書土器

静岡市以西の静岡県内における中世前期の墨書土器は、管見の限り、48遺跡から781点の出土が確認される(表49)。墨書土器は「1世紀以降、列島各地から姿を消してしまう」(平川2000)といわれるように、全国的にみると、中世以降出土量が大きく減少するようである。しかし、この出土事例からみても、少なくとも県内の静岡市以西の地域においては、中世に「墨書土器が消滅する」ような状況にないことは、明らかである。確かに出土点数をみると、古代の官衙遺跡のように数百点といった数の出土はみられないが、遺跡の性格に関わらず、中世の遺跡であれば数点程度の出土は、むしろ珍しくないような状況にあるといえてよい。

墨書された文字は1文字のものと2文字のものがあるが、これを1文字ずつに分離してしてみると、複数の遺跡において同じ文字が共通して使用されているものが多くみられる。3遺跡以上で使用されている漢字は20種あり、5遺跡以上で共通して使用されている漢字は、「一」「二」「十」「方」「力」「上」「大」「犬」「井」の10種である。漢字として認識できる墨書(註1)は延べ498字あるが、このうちの407字が3遺跡以上で出土する共通文字を使用しており、割合にすると実に全体の約82%を占めている。

このような共通文字の使用は、古代の集落遺跡でもすでに認められているところである。東日本の資料を分析した平川氏によると、20遺跡で使用されている205種の文字のうち、2遺跡以上で共通する文字は83種、5遺跡以上で共通する文字は「万」「大」「上」「加」「十」「井」「入」「寺」「生」「文」「千」「吉」「田」「本」「家」「西」「得」「仁」「真」「下」「主」「南」「天」「子」「安」「富」「山」「成」「壘」「継」の30種であるという(平川2000)。

5遺跡以上にみられる中世の共通文字を古代のものと比較すると、「万」「大」「上」「十」「井」など同じものが認められる一方、確認できない文字もいくつかみられる。特に、「家」「得」「真」「南」「富」「壘」「継」などの画数の多いや複雑な文字は、いずれも共通文字として使用されていない。画数の少ない単純な文字が使用されている点が、中世の共通文字の特徴といえよう。

また、3遺跡以上で使用されている中世の共通文字は20種あるが、文字の形が近いものがいくつか



1. 若狭國大良庄百姓光阿弥陀仏等通署記録文（は面）

2. 若狭國大良庄百姓申中状并通署記録文（し面）

3. 丹波國大山庄黄快注文（口面）

4. 朽木家古文書

図 418 史料にみられる略押

でも、両数の少ない一文字のものが、記号として使用されていた可能性を含んでいることを示唆するものとして注目しておく必要がある。これらに比べてより複雑で、花押として認識できるものも出土している。花押と認識できる墨書に関しては、当然のことながら、記号状のものよりも上位の階層によるものとみてよい。公家や武家、僧などが、その代表としてあげられる。

墨書される部位は、底部外面が圧倒的に多い。古代には、体部外面に墨書される例が比較的多くみられるのに対し、中世ではわずかに数点が確認される程度となっている。

(3) 各遺跡の様相

ここでは、比較的出土量の豊富ないくつかの遺跡をとりあげ、遺跡ごとに墨書土器の様相についてみることとする。

道場田・小川城遺跡（図 419） 道場田・小川城遺跡は、焼津市小川にある自然堤防上に位置する、古墳時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。土地区画整理に伴って、1989年から合計約 26,600 ㎡の範囲について発掘調査が行われている。中世前期の遺構については、把握しきれない部分も多いようであるが、地域の有力者を中心とした集落であると推測されている（河合 2004）。

墨書土器は合計 76 点報告されている。出土遺構は、溝・土坑・井戸・などであり、溝からの出土が大半を占めている。墨書は、漢字や仮名文字、記号、花押状のものが確認できる。漢字で 2 文字以上

のものは、「七郎丸」(5~21)「随喜」(1・2)「玄如」(3)「御子」(24)「千力」(22)「犬口」(4)である。共通文字1文字のものは、「万」(34)「十」(41~43)「井」(48)「下」(39・40)「大」(35・36)「二」(54)「上」(37・38)「一」(44)「七」(45・46)「あ(安)」(47)がみられる。その他の漢字としては、「五」(50)「女」(53)「喜」(51)「左」(49)が出土している。仮名文字は、「二口き」(25)と書かれたものが出土している。記号状の墨書では、「a」状の記号(55~58)がややまとまって出土している。4点ともに上の部分を丸くする点など、細部の形状も近似しており、明らかに意識して記号が書かれていることがわかる。28~31のような、文字と花押を組み合わせたようなものも出土している。

最も多量に出土しているのは、「七郎丸」である。溝ST317から、集中して15点(この他に包含層から1点)出土している。「七」と記されているものも出土しているが、いずれも同じ溝ST317からの出土であり、「七郎丸」の略であろう。この遺跡における特徴的な墨書といえる。また、「玄如」と「随喜」も、他の遺跡で確認できない墨書である。「玄如」は、法名とみてよいであろう。「随喜」は、「法華経」「随喜功德品」などによれば「他人が善き行いを修して徳の成ずるのを喜ぶこと」であるという(中村1981)。いずれも、仏教に関連する文字である点が注目される。

ミョウガ原遺跡(図420) ミョウガ原遺跡は、高田市湯日の標高約145mの丘陵上に位置する、縄文時代と平安時代後半~鎌倉時代の集落遺跡である。静岡空港の建設に伴って、1997年から合計40,843㎡の範囲が調査されている。平安時代後半~鎌倉時代の遺構としては、54棟の掘立柱建物や区画溝、5基の土坑を十文字に配した祭祀遺構などが検出されている(静学研2004)。

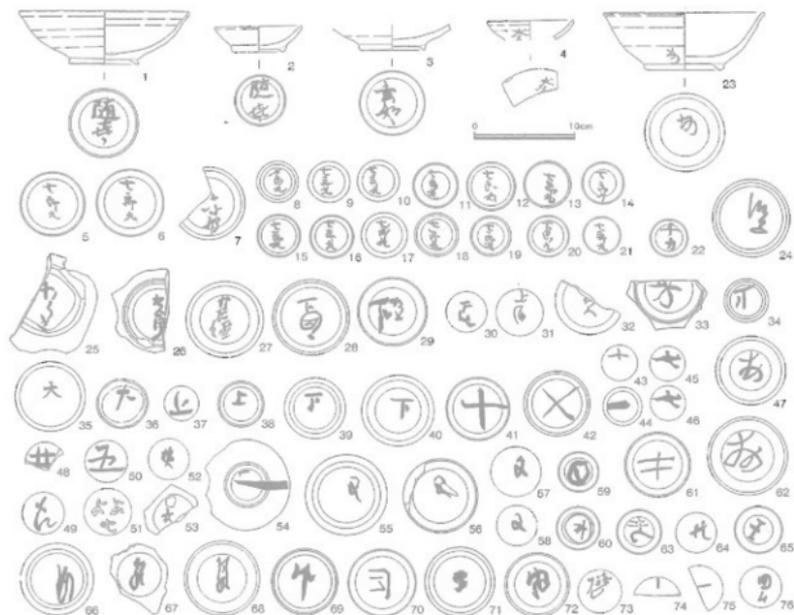


図419 道場田・小川城遺跡出土 墨書土器

墨書土器は、破片のものも含めて43点報告されている。墨書土器が出土した遺構は、自然流路・溝・掘立柱建物の柱穴・導水施設などで、自然流路から28点と最も多く出土している。墨書は、漢字と記号、花押状のものが確認される。2文字以上の漢字は、「力」(1)「一案」(2・3)「積□」(4)「大下」(5)「中上」(6)などである。1文字のものでは、共通文字の「二」(12~16)「三」(17~22)「十」(11)「大」(10)と、それ以外の文字「四」(23)「拾」(24~27)「福」(28)が確認できる。記号状の墨書には、43のようなものもみられるが、「○」「の」などの円形を基調とした記号(33~41)が多い。花押については、文字とも花押とも判断できないものが、1点(31)出土している程度である。

ミョウガ原遺跡では、大半が共通文字や数字を使用している点に特徴がみられる。また、多用されている文字としては、「三」(6点)と「拾」(4点)がある。「拾」は、他の遺跡ではみられない文字であり、この遺跡の特徴的な文字として捉えられる。

伊平遺跡(図421) 伊平遺跡は、菊江市東横地の丘陵先端から沖積地に位置する。工業団地の造成に伴って、1991年から5,887㎡の範囲が発掘調査されている。縄文~江戸時代の遺構や遺物が発見されており、鎌倉~室町時代には厨館跡であったとみられている。鎌倉~室町時代の遺構としては、掘立柱建物や井戸、土坑、溝、土壘などが検出されている(菊川町教委1995)。

墨書土器は、41点報告されている。遺構としては、溝や井戸、小穴などから出土しているが、ほぼ半分の20点は包含層や表土からの出土である。墨書は、漢字や仮名文字、花押状のものが確認できる。漢字で2文字以上のものは、「千力」(2~4)と「高力」(1)である。1文字の漢字では、「千」(6~10)「十」(11~14)「下」(15)「九」(17)「井」(18)「鬼」(19)といった共通文字が多い。共通文字以外では、「六」(21)や「善」(20)とみられる文字などが確認できる。仮名文字は1点(5)確認できる(註2)。花押状のもの(27~31)も、比較的多く出土している。

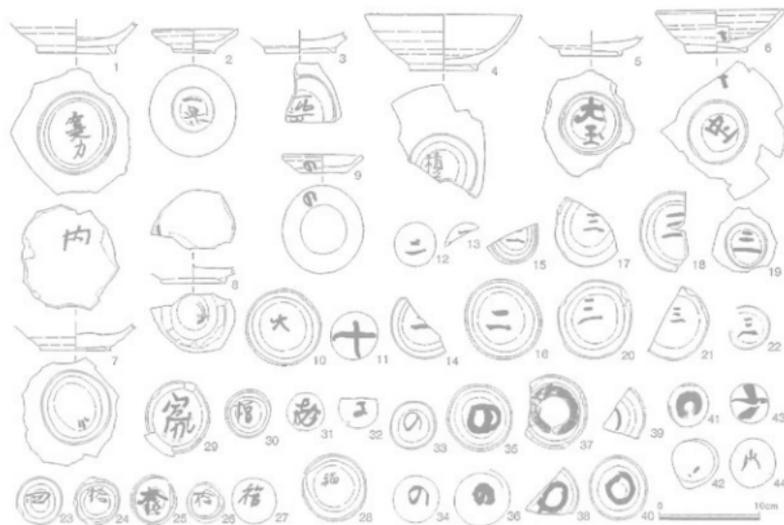


図420 ミョウガ原遺跡出土 墨書土器

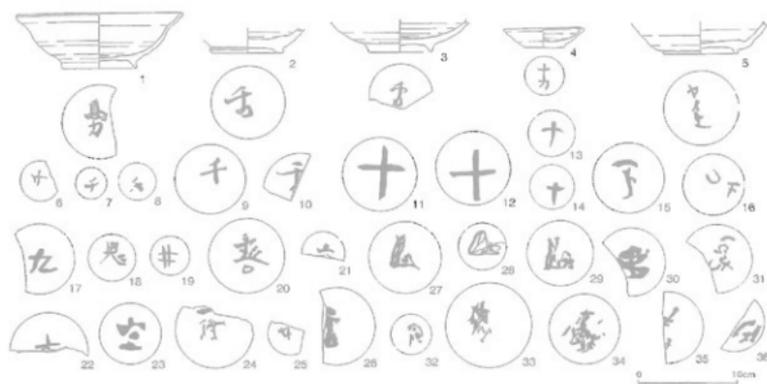


図 421 伊平遺跡出土 墨書土器

伊平遺跡の西側に隣接する横地城下遺跡群9区では、「千力」と書かれた墨書土器が35点報告されており、類似する「千力力」や「千力」に「十」を重ねたものなども確認される。伊平遺跡では「千力」以外に1文字のもので、「千」が11点、「力」が5点出土しており、「千」と「力」については、遺跡内において明らかに多用された文字であるといえる。遺跡の登録上、別の遺跡名が付されているが、伊平遺跡と横地城下遺跡群の9区は、本来一つの遺跡である可能性が高い。

中村遺跡(図422) 中村遺跡は、浜松市中区東伊場の海岸平野の砂堤上に位置する、縄文時代から近世にかけての集落である。1999年から約4,100㎡を対象に発掘調査が行われている。中世の遺構としては、掘立柱建物や井戸、溝などが検出されている(浜松市2006)。

墨書土器は、破片のものも含めて合計71点報告されている。溝や井戸、土坑、小穴などから出土しているが、約40%の29点が包含層からの出土となっている。墨書は、漢字や仮名文字、記号、花押状のものが確認できる。漢字で2文字以上のものは、共通文字の組合せの「力万」(1)がみられるのみである。共通文字1字のものは、「一」(2)「二」(3)「三」(11~23)「十」(4~7)「上」(8)「大」(9・10)「井」(24・25)が出土している。この中でも、「三」は17点と際立って多い。その他の漢字としては、「六」(26~29)「米」(30)「定」(31)が認められる。仮名文字は、「いろ」(32)「きく」(33)「か□」(34)が出土している。記号状のものは、「○」を基調としたもの(35~39)が数種みられ、「へ」に「|」を加えた記号(40・41)も出土している。42のような花押状の墨書も確認できる。

17点出土している「三」は、明らかに遺跡内で多用された文字として認識できる。中村遺跡の場合は、全体的に画数の少ない簡単な文字や記号が多いという傾向が見受けられる。

祝田遺跡(図422) 祝田遺跡は、浜松市北区細江町中川の自然堤防上に位置する。河川改修に伴って、1982・83年度(1次)と1992年度(2次)に、合計約2,800㎡について発掘調査が実施されている。古代から中世にかけての遺構としては、掘立柱建物や溝、井戸、土坑などが検出されている。遺物は、灰釉陶器や山茶碗といった土器類のほか、瓦も出土している。遺構については不明瞭であるが、寺院が存在した可能性が高いと推測されている(静文研1984、1985、1994)。

墨書土器は、破片のものも含め47点が報告されている。溝や包含層などから出土しているが、特に井戸から集中して発見されており、井戸の廃棄後投棄されたものとみられている。墨書は、漢字や記

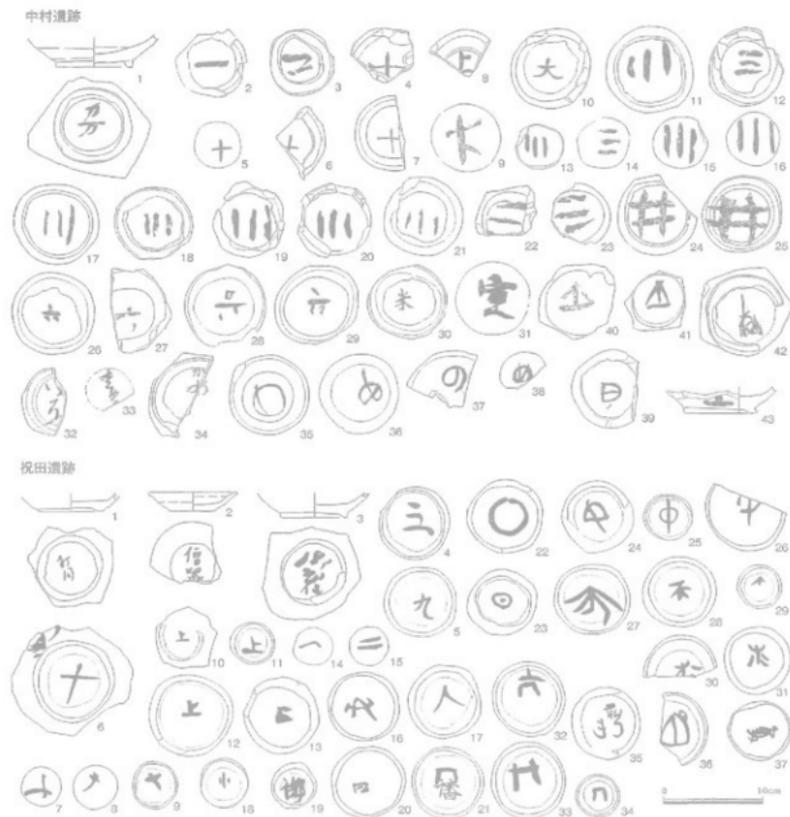


図 422 中村遺跡・祝田遺跡出土 墨書土器

号、花押状のものがみられる。2文字以上のものとしては、「僧器」(2)「打開」(1)「御藏」(3)がある(註3)。1文字ものでは、共通文字の「一」(14)「二」(15)「三」(4)「九」(5)「十」(6~9)「上」(10~13)「大」(16)「人」(17)「小」(18)「御」(19)と、「日」(20)「播」(21)が確認できる(註3)。記号状のものは、「〇」を基調とするものや、棒線を組み合わせたものなど様々であるが、「Φ」(24~26)や「不」のような記号(27~31)など、複数出土している記号も確認できる。花押とみられる墨書も出土しており、体部外面に記されているもの(6)もある。

2文字のものでは、「僧器」と「打開」が目される。「僧器」は文字通り「僧の器」であろう。報告書で「打開」と釈読されているものは、写真を見る限りでは、「行因」のようにみえる。「行因」とすれば、法名である可能性が高い。1文字のものでは、「十」と「上」が4点とやや多いが、極端に多用されている文字はみられない。

(4) 墨書土器の特徴

これまでみた点をまとめると、県内の中世の墨書土器には、以下のような特徴が見出せる。

①複数の遺跡から出土する共通文字が存在する。

「一」「二」「三」「十」「万」「力」「上」「大」「犬」「井」は5遺跡以上から出土しており、「七」「九」「千」「ド」「人」「小」「天」「安」「御」「鬼」は3遺跡以上から出土している。「御」「鬼」を除くこれらの共通文字は、画数の少ない単純な文字であり、ハネやハライなどを意識していないものが多く、半ば記号として認識されていた可能性が高い。このことは、墨書土器の出土と人びとの識字能力とは直接的には関連しないことを示しており、文字自体の意味から遺跡の性格などを知ることは困難であると推測される。

②共通文字以外には、画数の多い複雑な文字が多く認められる。

こういった文字は、基本的には、一定以上の識字能力を有する人物によって書かれたものとみてよい。また、これらについては、2文字以上記されている事例が多く認められる。2文字以上のものには、i) 共通文字の組合せのもの、ii) 共通文字とそれ以外の文字の組合せのもの、iii) 共通文字以外の組合せのもの、iv) 仮名文字の組合せのものがみられるが、中でも共通文字以外の組合せのものには、その意味を比較的容易に理解できるものが多い。内容は様々であるが、人名や施設名、仏教的な字句などがみられ、遺跡の性格を知るための手がかりとして有効な資料であるといえる。

③記号状の墨書が多くみられる。

文字か記号か判断できない破片を除くと、全体の約3割が文字として認識できないものである。紙面の都合によっては、文字が優先して掲載されていることも想定でき、実際にはこれ以上の割合で出土している可能性もある。なかには、落書きや試し書きのようにみえるものもあるが、同一の記号が複数出土している例がみられることから、基本的には意図して記された記号とみた方がよいであろう。これらの記号は、「東寺百合文書」や「朽木家古文書」などに散見される略押のように、個人ないしは集団を識別するための記号として使用されたと推測される。

④花押とみられる墨書が確認される。

中代の墨書土器とは大きく異なる点である。花押を用いた階層を限定するのは困難ではあるが、公家や武家、僧をはじめとする、一定以上の知識階層とみてよい。略押とみられる記号状の墨書に比べて、出土量が明らかに少ないことも、比較的限られた階層にあることを示している。

⑤遺跡内で多用する文字や記号がみられる。

先にみた、道場田・小川城遺跡の「七郎丸」、ミヨウガ原遺跡の「拾」、伊平遺跡の「千力」、中村遺跡の「三」などがこれにあたる。記号については、ある意味無限にあるように思えるが、「〇」「a」「の」「Φ」など、一定の記号を多用している例が確認できる。遺跡が密集する場合、その範囲は現在の行政区域や道路、河川等によって区切っている場合も多く、過去の集落や施設の範囲とは必ずしも一致しない。伊平遺跡と横地城下遺跡群9区のように、多用される文字や記号を抽出することは、当時の人々の生活領域を知る上で、有効な手段の一つである。

⑥墨書される部位は、底部外面が圧倒的に多い。

墨書された部位が底部外面のものは3点、体部外面のものは19点確認できるが、全体からみると0.3%

と24%に過ぎない。中世では、墨書は底部外面に施すのが一般的であったとみて間違いない。周知のように、古代では体部外面に墨書されたものはさほどめずらしいものではなく、数多く出土している。中世の墨書位置が底部外面にほぼ限られることは、古代とは大きく異なる点として指摘できる。

(5) 墨書土器からみた中屋遺跡

最後に、これらの特徴を踏まえた上で、中屋遺跡から出土した墨書土器を整理し、その内容から遺跡の性格について検討してみたい。

墨書土器は、破片のものも含めて合計22点出土している(図423)。大溝SD2001が11点と最も多く出土しており、次いで河川SR8001から8点、SR8003と小穴SP1037、包含層から各1点出土している。

墨書は、漢字2文字のもの1文字のもの、花押状のものがみられる。漢字2文字のものは、「藏納」(9)「腋門」(11)「千手」(1423)「得米」(1172)「得万」(52)「万料」(152)である。1文字のものは、「十」(26・54・1178)「上」(31・164)「大」(1401)「万」(1284・169)「三」(1171)「安」(153)「一」(53)「又」(1279・1952)であり、すべて共通文字である。点数としては、「十」が3点、「上」「万」「又」が各2点、「一」「三」「大」が各1点であり、突出して多く使用されている文字はみられない。花押状のものは2点(1096・1491)出土している。いずれも表面が磨滅しており、やや不明瞭であるが、左側の「し」や、右上の「一」、右側の「つ」など、似た形態となっている。画数が多く、明確にハネやハライがみられるなど記号とは一線を画していることから、花押と認識してよいであろう。

この中で注目されるのは、共通文字以外の2字が使用されている、「腋門」「藏納」「得米」である。「腋門」の文字から真っ先に想起されるのは、平安京内裏の「左腋門」「右腋門」である。左腋門と右腋

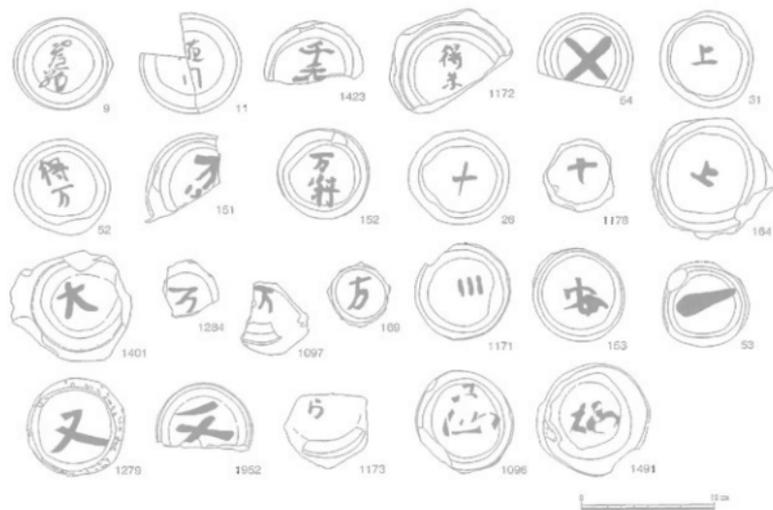


図423 中屋遺跡出土の墨書土器

門は、内裏の承明門を入れて左右、安福殿と春興殿の南に位置しており、内裏内の区画に設けられた門である。寺院では、東西南北の大門に加えて設けられた小門を「腋門」と呼ぶ。この場合、寺院を取り囲む築地の正門の脇に設けられた門を意味している。現代の感覚からすると、「腋門」という文字にはやや違和感を感じるが、『鎌倉遺文』には「腋門」（鎌倉遺文 2596、5657）と「脇門」（鎌倉遺文 4487、6247、6248、6410、9257 など）の両方が確認でき、この時期「腋」と「脇」双方の漢字が使用されていたことがわかる。この墨書土器の「腋門」が、施設内に設けられた門と外郭に設けられた門の、どちらの門を示しているのかについては判断できないが、いずれにせよ「正門」以外に門を設けた、大規模な施設の存在を想定することは可能である。中屋遺跡では、大溝によって区画された東西 160 m、南北 210 m に及ぶ大規模な施設が検出されており、違和感のないものといえる。

「蔵納」「得米」からは、収納物との関連が想起される。同じく 2 文字の「得万」「万料」も、富裕な状態を願うものとみることが出来る。古代の墨書土器において、「得」は主要な共通文字の一つとなっており、頻繁にその出土が確認される。一方で、先にみたように界内の中世の墨書土器においては、共通文字になっていないどころか、その出土は確認されていない。この点において、中屋遺跡の特殊な性格がうかがえる。

中屋遺跡は、区画内部の調査がほとんど行われていないため、その具体的な姿については将来の調査結果を待たねばならないが、本章の 2 節で述べたように瓦埴類の出土のあり方などからみて、寺院の可能性が高いと推測される。仏教に関連する墨書としては、一部欠損しているため不明瞭ではあるが、「千手」の文字が目立つ。当時寺院では宗教的な活動だけでなく、多くの下級僧侶や俗人らにより、寺領の経営をはじめ、出挙米や銭の貸付などといった経済活動も盛んに行われていた。中屋遺跡で出土した「腋門」「蔵納」「得米」「千手」といった墨書土器からは、複数の門を構える大寺院が存在し、敷地内に建ち並ぶ堂舎や子坊（塔頭）において、民衆への布教活動を行うとともに、寺院の経営を支えるための経済活動を行っていた姿が想起される。

註

1. 「安」と「天」は仮名とみることも可能性もあるが、ここでは漢字に含めている。
2. 報告書では「キエ」と釈説しているが、「エ」ではなく「は」であろう。また、「千」と「力」の文字が多用されていることを考慮すると、漢字「力」と仮名「イは」（人名か）の組合せかもしれない。
3. 「脇」については、「門脇」とも読めそうであるが、「門」と「脇」とでは明らかに連筆が異なっており、別の個体に類似する符号状の「門」が記されたものもある。これについては、記号「門」+漢字「脇」とし、漢字 1 文字のものに含めておく。

引用・参考文献

- 京都府立総合資料館 1970 『国録東寺百合文書』
 京都府立総合資料館 1974 『国録東寺百合文書』
 福立公文書館 1978 『内閣府文庫影印叢刊 朽木家古文書 下』
 黒田俊雄 1985 『中世寺院史と社会生活史』『中世寺院史の研究 上』法藏館
 宇川南 2000 『墨書土器の研究』吉川弘文館
 河合修 2004 『道場田・小川城遺跡』『中世の土器・陶磁器』『焼津市史 資料編 1 考古』焼津市
 財団法人静岡無量蔵文化財調査研究所 2004 『ミウカ原遺跡地』
 堀川町教育委員会 1995 『懐地城南遺跡群発掘調査報告書』
 財団法人浜松市文化振興財団 2006 『中村遺跡—中世編—』
 財団法人静岡無量蔵文化財調査研究所 1985 『祝田遺跡Ⅰ』
 財団法人静岡無量蔵文化財調査研究所 1994 『祝田遺跡Ⅱ』
 中村元 1981 『佛教語大辞典』東京書籍

5. まとめ

中屋遺跡の所在する浜北区根堅に考古学的調査の手が入ったのは、北側に広がる岩水寺丘陵に分布する古墳群の調査からであった。500基余りと推定されるこの古墳群は、5世紀後半から末に築造された人形山古墳群（下津谷 1988）をはじめとし、おもに6世紀から7世紀代の後期群集墳からなる。この後期群集墳については、本研究所の第二東名工事に伴って調査されたものに限っても、雲岩寺古墳群、高根山A古墳群の58基と多くの調査例を重ねている（武田 2004）。

それとは対象的に中屋遺跡のような段丘面の集落遺跡は先例になく、本格的に調査された例は、今回の第二東名建設事業に伴う本研究所の発掘調査が初めてといえる。

調査面積約24,000㎡、調査期間約6年に及んだ中屋遺跡の発掘調査は、すでに報告書を刊行した大門西遺跡（静埜研 2008）とともに、根堅地区の歴史を叙述することで、多くの新知見を含んでいる。

本来、調査例の少ないこの地域の集落遺跡の中において、中屋遺跡の調査成果から導かれる諸問題は、今後予定される第二東名工事の発掘調査報告書の成果を待って検討すべきであるが、古墳時代から江戸時代の及ぶ中屋遺跡の変遷をあとづけることの意味は、決して小さくないであろう。

以下、前節までに述べられている項目を避け、主に中屋遺跡の集落について調査成果を検討し、調査報告書の筆を置くこととした。

(1) 古代

竪穴建物 中屋遺跡の竪穴建物は6区から検出されているが、カマドなど炊飯施設が認められず、明瞭な貼り床、壁溝も認められない。柱穴が認められる例もあるが、ない例もある。恒常的な住まいというよりも別の利用を考えた方がよいかもしれない。また検出面が浅く、これ以外の竪穴建物はすでに削平され消滅した可能性が高い。いずれも時期は8世紀前半である。

掘立柱建物 中屋遺跡の掘立柱建物については6・7世紀の建物の主軸が東にふれ、8世紀前半が西にふれるという共通性があり、この点で中・近世の建物跡と異なる。このことから、本報告書の中で古代の建物跡と記述している範囲は、古墳時代後期から奈良時代末・平安初期に比定でき、古代前期の範囲に収まると考えられている。

1区の掘立柱建物SH1008は、中屋遺跡の掘立柱建物では、周囲に溝を掘削し、規模も大きい。そのため報告者は6世紀後半の「豪族居宅など、集落における中心的な施設」と推定している。近接するSH1006・SH1007についても出土遺物がわずかなため、建物跡の時期を出土遺物から比定することは困難であるが、この2棟の建物跡はSH1008と同じ区域に建てられていること、建物の主軸がSH1008と同じであることから、これら建物跡が有機的に関係していると推定できる。

掘立柱建物SH1011の時期は、7世紀後半と考えられている。中屋遺跡の出土土器中で、その量が増加するのは、この時期から8世紀前半である。建物跡の時期が古代としか判明しないケースもこの時期に入る可能性が高いと判断したい。これを裏付けるように2区SH2003、SH6009、SH6018、SH6020、SH6024と掘立柱建物の多くが、この時期に帰属する。

集落の形成 中屋遺跡の北側には岩水寺丘陵があり、横穴式石室を主体部とする大型古墳群が存在する。現状では5～6世紀の古墳はわずかで、多くは7世紀代に築造され、7世紀中頃にピークをむかえている。古墳群の眼下にある中屋遺跡では、古墳時代後期から古代の集落跡が検出され、これが調

査範囲でのもっとも古い遺構群である。検出された遺構は、竪穴建物、掘立柱建物、土坑・小穴、溝である。中屋遺跡周辺では、弥生時代や古墳時代後期前葉以前の集落跡は認められず、集落域に含まれていなかったと考えられる。集落は、後述するように古墳群のピークをむかえるやや前に営まれたらしく、集落のピークも7世紀中頃以降である。集落と古墳群の消長をみると、集落の形成は古墳群のピークと重なっているため、それと関係するような結果である。竪穴建物と掘立柱建物は、それぞれ1、2棟がまとまりをみせ、それが30～50mほど離れて分布する。これが中屋遺跡の実体的な姿であって、戸籍・計帳という房戸・郷戸のどの段階にあたるかは、今後の課題である。

製塩土器 8世紀前半には、瀬美半島でつくられた製塩土器（焼塩容器）の体部などを廃棄した竪穴建物跡SB6006と土坑SF6011、SF6034が認められた。製塩土器の脚部は別の場所で廃棄されたと考えられ、出土しなかった。もともと製塩土器は焼塩専用容器であって、生産地以外ではきわめて発見例が少ない。さらに粗塩を焼締めて固形化するもので、今日のように調味料として日常生活に使用されるものではなく祭祀に用いられたといわれている（岩本1980・大林2006）。SB6006とSF6034では祭祀用の小型土器を伴い、先の説を追認している。なお、竪穴建物跡SB6006とSF6034は8世紀前半、土坑SF6011は7世紀後半とされ、焼塩容器の時期が判明する。

鞠羽口 SF6032では8世紀後半と推定される小鍛冶用の羽口と炉壁片が投棄されていた。付近に小鍛冶工房があったことが推定された。律令期村落において、村落祭祀や小鍛冶工房がどの程度の集落単位で存在したのかは、今後の類例を待ちたい。

平安時代 時期の不明瞭な遺構を除くと、8世紀後半にはいりSH6019以外、認められなくなる。つまり中屋遺跡の古代集落は奈良後半でほとんど終了し、平安初期にかけては灰軸陶器片や緑軸陶器の小型壺（2467）のように一部の遺物が認められるのみとなる。この緑軸陶器の壺も小型品で、祭祀用と考えられる。第2章で述べたように、承平年中（931～938年）に編纂された『倭名類聚鈔』には、鹿王郡中の郷に赤狭がある。中屋遺跡の範囲は、『倭名類聚鈔』の赤狭の範囲に含まれていたと考えられるが、この時代には人々が住まいする集落の一角ではなく、その周辺の原野に変わったといえる。この辺が、『倭名類聚鈔』の郷と中世の郷が一致しない点であろう。これは、遠江の古代の郷と中世の郷の不一致につながる問題ではないだろうか。

（2）中世前期

集落の再開 再び中屋遺跡に人々の住まいする集落が成立するのは、12世紀中葉から後葉と考えられる。中世の掘立柱建物の年代は、12世紀後葉から13世紀後葉・末が少なく、多くが15世紀後半から16世紀末～17世紀初めに比定されている。建物の年代的分布をみると、I群の一部とV群南半以外、II群からV群北半までのすべてが、15世紀後半から17世紀初めに比定されている。

中屋遺跡の場合、現代の削平が著しく、遺構の検出面が浅い。したがって、後世の削平によって、建物跡やそれに関係する柱穴や、本来地中に包含されていた遺物は遊離し、流失した可能性が高い。他方、大溝のように、地中深くに掘削され埋没した遺構には、たとえ掘り直しされていても、安定した層を保ち、遺構の時期や周辺から投棄されたりし、混入した遺物によって、周辺に存在したであろう遺構の年代を反映している。

大溝Ⅲ層からは12世紀末葉の山茶碗・小皿が高い比率で出土している。これに遺物は投棄されたにせよ流れ込んだにせよ、中屋遺跡に展開した中世集落の年代を示している。8区河川SR8001では、護岸遺構と祭祀に伴って埋納された鞍などが検出されたが、その年代は13世紀中頃であった。流路SR7002やSR9002にも、掘削時期よりも古い13世紀代の遺物が流れ込んでいた。この周辺には中世前期(12世紀後葉から13世紀後葉・末)の遺構があつて消失した可能性も高い。いずれにせよ生活領域であつたと推定される。掘立柱建物V群の南半周辺に位置する土坑も中世前期が多く、河川SR8001までの範囲が、中世前期のエリアであつたと考えられる。

井戸 生活をする上で、水の確保は重要である。1区SE1001と5区SE5001は中世前期の井戸であつた。ところで、この井戸の周辺には当該期の建物跡が複数あつて、この井戸を使用する人々は、居住するエリアで共同使用したと判断される。

出土した瓦類の分析から、大溝で囲まれた北側の未調査領域に中世前期の寺院の存在が指摘された。すると、中屋遺跡における中世前期の建物跡・井戸などの遺構は、寺院の外域と考えざるをえない。井戸からの出土遺物を見ると、SE1001からは瓦片やカワラケ小皿がある。中世前期のカワラケは、寺院の儀式や武家礼法にもとづく費店などに使われる容器である。すると、この井戸を使用した人々の中に、寺域外に居住する僧侶や寺人の存在も推定される。

呪符木簡 旧河道SR8001では、護岸構築土に埋納されていた螺鈿装飾の鞍、呪符木簡、鞍の下に並べたヤダケが出土した。鞍は螺鈿装飾の高級品である。これら遺物は、出土状態や呪符木簡の存在から、川辺において「まじない」が行われ、護岸構築途中に埋納されていたと推定される。では、何を対象としたのであろうか。現在残る呪符を記した小野清秀『加持祈禱秘密大全』(小野1936)などをみる限り、出土した呪符木簡と一致する例はなかった。

主頭形を呈する呪符木簡5枚には「急々如律令」の呪文が書かれている。その下もしくは裏に春、夏、秋、冬の季節を記したもの4枚と下部の欠損して不明のもの1枚があるが、これは五行の運氣を表した部分と推定され、不明の1枚には土用と記されていたと推定される。さらに山、尸、日、星座などの符録の下に「鬼」の一字が書かれている。これは、墓りの方位にある疾病など悪しき氣と推定(山里2004)され、木簡はこれの除去のため地中に埋めたと推定したい。つまり、河川SR8001の出土地点から方位を守り、地鎮、方角めをする呪符と理解したい。

もともと陰陽道に由来する「急々如律令」の呪符木簡は、修験者に引き継がれ、流布していった(奥野1997)といわれており、本例も中屋遺跡付近の寺院に関与する修験者の存在が考えられるが、このことは少々筆が走りすぎたのかもしれない。

荘園公領制 中屋遺跡において、寺院やその外側に集落が成立した時期は、12世紀後葉である。この時期もしくはその直前は、遠江において賀侶荘、初倉荘など荘園や御野の成立、展開する時期である。これは全国的傾向で、「荘園公領制」の成立と呼ばれている。中屋遺跡の中世集落は、この時期に成立し、13世紀末に衰退している。荘園公領制といわれる体制と、考古学で検出された中世集落の実態とその消長が重ね合わせて論じられることは少ない。古代の再編が行われ、新たな中世郷村が生まれたことにつながる問題(坂本1985)でもある。

(3) 中世後期

集落の衰退 13世紀末から14世紀初めにはいと、中屋遺跡からは、遺物という人々が使用した生活用具の残存が急速に減少する。それ以前、遺物の主体であった山茶碗は瀬戸・東濃の一部以外、生産されなくなる。生産がない以上、消費もないと考えることができる。地中において後世まで残る遺物の代表格は、土器・陶磁器である。中屋遺跡を含む、東海地方東部の遺跡から山茶碗がほとんど出土しないことと、当該地域に人々が急速に減少したことは、必ずしも結びつかないこととなろう。よくいわれるように、木製品など有機質の容器に転化した場合、使用した容器は地中には残らない可能性が大きい。

他方、中屋遺跡では、14世紀代の中国製陶磁器（貿易陶磁器）が一定程度出土している。貿易陶磁器が出土する比率は、13世紀の西濃江の遺跡で0.5%であるから、14世紀代についても、貿易陶磁器が一定程度ある以上、それ以外の残りにくい生活用具があったと考えざるをえない。ただし、この時期でも普遍的に出土する常滑の壺・甕類があまりみられないことから、中屋遺跡における人々の生活活動が、前時期よりも衰退したことは指摘できる。

掘立柱建物 再び中屋遺跡において、人々の住まいである掘立柱建物が増加するのは、15世紀後半から16世紀末～17世紀前葉である。掘立柱建物Ⅰ群からⅤ群北半までの大半が、この時期に比定されている。これら建物跡の規模は、1間×2間、1間×3間、2間×2間、2間×3間、2間×4間、2間×5間である。多くは2間×2間以下の小型建物で30㎡以下が多い。

Ⅰ群の建物跡群では、SH1003が1間×3間が主屋と考えられ、それに1間×2間のSH1002がある。SH1003については、15世紀中葉から16世紀後葉と考えられる建物であり、その建物と有機的関連を考え、それ以外の建物もこの時期に建てられていたと判断される。SH2001はこれらの建物跡と離れ、別のグループであろう。規模は2間×2間であり、主屋と考えられる。

Ⅱ群の建物跡群は、1間×3間、2間×3間、2間×4間の建物で、SH2004からSH2008の建物跡は近接し、重複しているグループである。複数の時期にわたって、建物を建て替えながら生活したと推定される。それにしても、主屋とそれよりやや小さい付属建物の屋敷取りであり、この付属建物は納屋や倉庫という規模ではない。脇屋というべき別棟であろう。SH2009とSH4001はそれぞれ離れ、SH2004からSH2008の屋敷と異なり、それぞれが1棟で成り立つ家族の建物であろう。このようにⅡ群の建物を見ると、主屋とそれよりやや小さい付属建物で成り立つ家族と、1棟で成り立つ家族の建物であったことになる。

Ⅲ群の建物跡群は、主屋と考えられる2間×4間の建物4棟がある。これは17世紀前葉まで長く同じ屋敷地取りで、建物を建て替えながら生活したと推定される。ただし、同じ系譜の家族の居住かは不明である。当該期、屋敷地と建物は売買されているからである。近接するSH6004は納屋、倉庫のような機能も考えられる。このⅢ群の建物跡群は、中屋遺跡の中では建物規模が大きいグループである。また、Ⅲ群の建物跡群を区画する溝SD6002からは、19世紀代の陶磁器が出土しているため、同じ居住空間が長く使用されたと判断される。Ⅲ群から東側にある溝SD4001についても、19世紀代の陶磁器が出土しているため、中世後期においてⅢ群には屋敷地を区画する溝はなかったと判断される。

Ⅳ群の建物跡群は、2つのグループにわかれる。1つは1間×3間のSH3001で、もう1つのグループとは離れ、1棟で成り立つ家族の建物であろう。2つ目のグループには、主屋と考えられる2間×3間の建物3棟と、2間×5間の建物1棟がある。SH7002からSH7009の建物跡は近接し、重複しているグループである。複数の時期にわたって、建物を建て替えながら生活したと推定される。それにし

ても、納屋や倉庫と推定される SH7005 以外、主屋とそれよりやや小さい付属建物の屋敷取りであり、この付属建物は納屋や倉庫という規模ではない。分家別れも含め、脇屋というべき別棟であろう。これより、IV 群の建物跡群は近世まで長く同じ屋敷地取りで、建物を建て替えながら生活した跡と推定される。

V 群の建物跡群は、主屋と考えられる 2 間 × 2 間の建物 SH3003 と、1 間 × 2 間の SH3002 と SH3004 が認められた。後者は重複し、同じ屋敷地取りで、建物を建て替えをしたと推定される。また、北西に 17 世紀末から 18 世紀初頭と考えられる井戸 SE3001 があり、のちにこのエリアが屋敷地として使用されたと考えられる。V 群の建物跡群は、主屋と近接する付属建物という屋敷地と考えられる。

ところで、建物跡の分析から、掘立柱建物は I 群から V 群のグループにわかれ、さらにその中を細別できた。これは、集落内の屋敷取りを表していることと評価できる。それらに共通する 1 棟のグループと、主屋と付属建物で成り立つグループとに分けられることであろう。これはいわば建物にすむ住民の問題であり、その家族または住人が、単婚家族か非血縁者を含むかという居住域の広さにつながる。このことは、中屋遺跡に展開したそれぞれの家が、どのような経営単位であったかに結びつく問題であろう。

集落の様相 出土土器・陶磁器をみると、威信財になるような高級品はなく、中屋遺跡は一般的な農村部の一角と考えられる。他方、建物規模と屋敷取りについてはどうであろうか。建物規模と屋敷地からすれば、それほど大きくなく、屋敷地を掘りて区画するなどの地乗は認められない。よって一般的な農村部の一角という同じ見解をえた。ではこの時期、居住域の内外である境界はどこにあったのであろうか。遺跡東側には河川 SR8001 があるので、当然ながら境界になっている。SR8001 の 1 層からは、阿弥陀如来、無量寿（如来方）、大日如来の名号の書かれた塔婆類が出土している。立てられていたのか供養後、水辺に流したのかは不明であるが、境界を意識したものと判断したい。なお、この SR8001 は 17 世紀中頃前後に溜池に作り替えられており、塔婆はそれ以前のものといえよう。

(4) 近世

墓と屋敷地 中屋遺跡では、戦国時代末から 17 世紀初頭には墓地がみられる程度で、しばらく生活の痕跡はほとんど認めず、生活の拠点は調査区外に移ったようである。つぎに、中屋遺跡から発見された中世後期から近世前期の墓（中・近世墓）について、考えてみたい。

1 区北西では、16 世紀代の 2 基の墓（SX1006・1007）が発見されているが、掘立柱建物 I 群に近接した位置に発見されていることから、屋敷墓と考えられる。近世墓 1 基（SX1005）は 18 世紀初めの茶見墓である。周辺に近世の建物跡もなく墓が造られていないことから、安楽寺の寺院墓地とは考えられない。居住域から離れた、ある特定の家が所有する墓の一部であろうか。

2 区では、大溝と近世の区画溝の内外で、中・近世墓が発見されている。ただし、区画溝 SD2004 は近世墓 SX2005 とほぼ同じ時期であり、この墓と重複しないで、避けるように掘削されている。SX2005 の位置は、何らかの特殊事情があったと推定される。茶見墓 SX2006 は区画の外であり、居住域の外と判断される。それとは対比的に中世墓は、II 群の屋敷地のはずれで発見されていることから、屋敷墓の可能性が高い。区画の中から発見された SX2009 は、土葬で自然石の墓標をもつ。墓穴の大きさから子供の墓の可能性もあって、それゆえ哀別を惜しみ、屋敷地のはずれに埋葬したのかもしれない。

3 区では、近世の区画溝の内と土塁上の削平された部分に近世墓が発見されている。区画溝 SD3009 の埋没後に墓地は造られている。茶見墓 SX3003 と 3004 は、いずれも 17 世紀中頃から後半と、土塁上

の墓地群より古い。すでに土器は崩され、整地した後に造られたと判断される。付近に建物跡がないことから、居住域のはずれとも理解され、2基からなりそれぞれ1体を埋葬した屋敷墓の可能性が高い。土器上の墓地群は、18世紀前半も前後する時期で、茶毘墓も含んで複数基が集中している。村墓や寺院墓地の一角と言うよりも、ある特定の家の数世代にわたる墓地と判断される。SX3005は17世紀中頃から18世紀代の茶毘墓であり、単独で存在する。

中屋遺跡の中・近世墓は、主に遺跡北半に分布するケースが多い。そのうち中世墓は掘立柱建物の周辺から検出されていることから、屋敷墓の可能性が高い。さらにこの中世墓はそれぞれ1基から3基で構成され、数世代にわたる墓地とは考えられない。推定の域を出ないが、被葬者は分家創出の際の初代夫婦とその隠居した片親ではないだろうか。

近世墓については付近に建物跡がないこと、当該期の生活用具として残りやすい陶磁器も認められないことから、居住域のはずれの墓所と考えている。これら墓地がなぜその後、みられないかであるが、安泰寺の寺院墓地に移されたからだと考えている。その時期は、中屋遺跡から墓地が消える18世紀中頃から後半であろう。

近世の集落 再び中屋遺跡から遺構と遺物がみられる時期は、17世紀後半から末であるが、これは数少ない。一定程度以上みられるのは、18世紀中頃から後半である。この時期には掘立柱建物跡ではなく、石場立建物に移行していたと考えられるが、現代の建物建て替えや削平によって建物跡は確認できなかった。そのため生活用具の一部である陶磁器は、区画溝の埋土や土坑・小穴に残っていたのみである。この時期には、直線的に延びる区画溝がつくれ、屋敷取りが明確にされる。この区画はほぼ現代の屋敷取りの基本となっていた。墓地の移動もちょうどその頃であって、中屋遺跡周辺では、村の再編というべき現代まで続く新しい土地利用が、この時期、始まったこととなろう。

引用・参考文献

- 小野清寿 1936『加賀神祕書大鑑』
 岩本正二 1983『7～9世紀の土器製法』『文化財論叢』
 坂本重三 1985『荘園制成立と王朝国家』
 下津谷進男 1988『人形山古墳』『浜北市北瀬古墳群』浜北市教育委員会
 鹿野典雄 1997『まじない習俗の文化史』
 山本純一 2004『呪符の文化史』
 武田寛生 2004『雲岩寺C古墳群』『高取山A古墳群』『浜北市史 資料編 原始古代中世』
 大塚元 2006『古墳時代西日本を中心とする須恵土器の用途について』『静岡県埋蔵文化財調査研究所 研究紀要 第12号』
 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008『大門口遺跡・大平遺跡』

図 版



図版1 遺跡とその周辺(1)



1 遺跡遠景(西から)

2 遺跡遠景(東から)



1 遺跡遠景(東から)

2 遺跡遠景(南から)



遺跡の全景と調査区（航空写真合成）



西辺・南辺大溝 (西から)



南辺・東辺大溝と土塁の南東隅(東から)



1 西面土塁と大溝 (南から) 2 西辺大溝 (南から)



- 1 形辺大溝（東から）
- 2 大溝の南西隅



大溝と河川の接合部（東から）





1 螺鈿鞍の出土状況 (下に呪符木簡とヤダケ) 2 呪符木簡とヤダケの出土状況



1



2



1



2



1



2



1



2



1 後輪 (外側) 2 前輪 (外側) 3 前輪 (内側) 4 圧木先



1



2





図版 19 大溝 SD2001 出土遺物 (3)







1



2



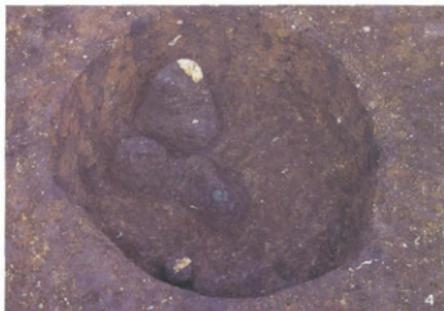
1



2



1 SX1005 2 SX2006 3 SX3001 4 SX3002
5 SX3003 6 SX3005 7 SX3009 8 SX3008



1 SX1007 2 SX1008 3 SX2007 4 SX2004
5 SX2005 6 SX2008 7 SX2009 8 SX3007



1



2



3



4



5



6

1 SX1005 出土遺物

2 SX1007 出土遺物

3 SX1008 出土遺物

4 SX2004 出土遺物

5 SX2005 出土遺物

6 SX3001 出土遺物



1



2



3



4



5

1 SX3002 出土遺物 2 SX3003 出土遺物
 3 SX3004 出土遺物 4 SX3007 出土遺物
 5 SX3005 出土遺物



1



2



1



2



3



4



5

1 SD3009・3013・3014 出土遺物

2 SD4001 出土遺物

3 SR7002 出土遺物

4 SD6002 出土遺物

5 SR9002 出土遺物



1



2



3



4



5



6

1 SD1006 出土遺物

2 SD2003 出土遺物

3 SD2004 出土遺物

4 SD2013 出土遺物

5 SD2014 出土遺物

6 SR8002・8003 出土遺物



1



2



3



4



5

- 1 SE3001 出土遺物 2 SE1001 出土遺物
3 SE4001 出土遺物 4 SE5001 出土遺物
5 SF7047 出土遺物



1



2



3



4



5



6

1 SF1025 出土遺物

2 SF6033 出土遺物

3 SF1004 出土遺物

4 SF3018 出土遺物

5 SF6028 出土遺物

6 包含層出土片口鉢・甕・壺



1



2



3



5



4



6

- 1 山茶碗 2 石製品 3 土紅質土器皿（非ロクロ）
 4 土紅質土器皿（ロクロ） 5 中世陶器 6 伊勢型鍋・内耳鍋



1

1 近世陶磁器 2 土人形



2



3

3 貿易陶磁









1



2



1



2



3



4



5



6

1 竪穴建物 SB6001 出土遺物
4 小穴 SP 出土遺物

2 土坑 SF6032 出土遺物
5 土坑 SF 出土遺物 (古代)

3 竪立柱建物 SH 出土遺物
6 溝 SD3001 出土遺物



1 包含層出土須恵器

1



2 包含層出土土師器

2



3 硯・緑釉陶器・瓦など



1109

1109 墨書土器【枚主】(SR8001出土)



1108

1108 墨書土器【□□】(SR8001出土)

3



1 SB6006 と SF6034
(手前が SB6006・東から)



2 SB6006 遺物出土状況
(東から)

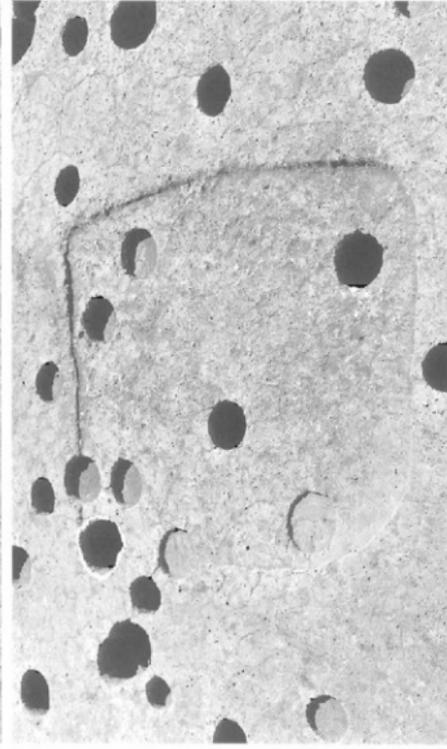


3 SB4001 と SF4015
(北から)

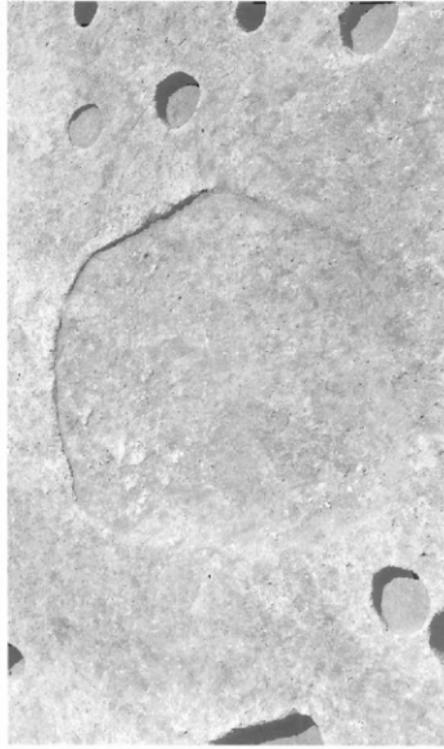
图版 41 穿孔建物 SB (2)



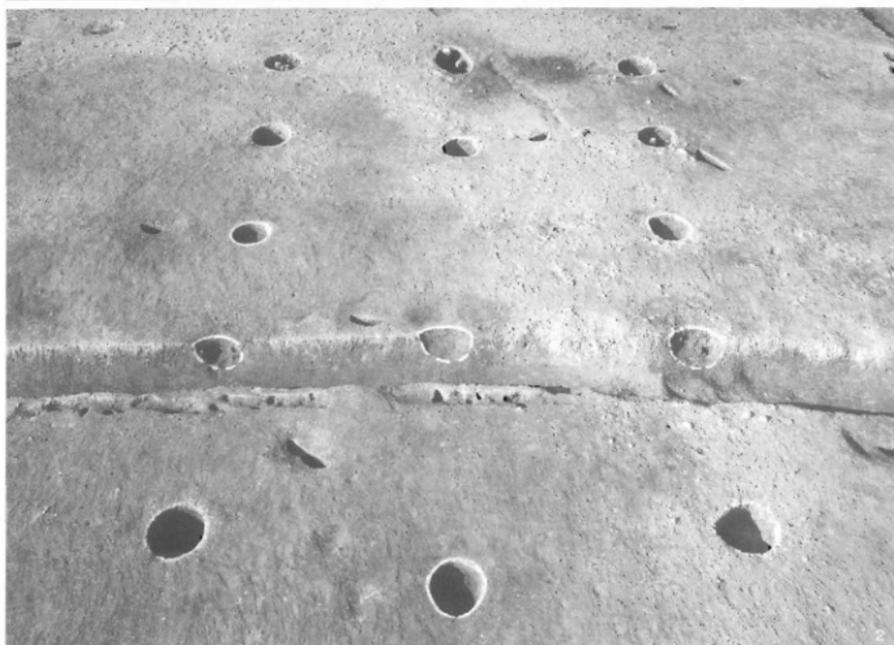
1 SB60001
(正面)



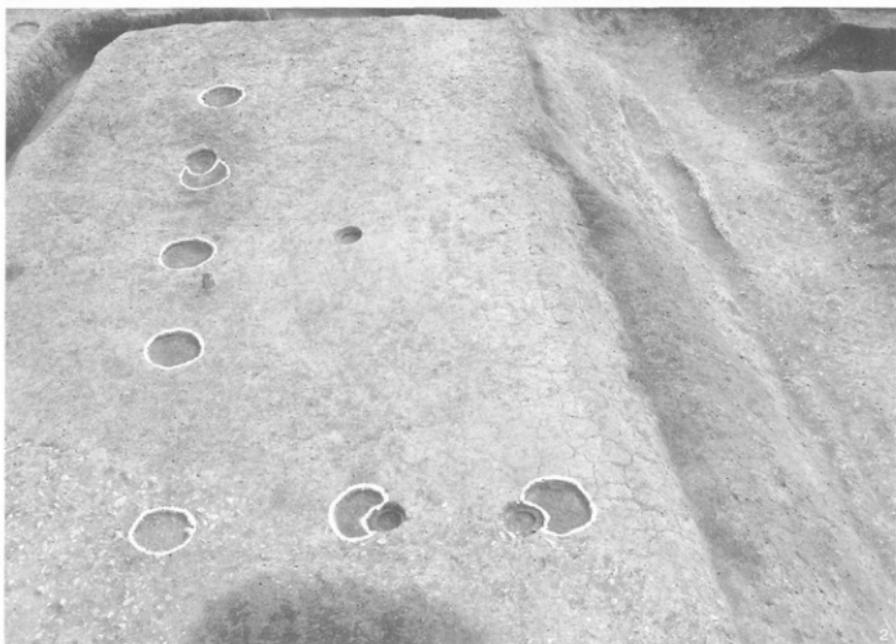
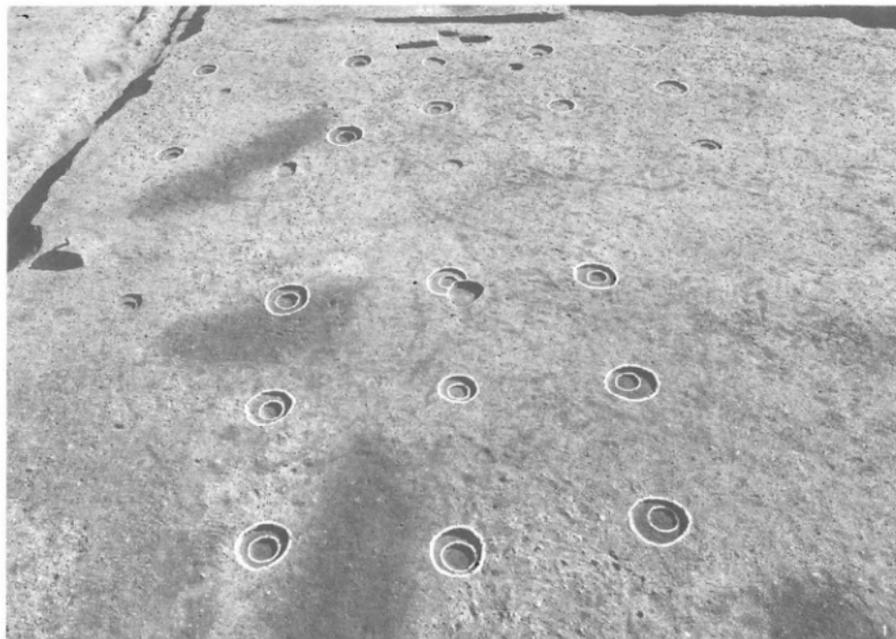
2 SB60003
(正面)



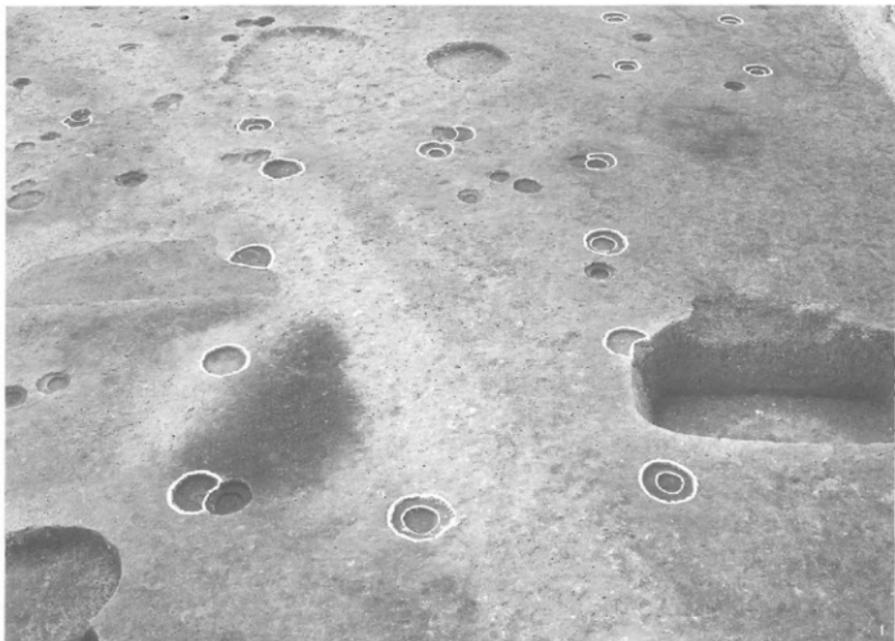
3 SB60004
(正面)







1 SH6001～6003 (北から) 2 SH6012 (北から)





1 SH2002と2001 (南から) 2 SH2006～2008 (東から)



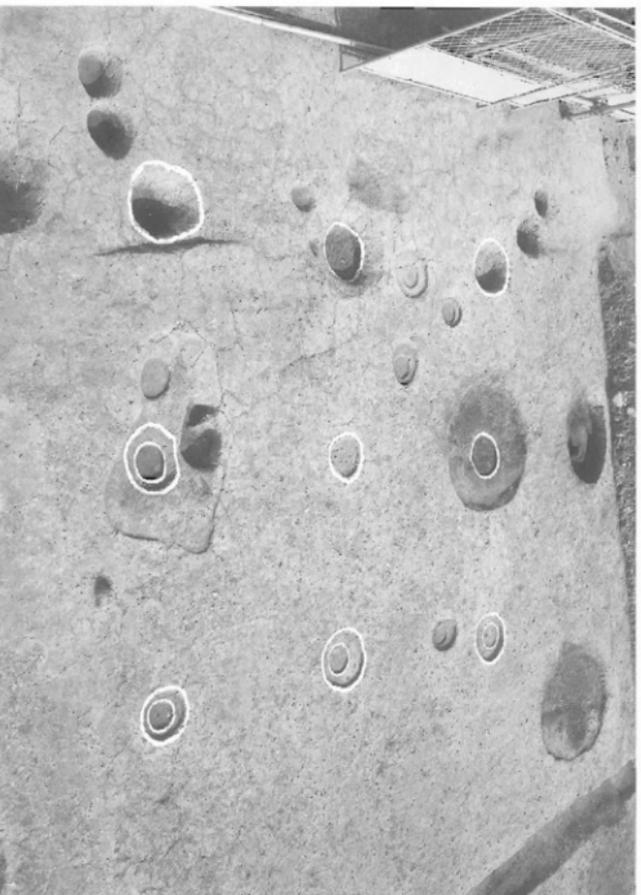
1 SH6005～6008 (北から) 手前中央が SH6006

2 SH7001と7002 (北から) 手前が SH7002



1 SH7003 (西から) 2 SH6010と6011 (東から)





獨立柱建物 SH (9)・河川 SR7002 図版 50



1. SH7007 (遺跡6) 2. SR7002 (遺跡5)

図版 51 河川 SR8001 護岸施設



1 杭列B (北から) 2 杭列B・構造材 (南から) 3 杭列C・構造材 (北から) 4 杭列D (南から)



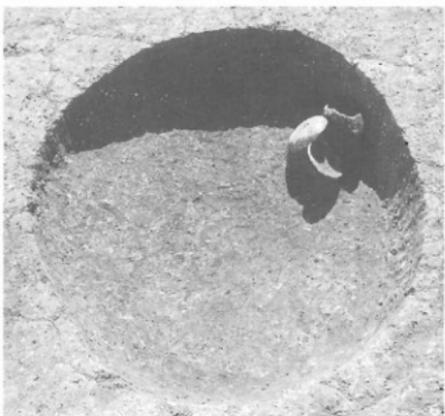
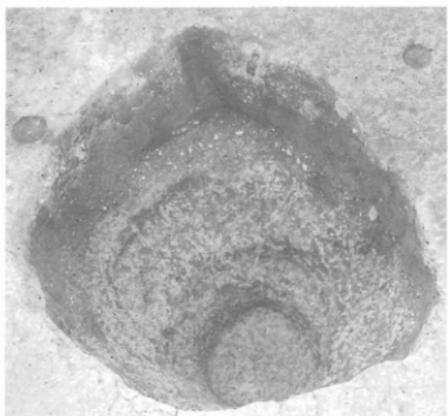
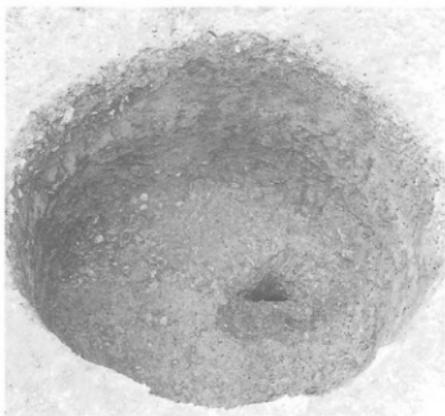
1 SR1001と現在の覺巻川（北から）

2 SD1001 西側（東から）

3 SD1001 東側（東から）



1 SD3001 北半 (東から) 2 SD3001 南半 (東から)



1 SE1001 2 SE5001 3 SE6001 4 SF1025 5 SF6033 6 SF6028



1



2



3



4



5



8



9



10



11



12



13



14



15



16



17



18



19



20



21



23



24



25



26



27



28



29



30



31



32



33



34



35



36



37



38



39



40



41



42



43



46



47



48



49



50



118



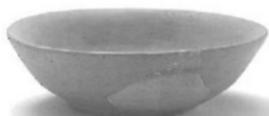
128



129



136



139



140



141



147



152



168



171



320



323



324



326



980



981



1256



1283



64



65



66



67



69



71



72



73



74



75



77



78



79



110



186



188



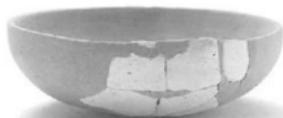
190



192



194



198



200



201



203



204



206



209



211



347



357



358



361



362



986



1196



1198



1200



1202



1203



1204



1205



1206



1207



1210



1214



1310



1311



1313



1318



1323



1326



1328



1332



1333



1334



1335



1338



1343



573



657



660



706



707



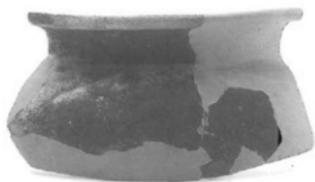
709



712



82



213



373



374



389



518



519



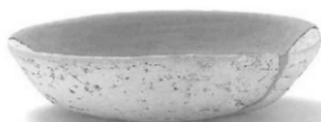
520



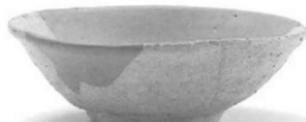
598



672



1699



1695



1713



1714



1721



1633



1736



1741



1742



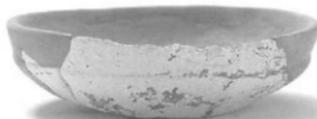
1743



1754



1758



1765



1684



1777

1695・1699 SF1004 出土	1713 SF2013 出土
1714 SF2023 出土	1721 SF3009 出土
1633 SF6033 出土	1736 SF4013 出土
1741 ~ 1743 SF6028 出土	1754 SF7019 出土
1758 SF7026 出土	1765 SF7031 出土
1684 SF7047 出土	1777 SF8002 出土



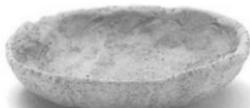
1785



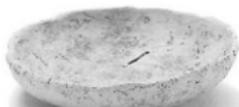
1798



1805



1806



1807



1870



1871



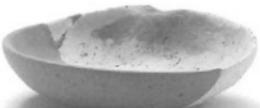
1872



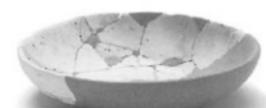
1877



1878



1879



1880



1881



1895



1896



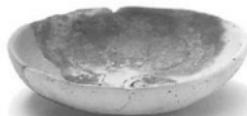
1897



1898



1899



1917



1918



1919



1923



1930



1931



1786



1818



1873

1874

1875



1787



1819



1826



1827

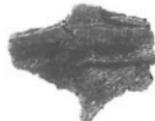


1839



1909

1933



1829



1828



1840



1841



1842



1882



1901



1902

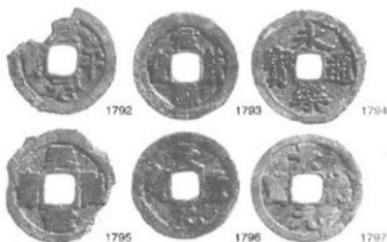


1932

SX1005 出土



SX1006 出土



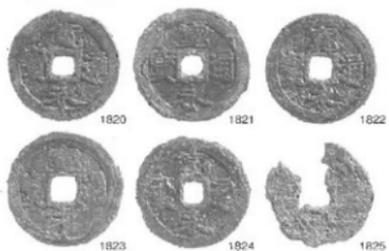
SX1007 出土



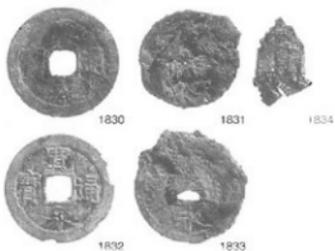
SX1008 出土



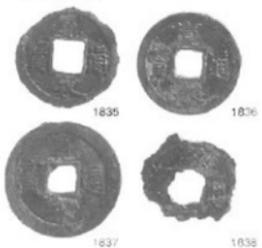
SX2004 出土



SX2005 出土



SX2006 出土



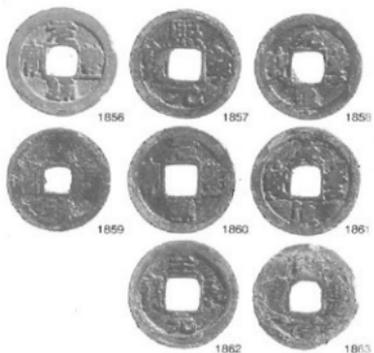
SX2008 出土



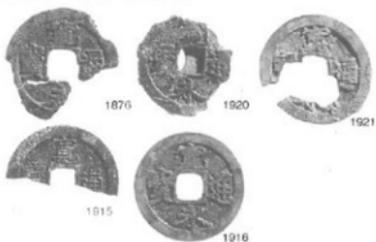
SX2009 出土



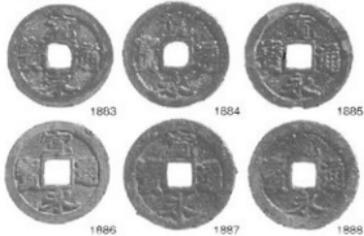
SX2011 出土



SX3001・3003・3008 出土



SX3002 出土



SX3004 出土



SX3006 出土



SX3007 出土





1449



1465



1497



1498



1934



1937



1944



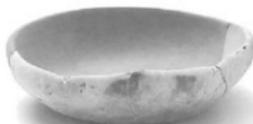
1948



1966



1971



1974



1976



1978



1979



1980



1981



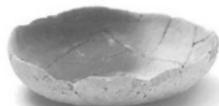
1982



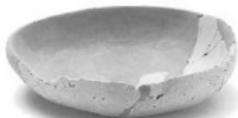
1984



1985



1991



1994



1995



1996



1997



2023



2039



2040



2042



2045



2046



2047



2057



2144



2145



2165



2168



2184



2188



2186



2210



2208



2214



2215



2216



2217



2218



2219



2222



2229



2230



2233



2240



2255



2267



2266



2272



2292



2293



2305



2313



2322



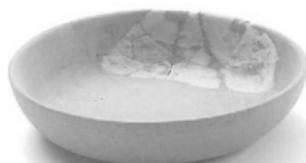
2324



2336



2344



2347



2348



2349



2350



2354



2362



2365



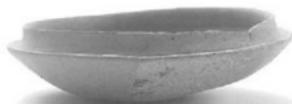
2378



2451



2459



2442



2443



2470



2476



2503



2511



2517



2529



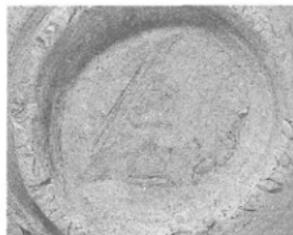
2521



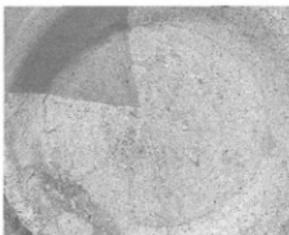
2528



2464



9 「風納」



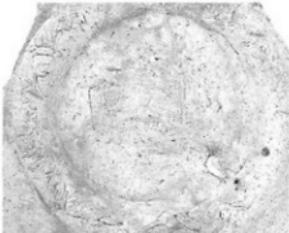
11 「海門」か



26 「十」



31 「上」



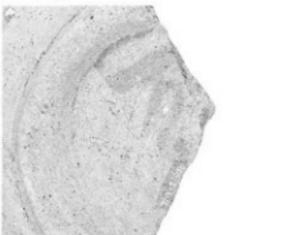
52 「神万」



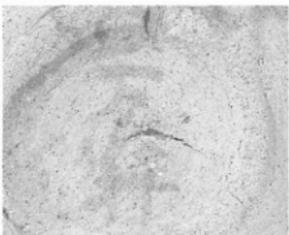
53 「一」



54 「十」



151 「万」(料か)



152 「万料」



153 「安」



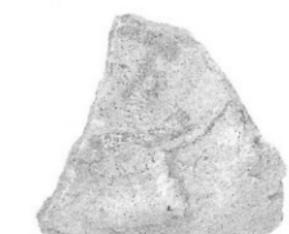
164 「上」



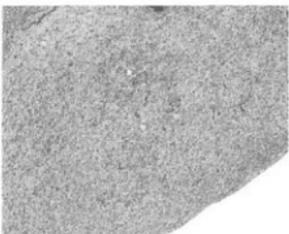
169 「万」



1098 花押



1097 「口」(万か)



1172 「神米」



1171 〔三〕



1173 〔口〕



1178 〔十〕



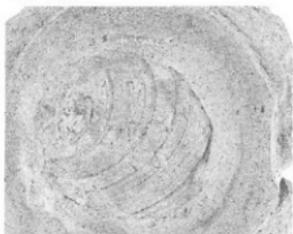
1279 〔又〕



1284 〔万〕



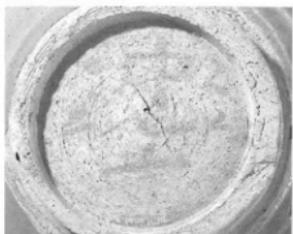
1423 〔千口〔手杓〕〕



1491 花押



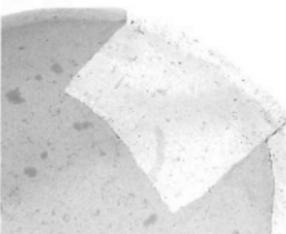
1952 〔又〕



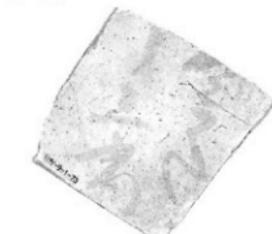
800 不明



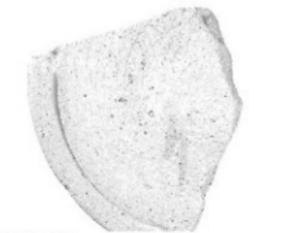
1292 〔口日寺山ノ后〕



1323 不明



1325 〔今うたノ口三箇〕



2056 不明



2066 〔赤A之介〕



1401 〔大〕

埴



207 (裏面)

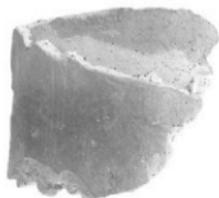
断面に明顯な焼化の痕跡が認められる。断面にも焼物の痕跡あり。



237 (裏面)

質面は均質部。

軒丸瓦



238 (断面)

断面は十字アタリ部。補充粘土が認められる。



238 (断面)

補充粘土が残存。右目と左切り目。



238 (断面)

二層部の互角部断面。丸瓦の差し込みは浅い。

丸瓦 I 類 (有段式丸瓦)



断面の断面は、上面に比べて鋭い。
磨り跡はみられない。
玉縁部は、粘土を補充して成形。
粘土痕跡はごくわずか。



243 (断面)



243 (断面)



1044 (断面)

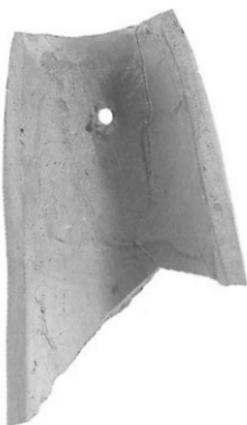


1044 (断面)

丸瓦Ⅱ類 (無段式丸瓦)



239 (凸面)



凸面は、全面ナテ調整。
吊り縁が残る。
凹面側縁・鉄線筋は断裂り。
釘穴あり。
破損。

239 (凹面)



241 (凸面)



破損の痕跡が顕著。
糸切り縁が明確に残る。
破損。

241 (凹面)



246 (凸面)



破損の痕跡が顕著。
凹面側縁・鉄線筋は断裂り。
破損。

246 (凹面)

図版 79 瓦 (3)

平瓦 I A 類

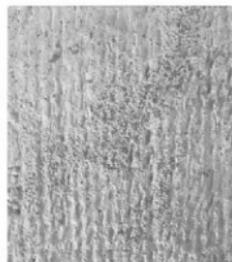


756 (凸面)

隠れ跡の付法はみられない。叩き目が細かい。



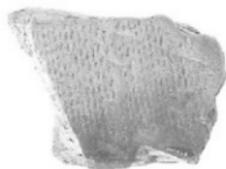
型板痕なし。叩き目と糸切り痕が明確に残る。



756 (凹面)

細かい叩き目。

平瓦 I B 類



263 (凸面)

わずかに隠れ跡が付法。細かい叩き目。



263 (凹面)

凹面に隠れ跡は付法しない。



粗い叩き目と隠れ跡。

平瓦 II A 類



270 (凸面)

縦長斜格子叩き。隠れ跡付法。

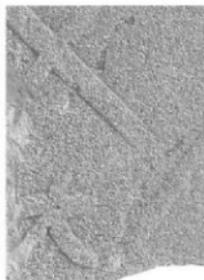


270 (凹面)

隠れ跡が付法。

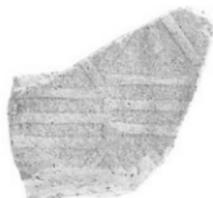


叩き目の「大」。



叩き目の小さな「大」。

平瓦 II B 類



673 (凸面)

縦長斜格子+横線の叩き。



673 (凹面)

隠れ跡が付法。叩き目が粗大。



叩き目の花文。

平瓦ⅡC類



1356 (凸面)

横長斜格子+横線の印を。



1356 (凹面)

叩き目が粗写。側縁と狭帯縁は裏取り面。



叩き目の変文字「大」。

平瓦ⅡD類



288 (凸面)

太い横長斜格子の印を。



288 (凹面)

裏れ目が付着。狭帯縁は裏取り面。



叩き目にも入る記号状の模様。

各種の技法

平瓦と凹(凹面)にあたる断面。
帯目の物るものには、係れ砂は付着しない。

平瓦Ⅱ類(凹面)の叩き目の粗写。



丸瓦Ⅱ類の目穴と帯り技法。



675の帯り技法。



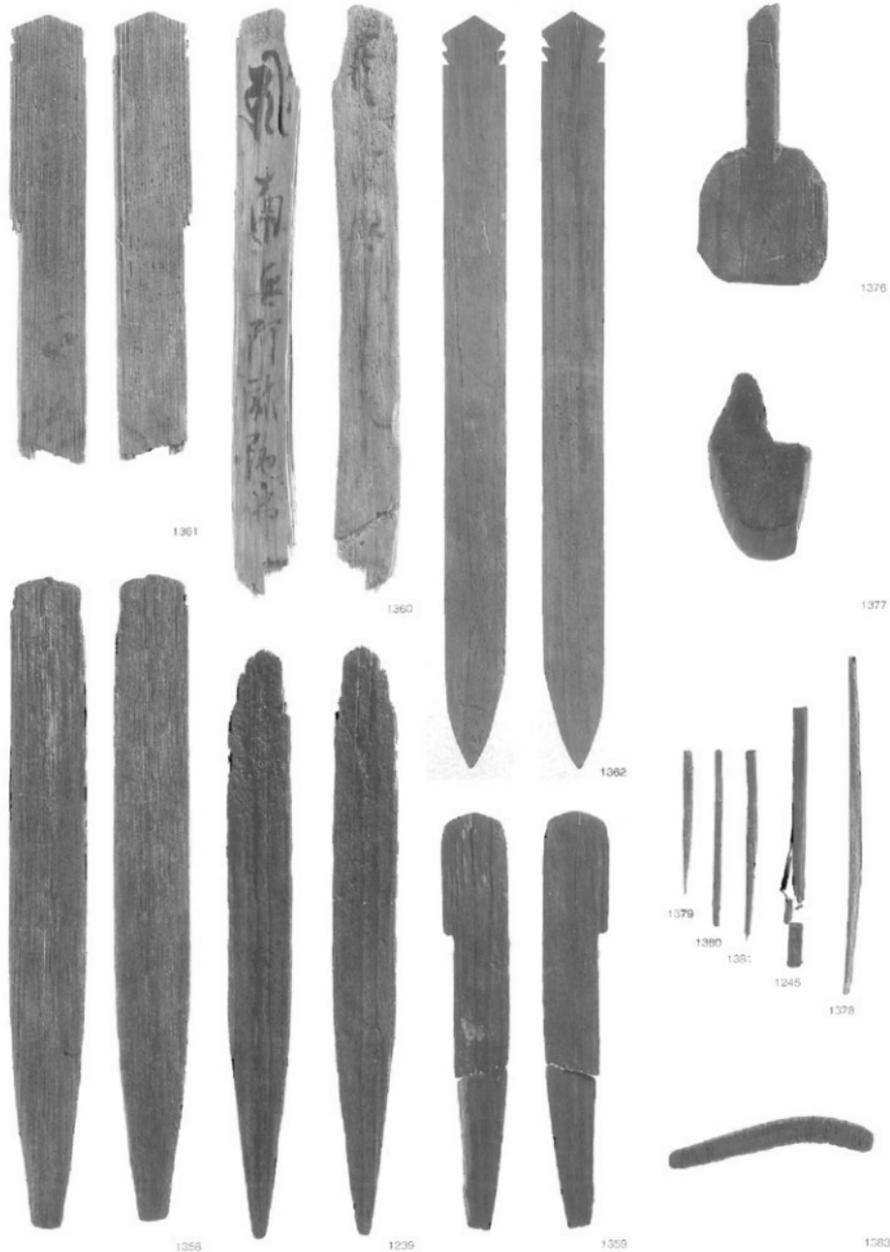
261の帯り技法。



1223の帯り技法。



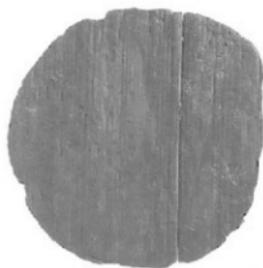
丸瓦の広縁部に付着する係れ砂。





1614

1362



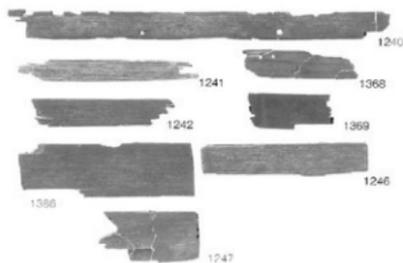
1243



1371



1370



1240

1241

1368

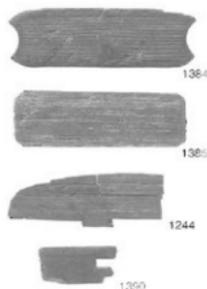
1242

1369

1246

1360

1247



1364

1365

1244

1360



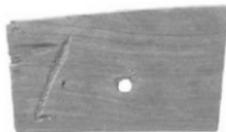
1372



1373



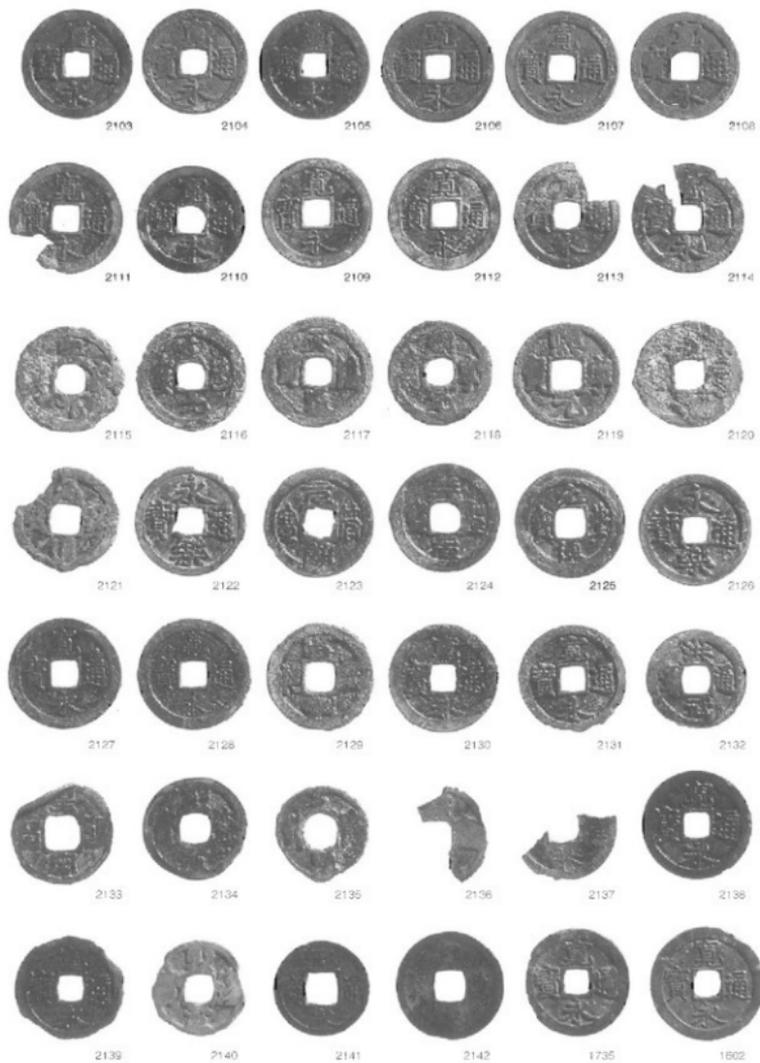
1374

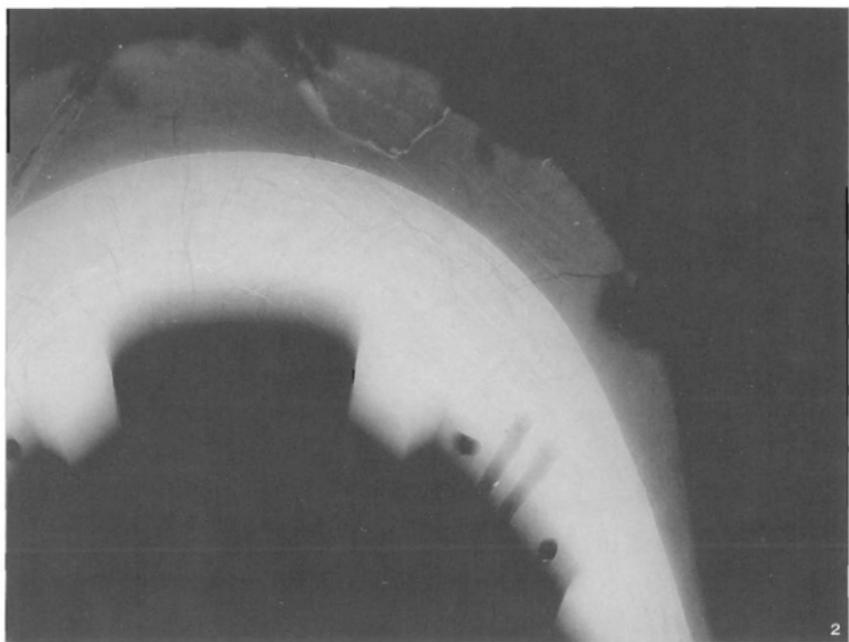
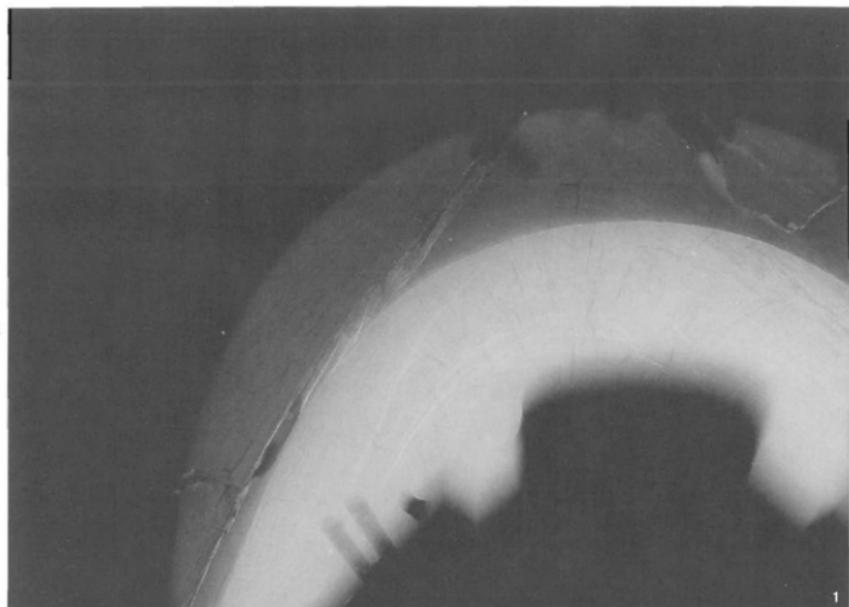


1875



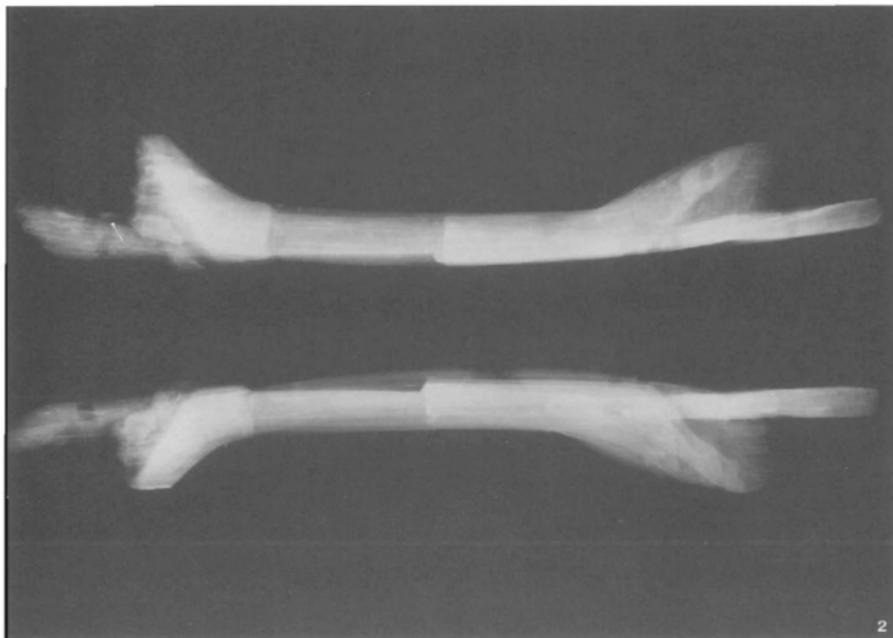
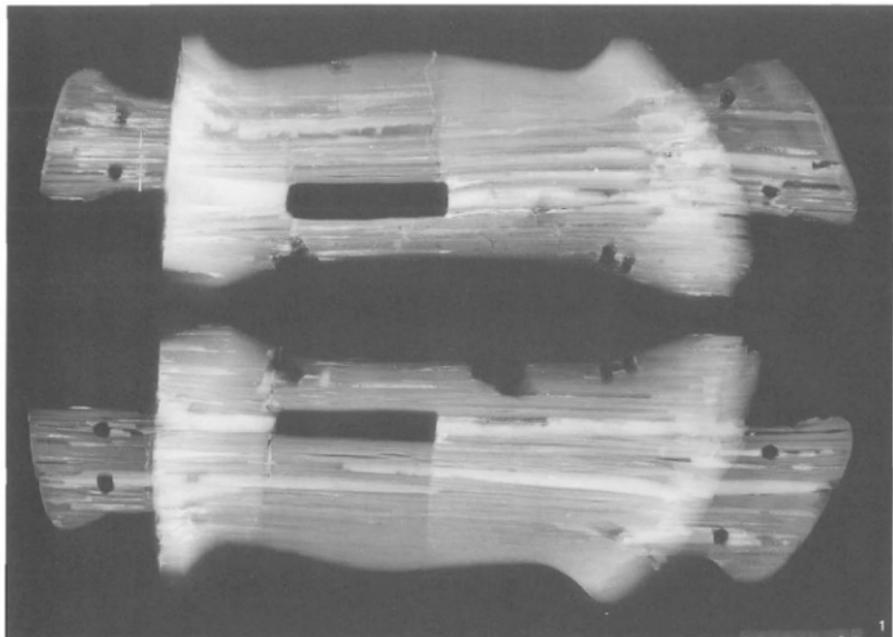
1249



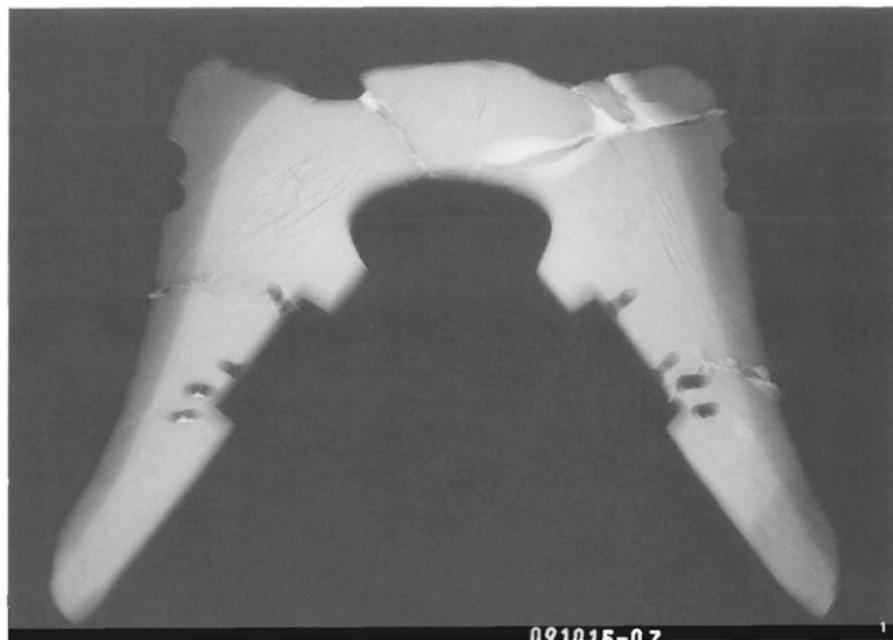


▲は全翼根の位置を示す

1 後輪 (左半) 2 後輪 (右半)



1 厩木 (上から) 2 厩木 (横から)



1 前輪 2 厚木先の布着せ

報告書抄録

ふりがな	なかやいせき							
書名	中屋遺跡							
副書名	第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 浜松市-2							
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告							
シリーズ番号	第234集							
編者名	武田寛生(編) 清川彰吾 足立順司 西尾太加二 小松大秀 鈴木三男 小川とみ 大澤正己 鈴木琢穂 及川司 大森信宏							
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所							
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田 23-20 TEL 054-262-4261							
発行年月日	2010年12月24日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
なかやいせき 中屋遺跡	しずおかけんはままつし 静岡県浜松市 はまきたくわがた 浜北区根堅			世界測地系		20000929 ～ 20001204 20010517 ～ 20020718	24,200	記録保存調査
				旧日本測地系		20031218 ～ 20050322 20050418 ～ 20060322		
				34° 50' 21"	137° 47' 30"			
				34° 50' 09"	137° 47' 41"			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
中屋遺跡	集落	古墳～奈良時代	壘穴建物、掘立柱建物、溝		須恵器、土師器、聚土器、土製模造品、鑿羽目、墨書土器			
	寺院 集落	平安～鎌倉時代	溝、土塁、掘立柱建物、井戸、河川、護岸施設		螺鈿縁、呪符木簡、瓦、埴、山茶碗、土師質土器、貿易陶磁、墨書土器			
	集落	室町～江戸時代	掘立柱建物、井戸、溝、河川、堀		陶磁器、土師質土器、漆碗、箸、下駄、歯物、銭貨、キセル、火打金			
要 約	<p>中屋遺跡は、古代から近世にかけての複合遺跡である。古墳時代後期から奈良時代には、壘穴建物や掘立柱建物を中心とした集落が展開している。平安時代末頃には、東西160m・南北210mの範囲を区画する大規模な溝が掘られ、内側には土塁が築かれる。内部には未調査ではあるが、厩辺の全段で瓦が出土することからこの施設は寺院であると推測される。この施設は、13世紀中頃に大規模な改修・再整備を行っており、同じ頃、東側に隣接する河川では、大規模な護岸工事が実施されている。護岸施設には、螺鈿縁と呪符木簡が埋納されていた。施設の存続期間は短く、14世紀には瓦葺き建物が火災によって焼失し、廃絶または著しく衰退している。その後、周辺は一般集落の様相を呈し、江戸時代には現在の集落の原形となる地割りが形成される。中世の遺跡の発掘例が少なく、文献史料も乏しいこの地域において、寺院とみられる施設をはじめとする多くの遺構・遺物が発見されたことは、今回の調査の大きな成果といえる。また、ほぼ完全な状態で発見された中世螺鈿縁は、全国で初めての出土例であり、考古学のみならず歴史学においても貴重な資料である。</p>							

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第234集

中屋遺跡

第二東名No.130 地点

第二東名造設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

浜松市-2

(第2分冊)

平成22年12月24日

編集・発行

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-8002 静岡市駿河区谷田23-20
TEL (054) 262-4261

印刷・製本

松本印刷株式会社
〒421-0303 檜原郡吉田町片岡2210
TEL (0548) 32-0851 (代)

